駒場 1991

東京大学教養学部

KOMABA1991

COLLEGE OF ARTS AND SCIENCES

THE UNIVERSITY OF TOKYO

COLLEGE OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO

[駒場] 1991

表紙について

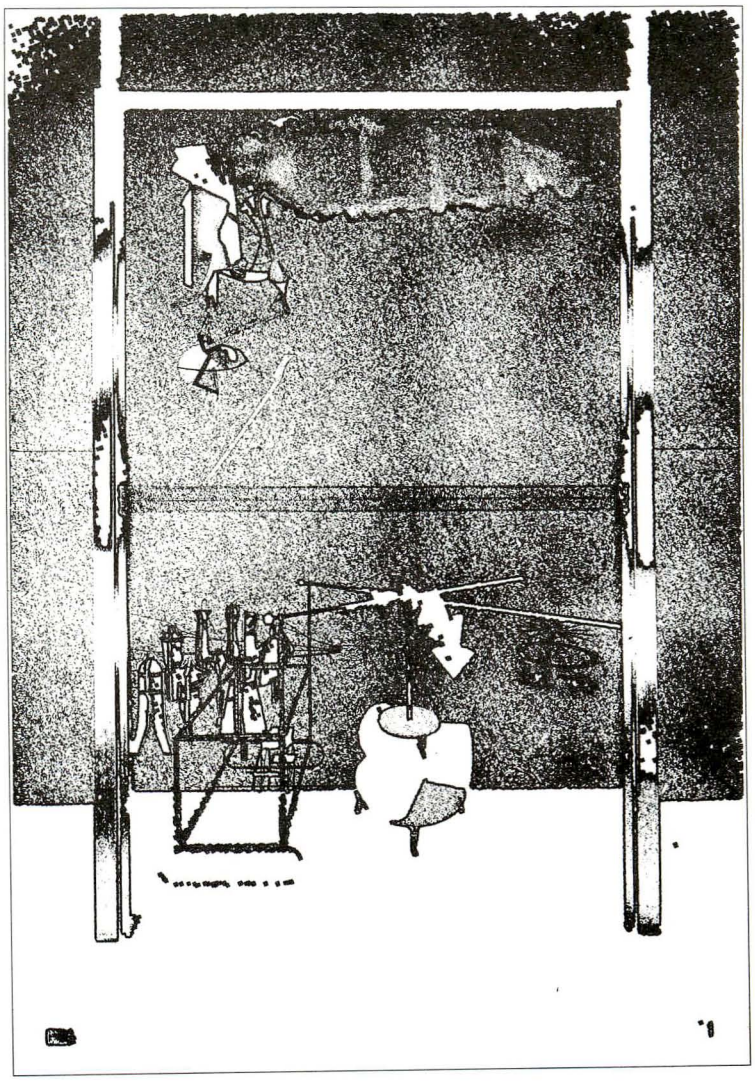
マルセル・デュシャン
〈彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも〉
東京ヴァージョン

今世紀を代表する芸術家のひとりであるマルセル・デュシャン（1887-1968年）が、1915年から23年にかけてつくりつづけ、未完のまま中断したこの現代美術の傑作（フィラデルフィア美術館蔵）を、本学部美術博物館はストックホルム近代美術館、ロンドンのテイト・ギャラリーにつづく世界で3番目のレプリカとして所蔵している。これは1978年から、80年にかけて、当時の小山弘志学部長を委員長とする「デュシャン〈大ガラス〉制作実行委員会」が、故瀧口修造と東野芳明両氏の監修の下、学内外から多くの援助を受けて制作したもので、原作者自身が生前に許可した最後のヴァージョンとなった。実際の作業には東京大学および多摩美術大学の院生と学生からなるスタッフがあたり、原作の制作過程をできるかぎり忠実に再現することを意図してつくられている。デュシャン未亡人によってもっとも美しくクリアーなレプリカとの評価を得たこの作品は、今日でも多数の観客を美術博物館に引き寄せている。

（写真撮影＝安斎重男）

COLLEGE OF ARTS AND SCIENCES
THE UNIVERSITY OF TOKYO

[駒場] 1991



東京大学教養学部

『駒場1991　東京大学教養学部』発刊に際して

それがながらく囚らえられてきた「塔」のイメージから、大学を決定的に解放すること。『駒場1991　東京大学教養学部』発刊の主要な意図はそこにあると言っても過言でない。「時計台」という記念碑的建築が担う神話的な比喩形象は、もはや大学の実情にそぐわないばかりか、来るべき世紀に向けての大学の自己改革にとって有害でさえあるし、また、世間が大学に向けて注ぐ視線をもあらかじめ歪曲しかねぬものだからである。『駒場1991』は、「塔」のそれとは異なる大学のイメージを提起することで、そうした状況の改善にわずかなりとも貢献することを目指している。

至高なる知識の獲得へと向けて世間との交渉を断ち、地表を遠く離れることで保証されるかにみえる精神の高貴さを占有しながら、遥かに地上を見下ろす視点を特権化するという「塔＝大学」のイメージは、世界的にみて明らかに時代遅れのものとなっている。大学進学率の向上とそれに見合った教官数の増大は、いたるところで、「時計台」によって象徴される大学という明治以来の国民的な合意を無効にしているはずである。事実、「象牙の塔」といった言葉は、遥か以前に死語と化し、もはや口にするものとて稀である。にもかかわらず、大学の組織や構成員の言動が社会的な話題となるときにはしばしば「塔」のイメージが回帰し、大学と社会との自由な交流を阻害しているのもまた事実なのだ。それ故、大学の「塔」のイメージからの解放は、たんに大学に席を置く者のみにとどまらず、社会にとっても急務だといわねばならぬ。

もちろん、現状を肯定せんとするあまり歴史をなおざりにするのは愚かなことだ。旧制一高の遺産として東京大学が受け継いだ名高い「時計台」そのものを否定したところで、それは何ごとも意味しはしないだろう。ただ、かつては旧制高校の特権性の象徴でもあったこの由緒正しい「塔」も、その存在とともに四十数年の時を刻みつつ発展してきた教養学部にとって、いまでは、変容の場としての「駒場」をかたちづくる多様な表情の一つにおさまり、あたりの風物との調和を寡黙に生きている。「塔」が担っていた特権的な象徴性のこうした緩やかな廃棄こそ、現在にふさわしくあろうとして自己変革を目指す大学の積極的なイメージでなければならない。

いま、大学に何がしかの特権があるとするなら、それは「屹立する高さ」としてではなく、「開かれた濃密さ」によってでなければなるまい。内部の絶えざる自己検証によって維持される知的な濃度が、外部との不断の接触を刺激としてさらなる多様性を獲得し、自分自身にとってさえ未知の領域を内部と外部の接点に創造し続けるとき、そこに初めて、来るべき世紀にふさわしくあろうとする大学のエネルギーがかたちづくられることになるだろう。大学が「開かれる」ことで外部からの干渉を恐れる者は、「屹立する高さ」が保証していた過去の特権へのノスタルジーを今なお捨て切れずにいる自信の無さを、あえて告白しているようなものだ。

大学の「自治」とは、「塔」がまというる神話的な比喩形象で象徴されるものを外部に対して誇示することによってではなく、「開かれた」場における濃密にして多様なエネルギーの創出と維持とにかかわるものにほかならず、またそうである限り、今後ますますの充実がはかられねばなるまい。「屹立する高さ」のイメージからおのれを解放することで、大学は自分自身の新たなイメージを世間に向けて提起すべき義務を負っているからである。また、その義務を果たすことによって、あらゆる個人がそうであるように、大学にも「開かれてはならぬ」領域がそなわっていることを他に対して主張する権利が、初めて保証されることになるはずだ。

いまなお生き延びている「塔＝大学」のイメージによって、社会と大学の間に張りめぐらさ

れている回路のかなりの部分が切断されたままでいるとするなら、大学は、率先してその多極的な交通を円滑化する作業を試みねばならず、『駒場1991』は、まさにそうした試みの一つにほかならない。その第一歩として、ここでは、東京大学教養学部をめぐる情報を、その組織としての特質、教官の専攻領域、学生の就学状況など、事情の許す限り公開しようとするものである。もちろんここに公開されている情報の多くは、これまでも人目から遠ざけられていたわけではなく、巻末に　書誌　として挙げられた複数の書物によってすでに公開されてさえいる。『駒場1991』刊行の目的は、それらの情報をある一定の秩序に従って整理し、「開かれた濃密さ」への外部からの接触の試みを容易ならしめようとすることにつきているといってよい。

3部からなる全篇の構成の中身は、目次に詳しく示されている。この構成は、過去一年来、第九委員会を中心として検討されてきた大学の「自己点検」のありかたをめぐる議論とその中間答申の内容とを踏まえて、同委員会の決議にもとづいて平成3年10月に結成された「年報編集委員会」によって最終的に採択されたものである。もちろん、こうした書物の刊行によって「自己点検」が完了したなどとは、間違っても主張しまい。組織の構成員にすら見えていなかったものをひとまず可視的な資料として提示することで、教養学部がいまある姿への内外からの批判的な視点にそれを委ねるための条件が、いまここに整ったというだけのことである。

初めての試みにありがちな構成の不備や細部の疎漏は、隔年での刊行が予定されている今後の号で順次補われていくことだろう。300人を超える教授会構成員を擁する巨大な組織としての教養学部の、その「開かれた濃密さ」の一端に世間の注目が寄せられ、学内の興味が向けられるなら、『駒場1991』の刊行の目的はなかば達せられたといってよい。あとはただ、大学における教育、研究、事務活動の現状と未来に真摯な関心を抱くあらゆる個人、あらゆる組織からの建設的な批判を待つのみである。

1992年3月
「年報編集委員会」

I

教養学部はどのような組織か

1　教養学部の理念と目標

教養学部長　原田義也

東京大学教養学部は昭和24年第二次大戦後の学制改革に伴って新制東京大学が発足したとき設立された。前期課程を担当する部局として、当時国内の他大学は教養部を設置したのに対し、東京大学だけが後期課程を擁する独立の「学部」をたてたのである。教養学部設立の趣旨は、東京大学の新入生が前期課程の2年間に広い学問的視野を身につけた後、その基礎の上にたって、自己の専攻する各学問分野に進んでいくための教育を行なうことにある。教養学部における一般教育は「リベラル・アーツ」教育と呼ばれているが、それは、学生を狭い専門の枠から開放する（liberate）、すなわち専門にとらわれない、教育であり、学問の諸分野に対する全般的展望を与えるとともに、それらの間の相互関係に対する正しい理解と認識を提供するものである。19世紀後半、欧米の大学では極端な専門の細分化に伴って、専門家の間の溝が深まり、それが学問の健全な発達を阻害する要因になると考えられた。この反省の上にたって、専門教育の前段階として、「リベラル・アーツ」教育が取り入れられたのである。学部創設以来、教養学部の教官は、前期課程では「人文科学」、「外国語」、「社会科学」、「自然科学」、「保健体育」からなる5科のいずれかに属し、活発な相互交流を通じて、リベラル・アーツの理念に基づく教育を推進してきた。

後期課程である教養学科は学年進行によって、昭和26年に発足した。その目的は前期課程における「リベラル・アーツ」教育をさらに広め、深めるとともに、「学際性」と「国際性」に重点を置く新しい学問分野を開拓することにあった。このとき、六つの分科、すなわち地域研究の4分科（アメリカ、イギリス、フランス、ドイツの各文化と社会）、国際関係論、科学史及び科学哲学が設立されたが、それは国際的な視野の下、既存の専門分野の枠を越えた、学問に対する新しい総合的なアプローチを意味するものであった。昭和37年には理系の後期課程である基礎科学科が発足した。その教育目標は自然科学の根幹をなす数学、物理学、化学、生物学等を総合的に学び、それを基礎として、従来の専門分野にとらわれない、柔軟な思考をもつ新しいタイプの科学技術者を養成することにあった。学科の性格はその名前から推測されるよりは広く、自然科学の基礎だけでなくその応用をも視野に入れた教育・研究を行なうことを目指している。

その後、教養学科と基礎科学科は時代の要請と学問の急速な進歩に伴って発展した。すなわち、昭和53年には教養学科が3学科へ、昭和56年には基礎科学科が2学科へ改組拡充された。現在、教養学科第一（総合文化）には、文化人類学、人文地理学、人間行動学、表象文化論、比較日本文化論、科学史及び科学哲学の6分科が置かれ、歴史的および地域的な視点を含む人間文化の総合的な把握を意図している。教養学科第二（地域文化）にはアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、アジア、中南米の各文化と社会の7分科が置かれ、言語を核とする文化の研究を基本にして、世界各地域の文化と社会についての、総合的な理解を指向している。さらに、教養学科第三（相関社会科学）には相関社会科学と国際関係論の2分科があり、現代社会が直面する複合的諸問題を学際的に追求することを目指している。また、基礎科学科第一（相関基礎科学）は既設の基礎科学科の理念を受け継いだのに対し、新設の基礎科学科第二（システム基礎科学）は自然科学と人文・社会科学との境界領域に存在する諸問題に対して、システム科学、情報科学、さらには物質系、生命系、生態系、地球系等に関わるグローバルな自然科学の立場から、新しい学問的アプローチを試みている。

教養学部の大学院である総合文化研究科は昭和58年に設立され、現在7専攻より成る。このうち比較文学比較文化、表象文化論、文化人類学の3専攻は教養学科第一に、地域文化研究は教養学科第二に、国際関係論と相関社会科学は教養学科第三に、広域科学は基礎科学科第二に

それぞれ基礎を置いている。総合文化研究科の目的は、総合文化の英語名称であるInternational and Interdisciplinary Studiesが示すように、国際的および学際的研究によって人文・社会・自然科学が関わる諸問題を総合的に追求していくことにある。

以上、教養学部の「三層構造」、すなわち前期課程、後期課程、大学院の設立の経過をたどりながら、その理念と目標について述べてきた。学部創設以来、教養学部の教官はこの三層構造に関与して、様々な専門分野で最先端の研究を行なうとともに、その成果を生かして前期課程教育を絶えず活性化してきた。しかし、最近の学部内外の急激な情勢の変化に対応して教育・研究体制の見直しが必要になっている。以下、若干この問題にふれることにする。

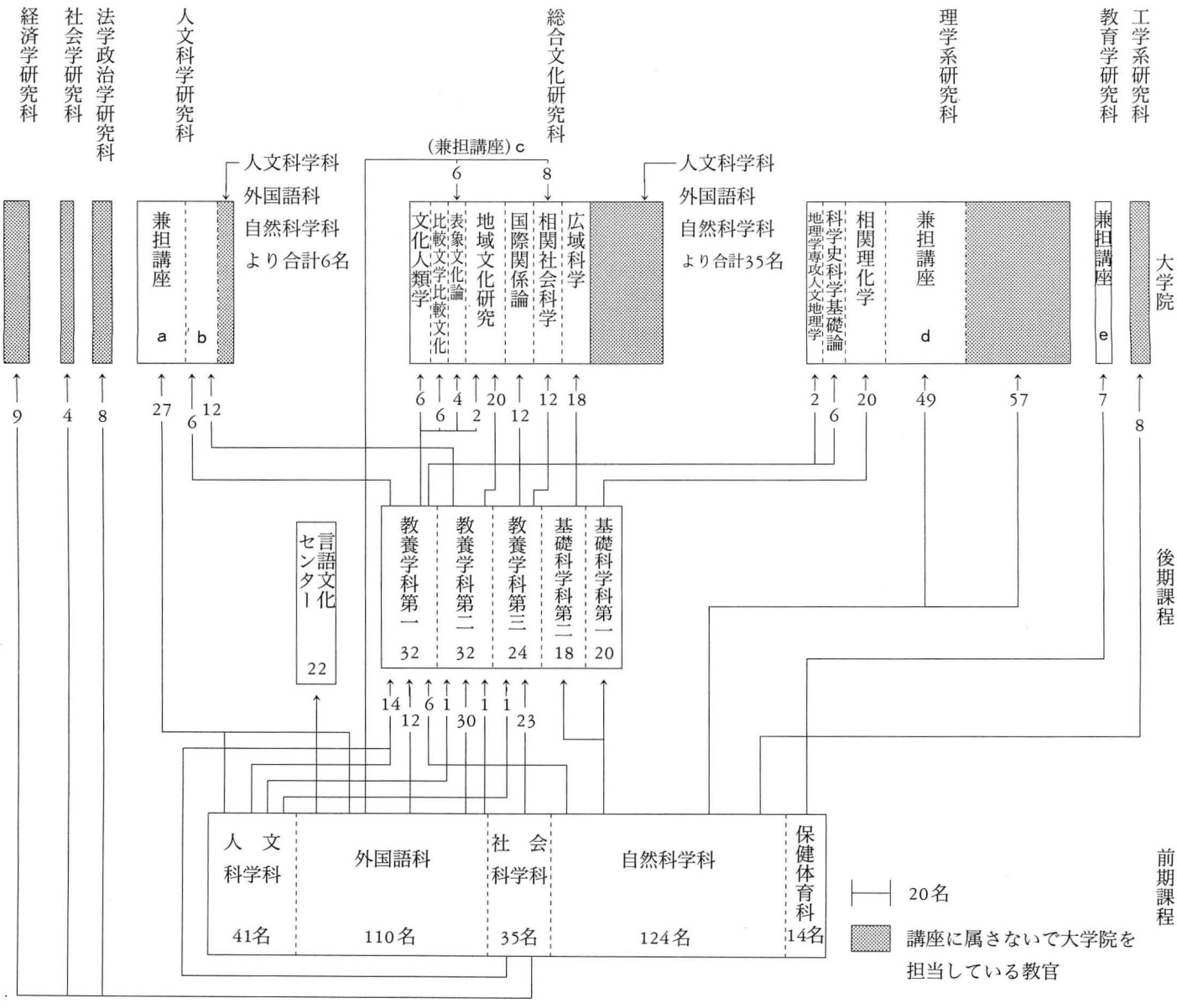
まず、前期課程教育については、最近の学生数の急増と高等学校における教育体制の変化のため、学生の能力や習熟度が多様化し、問題を生じている。これに対処するとともに、学問の進歩と大学教育に対する社会の要請の変化・多様化に応えるため、全学的な議論をふまえて、現在カリキュラムの全面的な見直しを行なっている。改正の重点は、科目選択の自由化・多様化と小人数教育の重視にある。具体的には従来の必修単位数を削減するとともに、新しい授業形態として、複数分野にまたがる「総合科目」や「小人数講義」を導入する、また自然科学では学生の習熟度のアンバランスを考慮して複線コースを設ける、さらに、語学教育では視聴覚機器を大規模に活用した「英語Ⅰ」のクラスと、きめ細かい指導を目的とする小人数の「英語II」のクラスを組み合わせて、いわゆる「発信型」の語学力の養成をはかる、等である。なお、後期課程への進学の際の振り分け制度についても、多様な評価尺度の採用や2段階選抜の導入によって改善することを計画している。これらのカリキュラムや制度の改革は、学部内外の情勢の変化の中で、学生の自主性・創造性を啓発し、「リベラル・アーツ」教育が一層の成果をあげるために行なわれるものである。

後期課程と大学院については、最近の学問の急速な進歩と高度な専門教育に対する社会的要請に対処するため、大学院を重点化する必要性が高まってきた。現在、後期課程の学生数は約390名であるのに対し、大学院生の数は約660名（総合文化研究科に属する者約330名、他研究科に属するが教養学部教官を指導教官とする者約330名）に達しており、学生数の点からは、実質的に大学院重点化が進行しているといえる。教養学部の大学院重点化に際しては、他研究科に属する教養学部教官の所属を総合文化研究科に移し、総合文化研究科の講座を再編成することを計画している。特に教養学部の後期課程に基礎をおく他研究科の専攻（西洋古典学専攻、科学史・科学基礎論専攻、相関理化学専攻等）を総合文化研究科に移管し、文系から理系を横断する学際的な教育・研究体制を構築する必要がある。なお、大学院在籍の留学生数は現在約180名に達しているが、さらに増加傾向にあり、国際化の進展に備えて、この面での対策が望まれる。

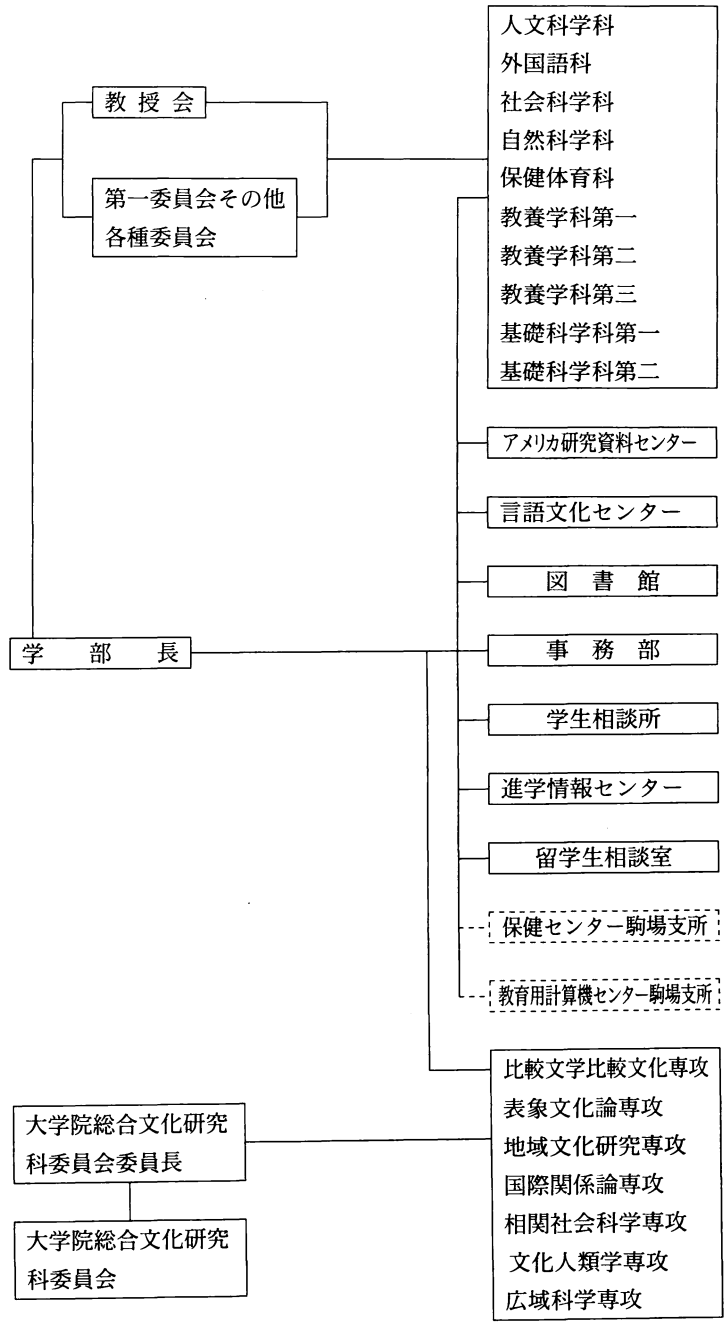
最近の「大学設置基準の大綱化」に関連して、他大学では4年間一貫教育を目指したカリキュラムの改正や、さらには教養部の改廃の動きも見られる。これに対し、東京大学の基本方針は、設置基準の改正に先立つ大学審議会の答申の趣旨、すなわち「一般教育等の理念・目標は極めて重要であるとの認識に立ち、それぞれの大学において、授業科目の枠組みにこだわることなく、その理念・目標のための真剣な努力・工夫がなされることを期待するとともに、この点についての大学人の見識を信ずるものである」、を積極的な意味に解して、一般教育の自由化・活性化に取り入れ、教養学部創設当初からの「リベラル・アーツ」教育の理念・目標を実現することにある。この基本方針の達成のためには、前期課程教育の改革を進めるとともに、三層構造の上層である大学院と後期課程の教育・研究体制を整備・充実して、その成果を前期課程教育に還元することが必要である。

激動する世界情勢の中で、「経済大国」日本と諸外国との間の文化摩擦が危惧されているとき、わが国の将来を担う人材の前期課程教育に責任をもつ、東京大学教養学部の旗印、「国際性」と「学際性」は、ますます鮮明でなければならない。創設当初を振り返り、さらに未来を展望するとき、今後、国際性については、「受信型」から「発信型」へ、学際性については、「境界型（inter-disciplinary）」から「横断型（trans-disciplinary）」へ重点を移すことが必要と考えられる。

教養学部組織図（現状）


経済学研究科
社会学研究科
法学政治学研究科
人文科学研究科
総合文化研究科
理学系研究科
教育学研究科
工学系研究科
大学院
人文科学科
外国語科
自然科学科
より合計6名
(兼担講座) c
6
8
人文科学科
外国語科
自然科学科
より合計35名
兼担講座 a
b
文化人類学
比較文学比較文化
表象文化論
地域文化研究
国際関係論
相関社会科学
広域科学
科学史科学基礎論
地理学専攻人文地理学
相関理化学
兼担講座 d
兼担講座 e
9
4
8
27
6
12
6
6
4
2
20
12
12
18
2
6
20
49
57
7
8
言語文化センター
22
教養学科第一
32
教養学科第二
32
教養学科第三
24
基礎科学科第二
18
基礎科学科第一
20
14
12
6
1
30
1
1
23
後期課程
前期課程
人文科学科
41名
外国語科
110名
社会科学科
35名
自然科学科
124名
保健体育科
14名
20名
講座に属さないで大学院を担当している教官

運営組織



a：人文科学研究科兼担講座
- 国語国文学専攻　日本語・日本文学　(4－2)
- 英語英文学専攻　言語文化第一　(2－2)
- 独語独文学専攻　言語文化第二　(3－4)
- 西洋史学専攻　歴史学方法論　(3－2)
- 哲学専攻　現代哲学　(3－2)

b：人文科学研究科基礎講座
- 西洋古典学専攻　世界思潮第一
- 西洋古典学専攻　西洋古典及び古代史
- 英語英文学専攻　イギリス第一
- 英語英文学専攻　アメリカ第一
- 仏語仏文学専攻　フランス第一
- 独語独文学専攻　ドイツ第一
- 露語露文学専攻　ロシア第一
- 露語露文学専攻　ロシア第二
- 心理学専攻　人間行動学

c：総合文化研究科兼担講座
- 表象文化論専攻　言語文化第三　(4－2)
- 相関社会科学専攻　現代社会分析　(6－2)

d：理学系研究科兼担講座
- 数学専攻　函数解析学　(4－4)
- 数学専攻　数学構造論　(3－3)
- 物理学専攻　核物質構造学　(4－4)
- 物理学専攻　粒子線物理学　(4－4)
- 科学専攻　分子科学　(4－3)
- 生物化学専攻　生体高分子学　(4－4)
- 動物学専攻　機構生物学　(2－2)

e：教育学研究科兼担講座
- 教育学専攻　体育学　(4－3)

2　沿革と現状ならびに将来計画

1. 沿革と発展

沿革——東大駒場

東京大学教養学部は、1949年（昭和24年）、新制東京大学の発足とともに設立された。他の大学では、一般教養課程を担当する組織を教養部としたが、本学は独立の学部をたて教養学部とし、学部後期課程（専門教育）を担う「教養学科」も、2年後に設置された。こうして東京大学教養学部は、新制東大に入学した学生が、将来の専門にかかわりなく2年間の教育を受ける**一般教養課程**すなわち**前期課程**（ジュニア）について全面的に責任を持つと同時に、**後期＝専門課程**（シニア）をもち、本郷キャンパスに設置された諸専門学部と対等な組織として出発したのである。

東京大学教養学部の置かれた駒場の地は、旧制度のもとでは、第一高等学校として、日本の指導的人材を輩出してきた由緒ある場所であり、旧制帝大を引き継いだ形の本郷キャンパスに対して、教養学部が**駒場**の名で呼ばれるのも、そこに由来する。本学部が、旧制一高及び東京高校を包摂して出発したという経緯からも、新制大学の内部に「旧制高校」の教育の積極的な要素を取り入れるべきであるとする主張は、教育面で本学部が出発当初から掲げた「リベラル・アーツ」（Liberal arts）の理念に反映されていた。「一般教養」を西欧中世の「自由学芸」に起源を持つ「リベラル・アーツ」として位置づけ、専門教育に進む前段階において、同時代の知に関する広い識見と、それによって涵養される豊かな判断力を養うことを目指したのである。南原繁総長のもとで初代の教養学部長に選ばれたのが、戦前・戦中の軍部ファシズムの弾圧に抵抗した矢内原忠雄という自由主義の実践的思想家であったことは、新制東大が教養学部に期したものを象徴していた。

教育・研究上の特色——学際性と国際性

現在から振り返って、「リベラル・アーツ」を、「同時代の知の基本的枠組み即ち知のパラダイムの学習と、そのような知にとって不可欠の基本的なテクネーの習得」と再定義するならば、東大駒場創設の理念は今以て有効であると言える。

しかしながら、そのような「リベラル・アーツ」教育は、同時代の知と社会と、さらには世界全体と向かいあえるような研究体制に支えられていなくては不可能である。今触れたような成立事情もあって、単に旧制高校の美風へのノスタルジーの如く語られることの多かった新制東大の駒場であるが、しかし、当時その指導的立場にいた若い教官たちにおける**現代の学問**に対する基本的な認識の斬新さ、正確さ、射程の長さによって、単なる「専門予科」とは本質的に異なる地平を切り開くことに成功した。そのような新しい学問観を貫いていたのが、**教養学科**創設の理念ともなった**学際性**と**国際性**である。

確かに第二次世界大戦とそれに続く敗戦の混乱と貧困のなかでは、西洋近代の学問的水準に対する遅れを取り返すこと、人文・社会科学であると自然科学や科学技術の領域であるとを問わず、欧米先進国の学問的成果を吸収し、その水準に達することが、「国際化」に他ならなかった。しかし、戦前の帝国大学がモデルとしていた西洋近代の知の枠組みそのものがすでに根

底的な変革を経験しつつあり、特にアメリカを中心に、大学における教育・研究のシステムが大きく変わりつつある状況は、戦後の新制大学に課せられた使命が、単に旧制大学の学問的仕組みの充実などというレベルでは済まないことを告げていた。制度としての学問は不易のものではなく、古い学問領域の間から**新しい知の領域**が一斉に出現していたのであり、学問も一つの創造であるなら、単にすでにあった知識の受容に終わるはずはなく、みずからが知の発信者となるべきであったし、そのためには、国際的に通用する言語を使いこなせることが不可欠のはずであった。これら教養学科の推進者たちが教育的情熱を傾注して実現し、以後40年にわたって発展し続ける「教養学科モデル」は、教養学部そのものを単なる教養部にせず、生きた教育・研究の場として成長させるための重要な牽引力となった。

教育・研究組織の特長——「三層構造」

ところで、東大駒場の教官達は、教養学部発足時から、前期課程教育と併せて後期課程教育に携わってきたばかりではない。**新制大学院**発足に伴い、**比較文学比較文化、西洋古典学、国際関係論**の課程を、やや遅れて**文化人類学**の課程を支えるとともに、本郷諸学部を基礎に作られた**大学院課程**にも参加していた。この間、後期課程及び大学院を充実させることは前期課程教育の充実のためにも不可欠であるとの認識のもとに、一貫してそのための努力が払われてきた。

こうして、1962年、自然科学系の後期課程として**基礎科学科**が発足。1978年には、**教養学科**が**教養学科第一（総合文化）**、**教養学科第二（地域文化）**、**教養学科第三（相関社会科学）**の3学科に再編され、また1981年には**基礎科学科第二（システム基礎科学）**の新設に伴い、**基礎科学科**が**基礎科学科第一（相関基礎科学）**となった。さらに、1983年には、教養学部を基礎とする**大学院総合文化研究科**が新設され、名実共に、一貫性のある独立した部局となった。大学院総合文化研究科も、発足時には**比較文学比較文化、地域文化研究、国際関係論、相関社会科学**の4専攻であったが、1984年には**広域科学専攻**が新設され、1986年には**文化人類学専攻**が社会学研究科から移管、1989年には**表象文化論専攻**が新設されることによって、7専攻となり、教官・学生の規模からいっても、またその研究・教育体制からいっても、東京大学の大学院のうち最も活発で重要な組織の一つとなっている。

このように東京大学教養学部は、**前期課程教育**、**後期（専門）課程教育**と、**大学院における教育・研究**という三層構造に立って、前期課程（文科Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類、理科Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類）二年間の約7500人の学生の教育に当たると同時に、学際的・国際的な専門教育・研究組織として、全国で他に例を見ない独自の発展を遂げてきた。それは、教養学部教官が、それぞれの領域で第一線の研究者であり、後期課程あるいは大学院における専門教育の現場を持ち得たということ、そして研究者としても優れた教育者が、不十分な教育・研究環境にもかかわらず、一般教養課程を担当することによって、同時代の知の先端的な部分も一般教養課程に還元される仕組みが成立し得たということに他ならない。

教官集団の特長——マルチ人間と多様な人材

このような「学際性」「国際性」「三層構造」という、教養学部が自分自身に課した要請のうち、計量的に示すのが最も容易なのは、「国際性」であろう。教養学部教官の極めて多彩な国際的活躍（国外招聘教授、交換教授、あるいは国際学会、国際シンポジウム、国際共同研究、国際的出版物への参加及びそれらの主催等）については、本年報Ⅰ-7に詳しいし、また主として大学院課程に在学し本学部の教官の指導を受けている200人を越える留学生（東京大学全体で第二位）については、同じくII-4に分析がある。外国人教官も、17名の専任「外国人教師」

の他に、日本人教官のポストへの外国人専任教官の任用も始まっている。これらの諸点から、教養学部が国際的に開かれた部局であり、かつその方向はいよいよ顕著であって、この面での国際貢献が本学部の重要な使命の一つであるとの認識は、広く共有されている。

始めにも述べたように、駒場の国際性は、その教育・研究上の当初からの理念であり、かつその理念を、たとえば教養学科のような「実験的な」教育において実践することから始めたのであって、単なる机上の空論に留まるものではなかった。教育と研究とがダイナミックに刺激しあう教養学部の特色は、「学際性」についても言える。

勿論、帝国大学以来の伝統的な研究領域が、そのままで現在に至っている訳ではないが、しかし、駒場がその学問的なアイデンティティを主張し、かつそれを確立したのは、何と言っても、まずは人文・社会科学系の「学際的な」(inter-disciplinary) 領域においてであった。比較文学比較文化、国際関係論、科学史、文化人類学といった、旧制大学には存在しなかった領域が、教育・研究組織としても、東京大学の内部で徐々にその市民権を獲得していった。大学院に組織されるのは遅れたとはいえ、地域文化研究は教養学科の教育上のもっとも重要なコアーをなしていた。自然科学系においても、専門教育のレベルで文字通り先端的な学際性において、駒場の教官は東京大学全体の発展に貢献しており、その制度的実現が、基礎科学科二科であり、大学院広域科学専攻であり、また理学系研究科に設置された相関理化学専攻であった。

しかしながら、教養学部の真の特質は、単に専門分野における学際的研究者の集団というに留まらない。

教養学部は、教官組織からすると、講座制に属する教官と学科目に属する教官と附置センターに属する教官とから成っているが、原則として、すべての教官は、前期課程学科目のいずれかの教室に属することになっており、教官人事もそこで行なわれる。しかし、すでに触れたように、教養学部教官は、一般教養課程つまり前期課程の教育のみに携わっている訳ではなく、前期・後期・大学院の三層の教育にかかわっている。と同時に、前期課程は原則として全教官が責任を以て担当するという原則も貫かれている。ために、教官の人選は、その研究者としての能力とともに、上記の三層の教育に能力のある者を選ばなければならない。それを教官個々人の側から見れば、三重の能力を持つことを要求されているということにもなるのである。

特に、旧「設置基準」に基づく一般教養課程の「学科目」は、「人文」「社会」「自然」の3分野に「外国語」と「保健体育」を加えたものであり、それを「一般教育等」と呼んでいた。これらが、教官組織としての「5科」に照応するのだが、そこには、以下に列挙するような学科目が置かれ、それぞれが教官組織としての「教室」を持つ。すなわち、

人文科学——心理学、教育学、哲学、歴史学、人文地理学、人類学、国文学・漢文学
社会科学——法学、政治学、経済学、統計学、社会学、社会思想史、国際関係論
自然科学——数学、物理学、化学、宇宙地球科学、生物学、情報・図形科学、科学史・科学哲学
外国語———英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、古典語
保健体育——体育

である。

しかし、これらの分類は、伝統的な学問分類を単純に反映したものが多いことからも、そのままで教官の専門分野に照応するものではない。たとえば、一般教養課程すなわち「ジュニア」において「外国語」を担当している教官は、5科レベルでは外国語科のいずれかの教室に属し、外国語教育のプロとしてジュニア教育に当たっているが、しかし研究者としては、必ずしも外国語教育法の専門家という訳ではない。シニア、大学院においては、言語科学、外国文学、地域文化研究、比較文学比較文化、表象文化論等の専門家として、その専門に従って教育にかかわっている。その意味では、研究上の要請と教育上の必要とが捩じれ構造になる場合も少なくなく、教官の専門をそのまま教育の現場に持ち込むことでは問題が解決しない。始めに述べた学習における「知のパラダイム」と「基本的な知的テクネー」との相関関係も、実は教官自身が、教育の日常的現場において常にみずからの内部で活性化することが求められている

課題であるのだ。

このように教養学部は、人文・社会・自然・外国語・保健体育という極めて広範囲にわたってそれらの専門家を集めているという点からだけでも、必然的に多様な人材に富んでいる。しかし、それに加えて、これらの専門家が、上記の複数の現場においても有能でありうることは、「駒場人」を特長づける多元性の証左である。事実、教養学部の教官には、大学においてのみならず、社会的にも、極めて多様な次元において活躍している人材も少なくなく、その意味では、非常に今日的な「マルチ人間」を包む集団であるとも言えよう。

意思決定機関——学部と大学院

人事・予算・カリキュラム・認定の四つの権限を持つ部局としての教養学部の、教育・研究にかんする重要な案件は、**教授会**において決定される。教授会構成員は、前記の5科に属する教授・助教授及び専任講師である。議長は学部長が当たる。それらの案件のうち主要なものは、**第一委員会**において議される。第一委員会は、学部長、評議員の他、前期課程5科の科長および主要な教室の主任、後期課程五学科の各委員長、第二、第三、第五、第六、第七、第八、第九各委員会委員長、ならびに学部長が必要と認めた委員若干名から構成され、議長は学部長である。定例教授会は8月を除き、月一回、第一委員会は月二回を原則とする。

大学院総合文化研究科の教育・研究に関する主要な案件は、**研究科委員会**がそれを議する。研究科委員会は、委員長（学部長）、各専攻主任及び専攻代表委員2名ずつ、本研究科と関連の深い他研究科および他研究所の代表委員各1名によって構成される。互選により議長1名が定められている（平成4年4月からは文系評議員）。

なお、大学院重点化構想の進捗にともない、1989年以来、「教養学部将来計画特別委員会」が学部長の諮問機関として設けられ、その下に計画の具体的審議・立案のために「将来計画特別委員会第一小委員会」がその任に当たっている。また同じようにして、学部長のもとに、三鷹国際宿舎の新設に伴ない「三鷹国際宿舎問題特別委員会」が、また、留学生に関する問題を包括的に審議・立案する組織として「留学生問題懇談会」が発足している。(Ⅰ-3参照)

2. 教育・研究の特長

学部前期課程教育（ジュニアあるいは一般教養課程）

(1)科類区分と横割り方式

現在、教養学部で学ぶ学生は、1•2年生合わせて7500名にも及ぶ。1949年発足当時は一学年1800名だったのだから、その膨張ぶりは驚くべきものがある。学生は、文科Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類、理科Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類の六つの科類に分かれて入学するが、クラス編成は選択した第二語学に従って決定され、原則として文Ⅰと文Ⅱ、理Ⅱと理Ⅲは、それぞれ同じクラスになる。

進学先の専門学部は、それぞれの科類によってある程度は決まっているが、最終的には、2年次の秋に行われる**進学振り分け**によって決定され、この機会に進路を変更することも可能になっている。言い換えれば、教養学部では、学生が始めから学部・学科別に分かれて入学する「縦割り方式」ではなく、2年間の前期課程教育の間に、様々な学問の可能性に接して、自分の適性を見極めた上で専攻分野を選択することができる「横割り方式」が取られている点が大きな特徴である。そこには、東京大学の教育が、本郷キャンパスと駒場キャンパスを共に必要とし、かつこの二つのキャンパスが離れていることから生ずる現実的解決という局面が当初か

らあったことは否定できないが、この地理的な基本条件を逆手に取る形で、この「横割り方式」は、40数年にわたって東京大学の活性化に貢献してきたと言って間違いはない。

しかし、専門諸学部（教養学部もその一つである）の定員数やそれと無縁ではない難易度を始めとして、「進学振り分け」制度にまつわる様々な問題については、目下のところ全学的なレベルで検討作業が進められている。いわゆる〝late specialization〟の利点を活かして、学生が自らの適性を正しく見極めた上で進学先を選択できるようなシステムの確立が急がれている。

⑵授業の概要

前期課程教育の目的は、すでに述べたように、特定の専門分野に偏らない総合的な視野を獲得させる「リベラル・アーツ」教育を行なうことであり、同時に、専門課程に進むために必要最低限の知識や知的技能を身につけさせ、専門的な物の見方・考え方の基本を学びとらせることにある。

従って、1・2年生を対象とする授業は、各教官がそれぞれ高度な学問的知見を背景にしつつも、自分の専門に閉じ籠もることなく、広い観点から学問の多様性と奥行きを学生に伝え得るものでなくてはならない。その意味では、これは一種の「芸」であるが、しかしまた、東大に入学したばかりの学生に向かって教育・研究者としての情熱を傾ける授業は、大学人としての「初心」を忘れないための恰好の場でもある。教養学部の教官は原則として全員が前期課程教育に携わることになっているのも、各教官が、絶えず自分の専門的研究の成果を「リベラル・アーツ」教育にフィード・バックしながら、両者の相互的交渉により、教育・研究の活性化をはかる仕組みに他ならず、そのようなものとして実績を挙げてきたことは、評価されて然るべきであろう。

授業は、先に挙げた教官組織の「5科」に対応する「人文科学」「外国語」「社会科学」「自然科学」「保健体育」の5分野に配置された学科目と、「一般教育演習」（全学一般教育ゼミナール及び総合コース）からなる。

授業の具体的な運営は「教室」単位で行なわれる。人文科学科には哲学、心理学、教育学、歴史学、人文地理学、人類学、国文学・漢文学の7教室、外国語科には英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語、古典語の7教室、社会科学科には法学、政治学、経済学、統計学、社会学、社会思想史、国際関係論の7教室、自然科学科には数学、物理学、化学、宇宙地球科学、生物学、情報・図形科学、科学史・科学哲学の7教室、保健体育科には体育1教室がそれぞれ置かれており、これが、ほぼ前期課程で行なわれている学科目の授業内容を表している。しかしこの他にも、外国文学や第三語学としてのアラビア語、朝鮮語、イタリア語、インドネシア語、ヒンディー語、トルコ語などが開講されており、さらに自然科学の科目としての情報処理など、新しい授業科目も設けられている。

全学一般教育ゼミナールは、各教官が自由なテーマで開講するもので、毎学期百数十コマにのぼる多彩な授業が設けられている。これは、設置基準による学科目の不備を補うとともに、小人数によるゼミ形式を原則とすることにより、学生が教官と直接交流できる貴重な場であり、中規模以上のクラスではなかなか実現するのが難しいきめ細かな指導を可能にしている。

総合コースは、複数の教官が参加して、世話役教官の司会のもとに、主にリレー方式で行われる講義で、専攻分野の異なる教官が教育レベルで協力する絶好の場であり、多彩な人材を擁する教養学部ならではの授業である。近年では、表象文化論のスタッフが中心になった前衛芸術論、外国語女性教官が中心になった性差文化論、比較文学比較文化の教官が中心になった比較日本文化論などが挙げられる。まさに、東大駒場の「学際性」を存分に発揮する場と言える。

⑶現状と問題点

このように前期課程教育は、新制東大の積極的なベクトルを担うべく、常に自己検討を怠らなかったが、しかし、日本の高度成長期を契機に、東京大学内部における新たな学問ニーズに対応すべき改革や学生数の急増は、様々な問題を生み出してきた。1968年から1969年にかけ

ての大学紛争を機に、地球的な規模で知の枠組みに大きな変革が起きたし、東大駒場といえども、そのような地平の亀裂から自由ではなかった。というより、東大駒場は、そのような知の変革を自ら生きることの出来るスタッフの充実を目指すことにおいては、恐らく日本のなかでも最も積極的な部局の一つであった。新たなる専門知は、知の地平そのものの変動と相関的であることを、鋭く自覚していたのだと言ってよい。それは、一方で、後期課程と大学院の改組拡充へと繋がるのだが、他方、東大駒場の根拠にも関わる一般教養課程の見直しも、必然的に内包するものであった。特に、80年代後半からの、いわゆる「大学院重点化構想」の内部では、前期課程教育のありかたは、全学的な関心の的でもあり、より近くは一般教養課程の「大綱化」とあいまって、「教養学部問題懇談会」「前期課程教育推進特別委員会」等、全学的なレベルでの議論が行なわれてきた。教養学部としては、総合文化研究科の改組・充実と学部教育特に前期課程教育の真に今日的な再編成とが、整合性のある形で実現するような改革を計画中である。

従って、ここでは問題点の主要な面と改革の基本的理念を挙げるに留めるが、何よりも重要なことは、学生の学習意欲をかき立てるような教育を目指すことであろう。高度に発達した情報化社会にあって、大学が独占的な情報の集蔵体であり、またその特権的発信者であるというような幻想を捨てることから始めなくてはなるまい。そのような地平にあっては、大学は知の先端化を誇ると同時に、その知が組み込まれている多元的な仕組みについても自覚的であるべきだろう。この文脈でいえば、先に再定義したような「リベラル・アーツ」、すなわち「同時代の知の基本的枠組み即ちパラダイムの学習と、そのような知にとって不可欠な基本的なテクネーの習得」としての「リベラル・アーツ」こそが、現代における知の基盤についての実践的教育となるはずである。かつて「教養」の名で呼ばれた社会人としての総合的判断力の涵養も、それに不可欠とされたある種の知的能力も、グローバルな価値観やヴィジョンが失われた現在であるからこそ、今日的に再評価されねばなるまい。

始めにも書いたように、発足当時から、**教養学科**は、東大駒場の理念の実験的モデルとして機能した。それは、**学際的**な教育・研究と、**発信型**の外国語を身につけた**実践的国際人**の養成を目指し、かつそれを、極めて不備な教育・研究環境にもかかわらず、**小人数精鋭教育**という形で実現したからである。このような**教養学科モデル**は、リベラル・アーツの一方の極を構成するものとして相変わらず有効なコンセプトである。しかし同時に、それを7500人の学生に対して行うことは不可能である。必修枠の軽減、学生の選択肢の増大とともに、個々の授業をインテンシヴで実効性のあるものにすること、本郷諸学部の教官の「小人数教育」への参加などは不可欠であろう。現在、教養学部が検討中の前期課程教育改革案においても、「小人数教育」による授業の多様化は、教官と学生の人間的接触による学習の動機の活性化として重要なコアーをなしている。と同時に、今日の人間を浸しているハイテク・メディアによる情報の生産・消費のネットワークは、それ自体として教育の現場に取り込むべきものである。UT-netの敷設を機に、マルチ・メディア教育が真剣に議論されるようになったのは、当然である。現在進行中の改革のなかにも、前期課程教育においては「受信型」にならざるを得なかった外国語を「発信型」に転換するためのプロジェクトとして、AV機器の大規模な導入による「英語Ⅰ」と、それと補完的関係にある「小人数授業」とが計画されている。また、自然科学においても、高校での学習状況の著しいばらつきを踏まえて、レヴェル別に複線コースを設定し、多くの科目について「小人数教育」の講義を導入する計画であることなどを挙げておく。

学部後期課程教育（シニアあるいは専門教育）

(1)教養学科

教養学科は、複数の専門分野にまたがって総合的に対象を捉える学際的な教育・研究を行うこと、学生が高度の専門教育を受けるとともに、広くかつ深い教養を習得しうること、新しい

発信型の外国語教育の理念に基づいて国際的活動を成しうる人材を養成すること、などを目的として、1951年に設立された専門課程であり、当時としては極めて挑発的な主張とも受け取られた「徹底した小人数精鋭教育」を実現した。発足時は、**アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ**、のそれぞれの「文化と社会」を対象とする分科と、**国際関係論、科学史及び科学哲学**の6分科であったが、その後、1967年以降の大幅な改組拡充によって、現在では、**教養学科第一（総合文化）、教養学科第二（地域文化）、教養学科第三（相関社会科学）**の3学科を擁するに至っている。

前期課程からは、文Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、理Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのいずれの科類からも進学できるような定数措置がなされており、現在3学科あわせて110名が進学している。特に文Ⅲからの志望者が多く、全学部を通じて最も平均点が高い。卒業生は、幅広い知見、国際的視野、高度の外国語能力を高く評価されているが、その約四分の一が大学院に進学して研究者の道を進み、約四分の三が社会に出て、官公庁、一般企業、銀行、ジャーナリズム等、広い分野で指導的な立場にあって活躍している。

学位は**教養学士**（Bachelor of liberal arts）である。

a．教養学科第一（総合文化）

文化人類学、人文地理学、人間行動学、表象文化論、比較日本文化論、科学史及び科学哲学の6分科が置かれ、それぞれ、人類文化の本質とその歴史的展開、人間環境系とその地域的多様性、人間行動の諸特性とその成立の仕組み、芸術表象の創造・伝達・受容を通して立ち現れる諸文化の歴史的特性とその構造的特質、人類文化の中に置かれた日本文化の普遍的特性、科学の発展の歴史と科学の思考の構造、などについて、学際的観点に立った教育・研究を行なっている。これらの6分科の講座を基礎にした**大学院**は、**文化人類学、表象文化論、比較文学比較文化**の3専攻が総合文化研究科に置かれており、**科学史・科学基礎論専攻**は理学系研究科にあり、人文地理学及び人間行動学は、それぞれ理学系研究科の**地理学専攻**、人文科学研究科の**心理学専攻**を支えている。これらの大学院に進学して研究者となる卒業生は全体の4割とかなり高いが、就職者のうち五分の一以上がマスコミ関係であるのが目立つ。また、美術館、図書館などの文化施設関係や、広告代理店などの情報産業に就職する者が多いのも特色である。

b．教養学科第二（地域文化）

アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、アジア、中南米の7**分科**が置かれ、それらの正式の名称が「…の文化と社会」であることからも分かるように、個々の地域の歴史、文学、思想、言語、芸術、政治、経済など、文化と社会の諸局面について、通時的ならびに共的な視座から、具体的かつ多角的理解を目指すとともに、分科間の協力による諸地域の相関関係の分析、日本との比較による問題発見、さらには世界の文化と社会全体に対する総合的展望の確立を目指す教育・研究を行なっている。総合文化研究科の**地域文化専攻**や人文科学研究科の言語・文学系の専攻等、大学院に進む者は卒業生の約三分の一であり、他の三分の二は、ジャーナリズム・銀行・商社を始めとする民間企業に就職するが、外交官を始め官公庁で活躍する者も少なくない。7分科のうちアメリカ、イギリス、フランス、ドイツの4分科は、国際関係論、科学史及び科学哲学とともに、教養学科創設時からこの学科を代表して、その国際性を内外に知らしめるのに大いに貢献してきた。

c．教養学科第三（相関社会科学）

国際関係論、相関社会科学の2**分科**が置かれ、現代社会が直面している様々な構造的問題を総合的な視座から解明することを基本理念に据え、個人、集団、組織、制度、そして社会全体、国際関係、さらにはそれらの歴史的動態等について、厳密な社会科学的方法と諸分野の学際的協力に基づく教育・研究を行なっている。大学院は、総合文化研究科にそれぞれ**国際関係論専攻、相関社会科学専攻**があり、卒業生のうち七分の一がそれらの専攻に進んで研究者となるが、外交官を始めとする国家公務員の道に進む者がほぼ同数であり、これが本学科の大きな特徴となっている。また民間企業では特に銀行が目立ち、ジャーナリズム関係がこれに続いている。

⑵基礎科学科

基礎科学科は、1962年（昭和37年）に発足した比較的新しい学科で、自然科学の幅広い基礎をもつ人材を、社会の様々な分野に送り出すことを使命としている。1981年には第二が新設されて、**基礎科学科第一（相関基礎科学）と基礎科学科第二（システム基礎科学）**の2学科構成となり、現在に至っている。いずれも、学問分野の細分化を極力排し、総合的視座に立った教育・研究をその基本理念とする。前期課程からの進学定員は、第一が約55名、第二が約12名である。

学位は**教養学士**（Bachelor of liberal arts）である。

ａ．基礎科学科第一（相関基礎科学）

数理科学、物質科学、生命科学の3コースから成り、自然科学の基本的構成分野である数学・物理学・化学・生物学等を一括して「基礎科学」と捉えた上で、自然科学を学際的・相関的に理解することを目指した教育・研究を行なっている。**数理科学**は、自然現象が内包している数理構造を把握し、**物質科学**は物質の示す諸現象を、物質の基本的構成要素である電子、原子、分子およびそれらの集団系の各レベルにおいて統一的に理解し、また**生命科学**は、生命現象の特性を、分子、細胞、個体レベルにわたる各階層において把握することを、それぞれ目的とする。基礎科学科第一の講座を基礎とする大学院は、理学系研究科に設置された**相関理化学専攻**であるが、卒業生の約半数が大学院に進学し、残りの半数が、電機・ソフト関連の一般企業や銀行、商社等に就職する。

ｂ．基礎科学科第二（システム基礎科学）

基礎数理学、基礎情報学、基礎システム学、生命システム学、宇宙システム物理学、物質系計画学、エネルギー計画学、生態系計画学、地球系計画学の9講座から成り、これらの講座名が如実に語っているように、現代社会が直面する複合的諸問題（たとえばエネルギー、資源、環境、科学技術計画等）に対処するために必要な予測・評価・意思決定・計画の科学化に関わる基礎的方法論と、関連する科学・技術の体系的知識の習得をはかることを目指した教育・研究を行なっている。本学科を基礎とする大学院は、総合文化研究科の自然科学系専攻である**広域科学専攻**であるが、卒業生は大学院に進学する者が多く、専門の分化はむしろこの段階で行なわれる。

大学院教育（総合文化研究科及び他研究科）

⑴総合文化研究科の組織構成

新制東京大学大学院は、発足当時から予算的措置を持たず、部局である学部の上に乗る形で運営されてきた。しかし、当初は、学部組織とは離れて、言わば部局横断型で発想されていたものが、1970年代に入って、一部局＝一研究科の原則が確認された。その為、従来は、他部局の上に立つ研究科の専攻あるいは講座を構成していた教養学部関連の大学院も、固有の組織を持つ必要が生じた。そもそも、教育・研究の実績からしても、教養学部の上に固有の大学院研究科が立つのは、時代の要請でもあったと言える。

こうして、1982年に、人文科学研究科から**比較文学比較文化専攻**が、社会学研究科から**国際関係論専攻**が分かれ、それに新設として教養学科第二に基礎を置く**地域文化研究専攻**と教養学科第三に基礎を置く**相関社会科学専攻**が加わって、4専攻からなる**総合文化研究科**が発足した。1984年、基礎科学科第二に基礎を置く**広域科学専攻**が新設され、1986年には**文化人類学専攻**が社会学研究科より移管された。さらに1990年には、教養学科第一に基礎を置く**表象文化論専攻**が新設され、合わせて7専攻の大学院になった。

総合文化研究科は、教養学部特にその後期課程における専門教育の深化・展開として、発足当初よりその教育・研究理念として学際性と国際性を掲げ、かつ単に専門領域における研究者ばかりではなく、社会の実践的分野においても活躍しうる高度の知見を備えた専門家を養成す

ることを目標としてきた。それは、一方で、研究・教育を単に領域間的学際性ではなく**横断型**(trans-disciplinary) なものとして設定することであり、国際的なレヴェルにおいても、専門知の単なる受容者ではなく、**国際的な場への知の発信者**たろうとする計画である。と同時に、他方では、知の創造が大学の内部に留まることなく、広く**現実の社会**に、しかも地球規模で拡大すべきであり、国際化と情報化の益々進む現代社会において、様々な文化創造の計画・立案やその意思決定に責任を持ちうる人材に対するニーズに応え、更には来るべき世紀の要請を先取りしようという野心的な企てである。

現在、総合文化研究科の入学定員は、7専攻合せて、毎年修士課程52名、博士課程30名であるが、これ以外にも別枠で外国人留学生を相当数受入れていることもあって、実際に在籍している大学院生は、修士・博士あわせて334名を数えている。すでに触れたように、研究生（51名）も含めて院生のなかに外国人留学生の占める割合が極めて高いのは、本研究科の大きな特徴であり、本研究科が国際的に開かれた組織であることを如実に物語っている。

学位は、修士については「修士（学術）」であり、その英訳は、文系専攻についてはMA、理系の専攻についてはMS、博士は「博士（学術）」で英訳はPhDである。いづれも専攻名の英訳を（ ）内に記すことになっており、その英訳は次のとおりである。

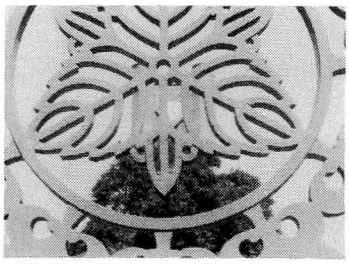
比較文学比較文化　Comparative Literature and Culture
表象文化論　Culture and Representation
地域文化研究　Aeria Studies
国際関係論　International Relation
相関社会科学　Interdisciplinary Studies of Social Science
文化人類学　Cultural Anthropology
広域科学　General System Studies

(2)他研究科に基礎を置いた大学院専攻あるいは講座は、理学系に**相関理化学専攻、科学史・科学基礎論専攻**及び人文地理学講座（地理学専攻）があり、また人文科学研究科の西洋古典学専攻も、3講座のうち2講座までが教養学科第一に基礎を持つ。この他、人文科学研究科の英語・英文学専攻には2博士講座と1兼担講座が、独語・独文学専攻には1博士講座と1兼担講座が、仏語・仏文学専攻には1博士講座が、ロシア語・ロシア文学専攻には2博士講座が、心理学専攻には1博士講座が、国文学専攻と哲学専攻と西洋史学専攻にはそれぞれ1兼担講座が、教育学研究科には1兼担講座が入っており、更に、理学系研究科には、すでに述べた相関理化学専攻のほかに7兼担講座が入って、これらの専攻を支えている。教養学部の教官は、主としてこれらの講座との関連で他研究科の教育・研究にも協力しており、その指導する学生数は約330名に達する。この数字には外国人研究生は含まれていないから、総合文化研究科と他研究科を合わせると、教養学部教官は、東京大学大学院において、700人に近い学生の教育と研究の指導にあたっていることになる。

3. 教養学部の問題点

教養学部が抱えている問題は少なくないが、その最も重要なものをあげれば、次の四点、すなわち 1）前期課程教育のカリキュラム編成と授業形態、2）三層構造の運用上の調整、3）事務組織（特に三層構造との関係において）、4）助手のステータス、に要約される。

1）大学設置基準によって定められた「一般教養課程」の学科目カリキュラムは、新制東大発足以来、細部の手直しはあったものの、大筋では40年以上、変わらなかったと言ってよい。勿論、東京大学では、同時代の知のニーズに適ったカリキュラムを編成するように努力してき



たし、設置基準上の学科目に指定されていない教科も、自主的に開講してきた。第三語学、文系・理系を通じての情報処理教育、150を越える全学一般教育ゼミナールなどは、その例である。しかし、専門課程における知の細分化やそれに伴う教育上の要請と、「一般教養課程」の授業編成とが、必ずしも合致しないことは、つとに指摘されてきたし、また同時に「リベラル・アーツ」が単なる専門予科に留まるものでないなら、そのような状況下においてこそ、自らの再定義をする必要は緊急なものとなっていた。

高校の延長のような講義、予備校の熱気を持たぬ動機づけの希薄な授業、学生のジャルゴンで「シケ対」と呼ぶ講義ノートの組織的コピーによって単位さえ取れればよい教科といった、これも学生が軽蔑的に「般教」と呼んでいるものの危機はもはやフンボルト以来の「教養」の理念の崩壊や、戦後民主主義教育の解体についての危機意識によってのみ乗り越えられるものではないと思われる。大学審議会の答申に基づいて文部省が「一般教養課程の大綱化」を決定した背景には、単なる効率万能主義の社会的要請以上に、一般教養課程の空洞化に対する社会的批判があったことも否定しがたい。我々「一般教育等」に携わる現場としても、もしそれが教養学部においても空洞化しているのなら、その空洞化の理由を探り、その根拠を分析して、21世紀の大学における「リベラル・アーツ」の基盤を築く作業に役立てていかなければならないはずだ。

カリキュラムと言う時、そこには、教科の内容と同時に、授業の形態や方法が含まれている。

先ず教科について言えば、設置基準によって教養学部の「一般教育等」に設置されている学科目をここで確認しておくと、次の26科目である。すなわち、

哲学、教育学、歴史学、人文地理学、人類学、文学、英語、独語、仏語、中国語、ロシア語、スペイン語、古典語、法学、政治学、経済学、統計学、社会学、社会思想史、国際関係論、数学、物理学、化学、生物学、科学史、保健体育

である。この内、教養学部発足当時には存在しなかった学科目は、教育学、人類学、ロシア語、スペイン語と国際関係論、科学史であり、またかつては存在していたが、その後、講座への振替によって学科目リストから消えたものに、心理学、図学（情報・図形科学と改称）、地学（宇宙地球科学と改称）があり、学科目として今も「教室」を構成している。文学はその授業科目からすれば国文学・漢文学、外国文学、西洋文学史などであるが、実際には「国文学・漢文学」が「文学」の代わりに「教室」となっており、外国文学は、外国語教室に任されている。

このように、教科としての学科目と教官組織としての学科目とは、教養学部の場合、必ずしも整合性のあるものではなくなっている。更には、学科目の名称が、少数の例外を除けば、如何にも「19世紀」的であり、場合によっては、高校の教科と区別をするのが困難なものさえある。それにもかかわらず、学科目の名称の変更も、また新しい学科目の設立も極めて困難であったのは、それが概算要求事項であり、その折衝には夥しい労力を要したからである。例えば、スペイン語を第二語学として学科目に加えるためには、教養学科に「中南米分科」を新設することを前提に、先ず「中南米研究」の講座を作る手続きが必要であったから、併せて学年次にして三年はかかっている。その折衝に当たった教官の並々ならぬ熱意と努力の賜物としてスペイン語は第二語学となったのである。数年前にアラビア語の専任ポストを作った時は、幸い振替によって「地中海文化論」講座の新設概算要求が認められ、スペイン語教室に預けるという形でアラビア語の専任教官を作ることができた。

一般教養課程の学科目が、こうして固定化してしまえば、それがルーティン化するのも止むをえぬことかもしれない。また、教養学部の場合、他の大学の教養部とは異なって専門課程、大学院を持っているから、「教養部解体」の波は直接に被るまいという楽観論があったことも否定できない。しかし、「一般教育等」と呼ばれる「一般教養課程」の学科目自体、40年の経験の後には見直すべきものが少なくないのであるから、「大綱化」を機に、その抜本的な組替えを行なう勇気が求められるところだろう。

2）本学部の教育・研究組織の特長をなす三層構造については、それが全体に徹底してきた

のが比較的近年の現象であり、また極めて複雑な力関係に貫かれているだけに、その有効な運用のためには多くの知恵と努力が要る。三層にかかわる教官は同一の人間なのであるから、調整が上手くいかない場合には、ある個人に過剰な労度が加わったり、あるいは、個人的にも集団的にもフラストレーションに陥る危険は常に存在しているからだ。

例えば、人事にしても、それを発議し、教授会に提案するのは前期課程の「教室」であるから、後期課程および大学院のための人材ではなく、先ずは前期課程教育のための適任者を選ぶことになる。しかし、同時に、その候補者は、後期専門課程ならびに大学院においても教育・研究の任に当たり得る人物であることが求められるのであり、事実、選考基準は候補者の教育能力とともにその専門的研究者としての資質を重視する。そのために、教室メンバーの中での評価が分かれることや、前期課程学科目との関係で適任とは見なされないという事態も生じうるのだ。

この点も含めて、三層構造の問題は、教育・研究のレヴェルよりは、学内行政のレヴェルで教官の労度を増大させている。三層それぞれの内部で意思統一を計らねばならないばかりではなく、三層間相互の意思統一が必要だからである。その意味でも、後期専門課程と大学院における教育・研究の実績を活かしつつ、前期課程を含めた整合性のある教育・研究分野を、大学院を軸に組み直して、よりスムーズで効率的なカリキュラム構成と教官の意思決定組織を作ることは、急務である。

3）事務に関して言えば、定員削減のために—正確には、大学における「定削」の皺寄せが事務官に来ているために—事務機構が極めて困難な条件を強いられている点は、幾ら強調しても強調し過ぎることはない。ただ、この領域でも、40数年にわたって続いたルーティン・ワークの内で、今や見直しを迫られているものも少なくない。

個々の問題というよりは、全体的な問題として言えば、7500人の前期課程学生を抱えている関係上、当然のことながら、すべてが前期課程を中心に発想されてきた。ために、教養学部を教養学部として存在せしめてきたレーゾン・デートルともいうべき教養学科・基礎科学科に固有の問題が事務上は必ずしも明確に捉えられていない。特に、近年、教養学部においても、大学院レヴェルでの教育・研究が量・質共に極めて重要になっており、それとの関連で留学生の占める割合も飛躍的に増大しているにもかかわらず、大学院が部局でないために、事務機構の上での対応がともすれば遅れがちとなっていることは事実である。

すでに、平成4年4月から、数理科学研究科の発足に伴い、その事務を教養学部が担うこととなったために、単に労度の増加だけではない種々の制度・組織的問題を解決しなければならない事態に立ち至っている。三鷹国際学生宿舎の新設もまた、日本の国際化のなかでは当然に解決しなければならない問題の一端であるが、それだけに、従来の学寮についての発想を大きく転換する必要がある。あるいは、より小さな問題であるが、国立大学におけるTA（ティーチング・アシスタント）の導入も、大学院と学部学科目とに跨がる制度であるだけに、従来の事務機構では解決できない問題を含んでもいる。

いずれにせよ、事務の業務の増大に伴い、教官に掛かる事務的な業務もまた急増しており、教官によっては、もはやその限度を越えているケースも少なくない。

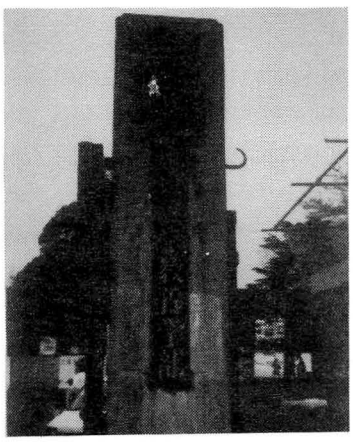
ともあれ、改革のテンポは極めて速く、大学人の通念を打ち破るものであるから、事務機構にもそれに見合った新しい発想と実行力が求められている。さらに言えば、大学において教官と事務との協力がこれほど必要になったことも少ないのではないかと思われる。

4）助手については、そのステータスが不安定であること、その業務が判然としない場合があること、特に教育の現場で責任ある立場に立ち得ないこと、などが問題点として挙げられる。教養学部の場合、講座・学科目併存型の学部であり、かつ、その講座の多くが振替によって作られた事情もあって、助手定員はそもそも絶対的に少なく、所謂「借用定員」に頼っている。その上、助手は定員削減の対象になるから、減ることはあっても増えることはまずない。大学院の専攻を持つ研究室でも、助手を持たない研究室はあるし、また、前期課程の教室レベルで言えば、たとえば、外国語専任教官110名に対して助手は僅か12名であり、しかもそのうち8

名は後期課程に配属されている。しかも、教室付教務職員は110名に対して僅か2名であり、その例外的な有能さによって、教室事務が破綻を来さずにいるのである。この問題は、差し当たり解決の方策が見つからないだけに、深刻である。

5）その他、教育・研究環境については、資格面積の問題も含めて、改善すべき要素は多い。教官研究室の不足なども、その重要な一例である。教養学部における理系の実験室・実験設備の老朽化・狭隘化は広く知られていると思われるが、しかし、文系教官の研究室問題も深刻である。従来、文系の教官は、大学にいる時間が少ないから個人研究室は要らないという主張がなされていたが、教官の住居空間の悪化や、研究条件（たとえば、情報処理）の変化などによって、文系の教官も大学の研究室にいる比率が極めて高くなっており、このレベルでも、大学は確実に変わってきているからである。

4. 将来計画（大学院重点化構想あるいは部局化）



1）大学院重点化構想あるいは「部局化」と前期課程教育の改革

東京大学教養学部は、現在その設立以来最も重要な転機にさしかかっている。それを構成する二つの力線は、一般教育課程の所謂「大綱化」と、「大学院重点化構想」あるいは大学院の「部局化」である。

第一の力線は、東京大学教養学部のみにかかわるものではないし、また東京大学教養学部は、単なる教養部ではなく、後期専門課程と大学院を持つ全国で唯一の教養学部であるから、同一に論じるわけにはいかない。と同時に、一般教育課程設置基準の大綱化が決まる遥か以前から、本学部は独自の大学院の設立・拡充に努力してきたし、その努力は、1980年代後半に、東京大学において大学院重点化構想が論じられるや、総合文化研究科の改組・拡充という方向で結集することとなった。さらに、過去数年間に、本間長世総長特別補佐を座長とする「教養学部問題特別懇談会」を始めとして、塩野宏総長特別補佐を室長とする「前期課程教育推進特別委員会」に至るまで、東京大学における大学院重点化構想の内部で、前期課程教育に責任を持つべき学部としての教養学部が抱える制度的諸問題の解決がはかられ、重要な成果を挙げている。

本学部としては、すでに事実上ほとんど全ての教官が大学院教育に関わり、指導している学生数からすると、大学院における教育・研究の占める重要さが、工学部、理学部に次ぐものであるという現実と、前期課程教育に対する責任の遂行とを、制度的にも、またカリキュラム編成の上でも、どのようにして新しくかつダイナミックな関係に置くかを検討中である。その間、平成4年度には、教養学部の数学科の教官が、理学部の数学教官と共に、理学系研究科を出て、駒場に独立の部局つまり独立研究科**数理科学研究科**を作るという概算要求が成立し、最も身近な領域で「部局化」が実現したのである。

⑵改革モデル

冒頭に強調した「三層構造」は、他に例を見ないものであるから、改革のモデルは我々自身が発見しなければならないことだけは確かであろう。

後期課程と大学院について述べたように、「横断型学際性」と「発信型国際化」とは、東京大学教養学部の基底的理念である。また、この理念が、従来は予想されなかったような地球社会の様々な局面で、知の創造の現場においてこそ検証されるべきであることも、共通の理解である。

前期課程については、始めにも書いたように、現代において共有すべき知の枠組みと、そのために不可欠の知的技能の習得をもって、「リベラル・アーツ」の二本の柱だと考えるならば、基本的テクネーの習得を目的とする科目を「基礎科目」、知のパラダイムの学習に関わる科目

を「総合科目」と、仮に呼んでおくのは、不隠当なことではあるまい。「基礎科目」には、例えば、「外国語」「情報処理」「方法論基礎」(あるいは「基礎講義」)「基礎演習・実習」(理系は「基礎実験」)「体育実技」が、内容は異なるにせよ、枠組みとしては、文・理共通のカリキュラムとして設定される。それを専門的な学習に発展させるプロセスとして、「総合科目」が、例えば、「思想・芸術」「国際・地域」「社会システム」「人間・環境」「生命・物質」「数理・情報」といった知の基本的分野に従って構成される。そこには、全学的な要望でもある「小人数講義」をできるだけ組み込む。この二つの柱を補う物として、「主題科目」を立て、複数教官による横断的な主題についての講義(従来の「総合コース」)とともに、多様な少人数教育の場を確保する自由主題ゼミを組む。これは、将来計画特別委員会第一小委員会で議論されている素案に過ぎないが、いずれにせよ、今回の「大綱化」は、未来を先取りするような形で、我々自身が「前期課程教育」の再定義をするための絶好の機会だと考えるべきである。

しかし、如何にカリキュラムの内容が優れていても、それを魅力的な授業にすることが出来なければ意味があるまい。従来の「一般教養課程」に投げかけられた批判の一つに、大人数講義があった。本学部では、大人数授業は比較的少ないし、また知的人格としての教官に学生を引きつける人間的な魅力と、学生の知的好奇心をたえず刺激しうるパフォーマンスの才があれば、「大人数授業即悪」とは言えないだろう。しかし、それを万人に期待することが出来ないのもまた事実である。むしろ、週一回の大人数講義が、その内容においても方式においても、ルーティン化していることのほうに問題があるだろう。ルーティン化という点では、小人数授業がそのままでは授業の活性化に繋がらないことも、言をまたない。

書物だけが情報の場ではなくなり、ハイテク・メディアによる情報の生産・受容・収蔵の仕組みが社会のあらゆるレベルで浸透しつつある現代において、マルチ・メディア教育は遠い先に掛けられた幻想ではない。「英語Ⅰ」はそれへ向けての実験の第一歩であり、また全学部的に、マルチ・メディア教育に関する様々な問題を論議し発案するための委員会として、「将来教育懇談会」が発足していることも書き添えておく。

同時に、このような状況であるからこそ、教官と学生の人間的な接触を重んじる小人数教育の重要さも、新たな形で見直さなければならないのである。

ともあれ、カリキュラムそのもののコンセプトが斬新でなければならないだろう。大学紛争後に始められた「総合コース」のように、「プロジェクト・チーム」がカリキュラムに責任を持つ形態は、今後益々その重要さを加え、教官が自分の専門という「蛸壺」に閉じ籠もる弊害への有効な解毒剤ともなるだろう。また、「教養学科モデル」がその有効性を実証してきたように、「インテンシヴな」教育の仕組みが考案されねばならない。講義は、なにも一週間に一度と決める必要はないのであって、ある教科を特定の時期に集中的に教科を学習させる「集中型授業」も、この際真剣に検討されなければならないであろう。

勿論、7500人という数の学生を擁し、かつ専門諸学部の要望にも応える形で改革を行なうのは至難の業ではある。しかし、いま、新たな一歩を踏みださねば、21世紀の大学として生き残れない位の覚悟で事に臨まなければならないことだけは、確かである。

(3)大学院総合文化研究科の改組・拡充

「教養学科モデル」は、我々教養学部が開発した、今以て未来の可能性を孕むモデルであり、そのコンセプトを基盤として総合文化研究科も発足した。今回の「大学院重点化構想」あるいは「部局化」による大学院総合文化研究科の改組・拡充は、まず、従来他研究科において行なわれてきた教育・研究活動を、その組織基盤である講座とともに、総合文化研究科に移し、既設7専攻、すなわち**比較文学比較文化、表象文化論、地域文化研究、国際関係論、相関社会科学、文化人類学、広域科学**の諸専攻の基礎となる講座を拡充し、同時に大講座に組み換える。理学系研究科から移管し、大講座に改組・拡充した**相関理化学専攻**と、新設の**言語科学専攻**がそこに加わる。理学系研究科に置かれていた人文地理学講座は、地球環境論として広域科学専攻の重要な局面を担い、同じく科学史・科学基礎論の3講座も、科学のメタ・サイエンスとし

て、同専攻の基幹講座となる。また人文科学研究科の心理学専攻に置かれていた人間行動学講座と教育学研究科の兼担講座体育学と共に、相関理化学専攻の生命系の身体・運動科学と認知科学を支えるが、これらの諸領域は、新しい総合文化研究科において、文字通り**文系・理系横断型**組織の要となるだろう。

新設を予定している**言語科学専攻**について言えば、教養学部付属言語文化センターを改組・拡充し、そこに、人文科学研究科より移管する言語関連の講座の重要な部分を加え、純増講座と合わせて、5大講座とする。その内容は、「言語基礎論」「言語情報論」「言語社会論」「テクストの科学」「言語教育法」であり、伝統的な Linguistics ではなく、21世紀を先取りする実践的かつ横断的な「言語の科学」(Science of Languages) である。そこに設定される実務専修コースによって外国語教育の現場において指導的な役割を果すべき社会人の再教育に資すると同時に、「外国語としての日本語」の組織的研究と教育によって、外国人留学生の教育と日本語の国際化に貢献しようとするものである。

また、すでに実績のある文系の諸専攻も、表象文化論は「アート・マネージメント」と「日本芸能論」をコアーに社会人のための専修コースを設ける計画であるし、社会的ニーズの大きい地域文化研究専攻は「ヨーロッパ」「ロシア・東欧」「地中海」「北米」「中南米」「アジア・太平洋」と地域を文化に従って横断的かつが重層的に設定しつつ、総合的地域研究として、社会人の再教育に資するコースを開設する予定である。さらに、国際関係論専攻及び相関社会科学専攻においても、「国際開発」や「国際政策科学」について、高度の専門的知見をそなえ、国際機関等の現場において活躍しうる実務家の養成のための、社会人専修コースを構想している。

すでに、ここ数年、大学院入学志願者ははっきり増大しており、また他大学に類似の優れた専攻がないこともあって、他大学からの志願者の増加も顕著である。それに加えて、外国人留学生は増加の一途を辿っており、学部長＝研究科委員長のもとに、評議員を座長とする「留学生問題懇談会」を発足させて、包括的に留学生に関する諸問題を審議し、解決策を立案することとなった程である。三鷹国際学生宿舎の構想もまた、このような現実を踏まえたものである。従って、所謂「大学院部局化」に伴う学生増に関しては、それに見合うニーズがあることは確実だと言える。

いずれにせよ、大学院を充実させることで、その学問的成果を学部前期課程ならびに後期課程にフィード・バックさせるという本学部の基本的仕組みが、21世紀の大学のモデルとして機能するためには、大学院重点化構想の実現は不可欠の前提である。その意味で総合文化研究科を、真に横断的学際性と発信型国際性とを兼ね備えた大学院とし、あわせてそこを部局とする新しい組織に変換することは、東京大学教養学部・総合文化研究科の急務であると言えよう。

(4)その他

三鷹国際学生宿舎の発足に伴い、駒場寮跡地の利用については、現在幾つかの案が検討中であるが、そのうちの幾つかのプロジェクト実現に向けて、募金態勢をとることは教授会で了承されている。たとえば、同時通訳設備のある会議場と小会議室、ゲスト・ルーム、食堂、サロン等を含む国際学術会館、劇場、美術館、スポーツ施設等を含む国際文化会館を建設して、そこを駒場国際学術文化シティーとすることも、世界と地域とに開かれた21世紀の大学のモデルを提供する上で重要な貢献をなすと考えられる。

3　各種委員会

学内行政と会議

本学においては、専任教官の選考基準として、教育と研究の両面における能力が問われることはいうまでもないが、同時に、教養学部（および大学院総合文化研究科）のさまざまなレヴェルでの運営に積極的に参加しうる資質も要求されている。それはまず、学部の意思決定機関としての教授会への出席によって果たされるものだが、それのみならず、教官組織としての5科レヴェルにおける教室に始まり、様々な委員会、さらには学部長・評議員のような学部全体、ひいては東京大学全体の運営にまで関わる責任を、原理的には各教官が平等に負っていることを意味する。

こうした学内行政への積極的な参加は、教養学部の運営が常に民主的なものであるための最低限の条件である。だが、外部に向けて広く開かれていることを使命とする現在の大学にとって、国際的な水準での教育研究環境のたえざる向上を目指し、時代とともに変化する種々の社会的な要請にも真摯に対応するためには、組織としての柔軟性が恒常的に保たれていなければならない。その意味で、さまざまなレヴェルにおける各教官の学内行政への積極的な参加は大学を制度的な硬直化から救い、不断の自己改革へ向けて組織的柔軟性を維持するための必要にして不可欠な条件となるだろう。研究と教育のみに専念する大学というイメージは、いまや、教養学部においては確実に過去のものとなろうとしている。

もちろん、あらゆる教官が卓抜な行政的手腕の持主であるとは考えられないし、またそうした資質が各人に要求されているわけでもない。問題は、大学の置かれたこうした現状の認識を共有する教授会構成員が、しかるべく理にかなった分業によって、学部運営の様々な局面に直接的かつ間接的に参加するシステムを円滑に機能させることにある。大学の知性は、いまや教育と研究のみならず、この運営システムの有効性の創出にも発揮されねばならない。それが、教育と研究の高い水準の維持につながらないなら、学内行政はたんなる学内政治に堕す危険をはらんでおり、そうした弊害をあらかじめ避けようとする態度の表明として、各教官の学部運営への積極的な参加が求められているのである。

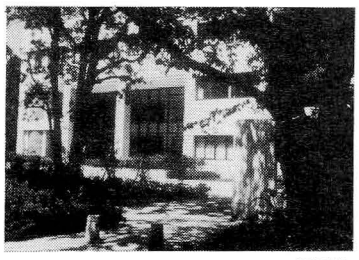
現在、教養学部は二つの課題に直面している。それが、大学設置基準の改正にともなう一般教養課程教育の組織替えの問題と大学院重点化構想の実現に関わる問題であることは、すでに触れられている（Ⅰ－2)。もちろん、これに取り組むことだけが自己改革につながるわけではないが、教養学部にとって極めて重要な問題であることはいうまでもない。前述の組織としての「三層構造」故に、この二つの課題が幾重にもリンクしあい、さしあたっては後者の問題のみを解決すればよい東京大学の他部局に比べて、遥かに複雑な問題系を抱えこんでしまっているからである。

こうした課題に対応すべく、教養学部は、各科および各教室選出の常設の各種委員会のほかに、プロジェクト・チーム的な性格を持つ複数の特別委員会を組織し、問題の解決に当っている。前期課程の各教室と学科のレヴェルでも、後期課程の分科や学科のレヴェルでも、大学院の各専攻のレヴェルでも、個々の問題ごとに綿密な討論が持たれ、意見の調整をはかっている。過渡的な事態であるとはいえ、これが教養学部の「三層構造」に独自の「会議の多さ」となって、一部の教官に過重な負担を課しているのは否定しがたい事実である。その行政的な業務の繁雑さは、教育研究条件の向上を目指すものでありながら、時として教育研究活動と両立しがたい状況にまでたち至っている。また、それが事務職員の労働条件の一時的な悪化をもたらしかねないことも無視されてはなるまい。

自己改革の実現にあたって大学がしばしば陥りがちなこうした運営上の「不条理」のいった

んを紹介する目的で、教官の教育と研究につぐ第三の仕事である行政的な責務についておてその概要を記しておくことも無意味ではなかろう。以下に、教養学部に存在する各種委員会のうち主要なものの業務の説明を記しておく。

1) 前期課程と後期課程


15号館

第一委員会

教養学部の教育と研究に関わる重要な案件についての意思決定機関である教授会の下に置かれており、教授会に提出される案件を検討して審議の慎重を期すとともに、あらかじめ問題を調整して議事の簡素化をはかる。その構成員は、前期課程の教官組織を代表する五科の科長、後期課程の教育組織を代表する5学科の委員長のほかに、俗に「ナンバー委員会」と呼ばれる常設の各種委員会等の委員長である（32ページ参照）。「ナンバー委員会」は、第一委員会を除いて七つあり、それぞれの任務を要約すれば次の通りである。

第二委員会

前期課程のカリキュラムを担当し、学期ごとの時間割作成を中心として授業計画を調整する。300名を超える専任教官とおびただしい数の非常勤講師の授業のコマの組合わせや時間帯の指定など、きわめて多元的な問題を解決するためには、教室所属の全教官の活動を包括的に把握していなければならない。さらに、後期課程、大学院の授業計画は、それぞれの水準で別の担当者があたっているため、それとの調整のうえで時間割を作成させねばならず、この委員会の委員は、学期ごとに極めて複雑な問題を解決しなければならない。

第三委員会

学部の予算を扱う第三委員会の任務は、経理課が作成する年間予算の原案を検討し、必要な修正を施したものを教授会に予算案として提出し、承認を求めることにある。学科目制の前期課程と講座制の後期課程の予算の分配に公平を期するため、複雑な配分方式が確立しており、その限りにおいて、国会の予算委員会とは性質を異にする。第三委員会の場で熾烈な予算折衝が行われたりすることはない。特別経費など、その配分を第三委員会が討議するケースもあるが、年度ごとのおよその優先順位が習慣的に守られている。後に示されるように、教養学部は多くの科学研究費を得た実績があり、委任経理金等の研究補助も少なくないが、これらの財源は第三委員会の管轄外にある。なお、大学院は、現行の制度では学生あたりの校費しか予算化されていないので、この委員会には代表権を持っていない。

第四委員会

何とも不思議なことに、病院でもない教養学部には、第四委員会は存在しない（発足当初、「もっぱら研究にかかわる問題」を扱う委員会として存在したことはあるのだが。）

第五委員会

「学内広報」より歴史が古く、教官の執筆する「駒場広報紙」として高い評価を蒙っている「教養学部報」の編集にあたるのが第五委員会である。原則として月一回発行され、春の新学期には教官の自己紹介の特集号を始め、外国語学習のため辞書紹介の特集号が組まれる。学部ガイダンスの時期には学部紹介、学年末には退官教授の惜別の辞などが紙面を飾る。執筆者は自由に自分の考えを披露し、反論が出て論争に発展することもある。記事は多岐にわたり、教養学部の教官の関心の広さと思いもかけぬ趣味などを知ることもできる。教養学部を訪れた海外の著名な大学人の講演の要旨など、この新聞でしか読めない記事も少なくない。

第六委員会

この委員会は、学生課の協力のもとに、学生問題を担当する。学生運動の盛んであった時代には、不測の事態が起きるごとに招集され、昼夜を問わず交渉に当らねばならず、委員は体力と精神力の酷使を要求された。解決すべき問題によっては、拡大第六委員会が組織され、その性質によっては、臨時特別対策委員会が発足して対応にあたる。昨今は定期的な委員会の開催でこと足りるが、この委員長がかつてに比べて閑職となった現状を祝福しているだけでよいかはどうか、複雑な感慨にとらわれる。

第七委員会

教養学部の入試実施委員会にあたる第七委員会は、前期課程の学生選抜を担当する。この入試は、後に触れるごとく（Ⅲ—1）全学部的な事業であり、全学的な入試管理委員会の下に、全研究所の教官も参加する。第七委員会は、入試の円滑な実施のための種々の対策を講じることを任務とし、大学センター試験の実施委員をも兼ねている。出題ならびに採点委員は別途に選ばれ、第七委員会の権限外である。ちなみに、総長の諮問機関として、入試制度問題検討小委員会が組織され、入試追跡委員会も全学的なレヴェルで活動している。

第八委員会

学生の福利・更生を扱う第八委員会は、学生部の協力のもとに、教養学部に管理責任がある駒場寮と三鷹寮に関わる問題を担当する。かつて学生運動の拠点でもあった寮をめぐる問題は、今日では、居住環境の改善をめぐる学生の要求への対応へと移行し、耐用年限を過ぎ、宿舎として現在の建築基準に合致しない寮の建物に校費を当てねばならない現状の抜本的改善が、最大の課題となっている。その解決は第八委員会の権限を超えた全学部的な問題なので、三鷹国際学生宿舎特別委員会のような臨時委員会を組織して対応している。なお、寮食堂の一部を改装して作られた「北ホール」通称「駒場小劇場」は、初期の野田秀樹や如月小春の活躍の舞台となったが、その「北ホール」運営委員会も第八委員会の管轄である。

第九委員会

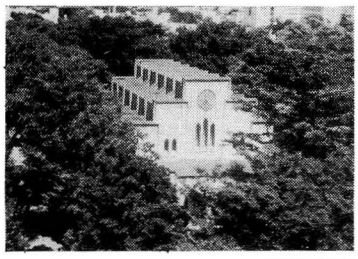
前期課程の将来計画を論じる第九委員会は、それに関わる教養学部が直面する緊急の課題を個別に討議する。現在は、大学の自己点検の問題に取り組み、一年間に及ぶ討論の結果を踏まえ、第九委員長を責任者とする別組織の「年報編集委員会」を発足させ、いま読まれつつある『駒場　1991』の編集作業に当っている。なお、1988年いらい、「大学院重点化」に対応する教養学部の改革問題を討議する機関として、学部長のもとに「将来計画特別委員会」が設けられ、その作業部会がさまざまな審議立案にあたっている。

以上の他にも、図書委員会、大型計算機センター委員会、教育用計算機センター委員会、言語文化センター運営委員会、建設委員会、国際交流委員会、留学生問題懇談会、美術博物館委員会、自然博物館委員会、オルガン委員会（これは最も優雅な委員会である）、将来教育問題懇談会等、多くの学部内の委員会が定期的な会議を行っている。本郷キャンパスでおこなわれる臨時東京大学前期課程教育改善推進委員会（通称塩野委員会）、全学カリキュラム委員会、教養学部連絡協議会等、全学の委員会にも出席を要請される委員も少なくない。特に上記「塩野委員会」に対応すべき教養学部内の委員会は「将来計画特別委員会」の「将来計画第二小委」であり、前期課程のカリキュラム改善に、全学的視野から対応している。

すでに述べた通り教養学部の組織構造上の原理は「三層構造」であるから、委員会も更に後期課程及び大学院の運営について開かれる。

後期課程には、5学科（教養三学科及び基礎二科）のそれぞれの分科あるいは学科レベルでの委員会があり、それらは、**教養学科第一委員会、教養学科第二委員会、教養学科第三委員会、基礎科第一委員会、基礎科第二委員会**を組織して、後期課程における教育・研究の重要な案件

を審議する。委員は分科主任・分科選出委員、特に必要と認められた者若干名である。教養三学科には、案件の整理・調整のために、総務小委員会がある。また、これらの委員会は、学士入学のための入学試験を組織する。教養学科の運営は、実際に学生を持っている**分科（研究室）**単位で行われるため、人文地理学、文化人類学、人間行動学、表象文化論、比較日本文化論、科学史科学哲学、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、アジア、中南米、国際関係論、相関社会科学の各分科の授業担当者を中心とする**コース会議**が、最下位の意思決定機関となる。博士講座の担当者変更は、ここで行なう（ちなみに、兼担講座の担当者決定は、前期課程の教室と大学院の専攻との協議に基づいて行なわれる。）


900番教室

2）大学院：

大学院については、研究科委員会が最高意思決定機関であることはすでに述べたが、その下位レベルは、**専攻コース会議**である。カリキュラム、学生経費、認定が主な仕事であるが、修士課程の入試、修士論文の審査、博士課程の入試（これは2種類あり得る）は、いづれも、提出された論文についての口述試験を伴うから、これに携わる教官の厖大な労力と知的集中とを要求される。現行の制度では、教養学部と総合文化研究科とは別組織であるから、両者の間に齟齬が生じないように心掛けねばならない。**総合文化研究科委員会**は、博士学位論文（甲）すなわち所謂「課程博士」と博士論文（乙）すなわち所謂「論文博士」を審査するが、その数等については、統計を参照されたい。いずれにせよ、東京大学大学院の内部では、論文提出率の高い研究科の一つである。

3）全学的会議：

学部に関して全学的な意思決定機関は、評議会であり、本学部からは、学部長と2評議員が出席している。大学院については、大学院協議会がその最高意思決定機関である。その下におかれた大学院制度小委員会は、大学院重点化構想を審議するための総長の諮問機関たる大学院問題懇談会とともに、その重要さを増している。

4）現状と問題点：

教養学部前期課程にかかわる特に重要な案件に限っては、学部長は5科長会議を招集して、これを議する（たとえば、学生増募にともなう教官ポストの配分）。案件によっては、後期課程の5委員長を加えた「5科長・5委員長会議」を招集することもある。

以上に述べてきた委員会の多くは、審議内容の決まった常設委員会である。しかし、実効的な特別委員会を設定しなければ事態の変化にグローバルに対応できないことが頻繁に起こるようになった。その典型的なものが将来計画第一小委である。

将来計画第一小委は、概算要求を必要とする組織改革とその実行にあっているために、本部ならびに文部省との折衝を含めて、多面的・多元的作業を負わされて、学部の命運にかかわる様々な変革に、具体的な「解」を至急に出す責任を負っている。ちなみに、そのような委員会では、常設の委員会では見えてこない駒場の多次元的位相とそれにかかわる複雑な問題が、否応無しに立ち現れてくる。

この『駒場1991』の編集も、教養学部将来計画を先へ進めるための、言説的動力の一つを構成するべく遂行されている。

第一委員会委員

科長

人文科学科長	藤本隆志
外国語科長	高辻知義
社会科学科長	折原　浩
自然科学科長	市村宗武
保健体育科長	戸苅晴彦
教養学科第一委員長	河内十郎
教養学科第二委員長	麻生　建
教養学科第三委員長	長尾龍一
基礎科学科第一委員長	庄野邦彦
基礎科学科第二委員長	杉本大一郎

教室主任

哲学	山本　巍
心理学	河内十郎
教育学	丹野義彦
歴史学	新川健三郎
人文地理学	谷内　達
人類学	大貫良夫
国文学・漢文学	鈴木　博
英語	鈴木　博
独語	高辻知義
仏語	新倉俊一
中国語	傳田　章
露語	森安達也
古典語	水谷智洋
西語	上田博人
法学	筒井若水
政治学	大森　彌
経済学	杉浦克巳
統計学	松原　望
社会学	見田宗介
社会思想史	山脇直司
国際関係論	渡邊昭夫
数学	折原明夫
物理学	浅野摂郎
化学	竹内敬人
宇宙地球科学	杉本大一郎
生物学	馬淵一誠
情報・図形科学	永野三郎
科学史・科学哲学	廣松　渉
体育	戸苅晴彦

評議員	川口昭彦
評議員	渡邊守章
総長補佐	岡本和夫

役職・委員長および事務部部課長

学部長	原田義也
評議員	川口昭彦
評議員	渡邊守章
図書館長	竹内敬人
科長（人文）	藤本隆志
科長（外国語）	高辻知義
科長（社会）	折原　浩
科長（自然）	市村宗武
科長（体育）	戸苅晴彦
委員長（教養一）	河内十郎
委員長（教養二）	麻生　建
委員長（教養三）	長尾龍一
委員長（基礎一）	庄野邦彦
委員長（基礎二）	杉本大一郎
委員長（第二）	浅見俊雄
委員長（第三）	大野公一
委員長（第五）	支倉崇晴
委員長（第六）	務台　潔
委員長（第七）	井村順一
委員長（第八）	加藤晴久
委員長（第九）	蓮實重彦
全カリ副委員長	加藤正昭
教養三学科議長	長尾龍一
奨学委員長	島田陽
学友会代表理事	杉浦克己
環境委員長	渡邊健
発明委員長	原田義也
オルガン委員長	新田義之
美博運営委員長	森安達也
科博運営委員長	横山　正
アメセン運営委員長	新川健三郎
言文センター委員長	高辻知義
建設委員長	川口昭彦
計算機委員長	川口昭彦
DNA安全委員長	庄野邦彦
防災委員長	原田義也
国際交流委員長	川本皓嗣
臨時増募実施委員長	川口昭彦
動物実験委員長	木村武二
進学情報センター運営委員長	大野公一
放射線安全委員長	庄野邦彦
放射線施設運営委員長	須藤和夫
石綿問題委員長	高野穆一郎
将来計画特別委員長	川口昭彦
将来計画第一小委員長	渡邊守章
将来計画第二小委員長	加藤正昭
保健センター駒場支所長	菅野健太郎
事務部長	松本榮三郎
総務課長	熊澤時雄
経理課長	細川順紀
教務課長	伊大知正久
学生課長	後藤友男
図書課長	大林重夫

4 人事——任用と昇任

教官の任用は、大きく分けて、生涯雇用（定年60歳）となっている専任教官（教授、助教授、専任講師）とそれ以外（助手、外人教師）とで、基準も方式も異なる。

先ず専任教官については、原則として、教養学部前期課程学科の5科に属する教室が選考・推薦母体となって人事を進める。すでに述べた「三層構造」の教育・研究に相応しい人材というのが基準であるが、例えば後期課程担当者としては適切であっても、前期課程の現行学科目からすると不適任である場合などについて、人選をめぐる教室内での論議は当然のことながら存在する。また、公募と教室内推薦とでは、自然科学系においては公募がほぼ定着しており、文系諸教室では公募はなお稀である。

人選の進め方は、教室によって異動があるが、原則の次のようなプロセスを踏む。

先ず、教官ポストに空きが出来た教室では、教室全体か、あるいは教室内小委員会において、候補者を絞り込む。その際、候補者の業績、学歴、教職歴、人物等について審査する。その上で、投票等の手段によって候補者を一人に決め、教室として科に提案する。多くの場合は、教室主任会議がこの提案を受けてそれを議し、適当と認められた場合には、任用すべき教官候補者として第一委員会に提案する。この際、教授人事であれば、科の教授会議をひらいて承認を求めた上、第一委員会に付議する。第一委員会は、候補者の学歴、教歴、業績、人物等についての説明を聞いたのち、提案を受入れ、選考委員会を組織し、候補者とその選考委員会とを教授会に提案する。なお、選考委員は、前期課程学科目教室を母体にして、当該教室から2名、隣接から2名、他学科の教室から2名とし、該当教室の1名が世話役となる。それが教授人事であれば、選考委員は、「役職委員」と呼ばれる学部長・両評議員、5科長と、当該教室から委員2名、隣接から委員2名を以て構成し、学部長が選考委員会を主催する（世話役は当該教室の委員）。選考に当たっては、業績の実物をその場でつぶさに検討し、質疑応答をして、慎重に審査する。選考委員会の賛同が得られれば、世話役の委員が第一委員会に報告し、第一委員会はそれを受けて、教授会に報告。審議の結果、投票によって可否を決する。可決には、出席者の過半数を要する。

助手及び「外国人教師」ついては、教室で選考し、科会の了承を経て、第一委員会、教授会において了承するのが原則であるが、流用定員を以て当てている助手については、それが実質上配属されている研究室などで選考し、関連5科の教室の了解を得て提案する場合もある。

留学生担当講師の任用については、それを教授会構成員としない場合には、それが属する講座（従って後期課程）の裁量に任されており、後期課程諸学科の委員会の議を経て、第一委員会、教授会で承認される。

「ごきぶりの専門家からボードレール学者まで」とあげつらわれたこともあるように、学際性を旗印に掲げる教養学部は、その前期課程教育の幅から言っても、極めて多様な専門分野の教官を任用している。従って、教授会に提案された時点において、個々のケースを審議することは、事実上不可能に近いし、当該教室や選考委員会の判断を重んじるのが最も良識にかなった選択である。ただ、その為には、学際的に関連のある諸教室あるいは大学院の諸専攻の判断も、前もって質しておくのが望ましいことは言うまでもない。

日本人枠による外国人教官の任用は、国際関係論に1名、文化人類学に1名であるが、平成4年度からは、英語とフランス語も各1名ずつ任用する。日本人枠による外国人の任用には、上記のような教養学部の極めて複雑な組織が障害になってきたことは否めない事実である。現在は、試行期間として任期を限っているが、早晩日本人とイーヴンに扱う時期が到来するのであろう。

5　予算の現状と問題点

教養学部の平成2年度歳入総額は、3,702,177千円、歳出総額は、7,180,529千円で対前年比1.0%の増である。また人件費は、5,427,550千円で総額の75.6%を占めている。平成2年度の歳入と歳出は次の通りである。

歳入		歳出	
区分	金額（千円）	区分	金額（千円）
授業料	2,840,302	人件費	5,427,550
入学料	764,178	物件費	1,195,205
検定料	5,863	奨学交付金	78,129
寄宿料	2,591	施設設備費	2,700
学校財産貸付料	3,786	科学研究費	476,945
用途指定寄付金受入	65,180		
受託調査試験等収入	15,197		
刊行物等売払代	204		
雑収入	4,876		

平成4年度の予算編成は、税収不足、国債費の増加など財政が極めて厳しい状況になっており、歳出経費の徹底した節減合理化が求められている。一方、大学を取り巻く環境は研究費の抑制、施設の老朽化、狭隘化など問題が山積している。内示された平成4年度予算新規事項の主なものは次の通りである。

①専攻の整備

　総合文化研究科　表象文化論専攻

②講座の増設

　教養学科第二　東欧地域研究講座

③入学定員の改定に伴う教官の整備

　基礎科学科第一　生体計測学講座

　一般教育学科目

④入学定員の改訂

　教養学科第二　東アジア文化交流論講座（10名）

⑤実習施設等設備費

　アメリカ研究資料センター設備

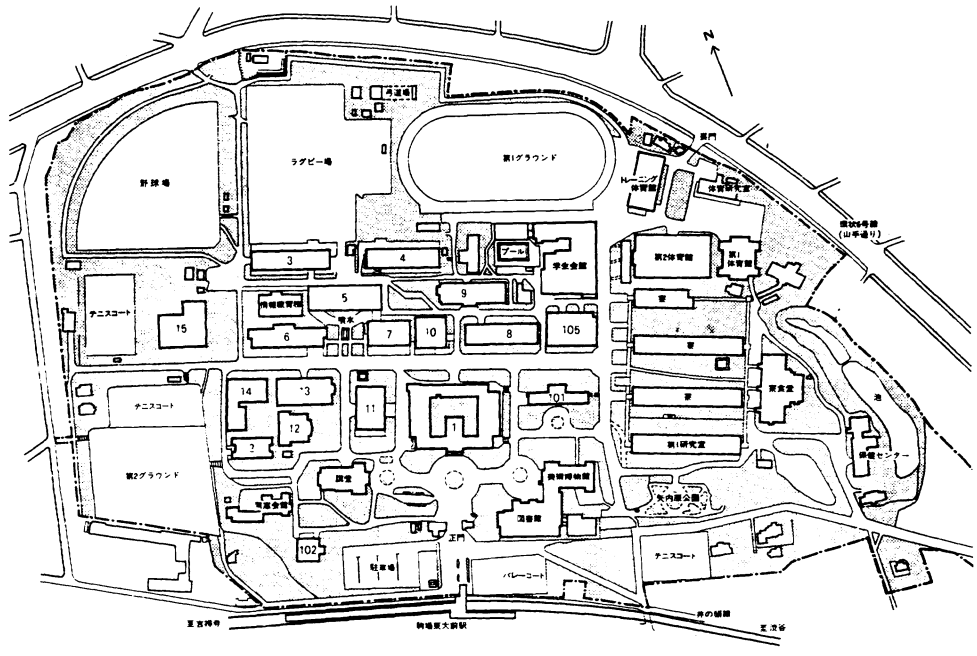
　マルチメディア大規模授業システム設備

教養学部が抱える根元的問題は、教官の予算定員と現員との間に大きな差があることである。即ち教養学部は東京大学全学の前期課程教育に責任を持つ立場から、新制東京大学の発足当初より、本郷各学部の教官定員を借用する形で運営されてきた。この借用定員については予算措置がなされていないのが現状である。平成2年度より本郷各学部の協力により、徐々に教官定員の振替が実現されているが、現在でも教養学部に所属する教官の約30%が借用定員である。

6 施設の現状と将来計画

教養学部の敷地は面積255,325㎡を有し、武蔵野台地の東部に展開する〝山の手台地〟上に位置し、神田川と目黒川に挟まれた段丘面上にある。教養学部は戦後の学制改革によって、旧制第一高等学校の敷地と1号館、101号館、図書館、大講堂、学生寮、寮食堂等の建物を引き継いだ。第一高等学校から移管された当初は、木造建築の教室群が建設されたが、昭和30年頃から、前期課程教育と後期課程教育教養学科の機能に対応すべく暫時、鉄筋コンクリート造りの中低層教室棟、研究棟（銀杏並木北側の3～9号館）に立て替えられ今日に至っている。これら鉄筋コンクリート造りの建物は、建築当時の劣悪な施工条件等の影響で現在構造的に著しく劣化している。また、その後の学部および大学院の研究・教育組織のめざましい改組・拡充に十分には対応しきれない状態にまでなっており、次世代の社会に必要な人材を養成する研究・教育組織を構築するためには、キャンパスの再開発を実行する必要に迫られている。このような事情を踏まえて、昭和60年に立案した長期計画においては、2号館改築計画により教育棟、研究棟、講義棟を分離し、人文系、社会系研究室を整理統合し、外国語系研究室も整理統合を計ること、および外部空間の環境整備を計ることが提案された。この長期計画に基づいて2号館を取り壊した跡地に、61年度には新2号館（文系研究棟）および12号館（講義棟）、62年度には13号館（講義棟）が建設された。昭和62年度には情報教育棟、63年度には14号館（文系研究棟、アメリカ研究資料センター）、平成元年度には15号館Ⅰ期棟（基礎科学科研究棟）が、順次建設された。以上の建物整備はキャンパス再開発計画の一部であり、前期課程、後期課程および大学院を擁する教養学部の高度な教育研究体制を維持し、発展させるには十分ではない。また計画中途であるために、すでに建設された建物の機能を十分発揮できない状態になっている。したがって引き続き以下で述べる計画が実施されることが必要である。

また都市計画高速道路中央環状新宿線（目黒区青葉台～豊島区南長崎）の計画があり、教養学部構内の裏門―体育研究室―第一体育館―寮食堂裏―保険センター―炊事門を通る地下ルートが予定されている。今後キャンパスの環境保全、振動対策等の立場から対処する必要がある。



キャンパス再開発計画の概要

① ゾーニング配置計画の基本方針

本キャンパスのゾーニングは、旧制第一高等学校時代の1号館、図書館、大講堂によって構成される銀杏並木南側の中央部分を保存しつつ、正門東側に事務管理棟、保健センターを配置する。1号館の西側から北側に連続する敷地に講義棟を、さらに外側を取り巻く形で研究棟を配置する。この研究棟の外側に各種運動場を配置する。キャンパス東側のゾーンには、体育館、体育研究室および福利厚生施設を配置する。駒場寮跡地には、美術館、劇場を備えた国際交流センターを建設し、国際社会に開かれた新しいキャンパス作りを目指す。三鷹国際学生宿舎と共に、次世代に向けて新しいタイプの国際文化交流の拠点を構築する。キャンパスの東端の池の付近は風致地区として整備する。この計画によって、現状では混在している研究の場、教育の場、課外活動施設、福利厚生施設等を整理統合し、それぞれの単位を機能的かつ有機的に再配置することにより、年々都心部から消えているグリーンスペースを創出する。この基本方針は建物改築と共に外部環境整備を同時に実行し、キャンパスの活性化に資することが期待できる。

②講義室の整備

講義室の内部設備も非常に老朽化しており、改善する必要に迫られている。平成4年度より11•12•13号館の主な教室に視聴覚機器を導入し、これを利用した新しいタイプの高等教育システムを検討中である。

③交通計画

現存する緑地、池などの自然の保全に十分考慮しながら、キャンパス空間の構造と秩序に適合した交通ネットワークを整備する。キャンパス外からの車の乗り入れ道路として、環状6号線および炊事門からの取付け道路を整備する。キャンパス内では講義棟、研究棟などの建物の外周に車が乗り入れる道路を配し、その内側の道路は歩行者の安全を確保しつつ機能的な道路網を形成するように計画する。

④ 基幹工事計画（電気、電話、エネルギー管理方式等）

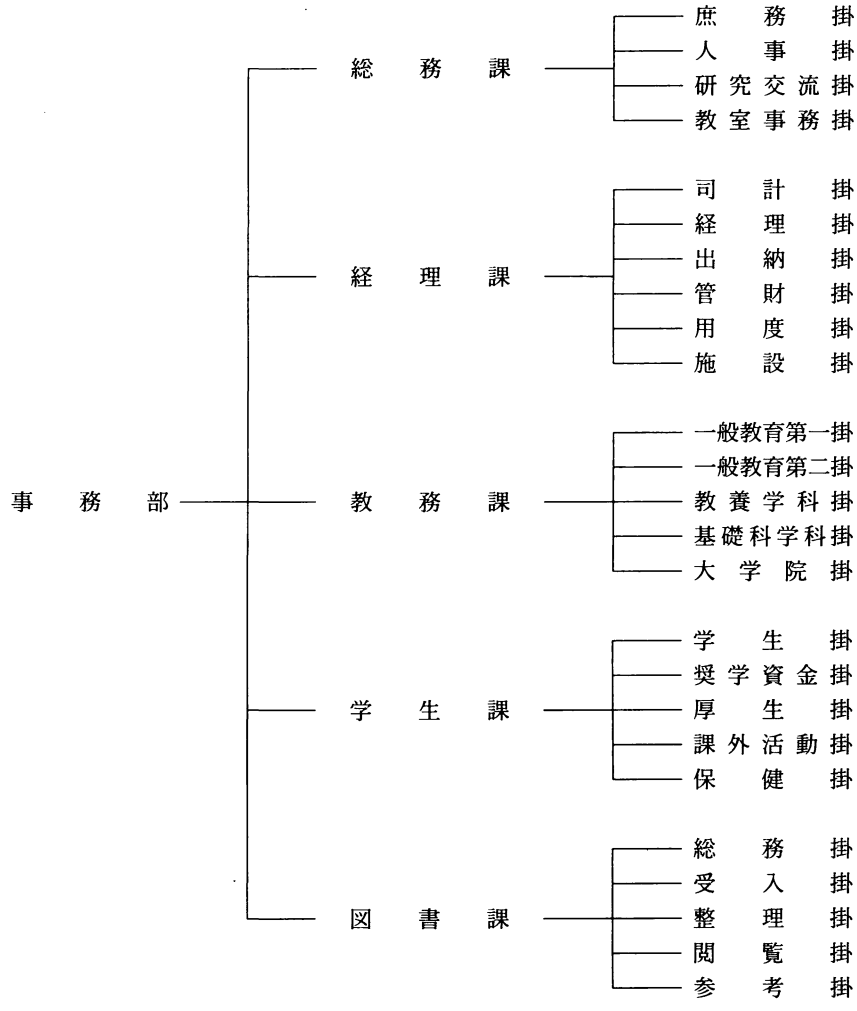
現在、東京電力と6KVの電力契約を結んでいるが、上記の基本計画の遂行に対応して、諸設備も充実する必要がある。現在の高圧電力契約を特別高圧電力契約（20KV）に変更し、それに伴って特別高圧変電設備を設置し、二次側回路の全面改修を行なう必要がある。この際、省エネルギー対策を十分考慮しながら、計画を実行する。また、電話、FAX、データー通信端末等通信回線の需要の増大に対処できる通信設備の拡充設備が必要である。

武蔵野の面影をつたえる木立

7 職員の組織と現状および将来像

教養学部事務部の職員組織は、平成3年度において下図のとおりとなっている。

事務組織図



上記のほか、学部の付属施設として言語文化センター及びアメリカ研究資料センターがあり、それぞれ事務室を設け職員を配置しており、技術系の職員については、本学の技術職員の組織化に基づいて、少数ながら「技術班」組織を置いている。

職員数は、第一次定員削減に入る前の昭和40年の196名をピークとして、平成3年度の第七次定員削減までに27.6%が削減され、さらに第八次定員削減によって、現定員の約9%が削減されようとしている。一方、学生定員は昭和61年度からの臨時増募と、平成2年度からの学生定員の総枠規制緩和による新規増募により大幅な増加を示し、それに伴う教官定員増によって、事務系職員の負担はさらに厳しいものとなっている。従って、本学部においては事務組織の見直しと、事務処理体制の合理化が避けては通れぬ懸案事項として、現在、教室事務の統合・整備等をその一環として進めている。

このほか、事務組織については、昭和39年4月の部制発足以降、ほぼ旧態依然とした組織で

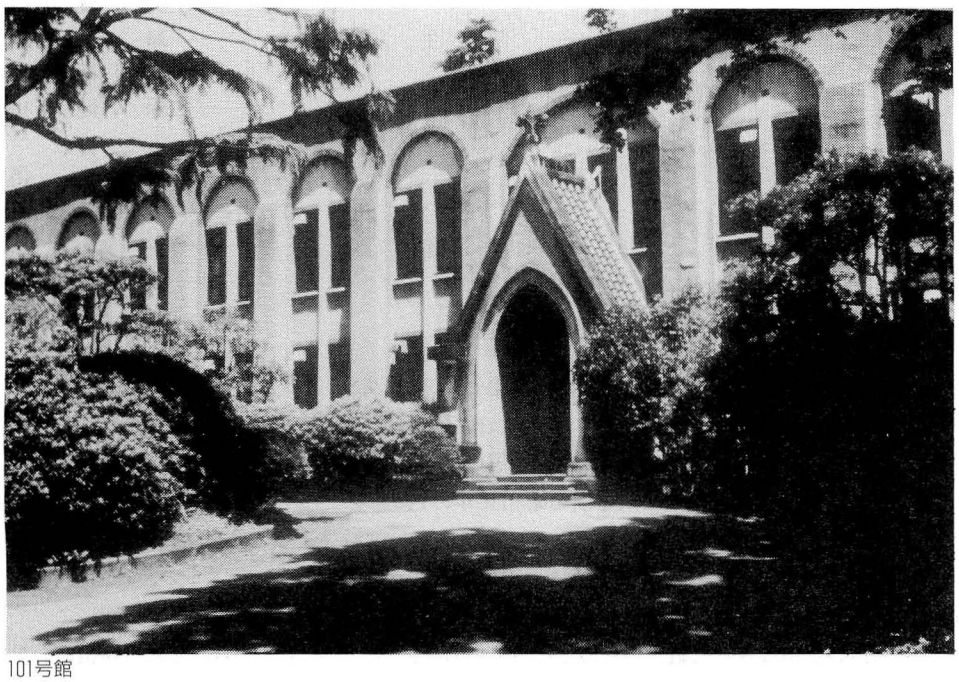
運営しており、近年の研究、教育に関する学際化、国際化に遅れをとっているとも言え、その抜本的な見直しが求められている。例えば、学部における企画広報、国際交流、留学生等を担当する掛の設置又は事務担当者の設定等は今後の重要な課題となるであろう。また、本学部が、前期課程の学生の教育を専ら担うという他学部にはない特殊性から、保健センター及び教育用計算機センターの駒場支所を置くことについても、或いは学生課を置くことについても、そろそろ全学的視野に立って再検討する時期が到来しているとも言えるのである。

職員の構成は、平成3年度において男性64%、女性36%で、平均年令は35歳となっており、やはり全学的傾向が示すとおり特に女性職員の高齢化が顕著となっている。

教養学部事務部の組織については、平成4年度に大学院数理科学研究科が発足し、その事務を教養学部が担うこととされたため、「教養学部・数理科学研究科事務部」と改められることになった。これに伴い、従来の教養学部事務部に新たに「数理科学研究科総務掛」(仮称・総務課)、「大学院第二掛」(仮称・教務課)、及び「数理科学研究科図書掛」(仮称・図書課)(いずれも平成4年3月現在)が設置され、職員が理学部定員から9名、教養学部定員から1名それぞれ振替により措置される予定となっている。

数理科学研究科については、現在その建物を有していないため、当面は理学部5号館と教養学部駒場キャンパスに分属することになるが、職員の効率的配置ができないうえ、事務処理上も輻輳し職員の負担は大きいものがある。さらに、教養学部においても、将来計画として、近年中に大学院部局化の構想があり、この実現に合わせて事務機構と事務処理体制についても見直す必要が生じることとなろう。また、現在すすめられている三鷹国際学生宿舎の建設に伴い、宿舎完成後の事務処理、或るいは駒場寮廃寮後に建設を計画している諸種の施設についての管理、運営並びに保守等に係る事務処理等、教養学部・数理科学研究科事務部にとって、その将来像は決して平坦なものではないと言えよう。

最後に、事務部としての将来計画の一つに「事務管理棟」新築の実現がある。上述のような厳しさのなかで、日常の事務処理を円滑に行うためにも、職員の和が求められるが、事務管理棟の実現によって、職員の統合が可能となり、より一層の和が生じ、職員の志気の高揚が生れるのであって、今後の教養学部・数理科学研究科事務部の発展のため、それを期待したい。



101号館

8 助手と技官

助手

大学における教育と研究ならびに事務活動に不可欠な存在である助手は、現在、教養学部に106名勤務している。学科目制（前期課程）と講座制（後期課程）とに分かれて配属され、その内訳は次のとおりである。

1) 学科目制：人文科学科 6名、外国語科 8名、社会科学科 2名
自然科学科 41名、保健体育科12名、その他3名 計72名
2) 講 座 制：教養学科第一 5名、教養学科第二 3名、教養学科第三 5名、
基礎科学科第一 18名、 基礎科学科第二 3名 計34名

教養学部における助手の勤務状況は、自然科学系、文科系でかなり異なっているが、名目的な所属にかかわりなく、教養学部の「三層構造」に従って、前期課程、後期課程、大学院の教育研究活動の補助にあたることが多い。

1) 学科目制

文科系学科目（人文科学、外国語、社会科学）の助手は、原則として授業は担当せず、教室レベルでの教育研究活動の補助、図書や物品の購入と整理、その他の雑務を主たる仕事内容とする。しかし助手の配当されていない教室もあり、また一部の外国語のように、数十名の教官に対して一人の助手しかいない場合もあって、その勤務負担はかなり重いものになっている。

自然科学科では、前期課程の学生の学生実験の指導を行なうほか、多くの場合、後述する基礎科学科の助手と同様に、教授または助教授と研究チームを構成し、教授または助教授を指導教官とする大学院生の研究指導の補助を行なっている。

保健体育科では、前期課程の学生の実技指導にあたるほか、教授または助教授に協力して大学生の研究指導の補助を行なっている。

2) 講座制

教養学科の助手は、主として図書や物品の購入と整理、授業準備の補助、その他科内の雑務などの仕事にあたる。さらに、授業や卒業論文等に関する具体的な問題について学生の相談相手となり、教官との間をつなぐパイプ役となることも、重要な仕事のひとつに数えられる。原則として授業は担当しない。しかし、いまだに助手の配当されていない分科もあり、その場合は、教官が種々の業務をこなさなければならないのが現状である。

基礎科学科の実験系では、学生実験の指導が助手の主たる仕事となる。また、理論・数学系では演習を担当し、学生に問題を解かせることによって、教授や助教授による授業の理解を深める手助けをしている。また、多くの場合、教授または助教授と研究チームを構成し、教授または助教授を指導教官とする大学院生の研究指導の補助を行なっている。

以上のような業務のほかに、助手は研究者として個人的かつ共同的な研究活動を行なっている。その業績の多くは国際的な評価の対象となり、教養学部の研究水準の向上に積極的に貢献している。他部局と比較して、教官数と学生数に対する助手の総数の相対的な少なさは、絶対

的な人員不足となってその負担過重を引き起こし、教育研究の両面で深刻な問題となり始めている。これは教養学部が近い将来において解決すべき重要かつ緊急な課題のひとつである。

技官

教養学部では技術職員と呼ばれているいわゆる技官は、教育職の助手と異なり行政職として採用され、研究室の業務に関わるものと工作技術室に関わる業務とに二分され、ともに技術班長（現在欠員）のもとに統括されている。

研究室の業務に関わる技官は、言語文化センターなど付属施設に所属するものと、低温センターや物理、化学教室での技術や事務に従事し、基礎科学科に所属するものとがある。大学における教育、研究、事務活動を円滑に機能させるにあたって、彼らの存在が必要不可欠なものであることはいうまでもない。しかしながら、言語文化センターにおけるAV機材を使った語学の授業や、大型電算機センターでの情報処理教育などの充実を目指してきた教養学部にとって、高度の技術と知見を備えた技術職員による補助活動は、人員配置の面で必ずしも充分なものとはいいがたい。例えば、七つのLL教室がフルに活動し、自習用の個人LLを初め、録音スタジオ、録画スタジオ、調整室、機材開発室などの機能を備えた言語文化センターには、現在一人の技官しか配置されていない。従って、器材を使用しての教育や研究に当たって、教官がその直接的な管理の責任を負わねばならないケースが多く、ときとして授業に支障をきたすケースも生じ、外国語教育の近代化を妨げる一因になっていることは否めず、教養学部が実現しつつある改革に当たって、研究室に関わる技官の人材確保が重要な課題となっている。

工作技術室の業務に関わる技官は、工作機械工、仕上仕立工などである。なお、電話交換手、教務助手、実験助手などの技能職員、守衛などの労務職員、保健センターの看護助手なども技官のカテゴリーに属する。大学における高度の教育研究環境の維持のためには、この方面における人材確保もなおざりにされてはなるまい。

9 外国人教師と外国人客員研究員

外国人教師

1949年の新制東京大学の発足いらい、教養学部は、その教育理念（I-1、I-2参照）の実現のために多くの外国人の協力を仰いできた。とりわけ、教養学科の後期課程においては、その創設直後から外国人による授業の比重が高く、駒場の「国際性」を内外に強く印象づけていたのである。当初は欧米のみを意味していたその「国際性」も、その後のアジア分科と中南米分科の新設により、より広い地域と文化圏とをカヴァーすることになり、駒場で授業をする外国人の国籍も飛躍的に増大した。この傾向は前期課程の授業にも反映し、現在では15人の外国人が常勤の教師として教養学部に所属している。その国籍は合計10か国にも及んでいるが、これに26人の外国人非常勤講師を加えると、18もの異なる国籍の外国人が駒場での授業を担当していることになる。

国立大学の外国語科目または専門教育科目を担当する外国人の常勤の教員を、国立学校設置法は「外国人教師」と規定している。その勤務の契約は国家公務員法第二条第七項に定められている。周知のごとく、明治初期いらい、我が国の高等教育に外国人は少なからぬ役割を果たしてきたが、その名称はながらく不統一のままとどまっていた。1921年（大正10年）、文部省はその統一をはかり、契約による者を「傭外国人教師」、臨時嘱託の者を「外国人講師」と呼ぶことに決定し、その名称が戦後まで続く。1951年、「傭外国人教師」を一般の外国人教師と招聘外国人教師とに区別したが、1969年、外国人教師制度の充実を図った折りに、常勤の「傭外国人教師」はすべて「外国人教師」として統一することになったのである。非常勤の者には「外国人講師」という名称が存続している。

現在、教養学部で教育に従事する「外国人教師」と「外国人講師」は、いずれも教養学部教授会には所属しない。雇用契約の期間はともに一年を越えないものとされるが、必要に応じて更新が可能である。常勤の「外国人教師」の多くは、前期課程の外国語や一般教育ゼミナールを担当するが、後期課程の専門教育にも積極的に参加している。そのかなりの部分が各科の紀要や内外の学術誌に論文を寄稿したり、専攻分野の学会に所属して研究発表を行なっており、専門の研究者としての活動も極めて活発である。15人の「外国人教師」とその国籍は次の通りである。

Collins, Angus Paul（英）
（コリンズ・アンガス・ポール）

Fārnkūs, Josef（独）
（フュルンケース・ヨーゼフ）

Struve-Debeaux, Anne（仏）
（ストリューブ・ドゥボー・アンヌ）

Pages, Jordi Aiats（スペイン）
（パジェス・ジョルディ・アイアツ）

Hughes, George Edward Harcourt（英）
（ヒューズ・ジョージ・エドワード・ハーコート）

Devynck, Jean-Christophe（仏）
（ドゥヴァンク・ジャン・クリストフ）

Gater, William（加）
（ゲーター・ウィリアム）

Schneider, Dennis Eugene（米）
（シュナイダー・デニス・ユージーン）

Collins, Clive Stuart（英）
（コリンズ・クライヴ・スチュアート）

Giacomuzzi, Peter（オーストリア）
（ジャコムッツィ・ペーター）

Wasserman, Estrellita（仏）
（ヴァセルマン・エストレリタ）

Pagès, Brigitte Marie（仏）
（パジェス・ブリジッド・マリ）

Goloubovskaia, Lioubov（ソ）
（ゴルボフスカヤ・リュボーフィ）

趙　賢州（中国）
（チョウ・ケンシュウ）

Agustin, Letelier Zuñiga（チリ）
（アグスティン・レテリエル・スニガ）

なお、すでに述べたように（Ⅰ-2)、教養学部では、日本人教官ポストへの外国人専任教官の任用も始まっており、この傾向は年ごとに顕著なものとなってゆく。現在は2名の外国人助教授が在籍しているが、この場合は国籍に関係なく東京大学助教授と呼ばれ、任用の手続きも日本人と変わることがない。教授会のメンバーとして各種委員をも務める外国人専任教官の経歴と業績は、後述の「II 教養学部では、誰がどのような教育研究を行っているか」を参照されたい。

外国人客員研究員

教養学部の発足いらい、駒場での研究を希望する外国人は数多く存在し、その数は近年増加の一途をたどっている。そうした状況に鑑み、1974年6月にその資格と受け入れ手続きとを定め、これを「外国人客員研究員」(Visiting Research Scholar) として学部内の統一をはかった(「東京大学教養学部客員研究員に関する内規」参照)。

願書の提出資格を持つのは、外国において研究教育に従事し、博士の学位を有するか、それと同等以上の研究能力を有すると認められた者であるが、外国の研究教育機関に属する日本人についても、この「内規」は準用される。研究に必要な経費の出所など、願書の記入に必要な事項は上記の「内規」に詳しく述べられている。

受け入れは教授会の議を経て学部長が行い、それぞれの教室、分科、専攻の受け入れ責任教官のもとで研究を行なう。研究期間は、1月以上1年以内とするが、特別の事情があると認められるときは期間延長も可能である。外国人客員研究員には、図書館の利用や研究会への参加など、教養学部教官に準じてさまざまな便宜が与えられ、充分な数ではないが研究室も提供されている。教育活動に参加することはないが、研究員としての彼らの駒場での滞在が教官や学生に及ぼす影響ははかり知れず、それを機に教養学部と外国の諸大学との間に国際的な交流が実現するケースが多い。

過去5年間に教養学部が受け入れた外国人客員研究員は次の通りである。

外国人客員研究員

氏名／国籍	所属研究機関／地位	研究テーマ　＊その他	期間	受入責任者／所属	経費負担
Shirane, Haruo アメリカ	南カリフォルニア大学助教授	日本古典美学の研究——特に中世の詩学に重点を置く	1986.1.9～1987.12.31	芳賀徹(比較文学比較文化)	国際交流基金 University of Southern California
Zolbrod, Leon カナダ	カナダ・ブリティシュ・コロンビア大学教授	比較文化の立場よりみた日本文化における三十六歌仙の役割——サロン文化の理想	1986.9.1～1987.8.31	芳賀徹(比較文学比較文化)	
Mulhern, Chieko アメリカ	Associate Professor of Japanese Literature, University of Illinois	Jesuit Authorship and Italian Motifs of Otogizoshi Tales Center for Advanced Study, University of Illinois	1986.9.1～1988.8.31	芳賀徹(比較文学比較文化)	
Hoshizaki, Brain カナダ	McGill Univ. Associate Professor	Biomechanics of Running	1987.1～1987.3	福永哲夫(保健体育)	自己負担
陳生保 中国	上海外国語学院日語科副教授	中国文学と日本文学の相互受容及び其言語における反映	1987.4.1～1988.12.31	芳賀徹(比較文学比較文化)	
Rajapaksa, Patiranage スリランカ	ルフナ大学講師	現代日本文学のシンハラ文学に及ぼした影響	1987.4.1～1988.3.31 1988.11.1～1989.10.30	芳賀徹(比較文学比較文化)	ルフナ大学
Marcus, Marvin Howard アメリカ	Washington大学助教授	森鷗外の史伝研究	1987.6.10～1987.8.20	芳賀徹(比較文学比較文化)	
Saniel, Josefa M フィリピン	フィリピン大学アジア研究センター所長 教授	日本とフィリピン、1946～1986	1987.6.15～1987.12.31	山影進(国際関係論)	国際交流基金
高昌範 韓国	ソウル大学独文科教授	独逸新則物主義と日本現代詩	1987.7.2～1987.12.31	小堀桂一郎(比較文学比較文化)	国際交流基金
鄭夢準 韓国	Ulsan University(Korea)	国際政治経済システムの変化と日本の対応	1987.9.1～1988.8.31	佐藤誠三郎(相関社会)	Ulsan Univ.
張青平 中国	上海復旦大学講師	中国文学と日本文学との相互受容、とりわけ両国の文学における女性の人間像	1987.10.1～1988.9.30	芳賀徹(比較文学比較文化)	
Rayner, Anthony Clement ニュージーランド イギリス	リンカーン大学	日本・ニュージーランド間文化交流計画の検討	1987.10.17～1987.11.28	平野健一郎(国際関係論)	ニュージーランド・ジャパン基金
Erony, Michael アメリカ	Univ. of Southern California	日本における電気通信政策についての変化	1987.11.1～1988.4.1	佐藤誠三郎(相関社会)	Univ. of Southern California
Stråth, Bo スウェーデン	イヨテボリ大学	戦後日本・西欧の産業政策と企業戦略	1987.11.1～1988.4.30	工藤章(国際関係論)	国際交流基金
Ahn, Jong Hoon 韓国	明知大学日本研究センター	国家安全保障とリーダーシップ	1987.11.1～1988.10.31	佐藤誠三郎(相関社会)	

氏名／国籍	所属研究機関／地位	研究テーマ　＊その他	期間	受入責任者／所属	経費負担
Mochizuki, Mike アメリカ	イェール大学	保守的改革の政治	1988.3.1～1988.5.21	佐藤誠三郎(相関社会)	国際交流基金
Tamanoi, Mariko アメリカ	シカゴ大学	近代日本の農村女性における性差意識の研究	1988.4.1～1989.3.31	平野健一郎(国際関係論)	The Joint committee on Japanese Studies of the American council of Learned Societies
董勲 韓国	南北平和統一研究所	日本・中国の対朝鮮半島政策	1988.4.1～1989.3.31	公文俊平(国際関係論)	㈱大宇ジャパン研究支援基金
Dharmawathie, R.P. スリランカ	ルフナ大学専任講師	太宰治とシンハラ文学	1988.4.1～1988.9.30	芳賀徹(比較文学比較文化)	スリランカ・ルフナ大学
陳月霞 中国	中国政府派遣研究員	日本経済が中国の対外開放政策と中日経済協力に及ぼす影響について	1988.4.5～1988.10.4	菊地昌典(国際関係論)	中国政府
Bulkin, Farchan インドネシア	インドネシア大学講師	日本と東南アジアの政治・経済関係	1988.5.16～1989.5.15	山影進(国際関係論)	国際交流基金 ＊1989.5.24～7.23まで東洋文化研究所で延長
Kim Ki-Hoon 韓国	ハワイ大学East West Center	満州在住朝鮮族に対する日本の少数民族政策、1932～1945植民地におけるエスニック集団に関する研究	1988.6.1～1988.11.30	平野健一郎(国際関係論)	国際交流基金
朴日根 韓国	国立釜山大学	英国の極東外交政策と日本・中国の対韓政策	1988.6.1～1989.1.15	平野健一郎(国際関係論)	The Japan Foundation
李福淑 韓国	建国大学(韓国)教授	日・韓両国のモダニズム詩比較研究	1988.9.1～1989.8.31	小堀桂一郎(比較文学比較文化)	韓国・建国大学
趙軍 中国	華中師範大学	近現代日中関係史(特に孫文と日本の関係)	1988.9.1～1990.8.31	平野健一郎(国際関係論)	東方学術交流協会
Jones, Stanleigh アメリカ	Pomona College(California)助教授	平賀源内の伝記的研究	1988.10.15～1989.7.15	芳賀徹(比較文学比較文化)	Fulbright Program
Miller, John Holmes アメリカ	アメリカ国務省	1985年以降の社会経済的変化の政治的意義	1988.10.1～1989.9.30	佐藤誠三郎(相関社会)	アメリカ国務省
厳安生 中国	北京外国語学院日本語学部助教授	近代中国人留日精神史	1988.10.20～1989.10.19	芳賀徹(比較文学比較文化)	国際交流基金
Fogel, Joshua A アメリカ	ハーバート大学準教授	ハルピンにおける日本人およびヨーロッパ人コミュニティ1900～1945	1989.1.20～1989.6.30	平野健一郎(国際関係論)	国際交流基金
Maurer, Karl 西ドイツ	ボッフム・ルール大学比較文学教授	比較文学方法論と近代日本文学研究――おもに松本清張と芥川龍之介について	1989.3.15～1989.7.15	芳賀徹(比較文学比較文化)	
高山 中国	国際関係学院	日中語対照研究	1989.4.15～1989.9.25	丸山松幸(国文学・漢文学)	中国国家教育委員会
馮月華 中国	北京師範大学	第二次世界大戦史研究	1989.5.1～1990.3.31	石井明(国際関係論)	自己負担
Postel-Vinay, Karolie フランス、アメリカ	ルーヴル美術館	日本の対外関係における文化の役割	1989.5.1～1990.3.31	平野健一郎(国際関係論)	自己負担

氏名／国籍	所属研究機関／地位	研究テーマ　＊その他	期間	受入責任者／所属	経費負担
Jones, Sumie アメリカ	インディアナ大学準教授	江戸町人文化における雅の研究	1989.5.15～1990.12.31	芳賀徹(比較文学比較文化)	
盛邦和 中国	中国華東師範大学中国史学研究所	中国と日本及び東アジアとの文化関係・文化比較	1989.5.1～1991.4.30	平野健一郎(国際関係論)	自己負担
Bryce, Martin, R. イギリス	ダラム大学講師	伝導性有機錯体の合成	1989.8	小林啓二(化学)	British Council
孫順玉 韓国	韓国中央大学校外国語大学助教授	日本近代短歌の研究――正岡子規を中心に	1989.9.1～1990.8.31	芳賀徹(比較文学比較文化)	韓国中央大学校
金永和 韓国	済州大学教授	「創造派」の研究――日本近代文学の影響を中心として	1989.9.1～1990.8.31	芳賀徹(比較文学比較文化)	韓国文教部
高明潔 中国	中央民族学院講師	中国におけるモンゴル族の社会と宗教	1989.9.1～1991.8.31	伊藤亜人(文化人類学)	日本生命財団
Iftekharuzzaman バングラデシュ	バングラデシュ国際戦略研究所	日本の国際的役割に対する認識の展開	1989.9.1～1990.8.31	渡辺昭夫(国際関係論)	国際交流基金
李徳純 中国	中国社会科学院外国文学研究所副研究員	戦後日本戯曲	1989.11.18～1990.11.17	小堀桂一郎(比較文学比較文化)	日本学術振興会
Fukumoto, Mary ペルー	Pontificia Universidad Catolica del Peru　教授	日本移民の文化的背景	1989.12～1990.3	大貫良夫(文化人類学)	国際協力事業団
Kwon, Kil Hyun 韓国	韓国科学技術院副教授	Analytic pseudodifferential operators and hyperfunctions	1990.1.9～1990.2.12	金子晃(数学)	日本学術振興会
Stenberg, Björn Lennart スウェーデン	スウェーデン技術開発庁主任開発官 ルント大学科学技術政策研究所　流動研究員	知的データベースによる日本の研究開発体制の分析	1990.1.15～1990.6.15	平澤冷(基礎科学科第二)	スウェーデン技術開発庁
閔善植 韓国	ハーバート大学	日米貿易交渉の研究	1990.2.1～1991.2.15	佐藤誠三郎(相関社会)	自己負担
鄭夢準 韓国	ウルサン大学	日韓比較産業政策の研究	1990.2.1～1991.2.28	佐藤誠三郎(相関社会)	ウルサン大学
Krupp, Helmar Manfred 西ドイツ	フラウンホーファー応用研究促進協会 システム技術革新研究所 研究所長 カールスルーエ工科大学教授	日本の技術革新政策	1990.2.15～1992.2.14	平澤冷(基礎科学科第二)	フォルクスワーゲン財団／フラウンホーファー協会
申熙錫 韓国	韓国外交安保研究院	現代日本の政党政治と自由民主党	1990.3.1～1991.3.31	佐藤誠三郎(相関社会)	日韓文化交流基金
陶炳蔚 中国	中国国際問題研究所	日中関係と朝鮮半島	1990.4.1～1991.3.31	石井明(国際関係論)	国際交流基金
Pahk, Dae Hyeon 韓国	延世大教授	Partial differential equations	1990.7.30～1990.8.27	金子晃(数学)	日本学術振興会

氏名／国籍	所属研究機関／地位	研究テーマ　＊その他	期間	受入責任者／所属	経費負担
姜太勲 韓国	檀国大学助教授	戦後日本の政党政治の継続性と変貌	1990.9.1～1991.8.31	佐藤誠三郎(相関社会)	日韓文化交流基金
金基桓 韓国	元韓国開発研究院長	1990年代における日・米・韓関係	1990.9.15～1991.5.31	佐藤誠三郎(相関社会)	日韓文化交流基金
Matsunaga,Louella Lynn イギリス	ロンドン大学SOAS　東洋アフリカ研究所	日本の企業経営とCI	1990.10～1991.3	伊藤亜人(文化人類学)	国際交流基金
Smith, Henry D. アメリカ	コロンビア大学歴史学科教授	19世紀日本の社会的危機とその民衆絵画における表現	1990.10.20～1991.8.31	芳賀徹(比較文学比較文化)	国際交流基金
Martinez-Chamorro Tanabe, Felipa Isabel スペイン	グラナダ大学	ラテンアメリカ諸国に対する日本の経済援助	1990.10.19～1991.10.18	渡辺昭夫(国際関係論)	Japanisch-Deutsches Zentrum (Berlin)
崔成徳 中国	長春師範学院　中文学部外国文学研究室主任・朝鮮文学研究所所長	中国と日本の近現代文学の比較研究	1990.10.1～1992.3.31	平川祐弘(比較文学比較文化)	中国国家教育委員会
聶莉莉 中国	中国社会科学院研究員	現代日本における宗教	1990.10～1992.10	伊藤亜人(文化人類学)	研究財団
Cavanagh, Patrick アメリカ	ハーバード大学心理学科教授	視知覚の心理物理学的研究	1990.11.15～1991.2.15	下條信輔(心理学)	自己負担
Vogel, Steven Kent アメリカ	カリフォルニア大学バークレー校	1980年代における規制緩和をめぐる政治過程	1990.11.15～1991.6.30	佐藤誠三郎(相関社会)	国際交流基金
Suvin, Darko R. カナダ	カナダ・マックギル大学教授	日本におけるブレヒト	1990.12.17～1991.8.31	芳賀徹(比較文学比較文化)	カナダ政府研究基金
洪性翕 韓国	韓国人類学協会、研究員	日本の農業における労働力	1991.2.1～1993.1.31	伊藤亜人(文化人類学)	日韓文化交流協会
崔在喆 韓国	韓国外国語大学校・東洋語大学日本語科助教授	韓・日近代文学の比較文学的考察	1991.3.1～1992.2.28	小堀桂一郎(比較文学比較文化)	国際交流基金
方幼封 中国	上海復旦大学ラテンアメリカ研究室主任	中国と日本におけるラテンアメリカ研究の比較	1991.3.15～1991.4.30	恒川恵市(中南米)	自己負担
Hussin Hutalib シンガポール	シンガポール大学	Research on Japanese Politics	1991.3.27～1991.5.15	佐藤誠三郎(相関社会)	日本学術振興会
方幼封 中国	上海復旦大学ラテンアメリカ研究室主任	日本におけるラテンアメリカ研究	1991.4.10～1991.5.9	恒川恵市(中南米)	自己負担
Segers, Rien T. オランダ	グローニンゲン大学比較文学科準教授	開かれた構造——20世紀日本の文学・美術におけるモダニズム	1991.5.1～1991.8.31	芳賀徹(比較文学比較文化)	日本学術振興会
王月鏡 台湾	台北市政府参事 国立師範大学	大都市圏における行政区画の再編	1991.5.1～1992.4.30	大森弥(相関社会)	台北市市政府奨学金
Hahn, Sang Geun 韓国	韓国科学技術院助教授	Iwasawa theory and Kolyvagin's Euler system	1991.6.15～1991.7.14	中島匠一(数学)	日本学術振興会
都光淳 韓国	漢陽大学校教授	日本の民間信仰における道教	1991.7～1992.6	伊藤亜人(文化人類学)	漢陽大学校

氏名／国籍	所属研究機関／地位	研究テーマ　＊その他	期間	受入責任者／所属	経費負担
Ieva Zicmane ラトビア	Latviaアカデミー研究員	有機ゲルマニウム化合物のNMRに関する研究	1991.9.12～1991.11.29	竹内敬人(化学)	Latvia科学アカデミー
Duenas, Sergio Francisco メキシコ	コレヒオ・デ・メヒコ	日米ハイテク産業における協力と競争	1991.10.1～1992.9.30	渡辺昭夫(国際関係論)	国際交流基金
張敏先 中国	中国体育情報研究所	日本の体育・スポーツに関する研究	1991.10.15～1992.10.15	浅見俊雄(保健体育)	中国政府
Pujari, Manas Ranjan インド	ジャワハルラル・ネルー大学	中曽根内閣時代の日本の防衛政策	1991.12.1～1992.9.30	佐藤誠三郎(相関社会)	国際交流基金
Lieven, Dominic Christoph Bagdan イギリス	ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス	日露官僚制比較研究	1991.12.15～1992.12.14	中井和夫(国際関係論)	国際交流基金
金周姫 韓国	誠信女子大学校助教授	在日韓国人のエスニシティー	1992.3.1～1993.2.28	伊藤亜人(文化人類学)	誠信女子大学校
Tankha, Brij インド	デリー大学	明治末期の国民統合と地域社会	1992.3.15～1992.7.15	三谷博(歴史)	国際交流基金

10　付属施設などの活動

図書館

図書館閲覧室

教養学部図書館は、平成2年度末において蔵書856,859冊、所蔵雑誌4,759種、所蔵視聴覚資料7,476点を有し、年間の受入図書は23,466冊、継続受入雑誌3,718種に及んでいる。これは東京大学付属図書館を構成する図書館・図書室のなかでも最も規模の大きい部局図書館であるばかりでなく、全国の大学図書館のなかでも中規模の総合大学の図書館に比肩する規模である。これは駒場キャンパスにおける前期課程、後期課程、ならびに大学院学生の教育、および学術研究に必要な図書館資料を収集・保存し提供するとともに、学術情報の流通の拠点としての役割を考えれば当然である。また、教養学部図書館は、学部の規模と教育・研究内容の多様さを反映して、学部図書館のほか、教養学科図書室、自然科図書室を始め学科ないし教室単位に置かれた研究室図書室で構成されている。

学部図書館の建物は、旧制第一高等学校当時の図書館に隣接して1964年から69年にかけて建設され、述べ8,089㎡(うち、約1,200㎡は教務課事務室、美術博物館等として使用されている)、収蔵能力約36万冊、閲覧席数838席を有するほか、読書会室、視聴覚ホール等が設けられている。平成3年度には、学生定員の増加に伴う閲覧席の増設、貴重書等を収蔵する保存書庫および視聴覚資料書庫・閲覧室の整備のため館内の改修工事を実施した。しかし、現用面積は必要面積の約2/3に過ぎず、座席数も本学部の学生数に比べて必ずしも十分ではない。また、学部内の学生用スペースの著しい不足のため、学生の一部は図書館を交歓の場として利用する傾向があり、これが図書館の環境を悪くしているのは否めない。図書館の近代化を含めた全学部的なキャンパス計画の進行が望まれる。

学部図書館は、駒場キャンパスに在籍する約8,000名の学生が利用する学習図書館としての役割を果たすため、学部全蔵書のおよそ38%に相当する約32万冊を収蔵している。うち約9万冊は閲覧室内の開架書架に配架されており、主として前期課程学生の学習に利用されている。蔵書の中には旧制第一高等学校、旧制東京高校の蔵書のほか、いくつの特殊コレクションも含まれている。学生用図書は、図書委員会の選定によるほか、教官の推薦や学生の希望等により、年間約6千冊を購入しており、図書、雑誌に加えて各種外国語学習のためのカセットテープ、英国のOpenUniversityが作成した教材ビデオなど視聴覚資料収集にも努力が払われている。また、学生の図書館利用を促すため、通常の勤務時間外にも閲覧業務を取扱うことで講義時間外の利用の便を図っており、休業期を除き通年にわたって平日は午後9時、土曜日には午後5時まで時間外開館を実施している。平成2年度には開館日数261日、延開館時間2,684時間（うち、時間外787時間)、入館者総数は延べ495,425人に達し、館外貸出冊数は50,354冊にのぼっている。

学部図書館は、学習図書館としての役割を担うとともに、学部内の各研究図書室が収集する図書館資料の受入・整理・図書館電算システムにかかわる連絡調整、学部総合目録の編成管理、文献複写や相互貸借の窓口など、学部における総合図書館としての機能も受け持っている。東京大学付属図書館における図書館業務の電算化は1986年に始められ、教養学部図書館では、閲覧業務と目録業務を電算処理に移行した。これによって、利用手続きが著しく簡便化されただけでなく、オンライン目録検索（OPAC）により全学の蔵書が検索可能になった。図書館の電算システムは引き続き相互貸借（Inter-Library Loan＝ILL）システムの開発が進められており、学内の学術情報ネットワーク（UTnet）の整備と相まって、近い将来には研究室等のコンピュ

ータから利用者が直接に目録検索や文献複写申込みをすることもできるようになる予定である。

教養学科図書室は、学部内では学部図書館についで規模の大きい図書室で、人文・社会科学分野を中心とする蔵書約16万冊を擁する。教養学部の初代学部長であった矢内原忠雄氏の旧蔵書を始め十を越す特殊文庫を含む教養学科の学際的な構成を反映した多彩な蔵書は、教養学部の教官と教養学科学生および大学院生、研究生の利用に供されているほか、学部外からの利用も少なくなく、内外の研究者から高い評価を得ている。

自然科図書室は、自然科学の諸分野とその境界領域にわたる研究者を対象とする図書室で、所蔵する資料は19世紀後半から20世紀初頭にかけて創刊された自然科学の各分野の主要な学会誌を含め1,079タイトルに上る学術雑誌を中心に構成されている。

この他、学部内の30個所に及ぶ学科・教室図書室は、それぞれの学問分野の特色を生かした資料収集と運営がなされており、所属する研究者のための研究図書室として機能している。

アメリカ研究資料センター

アメリカ研究資料センターは、アメリカに関する基礎的資料を収集し、それを全国のアメリカ研究・教育に従事する研究者はもとより、アメリカ研究を志す学生、あるいは広くアメリカに関心をもつ人びとの利用に供するために、1967年に設立された。運営は教養学部、法学部、文学部、経済学部、教育学部、社会科学研究所、新聞研究所から選出された委員からなる運営委員会によって行なわれている。

センターの主な活動としては、アメリカ研究に関する資料を収集し、閲覧、貸出し、図書館相互貸借などを通じてそれらを利用者に提供することであり、資料構成はアメリカ研究の参考図書、専門図書、定期刊行物、マイクロフォームを含む基礎的一次資料、視聴覚資料となっている。

センターの蔵書数1992年1月現在、図書46,000冊が登録されており、定期刊行物については、洋・和雑誌あわせて420点を所蔵している。所蔵資料の中には、例えばEARLY AMERICAN IMPRINTSがあるが、これは26,180枚という膨大なマイクロフィッシュからなる、一次資料集である。また、日本におけるアメリカ研究の基礎を確立した故高木八尺博士の蔵書ならびに各種文書などが、「高木文庫」として納められている。なお、邦語雑誌（学術雑誌、紀要、一般雑誌を含む）のアメリカ研究関係の諸論文の抜刷を収集して、「論文コレクション」として公開している。

1991年の利用者延べ数は4,603人、年間登録者は829人であり、学生と研究者を含む一般利用者の割合は4：1であった。センターを利用するには、学生は指導教官の紹介を必要とするが、一般利用者は身分を証明するものを持参すれば利用票が交付される。

アメリカ研究のリサーチ・ライブラリーとしての活動のほか、センターは研究会活動や出版活動等を行なっている。研究会活動としては、日本におけるアメリカ研究の発達と現状を検討し、今後のアメリカ研究の発展に寄与すべく、毎年二回ほど様々なテーマの下に研究会を開催している。また、アメリカ人研究者の訪日の機会を活用して、随時セミナーも開いている。

出版活動としては、センターの諸活動を総て収録する『アメリカ研究資料センター年報』ならびに蔵書目録をはじめ、センター所蔵資料に関する文献目録（アメリカ研究邦語基礎文献目録、日米関係研究基礎文献目録、女性学研究基本図書目録、移民研究基本図書目録、アメリカ外交史研究基本図書目録）を出版している。さらに、日本のアメリカ研究の先達に対するオーラル・ヒストリー・シリーズ（1977年以来現在まで28巻）を刊行している。

言語文化センター

言語文化センターL-203教室での授業風景

言語文化センターは昭和54年（1979年）に外国語・外国文化の研究教育に寄与することを主目的として設立された。センター長（教養学部長）が委嘱する前期課程5科や後期課程5科の代表が運営委員会を組織し、その管理運営にあたっており、本学部の共同利用施設としても広く利用されている。

センターでの研究活動の成果は毎年紀要にまとめて発表されており、紀要は本年度で第12号を迎える。活動のひとつとして外国語学習に関するアンケート調査を1,2年生に対して継続的に実施し、その集計結果等を紀要に報告しているが、これは学内外で特に高い評価を受けている。

語学ラボラトリー教室7室、スタジオ、教材開発室等に当面必要な機器が整ったのは昭和58年度だが、以降、本年度までに次のような設備が追加充実された。すなわち、ビデオディスク再生機器、フィルムのビデオ録画装置、衛星放送受信装置、テレビ標準方式（NTSC, PAL, SECAM）の変換装置、ビデオ静止画像記録装置、クローズドキャプション装置、光学読取り装置、リズム・イントネーション学習装置等である。このような設備は、視聴覚資料の充実と相俟って、授業の内容や手法の多様化を容易にしている。本年度はUTnetの通信回線への接続装置が設置され、図書館および学部外より資料の受信またはセンターよりの送信、数年後に予定されているキャンパス内有線テレビ放送への利用も可能となった。学生がテープ資料を自由に視聴出来る自由利用ラボも、当初の18席から30席に増設された。

視聴覚資料としては、発足時から外国語を中心として既に約5,300点あったが、その後本年度までに約2,500点まで増えている。映画と語学のコースものが主で、学生も自由利用ラボで視聴出来る。その一部は英国のOpen Universityがテレビ放送教材として開発した自然科学関係のビデオテープやスポーツ医学のビデオ教材で、図書館からの依託により学生に公開されている。

利用概況を見るとLL教室の利用率は極めて高い。1〜4時限の7教室の平均利用率は80%台で、一般教育ゼミなど特別な授業に充てられる5時限でも40%を超える。これは本学部開設の全外国語授業のほぼ18%強に当たる。学生自由利用ラボの利用は、発足第2年目の1983年度は延べ2,076名であったが、1987年度以降は延べ6,000名前後と増加している。

外国語学習活動の一部は、コンピュータの利用によって能率化が図れるので、本学部の外国語教育に課せられた枠内での改善方法として、コンピュータの導入が考えられる。それには、設備の導入と同時に教材の開発と運営方法の検討が今後の課題となるだろう。

教育用計算機センター駒場支所

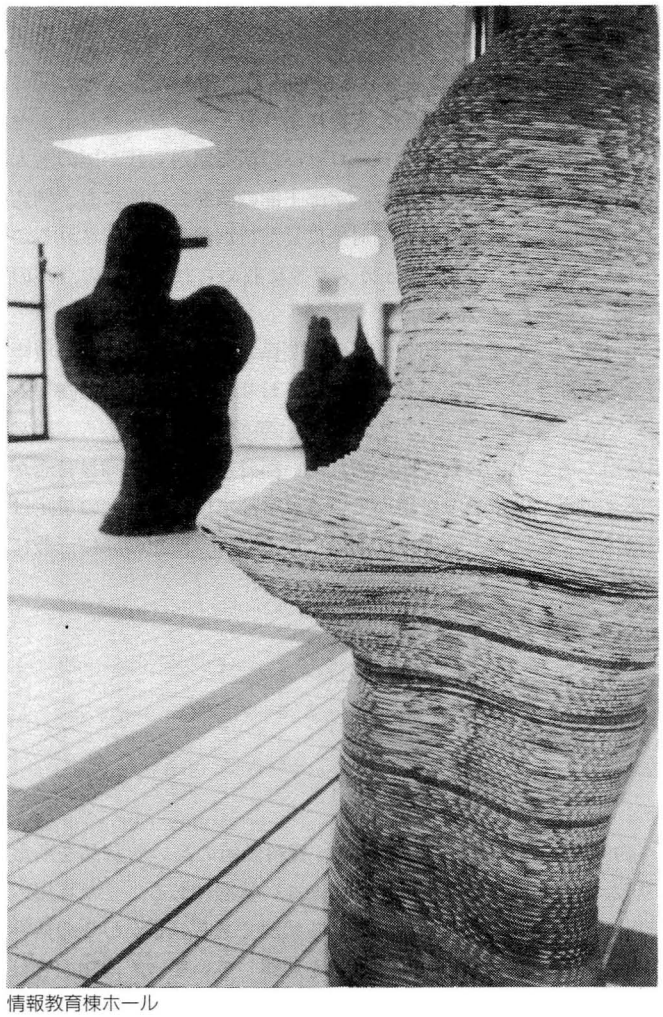
教育用計算機センター駒場支所は、全学的な組織である教育用計算機センターのシステム更新（1986年10月）と、教養学部における情報処理教育のための建物である情報教育棟の新営（1987年3月）とを契機として、1987年4月よりその活動を開始した。それ以前の計算機環境（専用端末約30台）とは較べものにならない、学生端末としてのパーソナルコンピュータ（パソコン）280台の設置により、教養学部における情報関連の教育は質・量ともに飛躍的に向上した。1991年度末の時点では、情報教育棟の五つの演習室（パソコンそれぞれ131、121、31、21、11台）のほかに、キャンパス内に合計26台8ヵ所に分散配置した端末によって教育が行なわれている。

学生によるパソコンの利用は、まず独立したコンピュータとしてプログラミング、表計算、

日本語ワープロを使用することから始める。次に、通信機能を利用することによって、情報教育棟に設置された中型コンピュータ（ホスト）およびUnixワークステーションの端末としても使用する。ホストコンピュータでは主に大型の数値計算や統計計算を、Unixワークステーションでは電子掲示板や電子メイルを利用する。また、すべてのパソコンはローカルエリアネットワーク（LAN）に接続されており、教材の個別および一斉配布、レポートファイルの収集、出席の確認といった授業支援機能が実現されている。またこのLANは本郷キャンパスのLANを通じて国内・国外のネットワークにも接続されており、外部へのアクセスも可能となっている。またこれと併用する形で、教師用パソコンの画面やビデオ画面を学生用パソコンの全部あるいは一部に放送したり、学生用パソコンの画面を教卓でモニタしたりする設備も設置されており、少数の教官でも多数の学生を対象とした密度の濃い教育が可能となっている。

現在情報教育棟で最も多く行なわれているのは、理科系学生に対する情報処理基礎教育であり、理科一類で言えば97%の学生がこれを履修している。文科系学生に対しては、これまでは主にゼミの形で対応してきたが、1992年度からは文科系学生に対する自然科目の一つとしての正規授業を開始する。これらの1、2年生に対する一般教育に加えて、4学期および3、4年の専門学科教育、それに教養学部の大学院教育にも利用され、年間約5,500名が駒場支所のシステムを利用している。

駒場支所は、教育用計算機センター全体の中で、駒場支所長および支所業務委員会によって運営されている。日常的には、情報教育棟職員2名（内1名は非常勤）およびセンター技官2名（本郷より交代で派遣）により、システム運用および教育支援を行っている。運用の経費は、教育用計算機センターの運営費と教養学部の共通経費、および専門学科以上に対する利用負担金でまかなっている。



情報教育棟ホール

11　地域社会との関連

オルガン演奏会

本学部900番教室にはパイプオルガンが設置されている。学内にこのような設備を持っているのは国立の総合大学としては殆ど例外と言ってもよく、美術博物館などと共に、理系文系等の専門の枠を超えた基本的な人間教育を志向する本学部の理念を象徴するものと言えよう。年間四回の学部主催演奏会は教職員、学生、卒業生、退官された旧教職員、内外演奏家、音楽研究者、あらゆる層の音楽愛好家達、近隣の住民等々の様々な人達の出会いの場となっている。

このオルガンは、株式会社森ビル社長森泰吉郎氏及び同社専務森稔氏によって1976年に寄贈され、それ以来「森オルガン」の愛称で親しまれて来ているもので、手鍵盤2段と足鍵盤を持ち、ストップは12個である。これにトレムラント装置と3個のカプラーが備えられていて、上段と下段、上段と足鍵、下段と足鍵の組合せにより、音色配合と強弱法の豊かな可能性が生み出される。小型ながら切れの良い、強くて冴えた音を持ち、オルガン好きの常連達から「小さいながら力持ち」という評を得てきた。ただ900番教室は適当な広さであるとはいえ、石造りの教会や音楽専用のホールと違い殆ど残響がないので、オルガニストには演奏の際に大変な緊張が要求されるそうである。これもまた、ここで行われる演奏と鑑賞の質を高く維持するのに一つの役割を果たしているとも言えよう。

愛称「森オルガン」

演奏中のアルノー・シェーンシュテット

設置されてから今年で満15年により、学部主催の演奏会も60回と数を重ねたが、その間に登場したオルガニストは日本オルガニスト協会の積極的な支援によりシェーンシュテット、ヤーコプ、ケストナー、サットマリーなど世界的に有名なヨーロッパの演奏家から我が国の老大家・新進気鋭の若手の諸氏にいたるまで頗るその幅が広い。学部主催の演奏会の他にも、例えば駒場で開かれる様々な学会の折りなどに、特定の聴衆を対象にした特別演奏会が催されることもある。演奏会の内容は全てDAT、テープ、ヴィデオカメラ等に収められ、研究のための貴重な資料として保存され利用されている。

演奏会の企画と実行、及びオルガンの保全など一切の仕事は、関係の事務職員の理解と積極的協力のもとに、学部長指名の教養学部オルガン委員会が担当しており、現在の委員は物理2、情報図形1、人類1、表象1、ロシア語1、ドイツ語2、フランス語2、英語1の11名である。運営に要する費用は基本的には国庫負担であるが、公費で賄い切れない部分には学部教職員有志が主な担い手となっている教養学部オルガン運営募金を用いている。学部主催の演奏会の予定は学内広報によって知らされるだけでなく、駒場と本郷の各部局に掲示され、前記の様に一般にも（勿論無料で）公開されている。

自然科学博物館

自然科学博物館は、いちおう約85㎡の展示室を有しており、資料価値の高い収蔵品を所蔵しているものの、専従の職員が居ないために、常時の展示が出来ない状態にある。また専用の収蔵庫も無く、購入収集した資料を、各教室に分散収蔵している状況である。しかしこの博物館の運営にあたっている運営委員会のメンバーはけっして現状を悲観していない。博物館とは

建物や収蔵品のことではなく、ひとつの運動であると認識しているからである。もちろん設備や収蔵品が充実するに越したことはないが、それよりもまず、博物館は運動でなければならないのである。必要とあれば生の資料はいたるところにあり、またあちこちの博物館に収蔵品がある。私たちがそれを組織すれば、すなわちそれが博物館なのである。

こうした観点から自然科学博物館ではさまざまな講演会や見学会を計画し、また毎年、短期間ながら臨時のアルバイト職員を導入してユニークな展覧会を開催してきた。これらは学生の教育と啓蒙を第一義とするが、またいっぽう、学内広報やビラなどで教職員に呼び掛け、さらに情報誌や新聞によって学外の人々にも広く呼び掛けた。こうした博物館活動は、大学の社会への窓としても機能するからである。事実、駒場祭にあわせて約10日間開催される特別展示や、毎年約2回開催される講演会は、いつも学生や教職員以外にたくさんの一般の参加者で賑わう。なかには常連のひとも居るほどである。

ここ数年の特別展示の主なテーマとしては、「イタリアの火山」(85)、「生きている化石」(87)、「温泉のすべて」(89)、「東アジアの蝶」(90)、「花の生物学」(91)があり、毎年、これと並んで展示される腕自慢の教職員による写真「駒場の自然」も人気が高い。1991年度の展示はとくに好評だったので、美術博物館と共催で、今年の4-5月、再度、美術博物館の展示室を用いて展示することになっている。また地震や噴火のようなそのときどきのトピックス、あるいは毎年の特別展示に関連しての講演会も好評で、1990年年は世界中の博物館向けに動く恐竜の模型を制作している田村徹夫氏が実物をトラックに乗せて登場、また1991年度は、銀河宇宙オディッセイの映像構成で著名な大口孝之氏が自作の映像を、さらに花と昆虫の生態写真の第一人者田中肇氏が自作スライドを携えて登場、ともに会場に溢れるほどのひとを集めた。見学会も博物館が力をいれている行事であり、1989年度に行なった「駒場キャンパス大紀行」と題する人文地理学と生物学の教官が講師となってのキャンパス周辺の探索は、なかでも好評だったもののひとつであり、本年4月には本学の海洋研究船白鳳丸の見学を予定している。

毎年刊行の「自然科学博物館ニュース」は、予算の許すときは増大号をつくっており、「生きている化石」と「蝶の世界」は、ほとんど研究誌といって良い内容で、今日でも入手希望者から連絡があるほどの出来になっている。

美術博物館

美術博物館は、もちろん教養学部の教育施設のひとつであるが、近年、ユニークな美術館としての評価が高まるとともに外部からの参観者の数もふえ、地域社会に開かれた施設としての役割も果たしている。

美術博物館は、教養学部初代学部長矢内原忠雄教授の発案によるもので、1951年に設立準備委員会が発足した。当時は大学の設備も整わず、予算も乏しく、ほとんどゼロからの出発であったが、東洋陶磁史の研究で知られる三上次男教授の多大の尽力もあって収蔵品が少しずつふえていった。また、美術博物館は当初常設の展示室がなかったため、定期的な展覧会と講演会の開催にも力をいれた。1951年秋の「西洋・東洋絵画展」は大学内外の協力によって大きな成功をおさめた。1962年には念願の展示室が第2本館に設けられ、そのあと、1971年には現在の旧図書館2階（教務課の上）に移転した。ただし収蔵室および作業室としては第1研究室の一部を使用している。なお、収蔵品の目録『東京大学教養学部美術博物館資料集1』が1985年に刊行された。これには金工、陶器、貨幣など東洋美術考古学関係の収蔵品が紹介されている。

収蔵品の基盤となるのは東洋美術考古学関係であるが、さらに旧第一高等学校所蔵の日本絵画、アメリカ大陸の古代遺物（遺跡の拓本を含む）、梅原龍三郎寄贈のコプト織り、ダ・ヴィ

ンチのアトランティコ手稿の複製をはじめとするイタリア・ルネサンス期の手稿の複製、リトグラフ若干など多岐にわたっている。なお、展示室正面に置かれたマルセル・デュシャンの「大ガラス」は、デュシャン未亡人の好意によりデュシャンの遺稿をもとに教養学部で制作された作品で、1980年に美術博物館に寄贈され、大学内外の参観者の注目を集めており、海外の美術館からもしばしば貸与の要請がきている。1991年には片岡球子画伯から「富士」の絵が寄贈された。

現在、週のうち水・木・金曜の3日間展示室を公開しており、平常展示のほか、年に1、2回は特別展を行っている。1991年の特別展は「テクストとイメージ展」で、教養学部の教官有志からも秘蔵の絵画や稀覯書を貸与していただき充実した内容となった。また年に4回、ひろく芸術一般をテーマとして外部から専門家を招いて講演会を開催している。また近年、美術博物館が中心になって文部省科学研究補助金の交付を受けて、空間表現の比較文化的研究を推進している。美術博物館が抱える最大の問題は、予算の伸びが限られているため、アルバイト費の圧迫で、新資料購入が不可能となっていることである。また展示室の老朽化と空調の不備も早急な解決を迫られている。さらに教養学部の学術資料の一部を保管しているため、収蔵室も不足している。学術資料の保管は学部全体で考えるべき問題であろう。現在の美術博物館運営委員会の委員は次の通り：森安達也（委員長）、義江彰夫、大貫良夫、船曳建夫、高橋康也、佐藤良明、新田義之、池田信雄、芳賀徹、阿部良雄、小林康夫、岩佐鉄男、桑野隆、横山正、安達祐之。

美術博物館特別展

1985年	
5.8〜7.12	高句麗の壁画展　第1回
10.23〜12.13	〃　第2回
10.23〜12.13	中国の瓦展
1986年	
4.23〜4.27	江戸時代の大工技術書展——平内家史料を中心に
1987年	
6.10〜7.31	「大ガラスと透視図法」展
1988年	
6.1〜6.17	写真展「キャサリン・マンスフィールドの作品と生涯——A Sense of Living」
11.30〜12.16	3D BOOKS展示——動く本、立ち上がる本、本を超える本
1989年	
5.4〜6.30	「都市図の視点」展
9.6〜11.2	「ジェノヴァ人、コロンブス——その勇気と信念」
1990年	
11.2〜12.15	西域の壁画（模写）
1991年	
6.5〜7.5	「テクストとイメージ」展

美術博物館講演会

1982年度		
4月28日	井上　靖	「西域の旅から」
11月26日	梅原　猛	「縄文文化とアイヌ文化」
1月28日	田中　淡	「中国の建築と庭」
2月4日	関根　伸夫	「環境装置としての美術」
1983年度		
6月17日	鈴木　八司	「エジプト古代文明をめぐって」
11月11日	坂根　厳夫	「遊び・科学・文化」
12月1日	針生　一郎	「ニューペインティングをどうみるか」
2月3日	黒川　紀章	「共生の思想」
＊連続講演会——「世紀末芸術」		
12月5日	阿部　良雄	「世紀末とは何か」
12月6日	芳賀　徹	「ジャポニズムとその里帰り」
12月7日	高橋　康也	「イエイツと能——『鷹の井戸』を観る」
12月8日	荒木　昭太郎	「世紀末フランス歌曲の世界」
12月9日	由良　君美	「世紀末イギリス絵画と文学——ラファエロ前派を中心として」
1984年度		
6月13日	阿部　良雄	「日本の前衛美術　1910年—1960年」
6月20日	赤瀬川源平	「60年代美術の直接性について」
6月29日	平井　正	「ドイツのダダイストと日本」
1月16日	種村　季弘	「魔術的リアリスム」
2月1日	長谷川　栄	「ミュゼオロジイの改革」
1985年度		
5月10日	諸井　誠	「音楽とエロティシズム」

6月17日　阿部　謹也「中世ヨーロッパの怪異なるものについて」
11月1日　川田　順造「アフリカにおける色とかたち」
12月5日　高階　秀爾「文学と絵画－19世紀ヨーロッパを中心に」
3月10日　早川　正夫「古建築の復元と古絵画－彦根城表御殿を中心に」

1986年度
5月16日　ヘンリー・スミス「アメリカからみる江戸百景－広重作品の分析」
6月20日　藤森　照信「都市への新しい視覚－路上観察学入門」
11月7日　藤波　隆之「歌舞伎と京劇－女形・隈取り・立ち回り」
12月2日　網野　善彦「中世の職人をめぐって」
1月26日　鏡味　治也「バリ島家屋の意匠と意味」

1987年度
6月12日　中沢　新一「哲学のハッピーエンド」
6月30日　福本　隆司「コンピューターグラフィックスの現在」
11月16日　吉増　剛造「武蔵野／駒場／水の道」
12月8日　久野　　健「なた彫りの仏像について」

1988年度
6月3日　コシノ・ジュンコ「ファッションの現在とその可能性」
6月28日　高田　倭男「平安貴族の服装について」
11月22日　岡崎　乾二郎「回想のヴィトゲンシュタイン・反映画的断章」
1月30日　落合　一泰「祝祭のデザイン－カリブ黒人社会の聖フランチェスコ祭」

1989年度
＊シンポジウム
6月1日　小林 忠　原 広司　横山 正　義江 彰夫　阿部 良雄（司会）
「都市図の視点」
12月4日　伊藤　俊治「写真・歴史・都市」
1月19日　小泉　和子「日本近代の家具、室内意匠における和洋折衷の系譜」

1990年度
5月17日　大貫　良夫「アンデスの遺跡発掘 —— 神殿と黄金」
10月25日　中西　夏之「絵画の光」
11月13日　杉浦日向子「江戸を描く、江戸を読む」
12月14日　鈴木　了二「建築の空隙」
1月25日　三宅　幸夫「音楽の悪魔」

1991年度
5月22日　秋山　邦晴「映画音楽——もう一つの現代音楽」

＊シンポジウム
6月26日　清水 徹　鶴岡 善久　阿部 良雄
「テクストとイメージ」
11月13日　田中　公明「曼荼羅入門」
11月29日　廣部　達也「ル・コルビュジエの建築ゲーム」

付属資料1

東京大学教養学部で教育研究にたずさわる教官は、個人の資格で、あるいは所属する教室、学科、専攻などの一員として、海外を含めた外部の研究者や研究組織と緊密な連携のもとに研究活動を行っている。その成果を共同で発表して相互理解を深め、討論を通じて研究水準のさらなる向上を目指す機会も数多く存在する。だが、そうした多様な活動やそれに寄せられる外部からの評価は、それぞれの専攻領域にのみ流通する断片的な情報にとどまり、教養学部の研究水準や総体的なイメージを学内外の視線に対して提示する努力は、これまでなおざりにされてきたのが現状である。よって、ここに、個々の研究活動や国際的な交流の現状を一括して列挙し、全体像の把握を容易ならしめる資料として提示する次第である。

全体は4部からなり、国際的な活動、学外からの評価、研究活動の公表、科学研究費などのリストが列挙されることになるだろう。なお、紀要などの研究活動の公表については、その項目に詳しい説明がなされている。また、教養学部の教官による諸外国の大学での招待講演や客員教授の詳しい資料は「II.教養学部では、誰がどのように研究教育を行っているのか」に個人情報として述べられているので、それを参照にされたい。

国際シンポジウム

主催者	テーマ／使用言語	会場／期間	参加者	刊行物　＊その他
支倉崇晴(開催責任者) 東大シンポジウム	Pascal, Port-Royal, Orient, Occident (「パスカル、ポール＝ロワヤルと東洋、西洋」) フランス語	東京大学山上会館 1988.9.27～29	103名(日本51、フランス46、アメリカ2、韓国、ベルギー、オランダ、カナダ各1)、他に傍聴者数十名 主たるゲスト:ジャン・メナール、フィリップ・セリエ(共にパリ第4大学教授) テレーズ・ゴイエ(クレルモン・フェラン大学名誉教授)	Pascal, Port-Royal, Orient, Occident. Actes du Colloque de l'Université de Tokyo 27-29 septembre 1988. Recueillis et présentés par Thérèse Goyet, Takaharu Hasekura, Jean Mesnard, Philippe Sellier, Tetsuya Shiokawa, Paris,Klincksieck, 1991.
高木教典(開催責任者) 東大シンポジウム	Information and Its Junctions 英語	東京大学山上会館 1987.10.6.～10.9	22名(日本、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、フィリピン)	Todai Symposium 1986 Information and Its Junctions, pp. 371
蓮實重彦(開催責任者) 東大シンポジウム	Le Siècle de Michel Foucault ミシェル・フーコーの世紀 フランス語 英語	東京大学教養学部12号館 1991.11.2～4	300名(日本240、フランス24、アメリカ合衆国、イギリス、ドイツ各10、イタリア、スイス、ユーゴスラヴィア各2) クリストファー・ノリス(ウェールズ大学教授)、フランソワ・エヴァルド、ダニエル・ドフェール(共にフーコー・センター研究員)	「ルプレザンタシオン」003号(近刊)
高辻知義(司会)	オーストリア文学とユーデントゥム 日本語 ドイツ語	上智大学 1987.5.9	250名(日本、西ドイツ、オーストリア、スイス、アメリカ) 主たるゲスト:Ruth K. Angress(カリフォルニア大学)	「ドイツ文学」日本独文学会編1987秋号に要旨
芳賀徹(開催責任者)	比較文学研究の新動向 英語	東京大学山上会館 1987.6.16,17	日本、オランダ、ポルトガル、アメリカ、ドイツ	
藤本文範(組織委員長) 日本応用物理学会、岡山理科大学、日本学術振興会、万国博覧会協会共催	12th International Conference on Atomic Collisions in Solids 「固体内原子衝突」 英語	岡山市 1987.10.12～16	296名(24国)	Proc. 12th International Conference on Atomic Collisions in Solids (North-Holland,藤本文範編)
高辻知義(司会) 日本ワーグナー協会	ファンタジー養成の場としてのオペラ ドイツ語 日本語	東京ドイツ文化センター 1987.11.11	250名 主たるゲスト: Götz Friedrich(ベルリン・ドイツ・オペラ総監督・演出家) Cornel Franz(同氏助手) 三光長治(埼玉大) 渡辺守章(東大) 西沢敬一(演出家)	「年刊ワーグナー1988」に採録

主催者	テーマ／使用言語	会場／期間	参加者	刊行物　＊その他
麻生建(開催責任者) 日本ドイツ学会 東京ドイツ文化センター	日独シンポジウム〈第二外国語としてのドイツ語－現在・過去・未来〉 ドイツ語 日本語	学習院大学 1987.11.27～29	150名(日本・西ドイツ) 主たるゲスト:Alois Wierlacher(バイロイト大学) 飯島宗一(名古屋大学学長) 西原春夫(早稲田大学総長)	「日本におけるドイツ語教育」日本ドイツ学会編　成文社 1989 "deutsch als zweite fremdsprache in der gegenwärtigen japanischen gesellschaft". München 1989.
角和善隆 Reinhard Schmidt-Effing	放散虫の生層序学・含放散虫岩の研究 英語 ドイツ語	Philipps大学(ドイツ・マーブルグ市) 1988.7.21～24	79名(日本5、アメリカ12、ソビエト8、ドイツ8、カナダ3、フランス3、中国3、スイス3、ほか)	Geologica et Palaesntologica 特集号
渡邊啓(開催責任者)	International Symposium on Dynamics of Macromolecules 英語	東京大学山上会館 1988.8.8～10	67名(日本37、アメリカ10、イギリス7、フランス4、西ドイツ2、ソ連2、ブルガリア2、ベルギー、オランダ、オーストラリア各1) 主たるゲスト:B. Jennings(イギリス Reddings 大学教授) C.T.O'Konski(アメリカ California 大学教授) R. Pecora(アメリカ New York 大学教授) S. Stoylov(ブルガリア科学アカデミー物理化学研究所所長) M. Mandel(オランダ Leiden 大学教授)	"Dynamic Behavior of Macromolecules, Colloids, Liquid Crystals and Biological Systems" Tokyo, Hirokawa,1989
佐藤直樹(東大教養) 井口洋夫(分子研) 佐野瑞香(熊本大理) 丸山有成(分子研)	有機半導体－40年 英語	岡崎ニューグランドホテル(岡崎市) 1988.11.8～11	79名(日本56、アメリカ5、イギリス4、ドイツ3、中国3、フランス2、イタリア、オーストラリア・カナダ・ソ連・デンマーク・ポーランド各1) 主たるゲスト:M. Pope(アメリカ) F. Wudl(アメリカ) D. D. Eley(イギリス) N. Karl(ドイツ)	Molecular Crystals and Liquid Crystals 誌特別号(171巻) Gordon and Breach、1989年. ＊王子セミナーとして
研究・技術計画学会・平澤泠 American Association for the Advancement of Science,	英語	アメリカ・サンフランシスコ・ヒルトンホテル 1989.1.20.	87名(アメリカ71、日本13、韓国・中国・ソ連各1)	"Science in Japan" Westview Press(1989) Robert S. Cutler、平澤泠、研究技術計画、4(3)292～298(1989)
戎崎俊一 University of California, Santa Cruz Stanford E. Woosley	10-th Santa Cruz Summer WorkshopSupernova 英語	University of California, Santa Cruz 1989.7.10～21	約150名	Supernovae, ed. S. E. Woosley, 1991, Springer Verlag
成瀬治、西川政雄 比較史・比較歴史シンポジウム	東アジア歴史教育シンポジウム(第2回) 日本語 朝鮮語 中国語	東京大学教養学部 1989.8.4～5	約200名(日本、韓国〈李光周／李元淳／李敏鎬〉、朝鮮民主主義人民共和国〈全栄律／文炳宇、中国・ツァンロン〉)	比較史・比較歴史教育研究会編『アジアの「近代」と歴史教育』(未来社、1990)

主催者	テーマ／使用言語	会場／期間	参加者	刊行物　＊その他
岩田一政(開催責任者)	21世紀の太平洋地域の資本の貸借関係 英語	総合研究開発機構 1989.8.20～21	20名(日本17　東大・神戸大・一橋大各1／日本輸出入銀行2／経済企画庁5／その他7、アメリカ3・イエール大)	"Prospective International Capital Ownership Patterns Across the Pacific at the Turn of the Century." NIRA Research Output 1991 vol.4 No.1
平野健一郎(共催)	Dutch-Japanese Symposium on the History of Dutch and Japanese Expansion 英語	亜細亜大学、京都大学東南アジア研究センター 1989.10.9～14	約40名(日本8、オランダ8)	Journal of the Japan-Netherlands Institute, 1990, vol.II
古田元夫 ホイアン国際シンポジウム組織委員会	古都市ホイアンに関する国際シンポジウム	ダナン(ベトナム) 1990.3	80名(うち日本から14)	Ancient Town of Hoi An, Foreign language Pabulishing Houces, Ha-noi, 1991
浜田隆士 高等教育研究所 S. Brenner T. Miyata K. Omoto A. M. Wewer S. Osawa & T.Honjo	The International Symposium on Evolution of Life Evolution of Life —— Fossils, Molecules, and Culture 英語	京都国際会議場 1990.3.26～28	約200名	S.Osawa & T.Honjo eds Evolution of Life Springer-Verlag, 1991
下條信輔 ヤクルト	知覚・認知・脳 英語	ヤクルトホール(東京) 1990.5.25～26	スピーカー4名(アメリカ) 聴衆500名	「ヤクルト国際シンポジウム－知覚・認知・脳」 (1991年:ヤクルト本社、HBJ出版局) ＊日本側コーディネーターおよび研究者集会司会を担当
吉田悟郎、西川正雄 比較史・比較歴史教育研究会 ソウル大学校　師範大学社会教育研究所 協賛:韓国歴史教育研究会(李元淳)	21世紀を志向する歴史教育 朝鮮語、日本語	ソウル大学校　湖巌教授会館 1990.7.29	100名(韓国、日本)	近刊予定
林睦実、保坂一夫(司会) IVG東京大会第20分科会 財団法人ドイツ語学文学振興会(早川東三)	Revolution und Literatur ドイツ語	慶応大学(三田キャンパス) 1990.8.26～9.1	300名(約50か国から) 主たるゲスト:Hans-Georg Werner	Akten des VIII. Internationalen Germanisten-Kongresses Tokyo 1990 (全11巻、indicium Verlag, München 1991)
平川祐弘 (開催責任者)	小泉八雲生誕百年フェスティバル 日本語、英語	松江 1990.8.30～9.2	日本、イギリス、アメリカ	『無限大』No.88「特集・ハーン、百年後の解釈」
佐々木力(開催責任者)	数学史 英語	東京大学山上会館 1990.8.31～9.1	約30名	Proceedings of the Tokyo History of Mathematics Symposium

主催者	テーマ／使用言語	会場／期間	参加者	刊行物　＊その他
小野光代(広島大) 新田春夫(東大)	近世ドイツ語史研究の方法と展望 ドイツ語	本栖湖口つじ 1990.9.2〜6	20名(日本12、西ドイツ4、オーストリア1、ソ連2、チェコスロヴァキア1) 主たるゲスト:Klaus J. Mattheier Oskar Reichmann Anne Betten Klaus-Peter Wegern Peter Wiesinger Natalja Semenjuk Natalija Bebenko Emil Skala	"Beiträge zur Forschung des Frühneuhochdeutschen" (in print)
高辻知義(司会) 日本ワーグナー協会	「トリスタン」コロキウム 日本語、ドイツ語	東京ドイツ文化センター 1990.11.8	200名(日本、西ドイツ、スイス) 主たるゲスト:D. Borchmeyers(ハイデルベルク大学) Theo Hirsbrunner(ベルン大学) Oswald Georg Banz(ミュンヘン大学)	「年刊ワーグナー1991」
平川祐弘(開催責任者)	夏目漱石『こころ』 英語	シンガポール、国立シンガポール大学 1991.4.29〜5.3	シンガポール、台湾、韓国、アメリカ、カナダ、オーストラリア、日本	『無限大』No.89「特集・シンガポールで読んだ『こころ』」
保坂一夫 日本独文学会(平尾浩三)	Deutsche Literatur heute-vereint oder entzweit? ドイツ語	日本大学文理学部 1991.5.19	250名(約4か国から) 主たるゲスト:Rolf Schnell	
友田修司(組織委員・司会) 園田昇(阪大工)	セレン・テルルの化学に関する国際会議 英語	大阪国際会館 1991.7.9〜13	233名(日本175、アメリカ18、ドイツ12、カナダ3、ベルギー6、中国8、イスラエル、イタリア、フランス、インド、タイ、マレーシアなど)	"Reviews on the Chemistry of Selenium and Tellurium", Phosphorus and Sulfur, 1992
浜田隆士 CIAC(国際頭足類協会) Drs. O'DOR & T. OKUTANI	The International Symposium on Recent Advancement of Cephalopod Fishery Biology-Recent Advancement of Cephalopod Fishery Biology 英語	東海大学清水分校 1991.7.16〜19	約150名	Proceedings(未刊)
竹内敬人(開催責任者) 東京大学 日本学術振興会 シンガポール国立大学	JSPS(日本学術振興会)／シンガポール(NUS)国際セミナー「有機化学・生物有機化学の最近の進歩」 英語	東京 1991.8.22〜8.25	40名(日本30、シンガポール8、マレーシア1、タイ1)	アブストラクト(約120ページ)
芳賀徹(実行委員長)	The 13th Congress of the International comparative Literature Association「ヴィジョンの力」 日本語、英語、フランス語	青山学院大学 1991.8.23〜28	海外約50か国より約500名、国内より約400名	PROCEEDINGS OF THE ICLA TOKYO CONGRESS、全6巻(1994年までに刊行予定)

主催者	テーマ／使用言語	会場／期間	参加者	刊行物　＊その他
林利彦(東大・教養・化学) 吉里勝利(広島大・理・動物) 林正男 (お茶の水女子大・理・動物) 伊勢村護(静県大・食品・生化) 木全弘治(愛医大・分医研)	細胞外マトリックスの構造と機能 英語	東京、資生堂別館 1991.8.31〜9.1	220名(アメリカ8、フランス3、ドイツ、オーストリア、スイス、イギリス各1) 主たるゲスト:B. R. Olsen(Harvard Med. Sch.) J. H. Fessler(UCLA) F. Ramirez(Mt. Sinai) Y. Yamada(NIH) S. Akiyama(NIH) Y. Yamaguchi (La Jolla, Canc. Found.) K. von der Mark (Max-Planck-Soc.) K. Beck(Linz Univ.) R. Chiquet-Ehrismann (Friendlich Miescher Inst.) R. Garrone(Univ. Lyon) 岡山大　二宮善文教授	"Structure and Function of Extracellular Matrix" Abstracts of the paper presented
角和善隆 Marta Marcucci	放散虫の生層序学・含放散虫岩の研究 英語、イタリア語	Montegufoni城(イタリアフローレンス市) 1991.9.30〜10.3	78名(日本8、イタリア18、アメリカ12、スイス6、ソビエト3、ドイツ5、ほか)	未発刊
恒川恵市 教養II・中南米 アカデミア・カスティージャ 国際文化会館共催	Encuentro de dos mundos: 500 años después (2つの世界の出会い、その500年後) スペイン語	東京・国際文化会館 1991.10.7〜11	120名(日本70、外国50) パネラー、スペイン2、アルゼンチン1、チリ1、日本1	1992年度に出版予定
平野健一郎(学会理事長)	アジア政教学会　第二回国際シンポジウム「アジアの2001年:ASEANのターニングポイント」 日本語、英語	慶応義塾大学 1991.12.7〜8	約100名(海外招待報告者4、日本側報告者8)	英文プロシーディング(予定) 学会誌『アジア研究』特集号(予定)
浜田隆士 東京大学生産技術研究所	The International Symposium on Three Dimensional Image Technology and Arts-Three Dimensional Image Technology and Arts 英語	東京大学生産技術研究所 1992.2.5〜7	約150名	Proceedings of the International Symposium on Three Dimensional Image Technology and Arts. HAMASAKI ed. Seiken Symposium, vol. 8,1992.
研究技術計画学会・平澤冷 American Association for the Advancement of Science,	Engineering in Japan 英語	アメリカ・ワシントンD.C.・オムニショーラムホテル 1991.2.17	103名(アメリカ84、日本15、カナダ2、韓国・中国各1)	"Engineering in Japan" Westview Press(1991)
研究技術計画学会(共催)・平澤冷(司会) Portland International Conference on Management of Engineering and Technology IEEE Engineering Management Society(共催)	Technology Management 英語	アメリカ・ポートランド・マリオットホテル 1991.10.27〜10.31	605名(アメリカ、カナダ、日本、ドイツ、インド、中国、等31ケ国)	PICMET '91 "Technology Management", IEEE Service Center(1991)

国際共同研究

参加教官	テーマ／使用言語	会場／期間	主催者	参加者	刊行物　＊その他
浅見俊雄 小林寛道 船渡和男	青少年の体力に関する日中共同研究 日本語、中国語	東京、北京(中国) 1985.11～1988.3	日本体育協会　浅見俊雄 中国全国体育総会　陳明達	21名(日本10、中国11)	青少年の体力に関する日中共同研究－パイロットスタディ 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告1986 青少年の体力に関する日中共同研究 第一報 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告1987 青少年の体力に関する日中共同研究 第二報 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告1988
古田元夫	Plan Boi Chau and the Dong Du Movement	カナダ、アメリカ、日本 1987～1988	Vinh. Sinh	6名	Plan Bio Chau and The Dong Du Movement, Yale Center for International and Area Studies 4
杉本大一郎	球状星団の力学と重力多体問題	1987.4.1～1989.3.31			日米科学協力事業共同研究(学振)
杉本大一郎	専用計算機による高密度恒星系の進化の研究	1991～1993			国際学術研究、共同研究(文部省)
岩田一政	21世紀の太平洋地域の資本の貸借関係 英語	東大教養－イェール大学グロース・センター 1988～1990	岩田一政	9名(イェール大5、東大1、神戸大1、日本輸出入銀行1、一橋大1)	"Prospective International Capital Ownership Patterns Across the Pacific at the Turn of the Century." NIRA Research Output 1991 vol.4 No.1
義江彰夫	日本史研究上の主要用語の仏語翻訳をめぐる諸問題	東京・日仏会館 1988～1990	日仏会館	6名	
福永哲夫 松尾彰文 船渡和男	日本人女性の動的姿勢測定(宇宙ステーション建設計画のため) 日本語、英語	東京大学 アメリカNASAジョンソン宇宙センター 1988.4～1991.3	宇宙開発事業団 アメリカ:NASA	約10名(日、米)	
伊藤亜人 船曳建夫 三尾裕子	漢族およびその周辺少数民族のコミュニティーの研究 中国語、朝鮮語、日本語、英語	東京および中国 1988.4～1992.3	漢族・少数民族研究会	14名(日本9、中国5)	
大貫良夫	古代アンデス文明の生成過程の研究 スペイン語	ペルー 1988.7～10	大貫良夫	9名(日本6、ペルー3)	大貫良夫「ペルー北高地カハマルカ盆地の形成期」 (東京大学教養学部人文科学科紀要:文化人類学研究報告No.5)

参加教官	テーマ／使用言語	会場／期間	主催者	参加者	刊行物　＊その他
廣瀬久和	Toward An Open World Order 英語	東京　全国銀行協会 京都　国際会議場 1988.9.5～9.9	The Mont Peler in Society	約160名（アメリカ74、日本14、ドイツ9、オーストラリア8、イギリス6、香港5、南アフリカ5、スウェーデン4、フランス3、カナダ3、アルゼンチン3、スペイン3、中国3、オーストリア3　他多数国）	
山口岳志 谷内達	日韓両国における都市システムの比較研究 日本語	韓国（ソウル・清州）・東京大学教養学部・筑波大学 1988.10.22～29及び 1989.2.8～13	長谷川典夫（三重大学）	11名（日本7、韓国4）	日韓両国における都市システムの比較研究（昭和63年度科研費報告書） ＊科学研究費海外学術研究による
浅見俊雄 小林寛道 八田秀雄	陸上競技ジュニア選手の体力に関する日中共同研究 日本語、中国語	東京、北京（中国） 1989.4～1990.3	日本オリンピック委員会　松井秀治 中国全国体育総会　陳明達	25名（日本15、中国10）	陸上競技ジュニア選手の体力に関する日中共同研究　第1報 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告1990 陸上競技ジュニア選手の体力に関する日中共同研究　第2報 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告1991
下条信輔	視知覚の心理物理学的研究 英語	東京大学・ハーバード大学 1989.4～現在	下条信輔	Ken Nakayama Patric Cavanagh Takeo Watanabe: Department of Psychology, Harvard Univ	Perception of Visual Surfaces. Science (in press) 他 学術論文数点 ＊（「東京大学国際共同研究計画」など）
佐藤直樹	光電子分光法による導電性高分子の電子構造研究 英語	スウェーデン・リンチェーピン・リンチェーピン大およびルンド大 1989.5.3～7.19	佐藤直樹 共催責任者：木村克美（分子研）	W.R.Salaneck（リンチェーピン大）	学術論文誌に掲載（5報、詳細略） ＊文部省科学研究費補助金海外学術研究による
小川晴久	三浦梅園と東アジアの実学の研究	東京大学教養学部 1989.6～1990.7		6名（日本3、ニュージーランド1、中国1、韓国1）	報告集『三浦梅園と東アジアの実学』 ＊1989年11月3日東京大学教養学部で国際公開講演会を開いた。
大貫良夫	古代アンデス文明の生成過程の研究 スペイン語	ペルー 1989.7～10	大貫良夫	9名（日本7、ペルー2）	大貫良夫・加藤泰建「クントゥル・ワシの墓」（ラテンアメリカ研究年報　No.11）
藤本隆志	The current philosophical Trend in Japan 英語	Michigan大学（アメリカ合衆国） 1989.9.15	Institute for Humanities + Center for Japanese Studies, Univ. of Michigan 責任者：Nicholas P. White	30名（日本、アメリカ）	

参加教官	テーマ／使用言語	会場／期間	主催者	参加者	刊行物　＊その他
恒川恵市	Japanese Enterprises in Mexico in face with North American Free Trade Agreement 英語、スペイン語	メキシコ各地および東京でのリサーチ 1989.10〜1990.9	Center for U.S.-Mexican Studies, Univ. of California, San Diego 責任者:Gabriel Székely	Gabriel Székely, Center for U.S.-Mexican Studies, Univ. of California, San Diego 恒川恵市 Harley Shaiken, Dept. of Communication, Univ. of California, San Diego Kurt Unger, Centro de Estudieos Económicos, El Colegio de México Wilson Peres, UN Economic Commision for Latin America and Caribbean	Gabriel Székely, ed. Manufacturing across borders and oceans. La Jolla: Center for U.S.-Mexican Studies, 1991.
土屋荘次	分子内ダイナミックスの統計分光学 英語	アメリカ 1990.3〜1993.2	土屋荘次	2名(日本1、アメリカ1)	
土屋荘次 遠藤泰樹 山内薫	振動高励起分子における量子カオス状態の統計分光学 英語	アメリカ、フランス 1990.4〜1992.3	土屋荘次	5名(日本3、アメリカ1、フランス2)	＊科学研究費補助金 国際学術研究
大野公一	分子科学における動的過程の実験的理論的研究 英語	スウェーデン(ウプサラ大学、シーグバーン研究所、ストックホルム大学、王立工科大学、ルント大学) 1990.5.20〜5.25	木村克美	18名(日本6、スウェーデン12)	平成2年度 「日本・スウェーデン分子科学協力(国際学術研究－共同研究)報告書」 岡崎国立共同研究機構分子科学研究所 ＊平成2年度文部省科学研究費補助金「国際学術研究」による。
三谷博	明治維新——断絶と連続	東京 1990.5〜1992.3	三谷博	15名(日本13、アメリカ2)	
大貫良夫	古代アンデス文明の生成過程の研究 スペイン語	ペルー 1990.7〜9	大貫良夫	8名(日本6、ペルー2)	大貫良夫・加藤泰建「クントゥル・ワシの墓」(ラテンアメリカ研究年報　No. 11)

参加教官	テーマ／使用言語	会場／期間	主催者	参加者	刊行物　＊その他
竹内敬人	日本学術振興会・全米科学財団　日米科学協力事業共同研究「不飽和有機ゲルマニウム化合物の合成・構造・反応に関する基礎的研究	1990.9.1〜1992.8.31		J.B.LAMBERT 教授（Northwestern大学）	発表論文多数
廣瀬久和	Family and Law 英語	オランダ　ライデン市 ライデン大学 1990.9.3〜9.6	The Center for Non-Western Studies (CNWS) The Van Vollenhoven Institute for Law and Administration in Non-Western Countries	30数名（オランダ、イギリス、日本、インドネシア、アフリカ－ボツワナ、フィリピンなど）	
恒川恵市	日米摩擦の国内的要因 英語	アメリカ合衆国および日本 1990.10〜1992.6	筑波大学・進藤榮一	10名（日本5、アメリカ5）	1993年予定
西川勝	誘導体媒質中の過剰電子:輸送・反応性・伝導状態エネルギーと媒質の高電圧特性	アメリカ、ドイツ 1991.3〜1993.3	西川勝	5名（日本3、アメリカ1、ドイツ1）	
宮本久雄	Edition de de la raison générale dans le monde contemporain フランス語	Institut de la recherche sur la raison générale, Santa-Sabina（イタリア） 1991.10.3〜5	Institut de la recherche sur la raison générale 責任者：Matheus Cardoso	10名（日本、アフリカ、アメリカ、メキシコ、ポルトガル）	
恒川恵市	チリにおける経済自由化と日本企業の対応 英語、スペイン語	チリ各地および東京でのリサーチ 1991.10〜1992.9	恒川恵市	恒川恵市 Gabriel Székely, Center for U.S.-Mexican Studies, Univ. of California, San Diego Augusto Varas, FLACSO (Chile) Wilson Peres, UN Economic Commision for Latin America and Caribbean	
渡辺昭夫	太平洋戦争の再考察－開戦50周年国際会議 日本語、英語	山梨県山中湖（ホテルマウント富士） 1991.11.14〜11.17		43名（日本、アメリカ、イギリス、ソ連、中国、韓国、フィリピン、ニュージーランド、オーストラリア）	未刊
渡辺昭夫	Japan's Stratagic Priorities in the 1990s 英語	御殿場　経団連ハウス 1991.11.18〜11.20	日本国際問題研究所・ロンドンIISS	日本、イギリス、アメリカ、ドイツ、ソ連、韓国	近刊予定（日本国際問題研究所）

参加教官	テーマ／使用言語	会場／期間	主催者	参加者	刊行物　＊その他
渡辺昭夫	South Asia's Security in the 1990s 英語	ダッカ（バングラデシュ） バングラデシュ国際戦略研究所 1992.1.5〜1.7	BIISS	57名（日本、イギリス、中国、ソ連、インド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、等）	
廣瀬久和	Principles of Contract Law 英語、フランス語	アメリカコラル・ゲーブル市マイアミ大学 1992.1.6〜1.11	Institute for Unification of Private Law（UNIDROIT）	約20名（J.Bonell教授（ローマ大） O.Lando教授（コペンハーゲン大） A.Farnsworth教授（コロンビア大） D.Tallon教授（パリ大） M.Fontaine教授（ルーヴァン大） M.P.Furmston教授（ブリストル大） Drobnig教授（マックス・プランク比較法研） その他オーストラリア、中国、アメリカ、等から20名程度	

招聘教授

氏名／国籍	所属研究機関／地位	受入責任者／所属	期間	プロジェクト　＊その他
Mattheier, Klaus J. ドイツ連邦共和国	ハイデルベルク大学教授	教養学部ドイツ語教室 新田春夫	1987.10	日本独文学会 ドイツにおける社会言語学研究の現在
Lindhard, J. デンマーク	オーフス大学教授	教養学部物理学教室 藤本文範	1987.10.25～11.25	日本学術振興会
Houssier, C. ベルギー	リエージュ大学化学教室教授	教養学部化学教室 渡邊　啓	1988.7.31～8.20	"Optical and electro-optical study for the development of the photo active polymers and chiral support for asymmetricorganic synthesis" に関する研究協力 ＊ベルギーのフランスコミュニティから申し込みがあった協同研究の基礎的な準備を進めることを目的として、東京大学学術交流資金で招聘（滞在費のみ、旅費はベルギーのフランスコミュニティが負担）。その翌年、教養学部化学教室より、山岸助教授（当時）がベルギーのフランスコミュニティの基金で招聘され、Liége 大学で3ヵ月間 Houssier 教授と共同研究を行った。
Metzler, D. ドイツ	ミュンスター大学	教養学部歴史学教室 本村凌二	1988.10.3～31	オリエント文明と古典古代社会 日本学術振興会
Brush, Martha アルゼンティン	ブェノスアイレス大学人類学歴史学教授	教養学部スペイン語教室・教養II中南米 上田博人	1989.3.20～30	日本学術振興会
Piet Hut アメリカ	プリンストン高等研究所教授	教養学部宇宙地球科学教室　杉本大一郎	1989.4.6～90.1.18	日本学術振興会 球状星団の力学的進化
Vishewanathan, Savitri インド	デリー大学中国日本研究科	教養学部歴史学教室	1989.6.8～8.6	東京大学学術研究奨励資金 日本とインドにおける近代国家形成の比較研究
N. Stolterfoht ドイツ	ハーン－マイトナー研究所 教授	教養学部物理学教室 小牧研一郎	1989.12.2～25	東京大学学術交流資金
Anant Srikhao タイ	Assistant Professor Kasetsant Univ	教養学部生物学教室 毛利秀雄	1990～91	
Alcantara, Manuel スペイン	コンプルテンセ大学 政治社会科学科教授	教養学部教養II中南米 恒川恵市	1990.10.23～11.13	東京大学学術交流基金 東京大学とコンプルテンセ大学との学術交流協定に基づく招聘
Katiyar, S. S. インド	インド工科研究所 教授	教養学部生物学教室 川口昭彦	1991	

氏名／国籍	所属研究機関／地位	受入責任者／所属	期間	プロジェクト　＊その他
Lambert, J. B. アメリカ	ノースウエスタン大学教授	教養学部化学教室 竹内敬人	1991.5.9〜19	日本学術振興会　全米科学財団 日米科学協力事業共同研究「不飽和有機ゲルマニウム化合物の合成構造・反応に関する基礎的研究」
Nakayama, Ken アメリカ	ハーバード大学心理学科教授	教養学部心理学教室 下條信輔	1991.5.26〜6.21	文部省科学研究費(創成的基礎研究) 生体機能の総合的研究
Hanson, Susan アメリカ	クラーク大学教授	教養学部人文地理学教室 山口岳志	1991.6.7〜16	国際交流基金 日米地理学界の交流 ＊クラーク教授はアメリカ地理学会会長
蒋炳釧 中国	厦門大学教授	教養学部文化人類学教室 伊藤亜人	1991.10.12〜26	漢族・少数民族研究会(代表:伊藤亜人) 日本民族学振興会(中根千枝) 文部省科学研究費『漢族およびその周辺少数民族コミュニティーの研究』
Athanassoulas, Evangelie フランス	マルセーユ天文台教授	情報図形科学教室 牧野淳一郎(助手)	1991.10.28〜11.17	日本学術振興会 宇宙の進化に関する研究
Wangania, Jopie インドネシア	インドネシア大学政治社会学部人類学科講師	文化人類学教室 山下晋司	1992.2.8〜1年間	国際交流基金 日本の食文化の研究
厳如嫻 中国	中国社会科学院民族研究所教授	教養学部文化人類学教室 伊藤亜人	1992.2.6〜21	漢族・少数民族研究会(代表:伊藤亜人) 日本民族学振興会(中根千枝) 文部省科学研究費『漢族およびその周辺少数民族コミュニティーの研究』
劉耀全 中国	広東民族学院教授	教養学部文化人類学教室 伊藤亜人	1992.2.6〜21	漢族・少数民族研究会(代表:伊藤亜人) 日本民族学振興会(中根千枝) 文部省科学研究費『漢族およびその周辺少数民族コミュニティーの研究』

交換教授(外国よりの来訪)

氏名／国籍	所属研究機関／地位	期間	受入責任者／所属	協定
Rossman, Antonio Kosby アメリカ	Visiting Lecturer University of California,Los Angeles, School of Law Harvard University, Law School, 1971	1987～1988	島田太郎 アメリカ科	日米教育委員会
Hall, William Keeney アメリカ	Associate Professor Bradley University Political Science, University of Kansas, 1969	1988～1989	島田太郎 アメリカ科	日米教育委員会
Reed, Roark Michael アメリカ	Professor of Law Southern Methodist University, School of Law Georgetown University Law School, 1969	1989～1990	島田太郎 アメリカ科	日米教育委員会
Guterbock, Thomas Martin アメリカ	Associate Professor University of Virginia Ph. D., Sociology, University of Virginia, 1976.	1990～1991	島田太郎 アメリカ科	日米教育委員会
Harweg, Roland ハルヴェーク、ローラント ドイツ連邦共和国	ボーフム大学教授	1991.10.1～12.22	岸谷敬子 ドイツ語教室	ボーフム大学
Babbitts, Judith Ann アメリカ	Lecturer John F.Kennedy University American Studies,Yale University,1987.	1991～1992	島田太郎 アメリカ科	日米教育委員会

交換教授(外国への赴任)

氏名	学位	所属／地位	赴任先	期間	協定　＊その他
保坂一夫		教養学部教授(当時助教授)	西ドイツ ボーフム大学	1987.4.1～1989.3.31	交換協定
猪口弘之	文学修士	教養学部助教授	西ドイツ ボーフム大学	1987.4.1～1989.3.31	交換協定
村田雄二郎	文学修士	教養学部外国語科中国語教室講師	中華人民共和国 北京日本学研究センター	1990.2.22～1991.3.20	〝日本国国際交流基金と中国国家教育委員会との間の「北京日本学研究センター」に関する会談録〞 ＊日本側派遣機関:国際交流基金
並木頼寿	文学修士	教養学部人文科学科・歴史学教室 助教授	中華人民共和国 東北師範大学付設赴設留学生予備校	1990.6.27～9.15	文部省と中国国家教育委員会との協定による中国国費留学生の渡日前専門日本語講義の講師として
高橋満	経済学修士	教養学部教授	中華人民共和国 東北師範大学赴日留学生予備学校	1991.7.3～9.15	中国国家教育委員会と文部省との協定 ＊専門日本語(経済学)の教授

招聘講演

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
Brewer,D.S. イギリス	Professor,Emmanuel College,Cambridge	Orality & Literacy in Chaucer's Style	東大教養学部 1987.4.3	中世イギリス研究資料センター （久保内端郎）	日本中世英語英文学会
Angress, Ruth K. ドイツ	カリフォルニア大学教授	エーリヒ・ケストナーの児童文学の批判的再読	東大教養学部 1987.5.12	ドイツ語教室	
Khondker,Habibul H. バングラデシュ	シンガポール国立大学教授	Identity and Authority:Women in Changing Asia （発表、質疑、応答は英語）	東大東洋文化研究所 1987.6.18	文化人類学研究室	
Luhmann,Niklas ドイツ	ビーレフェルト大学（ドイツ）	最近のドイツにおける社会システム研究について	東大教養学部 1987.9.9	教養学科第三	
Purcell,William オーストラリア	ニューサウスウェールズ大学日本経済経営研究センター副所長 教養学科第三外国人講師	The Development Strategy and Performance of Foreign Banks in Japan	東大教養学部 1987.9.16	教養学科第三第6回コロキアム	
Ahrens,Rüdiger ドイツ	ヴュルツブルク大学教授	ドイツにおけるシェイクスピア受容	東大教養学部 1987.10.6	教養学部ドイツ語教室	
Mattheier,Klaus J. ドイツ	ハイデルベルク大学教授	方言の衰退それとも方言のルネッサンス?	東大教養学部 1987.10.8	教養学部ドイツ語教室	
Ducrot Oswald フランス	Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales	Description des mots français argumentatifs - assez/trop- ＊日本フランス語フランス文学会招聘	東大教養学部 1987.10.20	言語文化センター、フランス語教室、教養学科フランス分科	
Screech,Michael A. イギリス	英国学士院会員 オックスフォード大学文学部教授	ラブレーのテクストの読解 ＊日本学士院招聘	東大教養学部 1987.10.21	フランス語教室、教養学科フランス分科	
Screech,Michael A. イギリス	Fellow Emeritus, All Soul's College, Oxford	Cultural Referrences in Renaissance Humanists ＊日本学士院の招聘	東大教養学部 1987.10.24	教養学科イギリス分科（山内久明）、英語教室（高橋康也）	
Read, Colin カナダ	西オンタリオ大学ヒューロン校歴史学準教授 外国人講師	Whither Canada? :Canadian Trade and Defence Policies in the '80s.	東大教養学部 1987.10.26	教養学科第三第8回コロキアム	
Rayner, Anthony ニュージーランド・イギリス	リンカーン大学教授 外国人客員研究員	New Zealand-A Pacific Nation?	東大教養学部 1987.10.29	教養学科第三第9回コロキアム	

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
Wolff,Christian アメリカ	作曲家	音楽と社会－アメリカ現代前衛音楽について－	東大教養学部 1987.10.31	教養学科表象文化論、同フランス分科、フランス語教室	
Polyakovs, A.M. ソビエト連邦共和国	Professor, Princeton University	Non-Critical String Theory	東大教養学部 1987.11.	物理学教室(藤井保憲)	
Rayner, Anthony ニュージーランド・イギリス	リンカーン大学教授 外国人客員研究員	Four Lectures on New Zealand - Its History, Politics, Economy and International Relations -	東大教養学部 1987.11.7/14	教養学科イギリス分科、国際関係論分科	
Saniel, Josefa フィリピン	フィリピン大学アジア研究センター所長教授 外国人客員研究員	Social Segmentation of Contemporary Philippine Society :Historical and Sociological Overview.	東大教養学部 1987.11.12	教養学科第三第10回コロキアム	
Horne, Donald オーストラリア	ニューサウスウェルズ大学教授 オーストラリアカウンシル会長	Some Basic Assumptions about Australian Culture	東大教養学部 1987.11.26	教養学科第三第12回コロキアム	
Nono,Luigi イタリア	作曲家	現代音楽の詩と思想--ヘルダーリン、ジャベス、ヴィトゲンシュタイン、ブルーノ、グラムシなどをめぐって	東大教養学部 1987.12.1	教養学科表象文化論、同フランス分科、フランス語教室	
Jennings, Kent アメリカ	カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授	The 1988 U. S. Presidential Election	東大教養学部 1987.12.9	教養学科第三第13回コロキアム	
Park,Heung-Soo 韓国	延世大学教授 外国人客員研究員	The Prospects of Democracy	東大教養学部 1987.12.18	教養学科第三第15回コロキアム	
Bo, Storäth スウェーデン	イヨテボリ大学助教授 外国人客員研究員	Industrial Policies in Shrinking Industries in Western Europe and Japan in Comparison: The Case of Shipbuilding	東大教養学部 1988.2.4	教養学科第三第16回コロキアム	
Leo Suryadinata シンガポール	シンガポール大学教授	中国と東南アジア	東大教養学部 1988.2.23	教養学科第三第17回コロキアム	
Randolf,David フィリピン	フィリピン大学第三世界研究所・所長	アキノ政権下におけるフィリピンの政治変動	東大教養学部 1988.3.24	教養学科第三(相関・国際)第19回コロキアム	
Eloy,Jean-Claude フランス	作曲家	東洋の声＝道(ヴォワ)	東大教養学部 1988.4.19	教養学科表象文化論、同フランス分科、フランス語教室	
Hare,R.M. イギリス	オックスフォード大学教授	The Structure of Ethics and Morals.	東大教養学部 1988.4.22	哲学教室(藤本隆志)	
Elliott,Ralph W. V. オーストラリア	Professor Emeritus, Australian National University	Runes and their Uses The Search for Sir Gawain's Green Chapel	東大国際文化会館 1988.5.3	中世イギリス研究資料センター(久保内端郎)	日本中世英語英文学会
Buhot de Launay Marc フランス	フランス国立科学研究所研究員	Traduire le style?	東大教養学部 1988.5.13	教養学科フランス分科、フランス語教室	
Marchand,A. P. アメリカ	North Texas州立大学教授	高ひずみ化合物の合成と構造	東大教養学部 1988.5.26	日本化学会(竹内敬人)	
Bianchi,G. イタリア	Pavia大学教授	植物産脂質の生合成	東大教養学部 1988.5.27	竹内敬人	

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
Roemer,Kenneth, M. アメリカ	University of Texas	America's Disney World as Utopia?	東大教養学部 1988.6.4	アメリカ研究資料センター	
呉祖光 中国	劇作家 中国戯劇家協会理事	中国の演劇をめぐる諸問題	東大教養学部 1988.6.8	教養学科アジア分科、中国語教室	
Roemer,Kenneth, M. アメリカ	University of Texas	Bellamy at One Hundred	東大教養学部 1988.6.8	アメリカ研究資料センター	
Conlin,Robert アメリカ	North Texas州立大学教授	ゲルメン、シリレン及びゲルミレンの反応とその機構	東大教養学部 1988.6.11	竹内敬人	
Hamilton,A.C. カナダ	Professor, Queen's University クィーンズ大学(カナダ)教授	Love Poetry in the English Renaissance	東大教養学部 1988.6.13	教養学部英語教室(川西　進)	日本英文学会
陳　月霞 中国	中国政府中央編訳局文献室日文翻訳 外国人客員研究員	中国共産党中央編訳局と私	東大教養学部 1988.6.16	教養学科第三第21回コロキアム	
Chee-Wah Cheah マレーシア	クィーンズ大学(カナダ)経済学部・講師 東大先端科学技術研究センター・客員助教授	Institutional Econmy of Telecommunications	東大教養学部 1988.6.17	教養学科第三第22回コロキアム	
Garraty,John A. アメリカ	Columbia University	American History and Historians in the 20th Century	東大教養学部 1988.6.18	アメリカ研究資料センター	
Ulmilla Phadnis インド	ジャワハルラル・ネルー大学	Political Dynamics of Ethnicity in South Asia	東大教養学部 1988.6.25	教養学科アジア分科国際関係論分科	
Porter, Gareth アメリカ	アメリカ大学(ワシントンD.C.) 助教授	Current Developments in the Cambodian Question	東大教養学部 1988.6.29	教養学科第三第23回コロキアム	
Lyotard Jean-François フランス	パリ第八大学教授	Sur l'éthique 倫理について ＊フランス政府文化使節	東大教養学部 1988.7.9	教養学科フランス分科、同表象文化論、フランス語教室	
Neuse,Richard アメリカ	Professor of English, University of Rhode Island	Anglo-Italian Literary Inter-relationships in the Fourteenth Century	東大教養学部 1988.7.10	英語教室(高田康成)	
Graner,G. フランス	パリ南大学教授	High resolution infrared spectroscopy and its application to molecular dynamics	東大教養学部 1988.7.15	相関理化学専攻(庄野邦彦)	
Holland,Joan イギリス	Centre for Medieval Studies,	On Editing the *Dictionary of Old English* 編纂上の問題点	学士会館本館 1988.7.21	中世イギリス研究資料センター(久保内端郎)	
Stoylov,S. ブルガリア	ブルガリア科学アカデミー物理化学研究所所長	"On the origin of permanent dipolemoment of rigid colloidal suspensions"	東大教養学部 1988.8.12	化学教室(渡邊　啓)	
Troe,H.J. ドイツ	ゲッチンゲン大学教授	レーザーによる単分光反応の研究	東大教養学部 1988.9.1	相関理化学(庄野邦彦)	
Viertler,Renate B. ブラジル	Professor,Univ.of San Paulo	Sons of the Jaguar: Elements of Bororo Cosmology and Social Organization(発表、質疑、応答は英語)	東大教育学部 1988.9.10	文化人類学研究室	

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
Wolfinger,Raymond E.	University of California	Why Do Americans Vote as They Do?	東大教養学部 1988.9.26	アメリカ研究資料センター	
Ustynyuk,I.	Moscow大学教授	有機金属化合物のNMRによる研究	東大教養学部 1988.9.29	日本化学会(竹内敬人)	
Neumann,W.P.	Dortmund工科大学教授	新しい有機ゲルマニウム化合物の構造と反応	東大教養学部 1988.10.18	日本学術振興会(竹内敬人)	
Kribben, Karl-Gert ドイツ	ハンブルク大学教授	テオドール・フォンターネのベルリン小説『イェニー・トライベル夫人』における空気の欠乏	東大教養学部 1988.11.4	ドイツ語教室	
Bednorz,J. G. スイス	IBM 主任研究員 (ノーベル物理学受賞者)	高温超伝導物質の発見	東大教養学部 1988.11.14	教養学部(鹿児島誠一)	
Reynolds, Douglas アメリカ	ジョージア州立大学(アトランタ校)歴史学部・準教授 外国人客員研究員	忘れられた黄金の10年－1898～1907	東大教養学部 1988.11.28	教養学科第三第24回コロキアム	
Echenique,P. スペイン	バスク大学教授	Dynamic Screening of Charged Particles in Solids	東大教養学部 1988.12.6	物理学教室(山崎泰規、小牧研一郎)	
朴日根 韓国	国立釜山大学社会化学大学教授 外国人客員研究員	イギリスの東アジア政策－1890年代から日清戦争まで	東大教養学部 1988.12.20	教養学科第三第25回コロキアム	
De Gaulle,Jean フランス	国民議会議員	フランスとヨーロッパの統合	東大教養学部 1989.2.14	日仏政治学会	
Burgdörfer,J. アメリカ	オークリッジ国立研究所 主任研究員	Transport Theory for Convoy Electrons and Rydberg Electrons in Solids	東大教養学部 1989.3.20	物理学教室 (山崎泰規、小牧研一郎)	
k.Kerber,Linda アメリカ	University of Iowa	Theme and Prospects of the Women's History in the United States	国立婦人教育会館 1989.3.22	アメリカ研究資料センター、国立婦人教育会館	
R.B.Mitchell イギリス	St.Edmund Hall, Oxford	Old English Syntax Revisited: A Review of the Reviews	東大教養学部 1989.4.7	中世イギリス研究資料センター (久保内端郎)	日本中世英語英文学会、教養学部英語教室
M. Inokuti 日本	アルゴンヌ国立研究所・主任研究員	Subexcitonic Electrons	東大教養学部 1989.4.8	物理学教室 (山崎泰規、小牧研一郎)	
Houston,Paul L. アメリカ	コーネル大学教授	相関光化学:ヨハン　クリスチャン　ドップラーの遺産による	東大教養学部 1989.4.14	相関理化学専攻(土屋荘次)	
Burke,Peter イギリス	Reader in Intellectual History, University of Cambridge	The Renaissance Man: Fact or Fiction?	東大教養学部 1989.4.26	教養学科イギリス分科(山内久明)、英語教室(木畑洋一)、歴史学教室	
Farchan Bulkin インドネシア	インドネシア大学講師 外国人客員研究員	State and Economy :Japan and Indnesia in Comparative Perspective	東大教養学部 1989.5.9	教養学科第三第26回コロキアム	
Stubbs,Michael イギリス	Professor,The University of London	Wordsworth Abroad: On the Nature of Standard Academic English	東大教養学部 1989.5.9	教養学科イギリス分科(山内久明)	英語教室(上島建吉)、ブリティッシュ・カウンシル招聘

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
Coustillas,Pierre フランス	Professor,University of Lille	English Studies in France	東大教養学部 1989.5.12	教養学科イギリス分科(山内久明)	英語教室
Maybury-Lewis,David アメリカ	Professor,Univ.of Harvard	Cultural Survival(発表、質疑、応答は英語)	東大教養学部 1989.5.23	文化人類学研究室	
Globokae,Vinko ユーゴスラヴィア	作曲家	音楽における意味の欲望	東大教養学部 1989.5.26	教養学科表象文化論、同フランス分科、フランス語教室	
Virasoro,M.A. イタリア	Professor,University of Rome	Spin Glass and Neural Network	東大教養学部 1989.6.	物理学教室(河原林研)	
Burton,Tom L. オーストラリア	University of Adelaide	The Boydell and Brewer Annotated Bibliographies of Old and Middle English Language and Literature: A Progress Report	東急文化会館 1989.6.8	中世イギリス研究資料センター(久保内端郎)	
Fogel,Joshua アメリカ	ハーバート大学歴史学部準教授 外国人客員研究員	シベリア、満州、ユダヤ人、日本人－戦前日本の反ユダヤ主義－	東大教養学部 1989.6.12	教養学科第三第27回コロキアム	
Kisslinger,L.S. アメリカ	カーネギー・メロン大学教授	Light cone representation for hadrons and nuclei	東大教養学部 1989.6.16	物理学教室(寺澤徳雄)	
Savitri Vishwanathan インド	デリー大学教授	アジアにおける日本のアイデンティティー	東大教養学部 1989.7.1	教養学科アジア分科	
高山 中国	北京国際関係学院教授	アジアから見た近代日本	東大教養学部 1989.7.1	教養学科アジア分科	
Matsudaire,Paul T. アメリカ	Assoc. Professor, Massachusetts Institute of Technology	Structure and function of villin from intestinal epithelial cells.	1989.10	馬淵一誠	
Hodgson,P.E. イギリス	オックスフォード大学教授	Multistep Process in Nuclear Reaction	東大教養学部 1989.10.4	物理学教室(寺澤徳雄)	
Harris,W.V. アメリカ	コロンビア大学	ローマの帝国主義	東大教養学部 1989.10.9	KODAI Journal-of Ancient History	
Gyan Pandey インド	デリー大学助教授	ナショナリズムと農民	東大教養学部 1989.10.12	教養学科アジア分科	
費孝通 中国	中央民族学院教授	経済解放政策と家族研究	学士会館 1989.10.14	漢族・少数民族研究会、文化人類学研究室(伊藤亜人)	
Karl H. Welge ドイツ	Bielfeld大学教授	強い静的外場の影響下にある高励起原子の分光:原子におけるカオス	東大教養学部 1989.10.19	相関理化学専攻・土屋荘次	
Bellemin-Noël,Jean フランス	パリ第八大学教授	Un coeur simple de *Trois Contes* de FLAUBERT ＊フランス政府文化使節	東大教養学部 1989.10.20	教養学科フランス分科、フランス語教室	
陳昌福 中国	上海師範大学副教授	今世紀中国における華僑問題に関する研究について	東大教養学部 1989.10.20	教養学科アジア分科	

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
郭豫明 中国	上海師範大学副教授	上海小刀会の反乱と外国祖界について	東大教養学部 1989.10.20	教養学科アジア分科	
Gyan Pandey インド	デリー大学助教授	コミュナル紛争	東大教養学部 1989.10.25	教養学科アジア分科	
Yavuz Ercan トルコ	アンカラ大学教授	オスマン帝国におけるアルメニア人問題	東大教養学部 1989.10.26/11.4	教養学科アジア分科	
Özer Ergenç トルコ	アンカラ大学教授	オスマン帝国の中央官僚制	東大教養学部 1989.10.26/11.4	教養学科アジア分科	
Parker,Hershel アメリカ	Delaware University	The Continuity between the Critics and the New Americanists	東大教養学部 1989.10.26	アメリカ研究資料センター	
Amalendu De インド	ジャダヴプル大学教授	インド・パキスタン分離独立前夜のムスリム	東大教養学部 1989.10.28	教養学科アジア分科	
Helflich,W. ドイツ	Freie Universität Berlin, Professor	Statistical Physics of Membrane Stability	東大教養学部 1989.10.31	物理学教室(伊豆山健夫)	
Mercer,Rosemary	ニュージーランド、ヴィクトリア大学	三浦梅園の実在論－天地から水差しまで ＊1989東大国際共同研究計画の一環として	東大教養学部 1989.11.3	小川晴久	
杜石然 中国	中国科学院自然科学史研究所	明清実学思潮と中国実学研究の現状 ＊1989年東大国際共同研究計画の一環として	東大教養学部 1989.11.3	小川晴久	
金容沃 中国	前高麗大学教授	朝鮮実学における近代的人間の追究 ＊1989年東大国際共同研究計画の一環として	東大教養学部 1989.11.3	小川晴久	
源了圓 中国	国際基督教大学	日本における実学思想の展開 ＊1989年東大国際共同研究計画の一環として	東大教養学部 1989.11.3	小川晴久	
Iftekharuzzaman バングラデシュ	バングラデシュ国際・戦略研究所 外国人客員研究員	最近の南アジアの政治情勢－インドの役割とその近隣諸国との関係－	東大教養学部 1989.11.7	教養学科第三第28回コロキアム	
Chuong Thau ベトナム	ベトナム史学院近代史部門責任者	ベトナムにおける中国と日本への関心	東大教養学部 1989.11.9	教養学科アジア分科	
Denkler,Horst ドイツ	ベルリン自由大学教授	西ドイツの小説に描かれた学生運動	東大教養学部 1989.11.13	ドイツ語教室	
Reed,Roark	Southern Methodist University	Criminal Jury Trial	東大教養学部 1989.11.18	アメリカ研究資料センター	
F.C.Robinson アメリカ	Professor,Yale University	Interpretation of *Beowulf*	東大山上会館 1989.11.23	中世イギリス研究資料センター (久保内端郎)	日本中世英語英文学会

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
F.C.Robinson アメリカ	Professor, Yale University	Ezra Pound and the Problem of Translating Old English into Modern English	東大教養学部 1989.11.25	中世イギリス研究資料センター （久保内端郎）	アメリカ資料センター 教養学科イギリス分科、英語教室
Thwaite,Anthony イギリス	Reader,André Deutsch（出版社アンドレ・ドイッチ社編集顧問）、詩人 Honorary Doctor,East Anglia Universityイースト・アングリア元東大教養学科外国人教師	The Englisshness of Philip Larkin,Poet	東大教養学部 1989.11.28	教養学科イギリス科（山内久明）、英語教室	
Schmidt,Werner F. ドイツ	ハーン・マイトナー研究所・主任研究員	誘電体媒質中の過剰電子	東大教養学部 1989.11.30	相関理化学（土屋荘次）	
Reichel-Dolmatoff,Gerardo コロンビア	Professor Emeritusr,（La Universidad de Los Andes）	Shamanism and Columbian Ethnology（発表、質疑、応答は英語及びスペイン語）	東大教養学部 1989.12.2	文化人類学研究室	
Yeats,Michael アイルランド共和国	アイルランド共和国上院議員 アイルランド・ダブリン大学トリニティ・コレッヂ名誉博士	Yeats as a Family Man Mrs.Grania Yeats（グレイニア・イェイツ夫人）のアイリッシュ・ハープ演奏	東大教養学部 1989.12.7	教養学科イギリス科（山内久明）、英語教室（出淵博）	日本英文学会
Edgerton,Reggie アメリカ	Professor,UCLA Department of Kimesiology	Physical exercise and muscle fiber type	東大教養学部 1989.12.10	保健体育科（福永哲夫）	
R. Seki アメリカ	カリフォルニア州立大学教授	Yukawa theories as effective theories of QCD for a large number of colors	東大教養学部 1989.12.15	物理学教室（市村宗武）	
蕭新煌 台湾	台湾大学法学部教授	台湾における省籍矛盾とエスニシティ	東大教養学部 1989.12.15•16	教養学科アジア分科	
Franckel Jean-Jacques フランス	フランシュ＝コンテ大学助教授	La notion d'opération en linguistique: à propos de la construction des catégories grammaticales de l'aspect et de la modalité	東大教養学部 1990.1.16	教養学科フランス分科、フランス語教室、フランス語学研究会	
Pratt,Melanie M. アメリカ	Assoc. Professor, Univ. of Miami	Possible function of cytoplasmic dynein in versicle transport.	東大教養学部 1990.2	生物学教室（馬淵一誠）	
Koopman-Boyden, Peggy ニュージーランド	カンタベリー大学社会学部教授 外国人講師	The Quiet Revolution in New Zealand-Political, Economic and Social Changes in the 1980's	東大教養学部 1990.2.5	教養学科第三第29回コロキアム	
Schütte,Hellmvt ドイツ	INSEAD（フランス　パリ） 東大先端科学技術研究センター客員教授	Europe 1992 and Eastern Europe	東大教養学部 1990.2.8	教養学科第三第30回コロキアム	
Durie,Eddie ニュージーランド	マオリ土地裁判長（ニュージーランド） ワイタンギ審判所長（ニュージーランド）	Legal Perspective on Land and Resource Ownership in New Zealand, pre-1840 to 1990	東大教養学部 1990.2.16	教養学科第三第31回コロキアム	

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
陳凱歌 中国	映画監督	私の映画創作を語る	東大教養学部 1990.4.20	中国語教室	教養学科表象文化論との共催
Hoover,W. アメリカ	Professor,University of California	Chaos and Irreversibility	東大教養学部 1990.4.20	物理学教室(金子邦彦)	
Kermode,Frank イギリス	Professor Emeritus,The University of Cambridge; Fellow,King's College, Cambridge	On Virginia Woolf,Between the Acts ＊東大教養学部英語教室の丹治愛助教授が講師の一人として参加	東大教養学部 1990.5.26	教養学科イギリス分科(山内久明)、英語教室、日本英文学会	
文玉杓 韓国	国立精神文化研究院副教授	日本における韓国人人類学者の行動	東大教養学部 1990.6.27	韓国研究フォーラム・ナグネの会(伊藤亜人)	
Vafa,C. アメリカ	Professor,Harvard University	Chiral Ring in Superconformal Field Theory	東大教養学部 1990.7.	物理学教室(風間洋一)	
Carter,William アメリカ	Professor,Fred Hutchinson Cancer Center	表皮細胞の分化における細胞接着の役割、特異的インテグリン	東大教養学部 1990.7.26	化学教室(林利彦)	
J.Crutchfield アメリカ	Professor,University of California,Berkley	Inferring Statistical Complexity	東大教養学部 1990.7.27	物理学教室(金子邦彦)	
Pahk,Dae Hyeon 韓国	延世大学教授	Solvability of convolution operators in the space K'e	東大教養学部 1990.8.2	数学教室	
Ziemian,B. ポーランド	アカデミー数学研究所助教授	Mellin distributions and asymptotic analysis	東大教養学部 1990.8.7	数学教室	
Pham Loi Vu ベトナム	国立科学研究センター教授	The determination of horizontal diffusion coefficients in the models for turbulent diffusion of contaminants from instantaneous source in the ocean ＊逆問題ミニシンポジウム	東大教養学部 1990.8.16	数学教室	
Zi Qi Sun アメリカ	ウィチタ大学助教授	Generic uniqueness for formally determined inverse problems ＊逆問題ミニシンポジウム	東大教養学部 1990.8.16	数学教室	
Hofmann,B. 東ドイツ	チタウ大学教授	On the regularization for ill posed integral equations ＊逆問題ミニシンポジウム	東大教養学部 1990.8.16	数学教室	
Solomon,R. アメリカ	オハイオ州立大学教授	The arithmetic of subgroup orders in finite Lie type groups	東大教養学部 1990.8.24	数学教室	
Banks,H.T. アメリカ	サザンカリフォルニア大学教授	Estimation of material parameters in distributed models for structures	東大教養学部 1990.8.28	数学教室	
Wells,Stanley イギリス	Professor,Director of Shakespeare Institute, University of Birmingham	Staging Shakespeare's Ghosts ＊Dr.Peter Hollandとの講演会	東大教養学部 1990.9.26	英語教室(髙田康成)	日本英文学会
Holland,Peter イギリス	Lecturer,Trinity Hall,Cambridge	Evading King Lear ＊Prof.Stanley Wellsとの講演会	東大教養学部 1990.9.26	英語教室(髙田康成)	日本英文学会

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
Wang,Yu-li	Principal Scientist, Worcester Foundation for Experimental Biology,USA	Actin dynamics in nonmuscle cells	東大教養学部 1990.10	生物学教室(馬淵一誠)	
Kerber,Linda k.	University of Iowa	Ambiguity of Woman's Citizenship in the United States	東大教養学部 1990.10.1	アメリカ研究資料センター、アメリカ学会	
Jesse Choper	University of California	Role of the Supreme Court	東大教養学部 1990.10.11	アメリカ研究資料センター	
Screech,Michael Andrew イギリス	英国学士院会員、オックスフォード大学文学部教授	三人の瞞着者(ラブレー、メルセンヌおよび『キュンバルム・ムンディ』)	東大教養学部 1990.10.16	教養学科フランス分科、フランス語教室	
Todorov,Tzvetan フランス	C.N.R.S.(国立科学研究所)主任研究員	Le langage et l'homme - l'itinéraire d'un chercheur de langage	東大教養学部 1990.10.19	教養学科フランス分科、大学院地域文化研究専攻、フランス語教室	
Assenova,Petja ブルガリア	ブルガリア科学アカデミー教授	バルカン言語圏現象について	東大教養学部 1990.10.20	ロシア語教室	
Stewart,A.T. カナダ	Professor, Queen's University.	Positrons in Simple Metals and Simple Liquids	東大教養学部 1990.10.23	物理学教室(兵頭俊夫)	
Harver,John イギリス	Fellow,Emmanuel College,Lecturer of English,The University of Cambridge	Men in Black: Mourning and Men's Wear in Nineteenth-Century Art and Literature	東大教養学部 1990.10.24	教養学科イギリス科(山内久明)	英語教室
Yang,C.N. アメリカ	SUNY(ニューヨーク州立大学), Stony Brook	Yang-Baxter Equation	東大教養学部 1990.11.	物理学教室(風間洋一)	
Baym,G. アメリカ	Professor,University of Illinois	Ultra-relativistic heavy ion collisions,searching for new form of matter at Brookheaven and CERN	東大教養学部 1990.11.5	物理学教室(伊豆山健夫)	
Orgel,Stephen アメリカ	Professor,Stanford University	Call me Ganymede: Shakespeare's Apprentices and Representation of women	東大教養学部 1990.11.7	教養学科イギリス分科(高田康成)	英語教室
Hvellplund,P. デンマーク	オーフス大学教授	Atomic Physics with Slow Antiprotons	東大教養学部 1990.11.13	物理学教室(山崎泰規、小牧研一郎)	
Pethick,C. アメリカ	Professor,Univeristy of Illinois	Screening in Quark-Gluon and Electromagnetic Plasmas	東大教養学部 1990.11.20	物理学教室(伊豆山健夫)	
Carter,Ronald イギリス	Professor,Nottingham University	Literature and Teaching of English ＊高橋和久、斎藤兆史両助教授が講師として参加。 ＊養学部外国語科(英語教室)紀要(1991)に掲載。	東大教養学部 1990.11.21	教養学科イギリス分科(山内久明)	英語教室
Winter,H. ドイツ	ミュンスター大学助教授	Effect of Image Charge and Charge Exchange on Trajectory in Surface Scattering	東大教養学部 1990.11.24	物理学教室(山崎泰規、小牧研一郎)	
渡辺武郎 日本	Associateハーバード大学	透明視の新たな展開	東大教養学部 1990.12.1	知覚懇話会、視覚研究会	
Cavanagh,Patrick アメリカ	ハーバード大学教授	Attention and motion perception.	東大教養学部 1990.12.1	知覚懇話会、視覚研究会	

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
Newberger,B.S. アメリカ	テキサス大学助教授	Application of Crystal channeling in Particle Accelerators	東大教養学部 1990.12.5	物理学教室(小牧研一郎)	
Soep,B. フランス	パリ南大学オルセ教授	Structure and dynamics of van der Waals complexes	東大教養学部 1990.12.7	相関理化学(鹿児島誠一)	
Kim Kihwan 韓国	元韓国開発研究院長 外国人客員研究員	韓国経済:80年代の構造改革と90年代の課題	東大教養学部 1990.12.13	教養学科第三第35回コロキアム	
Roe,John イギリス	Lecturer,York University 京都大学客員教授	Shakespeare's Rape of Lucrece	東大教養学部 1990.12.15	英語教室(川西進)	
Glashausser,C. アメリカ	ラトガス大学教授	Relative nuclear spin response to intermediate energy protons	東大教養学部 1991.1.8	物理学教室(市村宗武)	
張承志 中国	作家 中国作家協会理事 東洋文庫客員研究員	十年来の文学を振り返って	東大教養学部 1991.1.24	教養学科アジア分科、中国語教室	
張承志 中国	作家 中国作家協会理事 東洋文庫客員研究員	文革以降の中国文学界の動きと宗教・民族	東大教養学部 1991.1.31	教養学科アジア分科、中国語教室	
Redies,Chris ドイツ	京都大学理学部客員研究員	Visual cortical function : From neon illusion to metabolic mapping of cortical columus.	東大教養学部 1991.3.4.	BCBKセミナー	
Stockwin,J.A.A. イギリス	Director, Nissan Institute of Japan Studies オックスフォード大学	Japan and Great Britain	東大教養学部 1991.3.13	教養学科第三第36回コロキアム	
Uhlman,G. アメリカ	ワシントン大学教授	The inverse scattering problem and inverse boundary value problem,	東大教養学部 1991.4.9	数学教室、日本数学会	
Khalatnikov,I.M. ソ連	Landau Institute for Theoretical Physics,Professor	Non-linear Interactions between Superfuid He and its surface	東大教養学部 1991.4.10	物理学教室(伊豆山健夫)	
Hillers,Sigfredo スペイン	Professor,Facultad de Derecho, Universidad Compultense	Problemas en la democratización de Espara ＊参加者15名、使用言語はスペイン語	東大教養学部 1991.4.16	教養学科中南米分科(恒川恵市)	
Baier,V. ソ連	Academy of Novosivirsk, (USSR)	Radiation Yield in Single Crystal at GeV region	東大教養学部 1991.5.1	物理学教室(山崎泰規、小牧研一郎)	
Heller,E.J. アメリカ	ワシントン大学教授	Time-dependent approach to CW to femtosecond spectroscopy:New work for the old quantum theory	東大教養学部 1991.5.8•9	相関理化学(川喜田正夫)	
Lambert,J.B. アメリカ	Northwestern大学教授	有機ゲルマニウム化合物と有機ケイ素化合物の接点	東大理学部 1991.5.10	日本化学会(竹内敬人)	
Krieger,Murray アメリカ	Professor, University of California, Irvine	Two Faces of an Old Argument: New Criticism vs. Old Historicism, Deconstruction vs.New Historicism	東大教養学部 1991.5.11	日米英文学会、教養学科イギリス科(中村健二)	英語教室
Connerade,J.P. イギリス	Professor,(Imperial College) University of London	Vacuum ultraviolet laser spectroscopy of atoms	東大教養学部 1991.5.24	相関理化学(川喜田正夫)	

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
Verlinde,H. オランダ	Professor,Princeton University	2-dimensional Black Hole	東大教養学部 1991.6.	物理学教室(米谷民明)	
Nakayama,Ken アメリカ	ハーバード大学	Visual surface representation.	東大教養学部 1991.6.1	知覚懇話会、視覚研究会	
Tugendhat,Ernst 西ドイツ	ベルリン自由大学教授	Das Sein und das Nichts bei Heidegger	東大教養学部 1991.6.5	哲学教室(藤本隆志)	
Holland,Kenneth アメリカ	Professor of political Philosophy,Memphis State University	The Failure of American Universities to Respond to Allan Bloom's Critique of Higher Education in His Book *The Closing of the American Mind* (1987)	東大教養学部 1991.6.7	英語教室(高田康成)	
Brunel,Pierre フランス	パリ第四大学教授	Les Trois Morts d'Arthur Rimbaud (à l'occasion du centième anniversaire de la mort du poéte) ＊1991年度日本フランス語フランス文学会春季大会特別講演	東大教養学部 1991.6.8	フランス語教室、日本フランス語フランス文学会	
Serres,Michel フランス	アカデミー・フランセーズ会員	Le Tiers instruit ＊1991年度日本フランス語フランス文学会春季大会特別講演	東大教養学部 1991.6.8	フランス語教室、日本フランス語フランス文学会	
申熙錫 韓国	韓国外交安保研究院・教授 (研究部長) 元外国人客員研究員	日韓学生交換ゼミナール	東大教養学部 1991.6.11	教養学科第三(渡辺昭夫)	
Guest,M.A. アメリカ	ロチェスター大学教授	Loop groups and deformations of harmonic maps	東大教養学部 1991.6.13	数学教室	
Rasolt,M. アメリカ	Oak Ridge National Laboratory 主任研究員	Properties of Superconductor in Very High Magnetic Fields	東大教養学部 1991.6.28	物理学教室(吉岡大二郎)	
Li,Zhuxia 中国	中国原子能研究所教授	Quantum molecular dynamics to study from binary process to multifragmentation process	東大教養学部 1991.7.	物理学教室(市村宗武)	
Andelman,D. イスラエル	Professor,Tel-Aviv University	Bending elasticity and undulation of charged multilamellar system	東大教養学部 1991.7.1	物理学教室(伊豆山健夫)	
Duque-Ramirez,Fidel コロンビア	在日コロンビア大使	Situación contemporánea de Colombia ＊参加者20人、使用言語スペイン語	東大教養学部 1991.7.2	スペイン語教室(ジョルディ・パジェス)	
Smith,Peter アメリカ	Center for Iberian and Latin American Studies, University of California, San Diego Director 日米友好基金フェロー	Tres simarios de cambio en América Latina ＊参加者15名、使用言語スペイン語	東大教養学部 1991.7.3	教養学科中南米分科(恒川恵市)	
Onon Urugunnge モンゴル	東京外国語大学客員教授	オノン橋からケンブリッジへ	東大教養学部 1991.7.9	国際関係論教室	
Charles,David イギリス	オックスフォード大学講師	Supervenience, Composition and Physicalism	東大教養学部 1991.7.12	哲学教室(藤本隆志)	
崔吉城 韓国	啓明大学校教授	韓国におけるシャマニズム研究の現状	東大教養学部 1991.7.12	韓国研究フォーラム・ナグネの会(伊藤亜人)	

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
Kojima,H. アメリカ	Professor,Rutgers University	Broken relativistic symmetry and Helium	東大教養学部 1991.7.19	物理学教室(伊豆山健夫)	
Ramachandran,V.S. アメリカ	UCSD(カリフォルニア大学、サンディエゴ)教授	Visual perception:A biological perspective	東大教養学部 1991.7.31	BCBKセミナー、視覚研究会共催	
Brown,Richard E. カナダ	Professor, Dalhousie Univ., Canada	Communication in rodents	東大教養学部 1991.8	生物学教室(木村武二)	
Zwiebach,B. アメリカ	MIT教授	String Field Theory	東大教養学部 1991.8.	物理学教室(米谷民明)	
Vallee,Richard D. アメリカ	Principal Scientist, Worcester Foundation for Experimental Biology,USA	Structure and function of microtubule motors	東大教養学部 1991.8	生物学教室(馬淵一誠)	
Cande,W. Z. アメリカ	Professor, University of California Berkeley,USA	Mitosis in vitro: mechanism of anaphase spindle elongation	東大教養学部 1991.8	生物学教室(馬淵一誠)	
Kirillov,A.N. ソ連	レニングラード・ステクロフ研究所教授	Combinatorics of Young tableaux	東大教養学部 1991.8.27	数学教室	
Huber,J.R. スイス	チューリッヒ大学教授	Photodissociation dynamics of polyatomic molecules	東大教養学部 1991.9.27	相関理化学(川喜田正夫)	
蒋炳釧 中国	厦門大学教授	福建省におけるエスニシティ	東大教養学部 1991.10.13	漢族・少数民族研究会および文化人類学研究室(伊藤亜人)	
Pyenson,Lewis アメリカ	モントリオール大学教授	科学史の前線(科学史研究の最近の動向)	東大教養学部 1991.10.14	科学史科学哲学教室(佐々木力)	
Giai,N.V. フランス	パリ大学教授	Response functions in finite Fermi systems	東大教養学部 1991.10.25	物理学教室(市村宗武)	
McAlpine,Rachel ニュージーランド	作家	Katherine Mansfield and Patricia Grace	東大教養学部 1991.10.31	教養学科イギリス分科(成田篤彦)	英語教室、国際関係論教室
Tran Bach Dang ベトナム	ホーチミン市社会科学者協議会副会長	ベトナムから見た日本	東大教養学部 1991.10.31	日本ベトナム研究者会議	
Tran Van Giau ベトナム	ホーチミン市社会科学者協議会会長	ベトナムから見た日本	東大教養学部 1991.10.31	日本ベトナム研究者会議	
McAlpine,Rachel ニュージーランド	作家	Katherine Mansfield and Patricia Grace :Two New Zealand Short Story Writers	東大教養学部 1991.10.31	教養学科国際関係論分科、同イギリス分科、英語教室	
Halperin,B.I. アメリカ	ハーバード大学教授	Antiferromagnetic spin chains	東大教養学部 1991.11.1	相関理化学(川喜田正夫)	
Nish,Ian イギリス	Professor Emeritus,University of London	Anglo-Japanese Relations in Historical Perspective	東大教養学部 1991.11.7	英語教室(木畑洋一)	教養学科イギリス分科
Harweg, Roland ドイツ	ボーフム大学教授	翻訳者たちによって誤解されたドイツ語の一構文について－ トーマス・マンの『魔の山』を例にして	東大教養学部 1991.11.7	ドイツ語教室	

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
Wordsworth,Jonathan イギリス	Fellow,St. Catherine's College,Oxford University lecturer in romantic Studies, University of Oxford Wordsworth Trustの理事長	William Wordsworth:A Study of Meaning ＊Dr.Robert Woofとの講演会	東大教養学部 1991.11.11	英語教室(中村健二)	日本英文学会
Woof,Robert イギリス	English Literature, University of Newcastle upon Tyne Wordsworth Trustの理事	The Growth of the Prelude ＊Mr.Jonathan Wordsworthとの講演会	東大教養学部 1991.11.11	英語教室(中村健二)	日本英文学会
Knudsen,Helge デンマーク	オーフス大学教授	Interaction of Antiprotons with Matter	東大教養学部 1991.11.13	物理学教室(山崎泰規)	
Streda,P. チェコスロバキア	プラハ大学教授	横方向超格子のマグネチック・ブレークダウン現象	東大教養学部 1991.11.19	相関理化学(川喜田正夫)	
Condominas,Georges フランス	Directeur d'Etudes,Ecole des Hautes Etudes en Sccience Sociales	A Propos d'un Champ Semantique Elastique Emboite(発表、質疑、応答はフランス語)	東大教養学部 1991.11.26	文化人類学研究室	
韓承美 韓国	ハーバード大学、東京大学教養学部 国際交流基金フェロー	Producing Japanese-Lacquerware Industry in Wajima	東大教養学部 1991.11.27	韓国研究フォーラム・ナグネの会(伊藤亜人)	
Anderson,Ewan イギリス	Univ. of Durham	Strategic Nonfuel and Fuel Minerals	東大教養学部 1991.11.28	教養学科第三第42回コロキアム	
Nambu,Y. アメリカ	Professor,Chicago University	超伝導から素粒子の標準模型まで	東大教養学部 1991.12.	物理学教室(河原林研)	
Lukevics,E. ラトビア	Latviaアカデミー教授	有機ゲルマニウム化合物の薬理作用	ミタホール 1991.12.6	ゲルマニウム談話会(竹内　敬人)	
Phillips,Alfredo メキシコ	在日メキシコ大使	Cambio económico de México contemporáneo ＊参加者25名、使用言語スペイン語	東大教養学部 1991.12.10	教養学科中南米分科(恒川恵市)	
Blackmore,John アメリカ	筑波大学非常勤講師	マッハ対プランク(エルンスト・マッハの認識論)	東大教養学部 1991.12.11	科学史科学哲学教室(廣松渉)	
Jones,David カナダ	マッギル大学機械工学科 Associate	Perception of three-dimensional surface stant.	東大教養学部 1991.12.19	BCBKセミナー	
Murphy,Kathryn カナダ	マッギル大学助教授	Ocular dominance : beyond stripes.	東大教養学部 1991.12.19	BCBKセミナー	
Yagola,A.G. ソ連	モスクワ国立大学教授	Tihonov's approach for constructing regularizing algorithms	東大教養学部 1991.12.19	数学教室	
Masson,Bernard フランス	パリ第十大学教授	*L'Education sentimentale* et le mouvement immobile	東大教養学部 1991.12.20	教養学科フランス分科、同表象文化論、フランス語教室	
Villanueva,Francisco Márquez アメリカ	Professor,Department of Romance Languages, Harvard University	"La Celestina": Raíces hispanosemíticas ＊参加者15名、使用言語スペイン語	国際文化会館 1992.1.11	スペイン語教室(上田博人)	

氏名／国籍	所属研究機関／地位	テーマ　＊その他	会場／期日	主催者	共催者
Makrakis,G.N. ギリシャ	アテネ工科大学研究員	Caustics and quasi conformality, a new method for evaluating stress singularities	東大教養学部 1992.1.13	数学教室	
Katchalov,A. ロシア	ペテルブルク・ステクロフ研究所教授	Non-stationary inverse problems and computations	東大教養学部 1992.1.20	数学教室	
金容雲 韓国	漢陽大学教授	日韓文化の比較	東大教養学部 1992.1.20	韓国研究フォーラム・ナグネの会(伊藤亜人)	
Trotter,Ann ニュージーランド	オタゴ大学歴史学部教授 外国人講師	Problems of making policy in a small country :The case of New Zealand	東大教養学部 1992.2.6	教養学科第三第43回コロキアム	
厳如嫻 中国	中国社会科学院民族研究所教授	永寧納西族の母系制	東大学士会館、東洋文化研究所 1992.2.9	漢族・少数民族研究会および文化人類学研究室(伊藤亜人)	
劉耀全 中国	広東民族学院教授	広東における民族学の未研究課題	東大学士会館、東洋文化研究所 1992.2.9	漢族・少数民族研究会および文化人類学研究室(伊藤亜人)	
Lascoux,A. フランス	パリ第七大学LITP教授	Double Schubert Polynomials	東大教養学部 1992.2.12	数学教室	
Romanov,V. ロシア	ノボシビルスク・アカデミー数学研究所教授	Inverse problems for hyperbolic equations of the second order	東大教養学部 1992.2.21	数学教室	
Ono,Hiroshi アメリカ	ヨーク大学教授	Motion threshold and motion parallax threshold.	千葉大工学部 1992.2.24	視覚研究会	知覚懇話会・BCBKセミナー
Pütz, Peter ドイツ	ボン大学教授	翻訳者たちによって誤解されたドイツ語の一構文について——トーマス・マンの『魔の山』を例にして	東大教養学部 1992.3.18	ドイツ語教室	

2　学外からの評価

国外

叙勲

ヴェトナム社会主義共和国　友好徽章（'80）	古田元夫
Official de la Orden al Mérito por Servicios Distinguidos （ペルー政府特別功労勲章　オフィシアル　'83）	大貫良夫
Officiel de l'Ordre des Palmes Académiques （フランス政府教育文化功労勲章　オフィシエ　'85）	新倉俊一
Officiel de l'Ordre des Arts et des Lettres （フランス政府芸術文化勲章　オフィシエ　'85）	渡邊守章
Chevalier de l'Ordre des Arts et des Lettres （フランス政府芸術文化勲章　シュヴァリエ　'85）	阿部良雄
Chevalier de l'Ordre des Arts et des Lettres （フランス政府芸術文化勲章　シュヴァリエ　'89）	蓮實重彦

受賞リスト

中国人民共和国科学技術進歩賞	兵頭俊夫
Der Preis der Philosophischen Facultät fur die dest Dissertation （Universität Münster, ドイツ　'63）	岸谷敞子
Der Staats Preis der Victor-Adler（オーストリア　'85）	西川正雄
FIFA Referees' Special Award（国際サッカー連盟　'82）	浅見俊雄
Mary Cady Tew Prize（アメリカ合衆国　'84）	遠藤泰生
Noah Webster 2nd Prize（Yale University,アメリカ合衆国　'67）	池上嘉彦
Schleuderburg Award（Cornell University,アメリカ合衆国　'72）	友田修司
Stanislav Ulam Fellow Award（アメリカ合衆国　'88）	金子邦彦

国内

文科系

安達峰一郎記念賞（「国際機構の法的性格に関する一考察」84）	小寺　彰
市川三喜賞（《The Semological Structure of the English Verbs of Motion》70）	池上嘉彦
エコノミスト賞（『金融政策と銀行行動』81）	岩田一政

太平正芳記念賞（『ラテンアメリカ危機の構図』87）	恒川恵市
太平正芳記念賞（『中ソ関係史の研究』91）	石井　明
大仏次郎賞（『絵画の領分』84）	芳賀　徹
河出賞（ダンテ『神曲』の翻訳66）	平川祐弘
城戸賞（『現代における不幸の諸類型』64）	見田宗介
九英会賞（《Modal Verbs in Nouns Clauses after Volitinal Expressions in the Old English Orosius》79）	小川　浩
京都音楽賞（『ワーグナー・トリスタンとイゾルデ』91）	高辻知義
クローデル賞（クローデル『人質』の翻訳　73）	渡邊守章
芸術選奨文部大臣賞（『凡庸な芸術家の肖像　マクシム・デュ・カン論』89）	蓮實重彦
サンケイ児童文学出版大賞（『中国の古典文学』78）	丸山松幸
サントリー学芸賞（『平賀源内』81）	芳賀　徹
サントリー学芸賞（『日本国家思想史』83）	長尾龍一
サントリー学芸賞（『スルタンガリエフの夢』87）	山内昌之
サントリー学芸賞（『落語はいかにして形成されたか』87）	延広真治
サントリー学芸賞（『小泉八雲－西洋脱出の夢』ほか81）	平川祐弘
渋沢クローデル賞（『アレクサンドル一世』『イヴァン雷帝』の翻訳84）	工藤庸子
渋沢クローデル賞（M・パンゲ『自死の日本史』の翻訳87）	竹内信夫
渋沢クローデル賞特別賞（Combat spirituel ou immense dérision89）	中地義和
渋沢クローデル賞（P・ブルデュー『ディスタンクシオン』の翻訳91）	石井洋二郎
JACET賞（『英語教育学研究ハンドブック』80）	岡　秀夫
上代文学賞（『古事記の達成』84）	神野志隆光
組織学会賞高宮賞（89）	高橋伸夫
大学英語教育学会賞（標準テスト問題の作成に対して80）	鈴木　博
高見順賞（『冬の本』88）	松浦寿輝
日経品質管理文献賞（79）	藤野和建
日米友好基金賞（『ラバーソウルの弾みかた』90）	佐藤良明
日米友好基金賞（『サーカスが来た！』70）	亀井俊介
日本英文学会新人賞（《The Sirens Episode in Ulysses : Words Enchanted by Music》85）	丹治　愛
日本エッセイスト・クラブ賞（『サーカスが来た！』70）	亀井俊介
日本学士院賞（『近代日本におけるホイットマンの運命』71）	亀井俊介
日本ゲーテ賞（『ゲーテの「ファウスト」に於ける賭物の問題』61）	小堀桂一郎
日本古典文学賞（「古代時間表現の一問題」77）	神野志隆光
日本古典文学賞（「烏亭焉馬年譜」69-74）	延広真治
日本古典文学賞（「平安後期の『住吉物語』」ほか83）	三角洋一
日本宗教学会賞（Gemeinde und Welt im Johannesevalium 85）	大貫　隆
日本ドイツ語学文学振興会賞（「『愛の洞窟』と『宮廷の喜び』」90）	岡本麻美子
日本ドイツ語学文学振興会奨励賞（78）	鍛治哲郎
日本ドイツ語学文学振興会奨励賞（『認識と表現－ハイムの表現主義』75）	平子義雄
日本品質管理学会論文奨励賞（85）	藤野和建
日本認知科学会研究分科会発表賞（91）	下條信輔
日本翻訳出版文化賞（ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』70）	藤本隆志
日本翻訳出版文化賞（『ヴィトゲンシュタイン全集』77）	藤本隆志
日本翻訳出版文化賞（N・フライ『批評の解剖』80）	中村健二
日本翻訳出版文化賞（N・フライ『批評の解剖』80）	出淵　博
日本翻訳出版文化賞（マンゾーニ『いいなずけ』89）	平川祐弘
日本翻訳出版文化賞（E・ブロッホ『希望の原理』82）	保坂一夫

日本翻訳出版文化特別賞（『小学館独和大辞典』85）	三城満禧
日本翻訳出版文化特別賞（『小学館独和大辞典』85）	新田春夫
日本民族学振興会渋沢賞（「契システムにみられるch'inhan-saiの研究」など78）	伊藤亜人
日本民族学振興会渋沢賞（『儀礼の政治学:インドネシア・トラジャの動態的民族誌』89）	山下普司
俳人協会評論賞（『剝落する青空－細見綾子論』92）	杉橋陽一
発展途上国研究奨励賞（『現代のイスラム』84）	山内昌之
ピーコ・デッラ・ミランドラ賞（マンゾーニ『いいなずけ』の翻訳89）	平川祐弘
毎日出版文化賞（『スタンダード和仏辞典』71）	井村順一
毎日出版文化賞（『スタンダード和仏辞典』71）	冨永明夫
毎日出版文化賞（『スタンダード和仏辞典』71）	新倉俊一
毎日出版文化賞（『スタンダード和仏辞典』71）	保苅瑞穂
毎日出版文化賞（『スタンダード和仏辞典』71）	宮原　信
毎日出版文化賞（『スタンダード和仏辞典』71）	渡邊守章
毎日出版文化賞（『西欧精神の探求』76）	新倉俊一
毎日出版文化賞（『瀕死のリヴァイアサン』90）	山内昌之
吉野作造賞（『ラディカル・ヒストリー』91）	山内昌之
読売文学賞（『反日本語論』76）	蓮實重彦
読売文学賞（マンゾーニ『いいなずけ』の翻訳90）	平川祐弘

理科系

AVA博物館展示部門特別賞（89）	浜田隆士
石川賞（90）	菊地文雄
井上研究奨励賞（85）	野海正俊
井上学術賞（92）	馬渕一誠
精密工学会論文賞（82、87）	鈴木宏正
精密測定技術振興財団高城賞（90）	鈴木宏正
仁科仁科記念賞	杉本大一郎
西宮湯川記念賞（86）	米谷民明
西宮湯川記念賞（88）	氷上　忍
西宮湯川記念賞（90）	加藤光裕
日本化学会学術賞（84）	原田義也
日本化学会進歩賞（90）	山内　薫
日本化学会進歩賞（69）	岩本振武
日本化学会進歩賞（84）	遠藤泰樹
日本化学会進歩賞（85）	佐藤直樹
日本機械学会賞（70）	菊地文雄
日本機械学会論文賞（71）	永野三郎
日本原子力学会賞（69）	小牧研一郎
日本鉱物学会奨励賞（84）	宮本正道
日本古生物学会学術賞（71）	濱田隆士
日本脂質生化学研究会千田賞（79）	川口昭彦
日本生化学会奨励賞（79）	川口昭彦

日本地質学会研究奨励賞（60）	濱田隆士
日本図学会賞（88）	鈴木賢次郎
日本電子顕微鏡学会学術（寺田）賞(69)	村上 悟
日本電子顕微鏡学会瀬藤賞（91）	村上 悟
日本動物学会賞（91）	馬渕一誠
日本分光学会論文賞（88）	山内 薫

3　研究活動の公表

研究者としての教養学部の教官が、その研究成果を発表する内外の学会誌や学術研究誌がどんなものであるかは、II「教養学部では、誰がどのように教育研究を行なっているのか」の「研究業績」の欄に詳しく触れられているので、個々のケースを参照にされたい。ここでは、その欄にもしばしば姿を見せている教養学部の紀要や定期刊行物のリストを挙げておく。

紀要は教養学部の予算によって刊行される研究発表誌で、外国語による論文も多く、海外の研究者たちによる引用率も高い。予算の配分額は紀要委員会によって決められているが、内容の豊富さに見合ったページ数を確保しようとすれば赤字になりがちで、研究費による補填もいまや限度に達し、予算総額の見直しが検討されねばなるまい。

刊行は原則として年一回、発行部数は500が標準的な数字だが、非売品で市販されておらず、各大学、各研究機関などに無料で送付される。前期課程の5科の各教室が選出する委員と、付属施設、教養学科が選出する委員会（比較文化研究については全学部的に組織される委員会）がそれぞれの編集の責任を持つ。教授、助教授、講師以外に助手も執筆の資格を持つことはいうまでもない。それぞれの編集方針に従って内容はさまざまだが、論文のほかに、教官の年度ごとの研究業績を掲載しているものもある。

その他の定期刊行物のほとんどは、後期課程の分科や大学院の専攻などのメンバーを中心としているので、大学外の読者に向かっても開かれている。

以上の各刊行物について、その題名と最新号の発刊月日ならびに号数を示したものが以下のリストである。

人文科学科紀要

人文科学科紀要　哲学　XXV 1989(1990.3.31)
The Proceedings of the Department of Humanities.
College of Arts and Sciences, University of Tokyo.
Series of Philosophy.

人文科学科紀要　心理学VIII 1986 (1987.3.31)
The Proceedings of the Department of Humanities.
College of Arts and Sciences, University of Tokyo.
Series of Psychology.

人文科学科紀要　歴史学研究報告　第二十一集　(1987.3.31)
The Proceedings of the Department of Humanities.
College of Arts and Sciences, University of Tokyo.
Series of History.

人文科学科紀要　人文地理学X1988(1988.3.25)
The Proceedings of the Department of Humanities.
College of Arts and Sciences,University of Tokyo.
Series of Human Geography.

人文科学科紀要　文化人類学研究報告5 1989(1989.3.31)
The Proceedings of the Department of Humanities.
College of Arts and Sciences, University of Tokyo.
Series of Cultural Anthropology.

人文科学科紀要　国文学・漢文学 XXV 1991 (1991.3.31)
The Proceedings of the Department of Humanities.
College of Arts and Sciences, University of Tokyo.
Series of Japanese Classics-Chinese Classics.

外国語科紀要

外国語科研究紀要　英語教室論文集　第38巻第3号 1990 (1991.3.31)
The Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literature.
College of Arts and Sciences, University of Tokyo.
(English Section)

外国語科研究紀要　ドイツ語学文学論文集　第38巻第1号 1990 (1991.3.30)
The Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literature.
College of Arts and Sciences, University of Tokyo.
Beiträge zur Germanistik.

外国語科研究紀要　フランス語教室論文集　第38巻第2号 1990 (1991.3.20)
The Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literature.
College of Arts and Sciences, University of Tokyo.
Etudes de langue et littérature françaises.

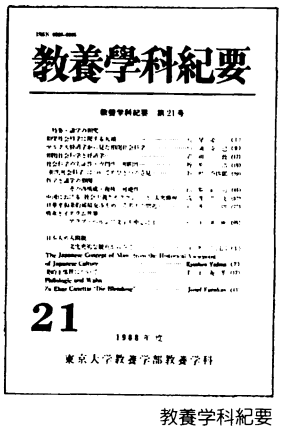
外国語科研究紀要　中国語教室論文集　第34巻第5号 1986 (1987.3.23)
The Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literature.
College of Arts and Sciences, University of Tokyo.
(Chinese Section)

外国語科研究紀要　ロシア語学文学論文集　第34巻第4号 1986 (1987.3.31)
The Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literature.
College of Arts and Sciences, University of Tokyo.

外国語科研究紀要　スペイン語教室論文集　第38巻第4号 1991 (1991.3.30)
Publicaciones del Departamento de Idiomas Extranjeros,
Facultad de Artes y Ciencias,
Universidad de Tokio.

言語文化センター紀要　第11号 1990 (1991.3.20)

教養学科紀要　第23号 1990 (1991.3.31)
The Journal of the Department of Liberal Arts.



教養学科紀要

紀要　比較文化研究　第29輯 1990 (1991.3.15)
Comparative studies of culture.

東京大学アメリカ研究資料センター年報 13 1990 (1991.3.20)
The Bulletin of the Center for American studies of the University of Tokyo.

東京大学アメリカ研究資料センター　vol.26 1990 (1991.3.30)
American studies in Japan oral history series.

外国語科定期刊行物

比較文学研究　第60号 (1991.11.30)
Studies of Comparative Literature.

表象　ルプレザンタシオン　002 1991秋 (1991.10.25)
Représentation.

地域文化研究　第3号 (1991.7)

社会科学科紀要

社会科学紀要　第40輯 1990 (1991.3.30)
The Proceedings of the Department of Social Sciences.

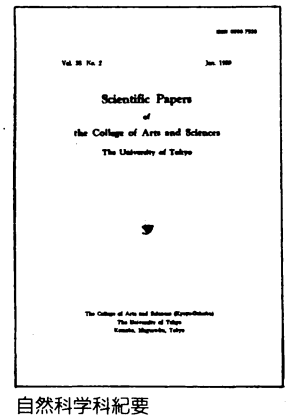
Working Papers (Department of Social and International Relations) n° 23 (1991.8)

国際関係論研究　8号 (1990.3.10)
Studies on International Relations.

相関社会科学　1号 (1990.3.10)
Komaba studies in Societies

自然科学科紀要

東京大学教養学部　自然科学紀要 Vol.41 No.2 (1991.12.15)
Scientific Papers of the College of Arts and Sciences.
The University of Tokyo.



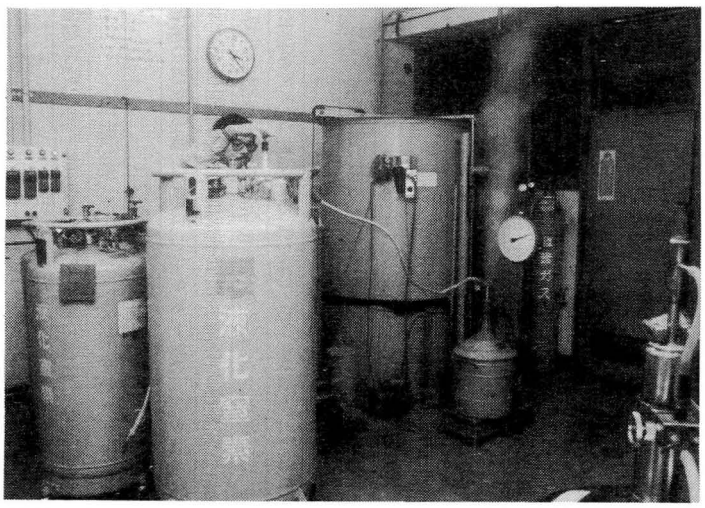
自然科学科紀要

自然科学科定期刊行物

科学史・科学哲学 No.10 1991 (1991.5.31)

体育科紀要

体育学紀要　第25号（1991.3.15）
The Proceedings of the Department of Sports Sciences.
College of Arts and Sciences, The University of Tokyo.



低温センター

平成元年度 科学研究費配分一覧

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
1	特別推進	真隅　泰三	教授	ポーラロンなどの素励起の新しい凝縮状態と超伝導性光応答発現機構の研究	68,000
2	特別推進	原田　義也	教授	メタステーブル原子をプローブとする電子放射顕微鏡の開発とその固体表面への適用	31,000
3	重点領域1	友田　修司	助教授	ゲルマニウムを含む有機超伝導体ドナーの合成とその物性研究	2,000
4	重点領域1	鹿児島誠一	教授	有機超伝導現象の解明	45,000
5	重点領域1	毛利　秀雄	教授	配偶子分化の分子機構	30,400
6	重点領域1	毛利　秀雄	教授	生殖系列の分子機構に関する基礎研究	14,800
7	重点領域1	戎崎　俊一	助手	超新星爆発におけるレーリー・テーラー型不安定の研究	1,100
8	重点領域2	小林　啓二	教授	スイッチング機能をもつ電荷移動錯体の問題	2,000
9	重点領域2	増田　茂	助手	固相反応の動的過程：ペニングイオン化電子分光による解折	1,800
10	重点領域2	菅原　正	助教授	液晶性柔構造の導入による固相重合反応の一般化	2,100
11	重点領域2	小林　啓二	教授	分子性錯体における固相光化学反応の増感効果	1,500
12	重点領域2	桜井　捷海	教授	オプトガルバニックレーザーCTによる反応性プラズマ診断の基礎研究	1,900
13	重点領域2	浅野　摂郎	教授	ウランおよび超ウラン元素を含む化合物の電子状態の計算	500
14	重点領域2	桂　　勲	助教授	*C. elegans*耐性変異株の分離、遺伝子機能の検索と遺伝子クローニング	1,900
15	重点領域2	大隅　良典	助教授	酵母性フェロモン、αファクターによるCa^{2+}動員機構の解折	1,700
16	重点領域2	友田　修司	助教授	セレンの特徴を生かした機能性分子の設計	2,300
17	重点領域2	浅野　摂郎	教授	金属シリサイド・シリコン界面の電子状態の計算	1,400
18	重点領域2	桂　　勲	助教授	*C. elegans*後期発生における組織・器官の形成・再配列の遺伝子制御	1,900
19	重点領域2	徳永万喜洋	助手	ミオシン頭部の立体構造変化の研究	1,700
20	総合A	平川　祐弘	教授	文字にあらわれた人種間摩擦の研究	2,000
21	総合A	和達　三樹	助教授	プラズマ波動系のダイナミックスと乱れ	3,500
22	総合A	梶本　興亜	助教授	液相化学反応への分子レベルからの新しいアプローチ——気相と液相とをつなぐ研究——	3,900
23	総合A	川口　昭彦	教授	生体膜構築機構におけるリピドソーティングの生物学的役割	5,900
24	総合A	鳥居　修晃	教授	信号系活動の成立・崩壊過程に関する実験的研究	9,000
25	総合A	大林　太良	教授	日本人とその文化の地域性	4,900
26	総合A	久保内端郎	教授	中世イギリスの言語と文学に関する綜合的研究——第7期——	10,500
27	総合A	加藤　重樹	助教授	化学反応の動力学理論の総合化とその応用に向けての学際的研究	5,900
28	一般A	毛利　秀雄	教授	X精子とY精子に関する基礎研究	500
29	一般A	麻生　建	教授	人文科学研究におけるテキスト・データベースの有効性と応用に関する基礎研究	6,500
30	一般A	鈴木　博	教授	コンピューターとビデオの利用による外国語教育再編成の可能性	18,200

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
31	一般A	宮本　正道	講師	ラマンスペクトルによる隕石中ダイヤモンドの成因解明	23,200
32	一般B	神品　芳夫	教授	日本におけるドイツの言語文化の役割とその変遷	500
33	一般B	鹿児島誠一	教授	有機超伝導体の高圧下の構造変態と超伝導	800
34	一般B	川喜田正夫	教授	イオン輸送系の構造と機能	1,000
35	一般B	鳥居　修晃	教授	先天盲開眼者・脳損傷事例の視覚による空間認知機能の形成過程	1,200
36	一般B	千石　喬	教授	データベース・コーパスの電算機処理による基礎語彙の二言語対照記述――	900
37	一般B	藤崎源二郎	教授	数論とその応用の綜合的研究	2,200
38	一般B	江尻　有郷	助手	絶縁体イオン結晶および金属の量子井戸効果	2,100
39	一般B	鈴木賢次郎	助教授	超音波法による金属の凝固界面の研究	600
40	一般B	藤原　邦男	教授	シリカ・エアロジェルを利用したポジトロニウム・気体分子相互作用の研究	700
41	一般B	遠藤　泰樹	助教授	フーリエ変換マイクロ波分光法による有機金属分子の高分解能分光	1,000
42	一般B	庄野　邦彦	教授	根粒形成における2種のオーキシン生合成系の果す役割の解析	1,300
43	一般B	小林　寛道	助教授	幼児、小・中学生の有酸素的作業能および運動能力の発達に関する追跡的研究	1,200
44	一般B	川口　昭彦	教授	ユーグレナにおける脂肪酸合成酵素遺伝子発現の調節機構	600
45	一般B	岩村　行雄	教授	戦後ドイツの社会的・文化的状況の総合的分析――社会批判意識を中心として――	1,000
46	一般B	渡邊　守章	教授	20世紀の芸術表象における〈演劇性〉についての総合的研究	2,800
47	一般B	長崎　暢子	教授	アジアの宗教・文化圏における国民統合の比較史的研究	2,800
48	一般B	高田　康成	助教授	英文学における政体概念の効果に関する史的考察	3,200
49	一般B	冨永　明夫	教授	十九世紀フランス言論界に於ける政治、文学の相関とその史的展開に関する総合的研究	3,900
50	一般B	杉浦　博	教授	1970年以降のドイツの思想と芸術における歴史・神話の概念の変化に関する総合的研究	3,500
51	一般B	小宮山　進	助教授	バリスティックな後方電子散乱存在下における整数量子ホール効果の研究	2,300
52	一般B	兵頭　俊夫	助教授	高分解能運動量・時間相関測定によるポジトロニウムの研究	6,500
53	一般B	川戸　佳	助教授	蛋白質・情報伝達物質の高感度運動測定による細胞内情報伝達処理機構の研究	6,200
54	一般B	梶本　興亜	助教授	超臨界流体中に生成する電荷移動状態の性質――共鳴ラマン散乱による研究――	4,800
55	一般B	山岸　晧彦	助教授	走査トンネル顕微鏡による粘土表面における不斉識別機構の研究	4,400
56	一般B	黒田　玲子	助教授	DNAと塩基配列特異的に相互作用する多機能金属錯体	4,500
57	一般B	桂　勲	助教授	*C. elegans*後期発生における遺伝子機能ネットワークの解明	4,200
58	一般C	河内　十郎	教授	MRIによる脳損傷部位と高次機能障害との対応に関する神経心理学的研究	400
59	一般C	高橋　輝暁	助教授	十八世紀ドイツの市民劇史にみる市民意識の形成と問題性	300
60	一般C	重藤　実	助教授	13世紀のドイツ語格言詩〝Bescheidenheit〟の動詞体系の分析	600
61	一般C	山崎　篤磨	助手	惑星状星雲中心星の観測的研究	400
62	一般C	江里口良治	助手	軸対称回転星の構造と熱的流れの数値計算法の開発	400
63	一般C	米谷　民明	助教授	量子重力と超弦理論への幾何学的アプローチ	600
64	一般C	増田　茂	助手	メタステーブル原子と固体表面の相互作用	400
65	一般C	宝月　岱造	助手	植物の成長分化における細胞壁微小管と細胞壁ミクロフィブリルの役割に関する研究	500
66	一般C	奥野　誠	助教授	哺乳動物漿中の鞭毛運動阻害蛋白を用いた鞭毛運動機構の研究	400

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
67	一般C	木村　武二	教授	齧歯類の生殖を制御する嗅覚情報物質の行動内分泌学的研究	900
68	一般C	木畑　洋一	助教授	第二次世界大戦後（1940年代～50年代）におけるイギリスのアジア政策	800
69	一般C	上田　博人	助教授	機械処理システムによる口語スペイン語の研究	2,000
70	一般C	田坂　隆士	助教授	代数群のガロア・コホモロジー理論	2,000
71	一般C	岡本　和夫	助教授	微分方程式の変換群の研究	2,200
72	一般C	難破　完爾	教授	数学基礎論とブール代数値解析学	2,100
73	一般C	風間　洋一	助教授	弦理論と統計多体系	1,300
74	一般C	伊豆山健夫	教授	磁束ストリングのトポロジーによる酸化物超伝導の諸相	900
75	一般C	和達　三樹	助教授	厳密に解ける模型とその応用	700
76	一般C	加藤　重樹	助教授	溶液内における光化学過程についての理論的研究	1,700
77	一般C	見附孝一郎	助手	溶媒和された励起状態イオンの化学反応素過程	1,900
78	一般C	本間　健二	助手	付着溶媒分子数を規定した二分子反応——求核置換反応における溶媒効果——	1,600
79	一般C	土屋　荘次	教授	周波数領域スペクトルのフーリェ変換による励起分子の動的分光法の開発	1,700
80	一般C	友田　修司	助教授	ヘテロ元素を含む不安定化学種の合成と構造研究	1,600
81	一般C	小林　啓二	教授	push-pull交差共役型ポリエンの合成と電子物性	1,600
82	一般C	松本　忠夫	教授	家族性クチキゴキブリ類の摂餌生態及び共生微生物との関係に関する研究	1,500
83	一般C	箸本　春樹	助手	高等植物の有性生殖過程における色素体の動態	1,300
84	一般C	川合　慧	教授	抽象データ構造に基づくグラフィック・インタフェースの研究	1,300
85	一般C	渡辺　融	教授	蹴鞠道家および蹴鞠故実の成立過程に関する研究	1,500
86	一般C	青山　昌二	教授	多変量統計解折による体力評価研究	700
87	一般C	務台　潔	教授	精製法と純度に重点をおいた大学一般教育化学実験種目の開発	1,800
88	奨励A	渡邊　武郎	助手	主観的輪郭生成のメカニズムについて	1,000
89	奨励A	丹治　愛	助教授	Virginia Woolfの交体論的研究	900
90	奨励A	小林　亮一	助教授	ケーラー・アインシュタイン計量の特異摂動の研究、および代数幾何学の諸問題への応用	1,000
91	奨励A	片岡　俊孝	助手	類数の拡大次数を割る成分	900
92	奨励A	木村　弘信	助教授	複素領域における微分方程式の研究	1,000
93	奨励A	戎崎　俊一	助手	中性子星表面における吸収線形成の研究	900
94	奨励A	一瀬　郁夫	助手	共形不変な場の理論と統計モデルの相転移	700
95	奨励A	松田　祐司	助手	トンネル効果による低次元伝導酸化物の研究	900
96	奨励A	長嶋　泰之	助手	磁場中におけるおけるオルソ・パラポジトロニウムのスピン偏極効果の分離測定	800
97	奨励A	金森　英人	助手	準安定電子状態アセチレン分子の近赤外レーザー分光	900
98	奨励A	山内　薫	助手	選択光励起によるクラスター内ペニングイオン化過程の機構	900
99	奨励A	吉村　伸	助手	芳香環プロトンのNMR完全解析による芳香環分子軌道の実測の研究	900
100	奨励A	嶋田　正和	助手	不均質な環境を移動分散する昆虫個体群の最適な産卵分布戦略の実験・モデル解析	900
101	奨励A	上村　慎治	助手	Å精度の微小変位計測装置を用いたキネシンのメカノケミストリーの研究	900
102	奨励A	堂前　雅史	助手	マウスおよび森林性齧歯類における尿を用いた社会行動の研究	900

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
103	奨励A	鈴木　宏正	助手	マルチメディアインタフェースによる設計計算の支援	800
104	奨励A	中村　政隆	助手	グラフ、ネットワーク、マトロイド等に付随する組合せ最適化問題の解析と解法の研究	800
105	奨励A	安部　孝	助手	低コレステロール血症に運動は効果的か——高脂食との関係——	1,000
106	奨励A	船渡　和男	助手	思春期前・中・後期学童の横断的発育・発達に関する研究——骨年齢基準による筋力および体肢組成の評価——	1,000
107	奨励A	服部　成介	助手	ras遺伝子産物p21のGTP加水分解活性促進因子の機能	900
108	奨励A	徳永万喜祥	助手	生物物理的測定による副腎皮質刺激ホルモンの作用機構の解明	1,200
109	奨励A特	櫛島　次郎	特別研究員PD	脳死と臓器移植をめぐる医療と文化の比較社会学的研究	800
110	奨励A特	仙田　郁夫	特別研究員PD	超弦理論に依る重力を含む統一理論の構成及びその現象論への応用	800
111	奨励A特	下田　昌克	特別研究員PD	ゲルマニウムとセレンの多重結合を含む化合物の合成と性質の研究	850
112	奨励A特	増子　恵一	特別研究員PD	キバハリアリを用いたアリ類の系統進化に関する社会行動学的および遺伝学的研究	1,100
113	奨励A特	伊藤　和行	特別研究員PD	17世紀イタリアにおける運動論および科学的方法の発展	600
114	奨励A特	奥村　隆	特別研究員DC	階級的社会構造における労働者の文化・ネットワークと生活世界の再生産——江戸川区地域ユニオンの事例研究を中心に——	1,000
115	奨励A特	多湖　敬彦	特別研究員DC	非正統医療技術の理論的根拠	900
116	奨励A特	宇田川妙子	特別研究員DC	イタリアの地域社会における人間関係の民族誌的・社会人類学的記述と分析	1,000
117	奨励A特	村田　嘉弘	特別研究員PD	解析的微分方程式の特異点について（n連立有理的方程式の動く特異点・動かない特異点）	1,000
118	奨励A特	高増　正	特別研究員PD	量子ホール効果状態下の光電気伝導度測定	1,000
119	奨励A特	中谷　正吾	特別研究員PD	可積分系理論の物性への応用	1,000
120	奨励A特	竹重　一彦	特別研究員PD	植物細胞の老化における液胞内タンパク分解の機構とその制御	1,000
121	奨励A特	細谷　夏実	特別研究員PD	棘皮動物卵細胞の細胞骨格蛋白質の機能解析	1,000
122	奨励A特	横田　悦雄	特別研究員PD	ウニ精子鞭毛の運動機構の研究	1,000
123	奨励A特	星野　真人	特別研究員PD	ras遺伝子産物p21を介する情報伝達系の研究	1,000
124	奨励A特	近藤　和典	特別研究員PD	線虫C.elegansの行動と形態の分子遺伝学的解析	1,000
125	試験1	土屋　荘次	教授	周波数可変真空紫外および極端紫外レーザーの開発	5,400
126	試験1	楠見　明弘	助教授	時間分解法と新しい蛍光試薬に基づく超高感度蛍光顕微鏡の開発と応用	10,500
127	試験2	小宮山　進	助教授	70～300μm帯連続波長可変、ゲルマニウム遠赤外レーザーの試作	1,700

平成2年度科学研究費配分一覧

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
1	特別推進	原田　義也	教授	メタステーブル原子をプローブとする電子放射顕微鏡の開発とその固体表面への適用	21,000
2	特別推進	眞隅　泰三	教授	ポーラロンなどの素励起の新しい凝縮状態と超伝導性光応答発現機構の研究	67,000
3	重点領域1	松原　望	教授	人為起源物質の制御にはたす動的リスク管理手法の開発	8,500
4	重点領域1	鹿児島誠一	教授	有機超伝導現象の解明	27,000
5	重点領域1	毛利　秀雄	教授	配偶子分化の分子機構	41,400
6	重点領域1	毛利　秀雄	教授	生殖系列の分子機構に関する基礎研究	24,000
7	重点領域1	阿部　寛治	教授	省資源・省エネルギー型高度技術社会の形態	6,000
8	重点領域1	馬場　修一	助教授	高度技術社会における若者の対人関係の変容	3,600
9	重点領域1	土屋　荘次	教授	波長可変真空紫外レーザーによる半導体光励起プロセスの基礎反応過程の研究	2,100
10	重点領域2	高野穆一郎	助教授	特殊イオンセンサーによる火口湖底噴火予知システムの構築	1,500
11	重点領域2	菅原　正	助教授	磁性・導電性機能分離型ツインドナーを利用した分子性有機強磁性体へのアプローチ	2,400
12	重点領域2	友田　修司	助教授	セレンの特徴を生かした機能性分子の設計	2,500
13	重点領域2	浅野　攝郎	教授	遷移金属を含む金属人工格子の電子状態の計算	1,300
14	重点領域2	江里口良治	助教授	パルサーの構造と安定性の研究	1,000
15	重点領域2	桂　勲	助教授	*C. elegans*後期発生における組織・器官の形成・再配列の遺伝子制御	2,000
16	重点領域2	綿秋　邦彦	教授	地球環境のゆらぎとサイクル	6,000
17	重点領域2	見附孝一郎	助手	溶液化学反応素過程の遷移状態	1,700
18	重点領域2	友田　修司	助教授	有機セレン化学種の異常原子価	1,800
19	重点領域2	小宮山　進	助教授	強磁場下二次元電子系における非局所性伝導：メソスコピック系における一次元伝導チャネルと電極の役割についての研究	2,000
20	重点領域2	浅野　攝郎	教授	金属シリサイド・シリコン界面の電子状態の計算	1,100
21	重点領域2	山田　晃弘	教授	種子登熟期における脂肪の蓄積機構	2,100
22	総合A	鳥居　修晃	教授	信号系活動の成立・崩壊過程に関する実験的研究	4,000
23	総合A	久保内端郎	教授	中世イギリスの言語と文学に関する総合的研究——第7期——	3,000
24	総合A	小川　晴久	教授	東アジアの学問世界『贅語』の総合的研究	2,000
25	総合A	池上　嘉彦	教授	認知意味論の立場からの英語基礎語彙の意味分析（日本語・及び独・仏語との比較対照を含めて）	1,600
26	総合B	土屋　荘次	教授	分子集団の構造と反応における多体効果	1,900
27	一般A	北川　東子	助教授	人文科学研究におけるテキスト・データベースの有効性と応用に関する基礎研究	2,500
28	一般A	鈴木　博	教授	コンピューターとビデオの利用による外国語教育再編成の可能性	2,800

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
29	一般A	宮本　正道	講師	ラマンスペクトルによる隕石中ダイヤモンドの成因解明	400
30	一般A	土屋　荘次	教授	分子および分子錯体の振動高励起状態における量子カオス準位構造の統計分光学	1,500
31	一般B	鳥居　修晃	教授	先天盲開眼者・脳損傷事例の視覚による空間認知機能の形成過程	800
32	一般B	小林　寛道	助教授	幼児、小・中学生の有酸素的作業能および運動能力の発達に関する追跡的研究	1,300
33	一般B	川口　昭彦	教授	ユーグレナにおける脂肪酸合成酵素遺伝子発現の調節機構	400
34	一般B	岩村　行雄	教授	戦後ドイツの社会的・文化的状況の総合的分析－社会批判意識を中心として－	500
35	一般B	渡邊　守章	教授	20世紀の芸術表象における〈演劇性〉についての総合的研究	900
36	一般B	長崎　暢子	教授	アジアの宗教・文化圏における国民統合の比較史的研究	900
37	一般B	高田　康成	助教授	英文学における政体概念の効果に関する史的考察	1,000
38	一般B	冨永　明夫	教授	十九世紀フランス言論界に於ける政治、文学の相関とその史的展開に関する総合的研究	700
39	一般B	杉浦　博	教授	1970年以降のドイツの思想と芸術における歴史・神話概念の変化に関する総合的研究	800
40	一般B	小宮山　進	助教授	バリスティックな後方電子散乱存在下における整数量子ホール効果の研究	1,300
41	一般B	兵頭　俊夫	助教授	高分解能運動量・時間相関測定によるポジトロニウムの研究	900
42	一般B	川戸　佳	助教授	蛋白質・情報伝達物質の高感度運動測定による細胞内情報伝達処理機構の研究	1,200
43	一般B	山岸　晧彦	助教授	走査トンネル顕微鏡による粘土表面における不斉識別機構の研究	2,100
44	一般B	黒田　玲子	助教授	DNAと塩基配列特異的に相互作用する多機能金属錯体	1,200
45	一般B	跡見　順子	助教授	抗重力筋萎縮のメカニズム-Tail Suspensionモデルによるヒラメ筋の萎縮で特異的に減少するタンパク質による解析－	1,500
46	一般B	桂　　勲	助教授	*C. elegans*後期発生における遺伝子機能ネットワークの解明	1,200
47	一般B	河内　十郎	教授	純粋型症例を対象とした高次脳機能のメカニズムの神経心理学的研究	2,900
48	一般B	高橋　康也	教授	シェイクスピアの作品の解釈と受容における文化的表象の機能に関する考察	3,600
49	一般B	岸谷　敞子	教授	ドイツ語史に関する言語類型論的考察	5,500
50	一般B	横山　正	教授	家相書及び庭園書における方位の意味づけの展開過程の研究	2,200
51	一般B	金子　晃	教授	偏微分方程式の代数解析的研究	3,200
52	一般B	杉本大一郎	教授	重力多体専用計算機の並列化による恒星系進化の研究	7,500
53	一般B	山崎　泰規	教授	H^+による2電子捕獲過程を用いた磁性体表面電子の研究	4,800
54	一般B	鹿児島誠一	教授	有機低次元導体における遷移金属d電子の役割	2,500
55	一般B	菅原　正	助教授	プロトンダイナミックスを利用した有機結晶における新規物性の開発	4,300
56	一般B	高野穆一郎	助教授	中間酸化状態の硫黄の地球化学――紫外レーザーラマン分光法による研究――	4,900
57	一般B	松本　忠夫	教授	亜社会性食材昆虫の家族および集団における血縁構造	3,400
58	一般B	堀　　準一	助教授	若年者の顎関節症に関する疫学的研究	2,500
59	一般B	楠見　明広	助教授	ナノメートル技術による細胞接着膜蛋白質の運動の直接観察：膜蛋白質の集合機構の解析	4,800
60	一般B	坂井榮八郎	教授	東西ドイツ関係の総合的研究－変わりつつあるヨーロッパの中で－	3,100
61	一般B	馬渕　一誠	助教授	細胞質分裂の分子機構に関する研究	5,900
62	一般B	大隅　良典	助教授	酵母及び植物細胞に於ける自食作用の誘導機構とその生理的役割の解析	3,300
63	一般C	米谷　民明	助教授	量子重力と超弦理論への幾何学的アプローチ	700

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
64	一般C	上田　博人	助教授	機械処理システムによる口語スペイン語の研究	300
65	一般C	風間　洋一	助教授	弦理論と統計多体系	500
66	一般C	伊豆山健夫	教授	磁束ストリングのトポロジーによる酸化物超伝導の諸相	700
67	一般C	藤井　保憲	教授	有限到達距離重力の研究	300
68	一般C	箸本　春樹	助手	高等植物の有性生殖過程における色素体の動態	700
69	一般C	川合　慧	教授	抽象データ構造に基づくグラフィック・インタフェースの研究	500
70	一般C	下條　信輔	助教授	新生児・乳児における随意・不随意眼球運動の発達と図地の知覚的分凝の研究	1,000
71	一般C	荒井　献	教授	古代地中海世界における「女性」の役割と意義	1,100
72	一般C	堀川　穎二	教授	代数幾何学とその応用	2,000
73	一般C	矢野　公一	助教授	力学系とその分岐の研究	2,100
74	一般C	折原　明夫	教授	発展方程式の統計解	2,000
75	一般C	戎崎　俊一	助手	専用計算機による楕円銀河の衝突と緩和の研究	2,200
76	一般C	江里口良治	助教授	高速回転星の安定性の研究	1,300
77	一般C	大西　直毅	教授	高速回転核の変形と内部対称性	900
78	一般C	市村　宗武	教授	中間エネルギー核反応によるスピン・アイソスピンモード及び⊿モードの研究	1,400
79	一般C	江尻　有郷	助手	アルカリハライド量子井戸励起子	1,500
80	一般C	金森　英人	助手	準安定電子状態分子の広領域近赤外レーザー分光	1,700
81	一般C	竹内　敬人	教授	アミド型窒素原子の1，3——相互作用——その可能性と限界	900
82	一般C	毛利　秀雄	教授	精子の成熟と受精能獲得に関する研究	1,100
83	一般C	木村　武二	教授	齧歯類の行動調節要因に関する行動内分泌学的研究	1,100
84	一般C	青山　昌二	教授	社会人の体力テストバッテリーの文献収集と開発研究	600
85	一般C	渡邊　融	教授	中･近世における蹴鞠道の伝授システムに関する研究	1,800
86	一般C	田辺　裕	教授	昼間人口による大都市圏の内部地域構造と市民概念の行政地理学的分析	1,400
87	一般C	竹内　信夫	助教授	「日本悉曇学の系譜」研究のための予備的資料調査	900
88	一般C	林　文代	助教授	フォークナーとピンチョンにおける権力構造と「書くこと」との関係に関する考察	1,000
89	奨励A	柴田　元幸	助教授	現代アメリカ小説群のサブジェクト・インデックス作成	1,100
90	奨励A	小林　亮一	助教授	ケーラー・アインシュタイン計量の特異摂動の研究及び代数幾何学の諸問題への応用	900
91	奨励A	中村　周	助教授	シュレデインガー方程式の解の構造	900
92	奨励A	厚地　淳	助手	函数論・複素多様体の確率論的特性の研究	700
93	奨励A	田嶋　直樹	助手	原子核の非軸対称変形と三次元的回転運動	1,000
94	奨励A	一瀬　郁夫	助手	強相関多体系への場の理論的アプローチ	700
95	奨励A	金子　邦彦	助手	Coupled Map Lattice による時空カオス・乱流の研究	800
96	奨励A	蓑口　友紀	助手	多孔質媒質中ヘリウム4薄膜の超流動転移	800
97	奨励A	伊藤　健吾	助手	無極性媒質中の過剰電子；移動度および付着反応速度	900
98	奨励A	大島　康裕	助手	超音速ジェット法を用いた短寿命分子種のフーリエ変換マイクロ波分光	1,000
99	奨励A	吉村　伸	助手	ジアリールエチレン類のエチレン結合の異常性のNMRによるアプローチ	900

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
100	奨励A	泉岡　明	助手	分子間電子移動モデルとしてのシクロファン型TTFダイマーカチオンラジカルの役割	900
101	奨励A	嶋田　正和	助手	不均質な環境を選択利用する寄主－寄生者3種系の共存に関する実験・モデル解析－	1,000
102	奨励A	石井　直方	助手	平滑筋における細胞内情報伝達機構	900
103	奨励A	源馬　徹	助手	光散乱法による高分子ブレンドの下限臨界溶点近傍の挙動の研究	900
104	奨励A	長島　忍	講師	疑似陰影表示による対話型曲面形状入力法の研究	800
105	奨励A	古屋かおる	助手	電気刺激法による筋力トレーニング効果の検討	900
106	奨励A	船渡　和男	助手	子どもの筋力の発達に関する横断的研究－骨年齢基準による筋力の評価－	900
107	奨励A	友末　亮三	助手	巧みな攻撃動作を行なうための身体各部位の用い方の分析	900
108	奨励A	道垣内正人	助教授	国際私法における法適用関係理論と公法の域外適用との統合的研究	1,000
109	奨励A	鈴木　宏正	助教授	精度設計支援システムにおける設計値式の学習に関する研究	900
110	奨励特	多湖　敬彦	特別研究員DC	近現代技術思想史における非正統医療技術の位置およびその理論的根拠	800
111	奨励特	濱田　賢二	特別研究員PD	超弦理論におけるコンフォーマル代数の構造	900
112	奨励特	竹重　一彦	特別研究員PD	植物細胞の老化における液胞内タンパク分解の機構とその制御	900
113	奨励特	細谷　夏実	特別研究員PD	棘皮動物卵細胞の細胞骨格蛋白質の機能解析	900
114	奨励特	横田　悦雄	特別研究員PD	ウニ精子鞭毛の運動機構の研究	900
115	奨励特	星野　真人	特別研究員PD	ras遺伝子産物p21を介する情報伝達系の研究	900
116	奨励特	近藤　和典	特別研究員PD	線虫*C. elegans*の行動と形態の分子遺伝学的解析	900
117	奨励特	日比野治雄	特別研究員PD	人間の色覚のメカニズムにおける中心視と周辺視の相違について	1,000
118	奨励特	太田　省一	特別研究員DC	十九世紀イギリス・フランスにおける精神医療の形成についての社会史的研究	900
119	奨励特	石山　文彦	特別研究員DC	現代英米の平等論における普遍主義と特殊主義	1,000
120	奨励特	杉田　秀一	特別研究員DC	認知としての正義－視点問題を中心として	1,000
121	奨励特	松本八重子	特別研究員PD	中南米・カリブにおける重層的統合機構の研究	1,000
122	奨励特	斎藤　憲	特別研究員PD	ユークリッド『原論』における比例論および無理量論の研究－『原論』テクストのデータベース化および文献研究用データベースシステムの開発	1,000
123	奨励特	橋本　義武	特別研究員PD	ゲージ理論の幾何学への応用	300
124	奨励特	秋山　和英	特別研究員DC	球状星団などの自己重力系の構造と進化	900
125	奨励特	土屋　章彦	特別研究員PD	超弦理論におけるループ振幅の研究	1,000
126	奨励特	藤村　陽	特別研究員DC	ベクトル相関を取り入れた光分解とファンデアワールス分子内反応の研究	1,000
127	奨励特	上原　浩一	特別研究員PD	トクサ類胞子壁形成における微小管の動態に関する研究	1,200
128	奨励特	鈴木　美穂	特別研究員DC	1，5－アンヒドログルシトールを含む糖脂質の構造と生理的機能の解析	900
129	試験1	土屋　荘次	教授	周波数可変真空紫外および極端紫外域レーザーの開発	3,000
130	試験1	楠見　明弘	助教授	時間分解法と新しい蛍光試薬に基づく超高感度蛍光顕微鏡の開発と応用	900
131	試験1	菅原　正	助教授	新型固体専用高分解能核磁気共鳴装置の試作と固相有機分子のダイナミックス	13,600
132	試験1	川戸　佳	助教授	レーザー顕微検査器の開発と薬物・情報伝達物質による細胞の応答・損傷の解析	16,400
133	試験1	小宮山　進	助教授	70～300μm帯連続波長可変、ゲルマニウム遠赤外レーザーの試作	1,300

平成３年度 科学研究費配分一覧

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
1	特別推進	原田　義也	教授	メタステーブル原子をプローブとする電子放射顕微鏡の開発とその固体表面への適用	155,000
2	特別推進	眞隅　泰三	教授	ポーラロンなどの素励起の新しい凝縮状態と超伝導性光応答発現機構の研究	9,000
3	重点領域１	松原　望	教授	人為起源物質の制御にはたす動的リスク管理手法の開発	8,500
4	重点領域１	阿部　寛治	教授	省資源・省エネルギー型高度技術者社会の形態	4,500
5	重点領域１	平澤　泠	教授	高度技術と基礎科学の相互連関性に関する実証的分析	5,000
6	重点領域１	土屋　荘次	教授	波長可変真空紫外レーザーによる半導体光励起プロセスの基礎反応過程の研究	2,400
7	重点領域２	高野穆一郎	助教授	特殊イオンセンサーによる火口湖底噴火予知システムの構築	900
8	重点領域２	浅野　攝郎	教授	金属シリカイド・シリコン界面の電子状態の計算	1,300
9	重点領域２	綿秋　邦彦	教授	地球環境のゆらぎとサイクル	4,500
10	重点領域２	山本　吉宣	教授	高度技術と国際関係	2,500
11	重点領域２	友田　修司	教授	有機セレン化学種の異常原子価	1,800
12	重点領域２	小宮山　進	助教授	強磁場下二次元電子系における非局所性伝導：メゾスコピック系における一次元伝導チャネルと電極の役割についての研究	2,000
13	重点領域２	浅野　攝郎	教授	遷移金属を含む金属人工格子の電子状態の計算	1,500
14	重点領域２	黒田　玲子	助教授	新しい多機能金属錯体によるDNA鎖切断機構の解明	1,800
15	重点領域２	金子　邦彦	助教授	大域結合カオス系による動的複雑さの現象学、理論とその応用	1,300
16	重点領域２	氷上　忍	助教授	アブリコソフ渦糸格子の融解相転移	1,100
17	重点領域２	大島　康裕	助手	星間分子の超音速ジェットフーリェ変換マイクロ波分光	1,500
18	重点領域２	江里口良治	助教授	重力波放出中の天体の内部構造の変化	1,200
19	重点領域２	大隅　良典	助教授	自食胞形成とその特異的融合過程の分子生物学的研究	2,000
20	重点領域２	大隅　良典	助教授	細胞表層の局所的成長機構の解析	1,800
21	重点領域２	矢原　徹一	助教授	ヒヨドリバナ有性型・無性型における寄生植物・病原菌・植食昆虫の相互作用	1,500
22	総合Ａ	久保内端郎	教授	中世イギリスの言語と文学に関する綜合的研究――第７期	2,000
23	総合Ａ	小川　晴久	教授	東アジアの学問世界『贅語』の総合的研究	2,000
24	総合Ａ	池上　嘉彦	教授	認知意味論の立場からの英語基礎語彙の意味分析（日本語及び独・仏語との比較対照を含めて）	1,200
25	総合Ａ	佐藤　純一	教授	スラブ語スラブ文学の比較対照研究の課題と方法	1,300
26	総合Ａ	阿部　良雄	教授	文学及び美術に表現された庭園についての比較文化的研究	3,000
27	総合Ａ	山影　進	教授	近代国際体系の拡大と広域交易網をめぐる国際関係	2,300
28	総合Ａ	鹿児島誠一	教授	有機導体における強い相関をもつ低次元電子系の研究	10,100
29	総合Ａ	林　利彦	教授	細胞接着因子の機能シグナルの解析とその臨床応用を目指す総合的研究	8,400

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
30	総合A	川戸　佳	助教授	機能性人工細胞の設計・製作と時間分解計測による解析	4,600
31	総合B	渡邊　昭夫	教授	戦後日本形成の基礎的研究	2,000
32	総合B	阿部　寛治	教授	流体力学の航空・宇宙における先端的応用	5,500
33	総合B	楠見　明弘	助教授	超顕微光学的手法による細胞観察・操作・加工技術の開発と細胞動態の解析への応用	2,500
34	一般A	北川　東子	助教授	人文科学研究におけるテキスト・データベースの有効性と応用に関する基礎研究	1,000
35	一般A	鈴木　博	教授	コンピューターとビデオの利用による外国語教育再編成の可能性	1,000
36	一般A	宮本　正道	助教授	ラマンスペクトルによる隕石中ダイヤモンドの成因解明	400
37	一般A	土屋　荘次	教授	分子および分子錯体の振動高励起状態における量子カオス準位構造の統計分光学	8,000
38	一般A	大野　公一	教授	クラスターのペニング電子・光電子分光	16,800
39	一般A	黒田　玲子	助教授	DNAによる金属錯体のキラリティー認識と生理活性	16,300
40	一般B	冨永　明夫	教授	十九世紀フランス言論界に於ける政治、文学の相関とその史的展開に関する総合的研究	700
41	一般B	杉浦　博	教授	1970年以降のドイツの思想と芸術における歴史・神話概念の変化に関する総合的研究	700
42	一般B	小宮山　進	助教授	バリスティックな後方電子散乱存在下における整数量子ホール効果の研究	800
43	一般B	河内　十郎	教授	純粋型症例を対象とした高次脳機能のメカニズムの神経心理学的研究	1,000
44	一般B	高橋　康也	教授	シェイクスピアの作品の解釈と受容における文化的表象の機能に関する考察	1,000
45	一般B	岸谷　敞子	教授	ドイツ語史に関する言語類型論的考察	800
46	一般B	横山　正	教授	家相書及び庭園書における方位の意味づけの展開過程の研究	1,000
47	一般B	金子　晃	教授	偏微分方程式の代数解析的研究	2,500
48	一般B	杉本大一郎	教授	重力多体専用計算機の並列化による恒星系進化の研究	500
49	一般B	山崎　泰規	助教授	H^+による2電子捕獲過程を用いた磁性体表面電子の研究	1,800
50	一般B	鹿児島誠一	教授	有機低次元導体における遷移金属d電子の役割	1,800
51	一般B	菅原　正	助教授	プロトンダイナミックスを利用した有機結晶における新規物性の開発	1,400
52	一般B	高野穆一郎	助教授	中間酸化状態の硫黄の地球化学——紫外レーザーラマン分光法による研究——	800
53	一般B	松本　忠夫	教授	亜社会性食材昆虫の家族および集団における血縁構造	1,600
54	一般B	大隅　良典	助教授	酵母及び植物における自食作用の誘導機構とその生理的役割の解析	2,300
55	一般B	堀　　準一	助教授	若年者の顎関節症に関する疫学的研究	2,000
56	一般B	楠見　明弘	助教授	ナノメートル技術による細胞接着膜蛋白質の運動の直接観察：膜蛋白質の集合機構の解析	1,800
57	一般B	坂井榮八郎	教授	東西ドイツ関係の総合的研究——変わりつつあるヨーロッパの中で——	1,000
58	一般B	馬渕　一誠	教授	細胞質分裂の分子機構に関する研究	1,200
59	一般B	藤本　隆志	教授	行為の哲学と科学——行為論的世界把握を目指して——	2,500
60	一般B	高田　康成	助教授	英文学に現れた身体性の表象機能に関する史的考察	3,500
61	一般B	蓮實　重彦	教授	フローベール草稿の文献批判学的資料分析と生成論的研究	2,500
62	一般B	兵頭　俊夫	助教授	分子固体中のポジトロニウムの研究	5,100
63	一般B	増田　茂	助手	スピンを選別したメタステーブル原子による電子分光	4,300
64	一般B	遠藤　泰樹	助教授	レーザー蒸発・反応法による金属・分子錯体の高分解能分光	6,100
65	一般B	友田　修司	教授	ヘテロ元素系における軌道相互作用の研究	4,800

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
66	一般B	小林　寛道	教授	小・中学生の有酸素的作業能および運動能力の発達に関する追跡的研究	2,200
67	一般B	林　利彦	教授	基底膜結合性の新しいコラーゲンの構造と機能	3,300
68	一般C	伊豆山健夫	教授	磁束ストリングのトポロジートによる酸化物超伝導の諸相	400
69	一般C	藤井　保憲	教授	有限到達距離重力の研究	200
70	一般C	下篠　信輔	助教授	新生児・乳児における随意・不随意眼球運動の発達と図地の知覚的分凝の研究	600
71	一般C	宮本　久雄	教授	古代地中海世界における「女性」の役割と意義	600
72	一般C	戎崎　俊一	助手	専用計算機による楕円銀河の衝突と緩和の研究	200
73	一般C	江里口良治	助教授	高速回転星の安定性の研究	500
74	一般C	大西　直毅	教授	高速回転核の変形と内部対称性	700
75	一般C	市村　宗武	教授	中間エネルギー核反応によるスピン・アイソスピンモード及び⊿モードの研究	600
76	一般C	竹内　敬人	教授	アミド型窒素原子の1、3—相互作用—その可能性と限界	800
77	一般C	矢原　徹一	助教授	DNAを用いたキク科ヒヨリバナ連の分子分類学的研究	300
78	一般C	木村　武二	教授	齧歯類行動調節要因に関する行動内分泌学的研究	700
79	一般C	田辺　裕	教授	昼間人口による大都市圏の内部地域構造と市民概念の行政地理学的分析	800
80	一般C	中井　和夫	助教授	戦後ウクライナにおける民族運動と民族政策の研究	1,200
81	一般C	山影　進	教授	東南アジア諸国連合（ASEAN）の協力体制の機能と限界——1980年代の各国国内社会状況とASEAN政治——	900
82	一般C	五味　健作	助教授	有限単純群の分類とその応用	1,900
83	一般C	黒田　成信	助教授	代数拡大体の数論の研究	1,800
84	一般C	野海　正俊	助教授	特殊函数と代数構造	1,900
85	一般C	長田　俊人	助手	トンネル分光法による磁場誘起SDW状態の電子構造の研究	1,800
86	一般C	森田　昭雄	助教授	ブラウン運動の手法による新しい反応速度論	2,000
87	一般C	山内　薫	助教授	共鳴分光法による原子クラスターのリドベルグ状態の解明	2,000
88	一般C	務台　潔	教授	光照射で除去可能な保護基の開発	1,800
89	一般C	嶋田　正和	助手	バッチ間移動により理想自由分布に近づく昆虫の産卵分布戦略の実験・モデル解析	2,400
90	一般C	鈴木　宏正	助教授	機械設計支援のためのトップダウン的組立品モデリング手法に関する研究	1,800
91	一般C	鳥海　弥和	助手	重水素NMR法による液晶性高分子のコンホメーションとセグメント運動の解析	1,900
92	一般C	川合　慧	教授	図形を通じた対話の形式記述とインタフェースシステムの研究	2,000
93	一般C	青山　昌二	教授	一般市民のスポーツ意識とスポーツ行動の相関分析	500
94	一般C	山田　茂	助教授	骨格筋肥大に関する生化学的研究	1,400
95	一般C	赤沼　宏史	助教授	1，5－アンヒドロ－D－グルシトールを含む新奇脂質複合体の生化学的研究	1,200
96	一般C	桂　勲	助教授	*C. elegans*の後期発生と成長に関する遺伝子の解明	2,100
97	一般C	竹内　信夫	助教授	「日本悉曇学の系譜」研究のための予備的資料調査	600
98	一般C	野村　正雄	助手	角運動量量子論の拡張とYang-Boxter関係式	700
99	奨励A	甚野　尚志	助教授	ヨーロッパ中世における身分論と身分意識の研究	700
100	奨励A	斎藤　兆史	講師	英語小説の文体研究に関する論文の二元的分類とそのデータベース化	900
101	奨励A	高橋　伸夫	助教授	組織学習モデルによる企業体質の研究	900

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
102	奨励A	伊藤　博	助教授	Eisenstein cohomologyの整数論的応用	900
103	奨励A	中村　周	助教授	シュレディンガー方程式の解の構造	900
104	奨励A	小林　俊行	助教授	ユニタリ表現の分岐則と簡約型等質空間上の調和解析	900
105	奨励A	厚地　淳	助手	関数論・複素多様体の確率論的特性の研究	900
106	奨励A	服部久美子	助手	フラクタル上の確率過程の研究	900
107	奨励A	川辺　幸子	助手	重力多体問題専用計算機を用いた銀河群の形成・進化の研究	900
108	奨励A	松田　祐司	助手	超伝導超格子における磁場中輸送現象の研究	900
109	奨励A	金子　邦彦	助教授	時空カオスの乱流パタンと熱力学－Coupled Map Lattice による研究	1,000
110	奨励A	泉岡　明	助手	水素結合で連結されたTTF導電錯体の合成とその物性	900
111	奨励A	真崎　康博	助手	チェノアセン誘導体をホストとする包接結晶での分子間相互作用に関する研究	1,000
112	奨励A	松下　信之	助手	一次元白金錯体における原子価交替の不整合におよぼす水素結合の効果	900
113	奨励A	市川　尚斉	助手	タバコ遺伝的腫瘍の腫瘍化・脱腫瘍化機構の解析	900
114	奨励A	堂前　雅史	助手	森林性齧歯類*Apodemus*属２種の貯食行動に関する諸要因の研究	800
115	奨励A	足立　博之	助手	アシル酵素中間体が蓄積する変異型酵素を用いたβ－ラクタマーゼの触媒機構の解析	800
116	奨励A	藤垣　裕子	助手	情報処理作業における作業密度増加による精神的負荷の研究	900
117	奨励A	井上　洋一	助手	スポーツと法に関する研究――アメリカ合衆国を中心として――	900
118	奨励A	船渡　和男	助手	子どもの形態に関する発育履歴と運動能力の関係PHV(Peak of Height Velocity)による筋出力パワーの評価――	1,000
119	奨励A	古屋かおる	助手	電気刺激法による筋力トレーニング効果の検討――その１、収縮パターンの違いによるトレーニング効果――	800
120	奨励A	太田　善浩	助手	情報処理機構における動的蛋白質間相互作用のリン光プローブを用いた研究	900
121	奨励A	佐甲　靖志	助手	１分子操作・追跡法による細胞膜蛋白質の運動の制御機構の解析	900
122	奨励A	石井　直方	助教授	筋疲労のメカニズム――細胞内カルシウムを中心として	800
123	試験B	楠見　明弘	助教授	時間分解法と新しい蛍光試薬に基づく超高感度蛍光顕微鏡の開発と応用	400
124	試験B	菅原　正	助教授	新型固体専用高分解能核磁気共鳴装置の試作と固相有機分子のダイナミックス	5,000
125	試験B	川戸　佳	助教授	レーザー顕微検査器の開発と薬物・情報伝達物質による細胞の応答・損傷の解析	400
126	特別奨励費	香月　保彦	日本学術振興会 特別研究員PD	四次元超弦理論の真空構造とその現象論的考察	800
127	特別奨励費	向田　寿光	日本学術振興会 特別研究員PD	低次元場の理論とその物性物理学への応用	1,500
128	特別奨励費	高野　浩志	日本学術振興会 特別研究員PD	仮想ゲージ場及びエニオン模型の高温超伝導への応用	1,200
129	特別奨励費	長谷部孝司	日本学術振興会 特別研究員PD	ケインズの貨幣的理論を踏えてマルクス経済学を貨幣的経済理論として再構成する	600
130	特別奨励費	北澤　孝史	日本学術振興会 特別研究員DC	シアン化カドミウム配位多面体による擬鉱物システムの構築	1,200
131	特別奨励費	宮脇　淳	日本学術振興会 特別研究員DC	分子の光励起ダイナミックスの真空紫外および紫外レーザー分光	800
132	特別奨励費	松本八重子	日本学術振興会 特別研究員PD	中南米・カリブにおける重層的統合機構の研究	900

	研究種目	研究代表者	官職	研究課題目	配分額(千円)
133	特別奨励費	斎藤　憲	日本学術振興会 特別研究員PD	ユークリッド『原論』における比例論および無理量論の研究――『原論』テクストのデータベース化および文献・研究用データベースシステムの開発	900
134	特別奨励費	安藤　耕司	日本学術振興会 特別研究員DC	溶液内化学反応、特に誘電緩和と電子移動反応に関する理論的研究	800
135	特別奨励費	今橋　映子	日本学術振興会 特別研究員DC	日本近代文学・文化におけるパリ	500
136	特別奨励費	竹市　博臣	日本学術振興会 特別研究員DC	視知覚系における「面」の表象、機能および機構の研究	800
137	特別奨励費	瀬地山　角	日本学術振興会 特別研究員DC	東アジア諸国における主婦の誕生と変遷	500
138	特別奨励費	杉田　秀一	日本学術振興会 特別研究員DC	認知としての正義――視点問題を中心にして	900
139	特別奨励費	中嶋　毅	日本学術振興会 特別研究員DC	ソ連邦工業化の政治経済過程	500
140	特別奨励費	太田　省一	日本学術振興会 特別研究員PD	十九世紀イギリス・フランスにおける精神医療の形成についての社会史的考察	900
141	特別奨励費	蓮見　真彦	日本学術振興会 特別研究員DC	有機超伝導体の超格子・電子状態と超伝導との相関	800
142	特別奨励費	坪井　滋	日本学術振興会 特別研究員PD	液胞内タンパク分解過程に関与する因子の分子生物学的解析	1,300
143	特別奨励費	二宮　京子	日本学術振興会 特別研究員PD	マウスの社会行動における嗅覚情報の役割に関する研究	1,200
144	特別奨励費	尾中　文哉	日本学術振興会 特別研究員PD	試験制度の社会的意味に関する国際比較――日本・タイ・韓国を事例として――	900
145	特別奨励費	渡辺　克義	日本学術振興会 特別研究員PD	第２次世界大戦におけるポーランドの抵抗運動――ワルシャワ蜂起を中心に――	700
146	特別奨励費	手塚奈々子	日本学術振興会 特別研究員PD	ニュッサのグレゴリオス哲学が現代思潮（特にキリスト教哲学）に与えるインパクト	700
147	特別奨励費	山下真由美	日本学術振興会 研究員PD	歌舞伎における西洋文化の影響	700
148	特別奨励費	堀　利栄	日本学術振興会 特別研究員PD	テチス域におけるジュラ紀古世放散虫化石の群集変化	900
149	特別奨励費	岩田　和佳	日本学術振興会 特別研究員DC	表層微小管による細胞壁の力学的性質の制御に関する研究	800
150	特別奨励費	土屋　章彦	日本学術振興会 特別研究員PD	超弦理論におけるループ振幅の研究	900
151	特別奨励費	レナート・ガーデ(氷上研)	日本学術振興会 特別研究員PD	アンダーソン局在の統計場の理論による研究	1,000

III

教養学部にはどんな学生が，どのようにして学んでいるのか

平成3年度授業日程表

4月10日(水)～4月11日(木)　学部オリエンテーション
4月12日(金)　入学式
4月13日(土)～7月23日(火)　第1・3学期授業
7月24日(水)～9月4日(水)　夏季休業
9月5日(木)～9月17日(火)　第1・3学期試験
9月18日(水)～10月13日(日)　秋季休業
10月14日(月)～12月24日(火)　第2・4学期授業前半
12月25日(水)～1月6日(月)　冬季休業
1月7日(火)～2月7日(金)　第2・4学期授業後半
2月8日(土)～2月21日(金)　第2・4学期試験

教養学部の授業時間

1時限　9時00分～10時30分
2時限　10時40分～12時10分
3時限　13時00分～14時30分
4時限　14時40分～16時10分
5時限　16時20分～17時50分

1　学生選抜の方式

教育・研究組織としての教養学部の特徴である「三層構造」(Ⅰ－2を参照)を反映するかたちで、ステータスを異にする3種類の「駒場の学生」が存在する。前期課程の学生、後期課程(教養学科と基礎科学科)の学生、大学院(総合文化研究科)の学生が、いずれも「駒場の学生」と呼ばれるにたる資格を持っているからである。では、彼らは、いかなる選抜試験をくぐりぬけて、その資格を手にすることになるのか。

いうまでもなく、その選抜試験は、「三層構造」のそれぞれの「層」によって異なっている。また、同じ「層」においても、複数の選抜方式が適用されている点に注目されたい。既に前期課程の段階で、彼らはいくつかの異なる方式に従って選抜されているのであり、後期課程でも大学院でも事情は変わらない。その結果、上記の3種類の「駒場の学生」の色分けは、さらに多様なものとなっている。

Ⅰ　前期課程

東京大学に入学を許可されたすべての学生は、前期課程の二年間、駒場の教養学部に所属し、それぞれの科類(付属資料2参照)のクラス編成(付属資料2参照)に従って勉学を行なう(付属資料2参照)。その意味で、この段階での入学者選抜、いわゆる入試は、前期課程の教育の責任を受け持つ組織としての教養学部の枠を超えた、東京大学の全学的な行事である。また、国公立大学に共通の「大学入試センター試験」の受験を出願資格として課し、その結果を第2次学力試験の結果と総合して成績の判定を行なっているという意味では、東京大学の枠をも超えた行事だともいえる(「東京大学入学者募集要項」参照)。

第2次学力試験のために東京大学が採用しているのは、いわゆる「分離分割方式」である。その際「大学入試センター試験」を受験した入学志望者が募集人員を大幅に上回った場合は、科類ごとの倍率で第1段階選抜が行なわれる。

「分離分割方式」の「前期日程」(センター試験は5教科6科目の受験が義務づけられる)は、毎年2月の下旬に「4教科型」で2日間にわたって実施され、3月10日ごろ合格者発表が行われる。論文や総合科目などによる選抜基準の多様化を目指した別枠入試としての「後期日程」(センター試験は文科各類3科目3教科、理科各類は3科目4教科の受験が義務づけられる)は、毎年3月中旬に2日間にわたって実施され、3月20日ごろ合格者発表が行なわれる。それぞれの募集人員は科類ごとに「募集要項」に記されているが、「前期日程」と「後期日程」の合格者の割合は、ほぼ9対1である。

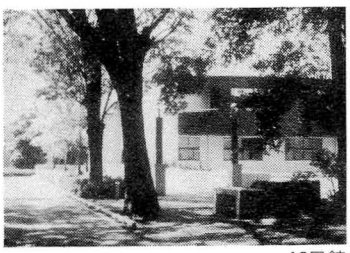
「分離分割方式」の他に、東京大学が独自に実施するものとして「外国の学校を卒業した外国人および日本人」を対象とした入学者選抜が存在する(「東京大学外国学校卒業学生募集要項」参照)。これは「外国人であって日本国の永住許可を得ていない者」を対象とした「第1種」、「日本人および第1種以外の外国人」を対象とした「第2種」からなっている。出願資格の詳細は「募集要項」に記されているが、いずれも書類による第1次選考の合格者に対して、「第1種」は、毎年2月下旬の1日、日本語と外国語(英語ほか八か国語)による小論文、「第2種」は、2月下旬の2日間、同じ形式による小論文に加え、文科は2外国語、理科は数学と理科2科目による筆記試験のかたちで第2次選考が施行される。3月中旬に、日本語による個人面接ののち、3月下旬に合格者の発表が行なわれる。募集人員は毎年「若干名」とされている。

以上の事実から明らかなとおり、東京大学の学生となるには、「分離分割方式」の「前期日程」と「後期日程」、ならびに「外国学校卒業学生」の「第1種」と「第2種」の合計四つの第2次選考試験のどれか一つに合格していなければならない。つまり、受験生が選んだ選抜方式に従って、前期課程の段階から

異なる4種類の「駒場の学生」が共存していることになる。その全員がまったく同じ資格で前期課程の教育を受ける権利をもっていることはいうまでもないが、国籍や育った文化的な環境をも異にするこの多様な集団が最初に出会う場が教養学部であるなら、それをいたずらに画一化することなく、さらに豊かな多様性に向けて羽ばたかせることが、前期課程の教育を受け持つ者たちにとっての喜ばしい義務であり、また権利でもあるだろう。

II 後期課程

1) 進学振り分け


12号館

教養学部の後期課程として教養学科(第1、第2、第3)、基礎科学科(第1、第2)の計5科が存在していることの特質は既に詳しく述べられている(I-2「学部後期課程教育」の項を参照)。前期課程の学生たちは、後期課程の各学部によるガイダンスやその冊子(「進学のためのガイダンス」参照)、ならびに「進学情報センター」(III-3参照)の提供する資料や情報に従って志望の専攻を決める。教養学科と基礎科学科のガイダンスは3学期生を対象として毎年6月に行なわれ、10月の「進学振り分け」(I-2参照)によ って希望する分科への進学が内定した者は、前期課程の第4学期から後期課程の授業を受講することができる。

東京大学のすべての学部への進学がほぼ入学時の科類で決定されている中で、教養学部教養学科と基礎科学科は、それぞれの科類の学生にかなり大きな選択の幅を残しているという特徴を持っている。教養学科へは文科理科の各類からの進学が可能だし、基礎科学科第1へは理科の各類から、基礎科学科第2へは理科文科各類からの進学が可能なのである。そこに、「学士入学」が加わることで、後期課程の「駒場の学生」の構成はさらに多様なものとなる。

2) 学士入学

もちろん、「学士入学」はあらゆる学部に共通の制度であり、教養学部に固有のものではない。また、後期課程のあらゆる学科が毎年定期的に学生を募集しているとは限らない。だが、他大学に存在しない専攻領域を多く擁し、小人数教育を理想とする駒場の後期課程に、他の専攻を修めた学生が改めて加わることは、多様な関心をいだく学生同士の相互刺激という点ではかり知れない意義を持つ。

「学士入学」試験の出願資格は科によって異なっている(「東京大学教養学部三学科学士入学試験要項」を参照)。試験は毎年3月上旬、第1外国語、第2外国語、論文の筆記試験、ならびに口述が実施され、その数日後に内定者の発表が行なわれ、入学許可の最終結果は3月下旬に通知される。

以上のごとく、「進学振り分け」に従って教養学科で学ぶ権利を得る学生に「学士入学」の試験に合格した者が加わることで、後期課程の「駒場の学生」は2種類の異なる選抜方式をくぐり抜けた者たちの集団となる。また、本郷から訪れる他学部聴講の学生たちの存在が、教養学部本来の多様性をさらに豊かなものにしていることはいうまでもない。

III 大学院

既に述べたように(I-2を参照)、教養学部の講座に基礎を置く大学院として、駒場には総合文化研究科(比較文学比較文化、表象文化論、地域文化研究、国際関係論、相関社会科学、文化人類学、広域科学の7専攻)が存在し、それぞれが修士課程(2年)と博士課程(3年)を持っている(表象文化論の博士課程は平成4年度の発足が予定されている)。

1) 修士課程

修士課程への出願資格は、既に大学を卒業した者、および受験する年度に大学卒業見込みの者が中心となるが、事情に応じてそれ以外のケースもありうるので注意されたい(「東京大学総合文化研究科修士課程学生募集要項」を参照)。選抜方式は、毎年9月中旬の1日(広域のみ8月下旬)に行なわれる筆記による第1次試験と、その合格者を対象とする2月中旬の1日(広域のみ3月中旬)に行なわれる提出論文審査の口述試験による第2次試験からなっている。各専攻の収容予定人員は「学生募集要項」に記されている。

「本学大学院外国人学生の入学に関する規程」(「東京大学大学院便覧」参照)に合致する限り、あらゆる国籍の人間に出願の権利が開かれている。外国人のための特別の学生選抜の制度があるわけではないが、筆記試験の専門科目の比重が高く、また前記「規程」が「外国人学生は定員外とする」と定めていることもあり、前期課程の学生選抜に比べて外国人が合格する可能性ははるかに高い。

外国人出願者の外国語の筆記試験には日本語が加わるが、第2次試験の口述試験は志願者の国籍を問わず日本語で実施される。入学許可内定者の発表は2月下旬(広域のみ3月中旬)に行なわれる。

なお、総合文化研究科以外の理学系大学院に属する相関理化学、科学史・科学基礎論の2専攻は教養学部の教官を中心に運営されている関係で、その学生は駒場キャンパスでの授業に出席することが多いことを書きそえておく。

以上の事実からして、大学院においては、総合文化研究科の「一般学生」と「外国人学生」に加えて、理学系研究科の上記2専攻の「一般学生」と「外国人学生」の合計4種類の「駒場の学生」が存在することになる。

2) 博士課程

博士課程への出願資格は、原則として、受験する年度に総合文化研究科で修士の学位を得る見込みの者(「第1号」)が中心となるが、それ以外のケース(「第2号」-「第5号」)もありうるので注意されたい(「東京大学大学院総合文化研究科第1種博士課程学生選考要項」参照)。外国人の出願資格は修士課程のそれに準じ、「定員外」の規程が維持されている。

選考は修士の学位論文(またはこれに代わる者)の審査と専門分野についての口述試験からなり、毎年2月の中旬に実施される。内定者の発表は2月の下旬である。なお、「第1号」の選考結果によっては、収容予定人員に余裕がある限り、「第2号」(本学での既に修士の学位を得たもの)以下の出願が認められ、日本および外国の他大学で修士(またはそれに相当する学位)を得た者、もしくは得る見込みの者などを対象とした学生選抜が行なわれることがある。その場合、試験は毎年3月上旬に実施される。

その結果、大学院の博士課程においては、修士課程における区別の外に、「第1号」選抜の合格者と「第2号」以下の選抜の合格者の2種類の「駒場の学生」が加わることになる。

IV 外国人留学生 研究生 大学院外国人研究生

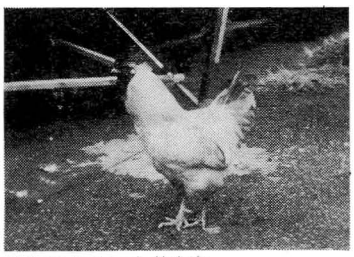
これまで見てきたような「駒場の学生」の多様性に加えて、教養学部には研究生、総合文化研究科には大学院外国人研究生の制度が存在する(「東京大学教養学部研究生出願要項」ならび「東京大学大学院総合文化研究科『外国人研究生』の出願について」参照)。出願者が入学を許可された場合には、彼らもまた「駒場の学生」となる。

大学院外国人研究生はいうまでもないが、学部研究生の日本人を除いた大半は、いわゆる留学生(III-4「留学生相談所と外国人留学生の現状」参照)によって占められている。

1） 外国人留学生

外国人留学生には、文部省の推薦をへて東京大学が受け入れる日本政府の国費留学生と、本学の留学生特別選考試験によって入学を許可された私費留学生の2種類が存在する。諸外国政府の国費留学生は、その際、私費留学生のカテゴリーに数えられる。教養学部と総合文化研究科での勉学を希望する外国人留学生の数は年々増加の一途をたどっている。東京大学では2番目にあたる78人の外国人留学生を数える総合文化研究科では、正規の学生である留学生の中から修士、博士の学位を取得する者も多く、東京大学の国際的な名声の確立に大きく貢献している。

2） 研究生


駒場のマスコット的存在
ーその獰猛さで知られる

日本人と外国人とによって異なる出願資格と提出書類は「出願要項」に記されている。入学時期は毎年4月1日と10月1日と2回存在し、学科において選考を行ない、研究期間は原則として1年。許可を得て期間を延長することは可能だが、研究期間が2年を越えることはできない。

3） 大学院外国人研究生

「東京大学大学院外国人研究生に関する規程」(「東京大学大学院便覧」参照)に従って、総合文化研究科にも「外国人研究生」の制度が存在する。出願資格と提出書類は「出願について」に記されている。入学時期ならびに研究期間は学部の研究生に等しく、選考は各専攻において、提出された書類によって行なう。

以上の事実から、いわゆる外国人留学生の中にも、学部と大学院の正規の学生選抜試験に合格した者と、研究生として入学を許可された者との二つのカテゴリーが存在することが明らかになる。「留学生相談室」(III-4参照)は、そうした違いにかかわりなく、外国人留学生全般のさまざまな相談に応じている。

これまでにみた極めて多様な学生集団に2種類の外国人留学生を含めたものが、いわゆる「駒場の学生」の実態である。それぞれに異なるかたちで選抜された学生たちの教育と研究指導にあたる教養学部の教官組織は、たえざる自己点検によって「三層構造」の硬直化を避け、それを円滑に機能させ続けねばなるまい。かくも多様な「駒場の学生」たちの学問的な好奇心は、惰性化した伝統よりも、社会的な変化に対応する新たな伝統の創出に極めて敏感だからである。

2　カリキュラム

前期課程カリキュラム

1）学科目と講座

雪の銀杏並木

東京大学に入学した学生は、駒場における教養学部前期課程の2年間を通じて、大学設置基準に関する文部省令の「一般教養課程」の規定に準拠したカリキュラムに従って勉学を行なう。

前期課程には、人文、社会、自然の三分野からなる一般教育科目、外国語科目、保健体育科目が開設されており、それらの総称として「一般教育等」が慣用化されている。原則として、「一般教育等」の教育の責任を負っているのは、それに対応する教官組織としての「5科」に所属する諸教室である。だが、既に述べたように（Ⅰ-2）、全教官が前期課程の教育にあたるという教養学部の「三層構造」の特質として、実質的には博士講座に所属する教官が名目的に学科目制の「5科」の教室に所属し、「一般教育等」の授業を担当するケースが多く、カリキュラム編成上の学科目と教官組織としての学科目とは正確には対応していない。後期課程や大学院で専門教育を担当する講座制の教官が学科目制の「一般教育」の教育にもあたるというこの制度は、他大学や他学部には例をみない教養学部独特のシステムであり、教育上の濃度を高めることに大きく貢献している。

もちろん、教養学部としては、大学設置基準に基づきつつも、必要とみなされる授業を自主的に開講している。創設以来の外国語重視の理念にふさわしく、設置基準が要求する「一般教養課程」2年間で1外国語8単位という水準を遥かに上回る、文科系は2外国語18単位、理科系は2外国語16単位を必修とするカリキュラムを長らく実施してきた（平成4年度からは文理共通で2外国語14単位必修）。また、設置基準が保証する英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語の他に、第三語学として、ギリシャ語、ラテン語、アラビア語、朝鮮語、イタリア語、インドネシア語、ヒンディー語、トルコ語を開講し、外国語習得に対する学生の多様な要求と、国際化を目指す社会的な要請に応えている。ギリシャ語、ラテン語はいうまでもなく、アラビア語に関しても専任教官を配し、朝鮮語の専任採用も来年度に予定されている。こうした第三語学の充実は、学生の後期課程での専攻の選択に無視しがたい影響を与えていることは特筆されねばなるまい。理科生はいうまでもないが、文科生をも対象とする情報処理教育も既に行なわれており、情報化社会に充分対応しうるカリキュラムへの編成替えの準備も整いつつある。

2）　必修科目と単位

夏学期（4月－9月）と冬学期（10月－2月）からなる一学年二学期制をとる教養学部の前期課程では、第1年次と第2年次とで合計四つの学期が存在することになり、第四学期には各学部の専門教育科目も開講される。時間割は学期ごとに異なるが、人文、社会の講義は通年で行なわれる。一年を通しての授業日程は年によって若干の異動があるが、それぞれの学年の「教養学部便覧Ⅰ」に記されている。各科類の学生が履修すべき必修科目とその単位数は、各学生が進学を希望する学部の要望科目とその単位数ともに、「履修の手引き（一般教育科目等の）」に詳述されており、「一般教育等」の科目一覧は別表を参照されたい。

授業は毎週月曜から金曜までの五日間、午前9時から午後5時50分まで、それぞれ90分ごとの五時限制によって行なわれる。学生は、学期ごとの時間割に従い、夏学期は5月上旬、冬学期は10月中旬の期限までに提出した履修科目届けに従って授業に出席する。出席を義務づける学部としての規定は存在せず、出欠を採るか否かは個々の授業担当者の裁量か、教室の方針に委ねられているので、学期末

試験に合格しさえすれば、授業に出席することなく単位を得ることも原理的に不可能ではない。だが、そうしたケースはむしろ例外的なものとなっているのが現状であり、これは授業と試験との有機的かつ有効な関連への教官の配慮を証明するものだとする見解もある。

成績の評価は点数で行なわれるが、学生が知りうるのは、成績表に記されたA(80点以上)、B(79-65点)、C(64-50点)、D(49点以下)の4段階のイニシアルのみである。評価の基準は授業担当者の職業的な経験と個人的な判断に委ねられており、同じ科目でも、単位取得が容易な場合と比較的困難な場合との不平等が生じかねない。それを避ける目的で、科目によっては、ABCDの割合をクラスごとの比率で制限する「内規」が存在している。Dはいうまでもなく不合格を意味するが、外国語や体育実技のように、4学期間の成績の平均で単位が認められる科目では、それだけで決定的な失敗を意味しはしないし、また逆に、第3、4学期の平均が50点を超えない場合は、科目全体の成績が不合格となったりもする。詳しくは「成績処理および追試験等に関する内規」を参照のこと。Dの評価を受けた学生に対して、科目によっては、追試験、見込点、補習などの救済処置が存在する。また、二年間で志望する学部への進学に必要な単位を取得できない学生は、留年、降年などを申し出ることで、最高四年まで前期課程にとどまることができる。それぞれに必要な手続きについては、前記「手引き」に詳しく述べられている。講義の内容や教官の授業態度に対する学生の反応や評価をまとめて公表することは、制度化されていない。だが、外国語を初めとする一部の科目では学生へのアンケートを実施し、その結果を紀要に発表しており、学生の要望や批判を吸収するシステムが皆無というわけではない。

野球場の桜

3) 全学一般教育ゼミナールと小人数講義

別表に示された科目一覧の他に、教養学部には「全学一般教育ゼミナール」が開講されている。1969年度まで行なわれていた「一般教育演習」を発展的に充実させるかたちで1970年度に開設された「全学一般教育ゼミナール」は、いわゆる東大紛争の直後、当時の加藤一郎総長による学生への呼び掛けを契機として生まれた全学的な制度である。

「第1学期から学生に対し専門的研究の一端に触れる機会をつくり、同時に全学の教官と人格的に接する機会をつくるため、本学の各学部・各研究所の教官が、事情の許すかぎり、一般教育ゼミナールを開き、第一学期から学生がそれに参加できるようにする」(「昭和45年度入学学生のカリキュラムに関する臨時措置案(臨時カリキュラム委員会報告)」、という趣旨で始まったこの前期課程の学生を対象とする制度は、1977年に一部手直しされ、以後今日にいたるまで続いている。駒場に限らず、東京大学の全キャンパスで行なわれ、学生の希望によって本学の教官以外の専門家を講師として招くことも可能である。1学期受講すれば1単位となるが、その上限などについては制限もあり、詳しくは「全学一般教育ゼミナール紹介」を参照されたい。

前記の「紹介」をみる限り、全学の教官の参加という当初の趣旨はいまなお生かされており、学期ごとに開講される多彩な内容のゼミナールが、各科類の学生の興味を横断的に惹きつけている。だが、その開講数の圧倒的な多さからして、前期課程の「駒場の学生」が教養学部の教官の専攻分野の多様性に触れる恰好の機会として機能し、「総合コース」、「ゼミナール形式の小人数講義」(いずれも「手引き」、「紹介」参照)などとともに、駒場における教育の濃度の向上に貢献しているのが現状である。また、20年におよぶこうした授業形態の成功は、前期課程における授業の形式(大人数講義か小人数のゼミか、AV機器を用いるか否か、等々)や授業内容の再検討、あるいは必修・選択枠の見直しにあたって、極めて有意義な指針となっていることも注目されてよい。

前期課程の「駒場の学生」は、これまでにみた多様で重層的なカリキュラムとの接触を通して、おのれにふさわしい専攻を選択するために二年間という時間的な余裕を与えられている。これを有意義なものとするために、教官は、たえず授業の質の向上が求められる。カリキュラムに実質を与えるものは、そのことの自覚からくる緊張感をおいてはありえず、その意味で、学生の授業への積極的な加担こそが教養学部の未来を担っているというべきだろう。「一般教育課程」の充実は、そのまま後期課程、大学院の充実につながり、またそれが前期課程に遡行的に波及するという相互運動が「三層構造」を有機的に活気づけるものだからである。

前期課程——第1，2年次に行なわれる一般教育科目，外国語科目，保健体育科目一覧表

分野		科目		対象科類	毎週授業時数 I学期	II学期	III学期	IV学期	単位	備考
一般教育	人文	哲学	哲学概説	文	(1	1)	(1	1)	4	文III のみいずれか1科目を選択必修
			哲学史	文	(1	1)			4	
			論理学	文	(1	1)			4	
				理	(1	1)	(1	1)	4	
			倫理学		(1	1)	(1	1)	4	
			哲学(一般)		(1	1)	(1	1)	4	
		心理学			(1	1)	(1	1)	4	
		教育学			(1	1)	(1	1)	4	
		歴史学	日本史		(1	1)	(1	1)	4	文III のみこのうち1科目を選択必修
			東洋史		(1	1)	(1	1)	4	
			西洋史		(1	1)	(1	1)	4	
			歴史学(一般)	文	(1	1)	(1	1)	4	
		人文地理学			(1	1)	(1	1)	4	
		人類学			(1	1)	(1	1)	4	
		文学	国文学		(1	1)			4	文III のみいずれか1科目を選択必修
			国語	文I,II,理	(1	1)	(1	1)	4	
				文III	(2	2)	(1	1)	4/8	
			漢文	文I,II,理	(1	1)	(1	1)	4	
				文III	2	2	1	1	4/6	
			外国文学		(1	1)	(1	1)	4	
			文学(一般)		(1	1)	(1	1)	4	
		人文科学(一般)		文，理	1	1	1	1	2/4	
					2	2	2	2	4	
	社会	法学		文I	(1	1)			4	
				文II,III,理	(1	1)	(1	1)	4	
		政治学		文I,III,	(1	1)			4	
				文II,理	(1	1)	(1	1)	4	
		経済学			(1	1)	(1	1)	4	
		統計学	基礎統計学	文I,II,理	1		1		2	
				文III	1				2	
			応用統計学	文I,II,理		1		1	2	
				文III		1			2	
		社会学		文III,理	(1	1)	(1	1)	4	
				文I,II	(1	1)			4	
		社会思想史			(1	1)	(1	1)	4	
		国際関係論		文I,II,理	(1	1)	(1	1)	4	
				文III	(1	1)			4	
	自然	数学	講義	理	(2	2)			8	必修
			演習	理	(1	1)			1/2	選択
			講義	文	2	2	2		4	
		物理学	講義	理	(1	1	1)		6	必修
			実験	理		2	2		1	必修
			講義	文	2	2	2		4	
		化学	講義	理	(1	1	1)		6	必修
			実験	理		2	2		1	必修
			講義	文	2	2	2		4	
		地学	講義	理	1	1	1		4	天文分野と地球分野を任意の2個学期で履修する
			実習		2		2		1	
			講義	文	2	2	2		4	
		生物学	講義	理	(1	1	1)		6	理II，III必修
			実験	理II，III	2				1	理II，III必修
			講義	文	2	2	2		4	

分野		科目		対象科類	毎週授業時数 I学期	II学期	III学期	IV学期	単位	備考
一般教育	自然	情報・図学	講義	理	(1	1)			4	
			実習	理			2		1	
			講義	文	2	2	2		4	
		情報処理		理IIIII		1			2	
		科学史		文	2	—	2		4	
		解析学I		理			1		2	
		解析学II		理			1		2	
		物理学II		理		1			2	
		現代物理学		理				1	2	
		化学II		理			1		2	
		生物科学		理			1		2	
		工学		理			1		2	
		自然科学(一般)		文，理	1	1	1	1	2/4	
					2	2	2	2	4	
外国語	第一	英語		文	2	2	3	3	8/10	必修
				理	2	2	2	2	6〜8	必修
	第二	ドイツ語		文	3	3	3	3	8〜12	1ヵ国語必修
				理	3	3	3	3	10〜12	
		フランス語		文	3	3	3	3	8〜12	
				理	3	3	3	3	10〜12	
		中国語		文	3	3	3	3	8〜12	
				理	3	3	3	3	10〜12	
		ロシア語		文	3	3	3	3	8〜12	
				理	3	3	3	3	10〜12	
		スペイン語		文	3	3	3	3	8〜12	
				理	3	3	3	3	10〜12	
	第三	ドイツ語			1	1	1	1	1〜4	
		フランス語			1	1	1	1	1〜4	
		中国語			1	1	1	1	1〜4	
		ロシア語			1	1	1	1	1〜4	
		スペイン語			1	1	1	1	1〜4	
		イタリア語			1	1	1	1	1〜4	
		ギリシア語			1	1	1	1	1〜4	
		ラテン語			1	1	1	1	1〜4	
		朝鮮語			1	1	1	1	1〜4	
		アラビア語			1	1	1	1	1〜4	
		インドネシア語			1	1	1	1	1〜4	
		ヒンディー語			1	1	1	1	1〜4	
		トルコ語			1	1	1	1	1〜4	
保健体育		体育	講義	文I,II 理II,III	1				2	必修
			講義	文III,理I					2	必修
			実技		(1	1	1	1)	2	必修
一般教育	その他	一般教育演習								履修方法，制限単位数等については「全学一般教育ゼミナール」

注)
- 対象科類に記載のないものは全科類共通。
- [ ] は各学期ごとに完了，( ) は2個学期以上にわたる。
- 単位の4／8は4単位または8単位の取得が可能なことを，8〜10は8，9，10単位のそれぞれの取得が可能なことを示す。他もこの例に準ずる。
- 毎週授業時数の欄は，「1授業時間(=90分)」単位で表わしてある。「教養学部便覧」に収録してある，教養学部規則第2条別表のこれに相当する数字は，1授業時間を「大学設置基準」の「2時間」に読み代えたものである

I　一般教育ゼミナール

教養学部——人文・社会

教官	題目
今井知正	プラトン哲学入門
宮本久雄	デカルト『省察』を読む
河内十郎	神経心理学演習
勝俣鎮夫	古文書を読む
新川健三郎	アメリカ現代史
甚野尚志	ヨーロッパ中世への視角
鳥海　靖	昭和初期の日本
長崎暢子	第二次大戦とアジア
三谷　博	英語圏の日本研究
本村凌二	馬の文化史－遊戯篇－
古田元夫	ベトナム語
古田元夫	東南アジアに触れる
山内昌之	歴史学と1990年代
田辺　裕	第三世界研究入門
山口岳志	農村地域研究入門
小川晴久	アジアと日本－自立と「開発」－
小川晴久	学問（学芸）の自由としての専門空間
坂梨隆三	近世のことば
戸倉英美	中国の〝幻想〟文学
延広真治	変体仮名の読み方
小寺　彰	国際社会と法
原田尚彦	行政に係る法律問題の研究
佐藤誠三郎	ポスト冷戦期の世界と日本
松原　望	天皇制と戦争責任
折原　浩	マックス・ウェーバー宗教社会学入門
山脇直司	ユートピア思想とレアルポリティーク
石井　明	中ソ関係－歴史・現在・将来
佐藤良明	受験英語の認識論
高田康成 足立信彦	ヨーロッパ文化における「歴史」と「国家」
小林康夫	小説の時間論
蓮實重彦	映像芸術　世界の映画・日本映画
伊藤　等	地図の基礎知識
小林　徹	水と人間環境ゼミ
田村明寛	ベルカント研究
前田　茂	法と社会と人権

教養学部——自然

教官	題目
上野　正	確率論の紹介
金子　晃	幾何学入門
堀川穎二	解析速修コース
加藤正昭	相対性理論
川戸　佳	生物物理学
小牧研一郎 兵頭俊夫 山崎泰規	実験物理学に親しむ－電子と陽電子
和田純夫	留学生のための数学・物理演習
小林啓二 菅原　正	現代有機化学入門
佐藤八十八	かたち
原　　襄	植物の観察
矢原徹一	進化
阿部寛治	数理科学のためのオブジェクト指向プログラミング
長島　忍	コンピュータ入門
塚本明子	コンピューター科学の数学（英語）
山田　茂	筋肉可塑性の機構

教養学部——外国語・外国文化

教官	題目
伊藤たかね	統語論入門
Giacomuzzi	Deutsch mit Angst? Nein danke
Gater	Syntax
川西　進	E.M.フォースターの短編小説を読む
川本皓嗣	英・仏語発音の基礎
久保内端郎	英語の歴史
C.Collins	An introduction to film
島田太郎	現代アメリカの小説を読む
鈴木　博	英語発音訓練
高山一郎	Vocabulary Building
丹治　愛	H.G.Wells, *The Time Machine*研究
行方昭夫	文学作品の正しい翻訳
Boccellari	比較文化（英語演習）
松野和彦	Headlines and Captions
山縣宏光	古英語入門
猪口弘之	ドイツの新聞を読む
川中子義勝	デンマーク語入門
北川東子	ドイツ文化論入門Ⅰ－「統一」をめぐって
麻生・北川	ドイツ研究のテーマとしての「統一」
麻生	ドイツ統一とヨーロッパ統合
足立	民族について
吉島	ドイツ人のアイデンティティと言語
大石	境界の都市…ベルリン
中澤	ドイツにおけるユダヤ系知識人の問題
石田	反ユダヤ主義とドイツの近現代
重藤	言語学研究における東と西
保坂	旧東独の作家たち
石田・北川	ドイツ「統一」の歴史的背景
杉浦　博	W.Müller/F.Schubert: "Die schöne Müllerin"
杉橋陽一	オペラ「指輪」研究
中澤英雄	カフカの短編作品
Fürnkäs	映画化されたドイツの児童文学
吉島　茂 Giacomuzzi	Alltagssituation—Österreich, BRD.und Japan

渡辺　健	ドイツ語圏の文学にあらわれた音楽
Wasserman	会話（フランス映画）(2コマ)
竹内信夫	サンスクリット入門
芳賀　徹	韓国語、韓国文化入門
B.M.Pages	仏語会話（2コマ）
松浦寿輝	日本近代詩演習
湯浅博雄	ランボーを読む
Goloubovskaia	ロシア語口頭練習と作文
島田　陽	ロシア詩を読む
沼野充義	東ヨーロッパの現代文学
森安達也	ポーランド語入門
水谷智洋	ギリシア叙情詩を読む
長崎暢子	ヒンディー語会話
杉田英明	アラビア語古典文学講読
山下美知子	タガログ語
岩崎悦子	ハンガリー語

教養学部——保健体育

教官	題目
石井直方	ウェイトトレーニングの理論と実際
石川　旦	ハタ・ヨーガの実修
小林寛道	スポーツ体力科学実習
山田　茂	運動生化学
渡会公治	スポーツ医学

法学部

教官	題目
西尾　勝	日本の行政
六本佳平	日本の社会と法の研究－英語文献講読

医学部

教官	題目
岩本愛吉	医学のための基礎分子生物学
鈴木紀夫	実験腫瘍学II
関　直彦	力動的精神医学概論
太田昌孝	脳と心の科学
高橋國太郎	脳と神経疾患
石塚	神経細胞の形態と相互の結合
石塚	脳の構造とその発生
高橋	脳イオンチャンネルと電気的興奮性
本郷	神経回路の働き
佐々木	指向運動と認識
Saffen	シナプス可塑性と記憶の分子機構
額田	神経細胞の会話
岡本	神経系発生のしくみ
中野	人脳の異常と形態変化
井原	アルツハイマー病
金沢	異常運動のメカニズム
楠	神経疾患と自己抗体

工学部

教官	題目
玉井信行	東京のインフラストラクチャー
大垣眞一郎	水環境と都市
下山　勲	6809を用いたマイクロコンピュータ実習
下山　勲	人間と機械
高野政晴	人・工・学－精密機械工学入門
大和裕幸	海と船の科学
荒川義博	飛行機とロケット
大崎博之	電気・電子工学入門
大崎	ガイダンス・電気電子工学科の概要
広瀬	音声言語によるマン・マシン・インターフェイス
西永	アトムを見ること、並べること
曽根	交通システムの技術と都市生活
相田	コンピュータネットワーク
河東田	半導体の評価技術－レーザラマン分光を中心として
小田	静電気工学の現状と将来展望
神谷	超高速光・半導体デバイスの物理
羽鳥	PCM
堀	制御のはなし
中野	半導体レーザと光集積回路
浅田	ASIC
関根	電力システムの発達
原島	ヒューマンコミュニケーション工学への道
水沢	サラリーマン通信技術者に要求される能力と体験
五神　真	量子工学入門
山崎弘郎	インテリジェントな認識と行動のシステム
山崎	生物感覚器とセンサ技術
安藤	視覚センサと聴覚センサ
森下	パターン認識と学習機能
出口	コンピュータビジョン（機械による情景の理解）
鈴木	手の動きと手による理解
中野	脳の情報処理機構のモデリング
北森	制御のメカニズムと方法
藤村	遠隔計測（リモートセンシング）
石川	触覚を作る
吉澤	脳機能の無侵襲計測
石井	音を利用した測定
大橋弘忠	量子からシステムへ
大橋	新しい光
勝村	量子ビームの利用
井上	核融合の話
田中	核量子エネルギーの利用と機能性材料
高橋	物質の持つ放射能
Harald Bolt	We need YOU to solve the energy Problem:FUSION
古田	認知工学とは何か
岡	原子力発電のしくみと安全設計
石井	量子ビームと物質のかかわりあい
井口	量子を見る、聞く、感じる！
安	現代のピラミッド：高レベル放射性廃棄物処分場
吉村	ネットワークコンピューティングの拓く未来

正路徹也	地球に生きる
正路	ガイダンス
正路	地球物質の循環と資源
大久保	TBM（トンネル掘進機）
島田	資源の供給評価
登坂	油田形成のシナリオ
田中	10000mを掘る
六川	地球の科学と工学
山冨	軟弱地盤を支える
井上	鉱石の分離・回収技術
石谷	エネルギーモデルと最適化手法
石井	有限地球観と資源・エネルギー
正路	まとめ
宮沢薫一	夢に挑む材料学
奥原敏夫	応用化学研究法
藤嶋　昭	分子・物性工学とハイテク技術
澤田嗣郎 本間　格	化学システム工学－エネルギー・物質・情報のEngineering
熊谷　泉	生命工学
小宮山宏	地球環境工学入門
登坂博行	総合試験所セミナー第Ⅰ－体験的工学入門－
新井民夫	41SI18Bからのメッセージ

文学部

教官	題目
戸川芳郎	文化・学術・制度－試論日中比較－
狩野千秋	アメリカ大陸の古代都市文明
尾上圭介	日本語の文法と意味
藤井省三	1920年代の都市と文学－エロシェンコと東京・上海・北京
池内　紀	旅の文学

理学部

教官	題目
松本幸夫	幾何学とモース理論
俣野　博	変分法入門
斎藤　毅	整数論
田隅三生	化学における新しい研究の動向
田隅	全学ゼミについて、分子分光学と化学
岩澤	化学反応のしくみ
近藤	簡単な分子のダイナミックス
奈良坂	有機化学における右と左
岩村	有機化合物に磁性をもたせる
橘	化学による自然の理解
岡崎	有機ヘテロ原子化学の最近の動向
富永	大気の地球化学
小間	分子ビームによる新物質の合成
齋藤	金属クラスター錯体
石川　統	動物科学のフロンティア'91
東江昭夫	植物科学の最前線
鳥海光弘	地球と生命の進化

農学部

教官	題目
池庄司敏明	昆虫の科学
池庄司	昆虫と人間の係わり
小林	昆虫の構造と機能
山根	昆虫と森林
鈴木	昆虫の脳神経ホルモン
加賀	水性昆虫の生活
古田	昆虫の天敵
石川	昆虫の季節適応
島田	昆虫の分子遺伝学
永田	昆虫の休眠・変態
土崎	植物の病気を伝搬する昆虫
田付	昆虫同種異種間の化学信号
矢野俊正	食品工学入門
森　謙治	有機合成化学入門
室伏　旭	天然物と生物活性
魚住武司	微生物とバイオテクノロジー
鈴木和夫	森林生態系と環境
永田　信	森林環境と人間活動
会田勝美	海と生物
会田	魚類の成熟と産卵
谷内	魚類の分類と進化
日野	つくり育てる漁業(1)
日野	つくり育てる漁業(2)
山口	プランクトンの化学と利用
渡部	魚介類筋肉の生化学
福代	有毒赤潮プランクトンの生態
鈴木	魚は水に棲む－生理学の立場から
二村	海洋における低次生物生産
野口	魚介類の毒
村上	微細藻類の産生する生理活性物質
伏谷	海洋生物のケミカルコミュニケーション
清水	水産資源と環境
会田	魚類の回遊とホルモン
蔵田憲次	食糧・エネルギー・国土環境
見上　彪	高等動物の比較生物学
菅野　茂	日本の家畜・日本の畜産
石津　敦	木材と生活
大熊幹章	木材と住宅

経済学部

教官	題目
柴田徳太郎	転期に立つ現代資本主義

教育学部

教官	題目
長澤雅男	文献と情報の探索

薬学部

教官	題目
佐藤能雅	総合的な生命科学としての薬学
関水	DNAのトポロジー変化による遺伝子発現の制御
小林	触媒的不斉合－有機化学的、生化学的手法の開発
嶋田	タンパク質の〝形〟、〝ゆらぎ〟そして〝はたらき〟
豊島	免疫応答に関わる物質－薬学研究のターゲット
杉山	脳内への薬物送達のための戦略：血液－脳関門とは何か？
遠藤	発癌プロモーション過程の有機化学的研究
松木	くすりの正しい認識－薬効評価の難しさ
海老塚	薬用植物とバイオテクノロジー
板井	コンピュータは薬物の設計において何ができるか
工藤	即時型アレルギーの機構を説明し、有効な医薬品を考える
中村	極限分析法の開発と生命科学への展開
小野	脳と薬物
矢野	生物的システムと情報
長野	フリーラジカルと生体

医科学研究所

教官	題目
吉田光昭	
豊田	初期胚に由来する多分化能細胞－胚性幹細胞
片山	分子の動きを電子顕微鏡で見る
笹川	ヒト細胞へ侵入する病原細菌
小澤	遺伝子導入法の分子医学への応用：病態解析から遺伝子治療まで
高崎	細胞分化と糖タンパク質
金井	核酸と自己免疫疾患
山内	スローウイルス感染
北	分子から見た寄生虫
池田	染色体の構造はいかに保たれるか
服部	肝特異的遺伝子の発現制御機構について
山本	遺伝子から見る癌
渡邉	成人T細胞性白血病（ATK）に合併する高カルシウム血症の病態と分子機構
榊	遺伝病の分子遺伝学
横田	サイトカインおよびそのレセプター構造と機能

生産技術研究所

教官	題目
小林敏雄	先端科学技術と大学研究所
荒木孝二	人と化学のかかわり合い－人にやさしい化学を目指して

地震研究所

教官	題目
島崎邦彦	地震の震源：断層を探る
島崎	地震の震源を追って
山下	震源の数理モデル
松田	断層をみる：断層を追って
阿部	地震波からみた断層運動
都司	津波からみた断層像
池田	活断層がつくる地形
太田	断層と地震災害
島崎	活断層の過去を探る：別府湾での海底断層調査
脇田	地中ガスが伝える活断層の動き
大中	実験室で再現される断層運動：断層破壊を律する構成法則は存在するか？
嶋本	断層の深部を探る

応用微生物研究所

教官	題目
瀬戸治男	バイオテクノロジーに何が期待できるか？

原子核研究所

教官	題目
橋本　治	
野村	原子核物理と宇宙における元素合成
山田	素粒子物理学の最前線
山崎	エグティックな素粒子原子
橋本	原子核物理の新時代
奥野	放射線を測る
鵜飼	実験を支えるコンピュータ
西川	素粒子物理と宇宙
片山	原子と原子核の接点
柴田	放射線の学際利用
関口	加速器の原理
田辺	見学と実習
片山	サイクロトロンと重イオン蓄積リング
吉田	見学と実習
新井	電子シンクロトロン、放射光施設 重イオン線形加速器

東洋文化研究所

教官	題目
末成道男	人類学から見る中国社会

社会科学研究所

教官	題目
小森田秋夫	社会主義とは何か？－その歴史と現在
和田	思想・運動としての社会主義から体制としての社会主義へ
和田	ロシア革命と国家社会主義の成立－レーニンとスターリン
岩田	ユーゴスラヴィア自主管理社会主義の模索と挫折
山内	社会主義と民族
塩川	ペレストロイカと政治システム転換
二瓶	ペレストロイカにおける経済構造の転換
近藤	中国の革命・社会主義・現代化－毛沢東・周恩来から鄧小平へ
田嶋	12億人民と中国経済の挑戦
田中	中国における法治主義
加藤	現代における社会民主主義の諸相
広渡	「ふたつのドイツ」から「ひとつのドイツ」へ
小森田	ポーランド「連帯」の軌跡

新聞研究所

教官	題目
吉見俊哉	メディア時代の大衆文化

史料編さん所

教官	題目
黒田日出男	絵画史料論

先端科学技術研究センター

教官	題目
廣松　毅	科学技術と社会
伊藤良一	先端材料の世界
松原	超硬質材料の合成と評価
岸	セラミックスおよびその複合材
武田	先端複合材料－テニスラケットからスペースプレーンまで－
二木	老化の化学－生物は何故年をとるか－
宮山・松原	先端研見学会（セラミックス、バイオ等）
O.Chen	What materials do we uce in gas turbine engines?
崔	ゾルゲル法によるセラミックスの合成とその物性
柳田	機能性セラミックス
宮山	セラミックス材料の電気的機能
堀江	高分子系の高密度光メモリー（PHB）
白木	半導体超格子－ピンセットで原子を並べる－
狩野	非線型光学材料と情報処理
伊藤	半導体レーザと非線型光学
白木	先端研見学会（プロセスセンター等）
山本	地球環境問題と材料
大須賀節雄	先端科学技術研究の動向

II総合コース

教官	題目
平川祐弘	比較日本文化論
平川(仏語)	序論　ヴィクトリア朝の倫理と明治の倫理
川本(英語)	内と外からの日本文学－三島由紀夫の評価を中心に
延廣(国漢)	近世はいかにして近代に変わったか
小堀(独語)	国語醇化の思想
松岡(国漢)	婆娑羅の時代
Smith（コロンビア大学）	江戸の絵画における西洋遠近法
芳賀(仏語)	「近代化」の中の桃源郷－『草枕』から『村の名前』まで
鳥海(歴史)	明治日本から見たイギリスとフランス
三谷(歴史)	国際関係のイメージ－幕末・現代・インド
Hughes（文学部）	ラフカディオ・ハーンと世紀末
大澤(英語)	三島文学における独白と対話－近代能楽集をめぐって
芳賀(仏語)	西洋人の日本研究－歴史学の分野を中心に
神野志(国漢)	日本神話研究の方法をめぐって
竹内(仏語)	日本文化の建設者たち
滝田佳子	性差文化論
新倉(仏語)	プレゼンテーション
滝田(英語)	
工藤(仏語)	
下條(心理)	
渡邊(仏語)	表現としての性
下條	認知・神経科学から見た性
舘(お茶の水女子大学)	ジェンダーと自己形成ⅠおよびII
池内(文学部)	制度としての性ⅠおよびII
丹野(教育学)	女性のライフ・サイクルと身体の心理学
Babbits(フルブライト交換教授)	アメリカにおけるフェミニズム
田中(法政大)	江戸の性文化
長崎(歴史)	アジアの女性Ⅰ
長崎(歴史)	アジアの女性II
小林(仏語)	身体と他者
滝田(英語)	ディスカッション
下條(心理)	
工藤(仏語)	
北川(独語)	
平川祐弘	比較日本文化論
芳賀(仏語)	近代の中の桃源郷－『草枕』から『村の名前』まで
川本(英語)	明治期の西洋詩の翻訳
延廣(国漢)	江戸の文化の形成過程
松岡(国漢)	中世の音を聴く
仙北台(武蔵大)	竹山道雄の日本
Hughes（文学部）	仲介者としてのラフカディオ・ハーン
三谷(歴史)	比較史上の明治維新
滝田(英語)	荷風・武郎とアメリカ
吉田(東北大)	蘭学とヒポクラテス医学
義江(歴史)	浄土信仰の日本的特質
小堀(独語)	日本文化と西洋文化の出会

崔在喆 (韓国外語大)	日本人文学者の韓国紀行－韓・日相互理解の一方法
大沢(英語)	漱石『こころ』について近代文学と能(3)
平川(仏語)	漱石と魯迅－その留学体験の明暗
菅原正	自然科学のフロンティア ―今、基礎科学では―
菅原	ガイダンス
高橋	カオスとは何か、その数理学的基礎
金子	計算機シミュレーションによるカオスの物理
山内	励起分子を通してみた量子カオス
菅原	分子や物質はデザインできるか
鹿児島	低次元物質の不思議
小宮山	メソスコピックな物性とは
楠見	細胞膜の動的な機能構造デザイン
須藤	ナノメーターマシン：タンパク質
川喜田	遺伝子の変異を通して細胞機能を探る
庄野	マクロな生命現象のミクロな理解
馬渕一誠	自然科学(一般)*「かたち」
馬渕(生物)	ガイダンス
川合 (情報図形)	形の表現と表示
中村 (情報図形)	関係の形－グラフ
金子(物理)	パターンの物理
伊豆山(物理)	雪と針状結晶、フラクタルの世界。アモルファスって何だろう。
伊豆山(物理)	膜の形の今どきの物理
小牧(物理)	結晶の構造を見る
米谷(物理)	素粒子物理における目には見えない形
江里口 (宇宙地球)	天体の形とそれを決める要因
鳥海(地質)	固体地球の流れと多結晶体の構造
岩本(化学)	錯体の構造
綿秋(化学)	結晶とケイ酸塩の形と構造
小林(化学)	有機化合物の形
林(化学)	コラーゲンと生物
矢原(生物)	花はなぜいろいろな形をしているか
松田(生物)	細胞の形と組織の形
古田(数学)	4次元空間のかたち
橋本 (科史科哲)	科学史、技術史におけるイメージとグラフの役割

＊一般教養科目

後期課程カリキュラム

教養学科と基礎科学科への進学に必要な「一般教育等」の単位を満たし、進学振り分けによって教養学部後期課程への進学を許された学生は、教養学科第一(総合文化)、教養学科第二(地域文化)、教養学科第三(相関社会科学)、基礎科学科第一(相関基礎科学)、基礎科学科第二(システム基礎科学)のうち、それぞれの所属する学科の定める科目と単位に従って二年間の勉学を行なう。

卒業に必要とされる単位は、いずれも84単位以上である。単位の取得は原則として各学期末、学年末の試験によるが、教養学科と基礎科第二ではレポートまたは平常点で代えることも認められている。基礎科第一ではレポートは認められるが、平常点による評価は認められていない。成績の評価は優、良、可、不可の4段階からなり、不可はいうまでもなく不合格を意味する。後期課程の在学年数は四年を超えることができない。教養学科では卒業論文10単位が必修となっているが、特定の分科の枠に閉じこもることのないよう、「副専攻」のシステムがあることを書きそえておく。

カリキュラムと授業内容は「教養学部便覧II」、「ガイダンスの手引き」に詳しく触れられており、教養学科と基礎科学科第二は独自の「授業内容」を学生に配布している。科目名は表に示されている通りである。後期課程では、いずれも《late specialization》を理念として掲げ、人文科学、社会科学、自然科学の基本的知見を身につけ、研究者にも社会人にも適した理論的な思考と実践的な訓練の深化を目標として、少数精鋭主義による学生と教官とのきめこまかな交流が積極的にはかられている。

後期課程

1．共通科目「教養学科第一(総合文化)教養学科第二(地域文化)教養学科第三(相関社会科学)」

群	科目	単位数	必修単位数				
			教養学科第一			教養学科第二	教養学科第三
			文化人類学 人文地理学 人間行動学	表象文化論 比較日本文化論	科学史及び科学哲学		
1	ギリシア・ローマ思潮	2〜4	4	4	4	4	4
	キリスト教思潮	2〜4					
	近代思想	2〜4					
	イスラム思潮	2〜4					
	東洋思潮	2〜4					
	日本思想史	2〜4					
2	比較文学	2〜4		4			
	比較文化	2〜4					
	日本の文学	2〜4					
	日本文化論	2〜4					
	記号論	2〜4					
	表象文化史	2〜4					
	表象文化基礎論	2〜4					
3	人間行動学	2					
	認知発生論	2					
	言語と人間	2〜4					
	文化人類学	2					
	民族学	2〜4					
	人文地理学	2			4		
4	科学史	2〜4					
	科学基礎論	2〜4					
	現代科学論	2〜4					
	コンピュータ入門	2〜4					
	コンピュータ実習	2〜4					
5	地域文化研究基礎論	2〜4				8	
	地域文化相関論	2〜4					
	地域文化と地理	2〜4					
	地域研究論 I	2〜4					
	地域研究論II	2〜4					
	地位研究論III	2〜4					
6	社会科学方法論 I	2					
	社会科学方法論II	2					
	統計 I	2					
	統計II	2					
	文化の社会科学	2					
	社会哲学	2					
7	法学 I	2〜4					
	法学II	2〜4					
	法学III	2〜4					
	政治学理論	2〜4					
	経済数学入門	2〜4					
	経済学理論 I	2〜4					
	経済学理論II	2〜4					
	社会学理論	2〜4					
1群から7群のうち			8	8	4	4	4
合　計		38-156	20	20	20	20	20

2．外国語科目

科目	必修単位数		
	教養学科第一	教養学科第二	教養学科第三
英語 フランス語 ドイツ語 ロシア語 中国語 スペイン語 ポルトガル語 イタリア語 ギリシア語 ラテン語 その他の外国語	12 (2ヵ国語以上)同一外国語6単位以上を含む。	14 (2ヵ国語以上)第1外国語10単位以上を含む。ただし、「アジアの文化と社会」においては、同一外国語8単位以上、「中南米の文化と社会」においては、第1外国語以外にポルトガル語2単位以上を含む。	12 (2ヵ国語以上)

〔備考〕 教養学科第二(地域文化)の分科課程ごとの第1外国語は次のとおりとする。
「アメリカの文化と社会」及び「イギリスの文化と社会」 英語
「フランスの文化と社会」 フランス語
「ドイツの文化と社会」 ドイツ語
「ロシアの文化と社会」 ロシア語
「中南米の文化と社会」 スペイン語

3．教養学科第一(総合文化)分科課程科目

(1)文化人類学

科目	単位数			必修
	講義	演習	実験・実習	単位数
文化人類学基礎編	2			2
自然人類学	2			2
人類学実験			2	2
先史人類学	4			4
言語人類学	4			4
民族学	4			4
文化人類学野外実習 I			2	2
文化人類学野外実習II			2	2
文化人類学理論 I	2			
文化人類学理論II	2			8 演習2単位を含む。
地域民族誌 I	2			
地域民族誌II	2			
社会の構造	2			
応用人類学	2			
日本文化研究 I	2〜4			
日本文化研究II	2〜4			
野外実習方法論	2			
文化人類学演習		2〜4		
特殊講義	2〜8			
合計	36〜46	2〜4	6	30

(2)人文地理学

科目	単位数			必修
	講義	演習	実験・実習	単位数
人文地理学	2			2
地域論・地域分析及び実習	2		2	4
自然環境論・環境研究及び実習	2		2	4
地図学及び実習	2		2	4
人文地理学演習		2		2
人文地理学野外実習			4	4
社会経済地理学	2〜4			6
文化地理学	2			
都市地域論	2〜4			
農村地域論	2〜4			
人口論・人口分析	2〜4			
資源・エネルギー論	2			
応用地理学	2			
比較風土論	2			4
日本地誌及び演習	2	2		
世界地誌及び演習	2〜6	2		
特殊講義	2〜8			
特殊研究演習		2〜4		
特殊研究実習			2〜4	
合計	30〜48	8〜10	12〜14	30

(3)人間行動学

科目	単位数			必修
	講義	演習	実験・実習	単位数
人間行動学基礎論	4			4
認知行動論	4			4
行動学実験法	2			2
行動評定法	2			2
人間行動学実験			4	4
人間行動学特殊研究実験			2	2
行動発達論 I	2〜4			12 演習2単位以上を含む。
行動発達論 II	2〜4			
比較認知論 I	2〜4			
比較認知論 II	2〜4			
神経行動学 I	2〜4			
神経行動学 II	2〜4			
認知発生論 I	2〜4			
認知発生論 II	2〜4			
特殊講義	2〜8			
特殊研究理論		2〜4		
人間行動学演習 I		2		
人間行動学演習 II		2		
認知発生論演習 I		2		
認知発生論演習 II		2		
神経行動学演習 I		2		
神経行動学演習 II		2		
合計	30〜52	14〜16	6	30

(4)表象文化論

科目	単位数			必修
	講義	演習	実験・実習	単位数
表象文化基礎論	4			4
表象文化構造・機能論	2			2
表象文化構造・機能論実習			2	2
表象文化相関論	2			2
表象文化相関論実習			2	2
表象文化史	4			4
舞台芸術論	2〜4			14 演習2単位以上を含む。
造形空間芸術論	2〜4			
音響芸術論	2〜4			
映像芸術論	2〜4			
言語芸術論	2〜4			
表象文化論特殊講義	2〜4			
表象文化基礎論演習		2		
表象文化構造・機能論演習		2		
表象文化相関論演習		2		
表象文化史演習		2		
表象文化論特殊研究演習		2〜4		
合計	24〜36	10〜12	4	30

(5)比較日本文化論

科目	単位数			必修
	講義	演習	実験・実習	単位数
比較日本研究基礎論	4			4
日本文化交流基礎論	2			2
日本文化交流基礎演習		2		2
比較日本文化論	4			4
比較日本文化論基礎演習		2		2
日本社会論	4			4
日本文化交流論 I	2			12 演習4単位以上を含む。
日本文化交流論 II	2			
日本伝統社会論	2〜4			
日本の生活文化	2〜4			
日本比較文学	2〜4			
日本の言語文化 I	2			
日本の言語文化 II	2			
日本の思想	2			
比較日本文化の特殊講義	2〜8			
日本文化交流論演習		2		
比較日本文化論演習		2		
日本の生活文化演習		2〜4		
日本比較文学演習		2〜4		
日本社会論演習		2〜4		
日本の言語文化演習 I		2		
日本の言語文化演習 II		2		
比較日本文化資料研究 I		2		
比較日本文化資料研究 II		2		
比較日本思想演習		2		
比較日本文化特殊研究演習		2〜8		
合計	32〜44	26〜38		30

(6)科学史及び科学哲学

科目	単位数			必修単位数
	講義	演習	実験・実習	
科学史概論	2〜4			16 演習4単位以上を含む。
科学史第1	2〜8			
科学史第2	2〜8			
科学史演習		2〜4		
科学哲学概論	2〜4			
科学哲学第1	2〜8			
科学哲学第2	2〜8			
科学哲学演習		2〜4		
科学思想史及び演習	2〜4	2〜4		
科学社会学及び演習	2〜4	2〜4		
科学史特論 I	2〜4			
科学史特論 II	2〜4			
科学哲学特論 I	2〜4			
科学哲学特論 II	2〜4			
数学	2〜8			10
物理学	2〜8			
化学	2〜8			
生物学	2〜8			
技術史	2			2
技術論	2			
宇宙進化史	2			
資源論	2			
特殊講義	2			
特殊研究理論		2		2
自然科学実験実習			2	
合計	42〜106	10〜18	2	30

4. 教養学科第二（地域文化）分科課程科目

(1)アメリカの文化と社会

科目	単位数		必修単位数
	講義	演習	
[講義]			
アメリカの歴史	4		4
アメリカの文学	4		4
アメリカの思想	2〜4		2
アメリカの政治・経済	4		4
アメリカの地理	2〜4		2
[特殊講義]			
アメリカ現代史	2〜4		4
アメリカの外交	2〜4		
アメリカの法律	2〜4		
アメリカの宗教	2〜4		
アメリカの社会	2〜4		
アメリカの大衆文化	2〜4		
アメリカの芸術	2〜4		
米州関係論	2		
特殊講義	2〜8		
[演習]			
アメリカの歴史演習		2〜4	10 [演習] 4単位を含む。
アメリカの思想演習		2〜4	
アメリカの政治演習		2〜4	
アメリカの経済演習		2〜4	
アメリカの文学演習 I		2〜4	
アメリカの文学演習 II		2〜4	
アメリカの地理演習		2〜4	
[特殊研究・特殊演習]			
アメリカの外交演習		2〜4	
アメリカの法律演習		2〜4	
アメリカの社会演習		2〜4	
アメリカの言語演習		2〜4	
特殊研究演習		2〜8	
論文指導		4	
合計	34〜58	28〜56	30

(2)イギリスの文化と社会

科目	単位数		必修単位数
	講義	演習	
[講義]			
イギリスの歴史	4		4
イギリスの文学	4		4
イギリスの思想	4		4
ヨーロッパの政治・経済	4		4
[特殊講義]			
イギリスの言語	2〜4		4
イギリスの演劇	2〜4		
イギリスの芸術	2〜4		
イギリスの社会	2〜4		
イギリスの政治	2〜4		
イギリスの経済	2〜4		
ヨーロッパの地理	2〜4		
英連邦論	2〜4		
特殊講義	2〜8		
[演習]			
イギリスの思想演習		2〜4	10 [演習] 4単位を含む。
イギリスの文学演習 I		2〜4	
イギリスの文学演習 II		2〜4	
イギリスの歴史演習		2〜4	
イギリスの社会演習		2〜4	
[特殊研究・特殊演習]			
イギリスの政治演習		2〜4	
イギリスの経済演習		2〜4	
イギリスの文化演習		2〜4	
イギリスの文学特殊研究		2〜4	
イギリスの思想特殊研究		2〜4	
特殊研究演習		2〜8	
論文指導		4	
合計	34〜56	26〜52	30

(3)フランスの文化と社会

科目	単位数		必修単位数
	講義	演習	
[講義]			
フランスの歴史	4		4
フランスの文学	4		4
フランスの思想	4		4
ヨーロッパの政治・経済	4		4
[特殊講義]			
フランスの社会	2〜4		4
フランスの言語	2〜4		
フランスの演劇	2〜4		
フランスの芸術	2〜4		
ヨーロッパの地理	2〜4		
フランス文学特論	2〜4		
特殊講義	2〜8		
[演習]			10 [演 習] 4 単位を含む。
フランスの思想演習		2〜4	
フランスの文学演習		2〜4	
フランスの言語演習		2〜4	
フランスの社会演習		2〜4	
[特殊研究・特殊演習]			
フランスの芸術演習		2〜4	
フランスの経済演習		2〜4	
フランスの政治演習		2〜4	
フランスの地理演習		2〜4	
フランスの文学特殊研究		2〜4	
フランスの思想特殊研究		2〜4	
特殊研究演習		2〜8	
論文指導		4	
合計	30〜48	26〜52	30

(4)ドイツの文化と社会

科目	単位数		必修単位数
	講義	演習	
[講義]			
ドイツの歴史	4		4
ドイツの文学	4		4
ドイツの思想	4		4
ヨーロッパの政治・経済	4		4
[特殊講義]			
ドイツの社会	2〜4		4
ドイツの言語	2〜4		
ドイツの法制	2〜4		
ドイツの音楽	2〜4		
ドイツの芸術	2〜4		
ヨーロッパの地理	2〜4		
特殊講義	2〜8		
[演習]			10 [演 習] 4 単位を含む。
ドイツの歴史演習		2〜4	
ドイツの文学演習		2〜4	
ドイツの思想演習		2〜4	
ドイツの社会演習		2〜4	
[特殊研究・特殊演習]			
ドイツの言語演習		2〜4	
ドイツの社会思想演習		2〜4	
ドイツの音楽演習		2〜4	
ドイツの文化演習 I		2〜4	
ドイツの文化演習 II		2〜4	
特殊研究演習		2〜8	
論文指導		4	
合計	30〜48	24〜46	30

(5)ロシアの文化と社会

科目	単位数		必修単位数
	講義	演習	
[講義]			
ロシア・ソビエトの歴史	4		4
ロシア・ソビエトの文学	4		4
ソ連・東欧の社会	4		4
ソ連・東欧の政治・経済	4		4
[特殊講義]			
ロシアの思想	2〜4		4
東欧の歴史	2〜4		
東欧の言語文化	2〜4		
ロシア・ソビエトの言語	2〜4		
ロシア・ソビエトの芸術	2〜4		
ソ連・東欧の地理	2〜4		
ソ連・東欧の宗教	2〜4		
中央アジア地域文化研究	2〜4		
特殊講義	2〜8		
[演習]			10 [演 習] 4 単位を含む。
ロシア・ソビエトの文学演習		2〜4	
ロシア・ソビエトの言語演習		2〜4	
ソ連・東欧の政治演習		2〜4	
ソ連・東欧の経済演習		2〜4	
ソ連・東欧の社会演習		2〜4	
中央アジア地域文化研究演習		2〜4	
[特殊研究・特殊演習]			
ロシアの思想特殊研究		2〜4	
東欧の言語文化特殊研究		2〜4	
特殊研究演習		2〜8	
論文指導		4	
合計	34〜56	22〜44	30

(6)アジアの文化と社会

科目	単位数		必修単位数
	講義	演習	
[講義]			
アジアの歴史と文化	4		4
アジアの政治と経済	4		4
アジアの地理と民族	4		4
[特殊講義]			
東アジア近代史	2〜4		8
東アジア近代思想	2〜4		
東アジア近代文学	2〜4		
東南アジア近代史	2〜4		
東南アジア地域文化研究	2〜4		
南アジア近代史	2〜4		
南アジア地域文化研究	2〜4		
中東近代史	2〜4		
中東地域文化研究	2〜4		
中央アジア地域文化研究	2〜4		
特殊講義	2〜8		
[演習]			
東アジア地域研究演習 I		2〜4	10 [演習] 4 単位を含む。
東アジア地域研究演習 II		2〜4	
東南アジア地域研究演習		2〜4	
南アジア地域研究演習		2〜4	
中東地域研究演習		2〜4	
中央アジア地域文化研究演習		2〜4	
[特殊研究・特殊演習]			
朝鮮地域特殊研究		2〜4	
中国地域特殊研究		2〜4	
インドシナ地域特殊研究		2〜4	
インド地域特殊研究		2〜4	
アラブ地域特殊研究		2〜4	
特殊研究演習		2〜4	
論文指導		4	
合計	34〜60	28〜56	30

(7)中南米の文化と社会

科目	単位数		必修単位数
	講義	演習	
[講義]			
中南米の歴史	4		4
中南米の文化	4		4
中南米の政治	4		4
中南米の経済	4		4
[特殊講義]			
中南米の地理	2〜4		4
中南米の言語	2〜4		
中南米の思想	2〜4		
中南米の文学	2〜4		
中南米の民族と社会	2〜4		
米州関係論	2〜4		
イベリア半島の歴史	2〜4		
特殊講義	2〜8		
[演習]			
中南米の歴史演習		2〜4	10 [演習] 4 単位を含む。
中南米の文化演習		2〜4	
中南米の政治経済演習		2〜4	
[特殊研究・特殊演習]			
中南米の言語演習		2〜4	
中南米の思想演習		2〜4	
中南米の文学演習		2〜4	
中南米の民族と社会演習		2〜4	
特殊研究演習		2〜8	
論文指導		4	
合計	32〜52	20〜40	30

5. 教養学科第三(相関社会科学)分科課程科目

(1)相関社会科学

科目	単位数			必修
	講義	演習	実験・実習	単位数
相関社会科学入門	4	2		6
現代社会論	4	2		6
意思決定論 I	2			10
意思決定論 II	2			
社会意識論 I	2			
社会意識論 II	2			
社会工学 I	2			
社会工学 II	2			
社会統計分析	4			
社会調査法	4			
組織理論 I	2			
組織理論 II	2			
社会体制論 I	2			
社会体制論 II	2			
体制変動論	2			
日本社会研究 I	2			
日本社会研究 II	2			
環境社会科学 I	2			
環境社会科学 II	2			
社会経済史	2			
特殊講義	2〜4			
意思決定論演習		2〜4		8
社会意識論演習		2〜4		
社会工学演習		2〜4		
組織理論演習		2〜4		
社会体制論演習		2〜4		
日本社会論演習		2〜4		
現代社会分析演習		2〜6		
社会調査法実習			2〜4	
特殊研究演習		2〜4		
特殊研究実験			2〜4	
特殊研究実習			2〜4	
合計	50〜52	20〜38	6〜12	30

(2)国際関係論

科目	単位数			必修
	講義	演習	実験・実習	単位数
国際政治	4	2		6
国際法	4	2		6
国際経済	4	2		6
国際関係史 I	2			4
国際関係史 II	2			
国際体系 I	2			
国際体系 II	2			
国際文化 I	2			
国際文化 II	2			
国際機構 I	2			
国際機構 II	2			
世界モデル I	2			
世界モデル II	2			
経済発展	2			
国際経営	2			
特殊講義	2〜4			2
国際関係史演習		2〜4		6
国際体系演習		2〜4		
国際文化演習		2〜4		
国際機構演習		2〜4		
世界モデル実習			2〜4	
特殊研究演習		2〜4		
特殊研究実験			2〜4	
特殊研究実習			2〜4	
合計	38〜40	16〜26	6〜12	30

6. 選修科目

科目	単位数	
	講義	演習
ギリシア文学	2〜8	
ラテン文学	2〜8	
古代神話学	2〜8	
比較文学比較文化特論	2〜8	
言語学	2〜8	
西欧中世思想	2〜8	
社会科教育	4	
理科教育	4	
比較文学比較文化演習		2〜8
合計	20〜56	2〜8

7. 基礎科学第一（相関基礎科学）科目

(1)第 I コース　第 II コース共通必修科目

科目	単位数			合計
	講義	演習	実験	
解析 I	2	1		3
解析 II	2	1		3
電磁気学光学 I	2	1		3
量子力学 I	2	1		3
統計熱力学 I	2	1		3
無機化学 I	2			2
有機化学 I	2			2
分子科学概論	2			2
協関生物学 I	2			2
基礎科学実験学		2		2
基礎科学実験 I			6	6
基礎科学実験 II			2	2
基礎科学特別研究			8	8
外国語論文講読 I	2			2
外国語論文講読 II	2			2
外国語論文講読III	2			2
合計	24	7	16	47

(2)第 I コース必修科目

科目	単位数		合計
	講義	演習	
※解析III	2		2
代数学	2	1	3
電磁気学光学 II	2		2
量子力学 II	2	1	3
※統計熱力学 II	2		2
固体物理学 I	2		2
※固体物理学 II	2		2
※電子工学 I	2		2
合計	16	2	18
(第 I コース必修単位合計)	(12)	(2)	(14)

備考　※印の科目については2科目4単位を選択必修とする。

(3)第 II コース　必修科目

科目	単位数		合計
	講義	演習	
分子分光学 I	2		2
※物理化学演習 I		1	1
※物理化学演習 II		1	1
有機化学 II	2		2
生化学 I	2		2
分子生物学 I	2		2
合計	8	2	10
(第 II コース必修単位合計)	(8)	(1)	(9)

備考　※印の科目については、1科目単位を選択必修とする。

(4)選択科目

科目	単位数		合計
	講義	演習	
解析Ⅳ	2	1	3
解析Ⅴ	2	1	3
確率統計	2	1	3
分子構造論	2		2
電子工学II	2		2
流体力学・弾性学	2		2
放射化学	2		2
原子核物理学	2		2
量子力学III	2		2
固体物理学III	2		2
結晶学特論	2		2
無機化学II	2		2
物理化学特論Ⅰ	2		2
物理化学特論II	2		2
有機化学特論Ⅰ	2		2
有機化学特論II	2		2
有機化学III	2		2
物理化学特論III	2		2
化学反応論	2		2
物性化学	2		2
分子分光学II	2		2
生化学II	2		2
生化学III	2		2
分子生物学II	2		2
協関生物学II	2		2
協関生物学III	2		2
生体構造論	2		2
特殊講義Ⅰ～XII	1～2		1～2
数学教育	4		4
理科教育	4		4

備考　数学教育、理科教育は卒業に要する単位を加えることができない。

(5)共通選択科目

科目	単位数		合計
	講義	演習	
解析学Ⅰ	2		2
解析学II	2		2
物理学II	2		2
現代物理学	2		2
化学II	2		2
生物科学	2		2
工学	2		2

備考　1．この共通選択科目は、前期課程に開設される科目である。
2．この共通選択科目は、届け出により、1科目2単位に限り卒業に要する単位に認定する。

(6)外国語Ⅰ　英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語のうち1単位。
外国語II　英語、フランス語、ドイツ語　ロシア語のうち1単位。

8．基礎科学科第二(システム基礎科学)科目

必修科目、選択科目

科目	単位数			必修
	講義	演習	実験・実習	単位数
システム基礎数学Ⅰ	2			2
システム基礎数学II	2			
システム基礎数学III	2			
システム基礎数学演習		1		1
システム数理Ⅰ	2			2
システム数理II	2			
システム数理III	2			
システム数理Ⅳ	2			
システム数理演習		1		1
システム数理実習			1	1
情報科学Ⅰ	2			2
情報科学II	2			
情報工学Ⅰ	2			
情報工学II	2			
情報科学実習			1	1
システム理論Ⅰ	2			2
システム理論II	2			
システム理論III	2			
システム理論Ⅳ	2			
システム理論演習Ⅰ		1		1
システム理論演習II		1		
自然システムⅠ	2			4
自然システムII	2			
自然システムIII	2			
自然システムⅣ	2			
自然システムⅤ	2			
非平衡開放システム	2			
非線形システム	2			
自然体系論Ⅰ	2			2
自然体系論II	2			
自然体系論III	2			
自然体系論Ⅳ	2			
複合系計画論Ⅰ	2			2
複合系計画論II	2			
複合系計画論III	2			
複合系計画論Ⅳ	2			
システム測定学Ⅰ	2			2
システム測定学II	2			2
システム基礎科学実験Ⅰ			2	2
システム基礎科学実験II			2	2
システム基礎科学実習Ⅰ			1	1
システム基礎科学実習II			1	
システム理論特論Ⅰ	2			
システム理論特論II				
システム科学特別講義Ⅰ	2			
システム科学特別講義II	2			
システム科学特別講義III	2			
システム科学特別講義Ⅳ	2			
システム科学特別講義Ⅴ	2			
システム科学特別講義Ⅵ	2			
外国語論文講読Ⅰ	2			
外国語論文講読II	2			
外国語論文講読III	2			
外国語	2			
特別研究	10			10
特別演習		6		6
合計	98	10	8	46

備考　外国語は英語、フランス語、ドイツ語及びロシア語のいずれかとする。

(2)共通選択科目

科目	単位数		合計
	講義	演習	
解析学 I	2		2
解析学II	2		2
物理学II	2		2
現代物理学	2		2
化学II	2		2
生物科学	2		2
工学	2		2

備考 1. この共通選択科目は、前期課程に開設される科目である。
2. この共通科目は、届け出により、1科目2単位に限り卒業に要する単位に認定する。

大学院カリキュラム

1） 修士課程

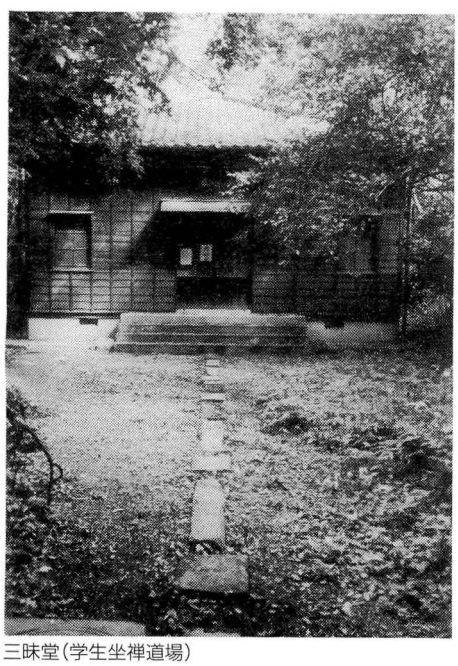
総合文化研究科には、比較文学比較文化、表象文化論、地域文化研究、国際関係論、相関社会科学、文化人類学、広域科学の七つの専攻が置かれている。それぞれの専攻による選抜試験（Ⅲ－1参照）で入学を許された者は、「東京大学大学院学則」の定める第1種課程の学生となる。第1種課程では、修士課程および修士の学位を得た者に対して博士の学位を与える第1種博士課程とを区別する大学院教育が行なわれている。標準修業年限は五年とされている（修士課程二年、第1種博士課程三年）。

修士課程においては、それぞれの学生は指導教官の指示に従い、「総合文化研究科規則」の定める専攻科目のうちから16単位以上を修得し、必要な研究指導のもとに学位論文を執筆し、提出した論文の審査と最終試験に合格すると、学術修士の学位を授与される。カリキュラムと授業内容は「東京大学大学院便覧」と「総合文化研究科授業内容」に詳しく記されている。

2） 第1種博士課程

第1種博士課程への進学（Ⅲ－1参照）を許された者は、指導教授の指示に従い、所定の専攻科目から8単位以上を修得し、修士課程のそれと等しい要件を満たした者には、学術博士の学位が授与され、論文を提出しない場合は満期退学となる。専攻によっては、博士課程在学中に外国の大学に留学して博士（Ph.D.）の学位を取得する者も少なくないが、標準修業年限中に本研究科への学位論文の提出を奨励する方向での指導が行なわれ、その成果が現れ始めている。カリキュラムと授業内容は、修士課程の項目に記された「便覧」と「授業内容」を参照されたい。

以上のごとく、総合文化研究科は、東京大学で初めての本格的な文系・理系横断型の学際的な教育研究組織にふさわしく、研究対象の幅広さと研究方法の多様さによって諸外国の注目を惹き、短期間でPh.D.の学位を取得する本研究科の学生の質の高さが、留学先の大学で等しく認識されるにいたっている。また、修士課程、博士課程に多くの外国人留学生を受け入れており、日本人の大学院学生によるチューター制度も確立している。それが日本人学生の健全な国際性を養い、知的刺激にもなっていることは特筆すべきだろう。



三昧堂（学生坐禅道場）

大学院

別表　修士課程科目表

専攻	授業科目	単位
比較文学比較文化		
	比較文学方法論	4
	比較文学方法論特殊研究	4
	比較文学方法論演習	4
	近代日本比較文学史	4
	近代日本比較文学史特殊研究	4
	近代日本比較文学史演習	4
	比較文化思想	4
	比較文化思想特殊研究	4
	比較文化思想演習	4
	比較哲学基礎論	4
	比較哲学基礎論特殊研究	4
	比較哲学基礎論演習	4
	比較文明論	4
	比較文明論特殊研究	4
	比較文明論演習	4
	日本比較文化史	4
	日本比較文化史特殊研究	4
	日本比較文化史演習	4
	外国文学受容史	4
	外国文学受容史特殊研究	4
	外国文学受容史演習	4
	比較文体論	4
	比較文体論特殊研究	4
	比較文体論演習	4
表象文化論		
	表象文化基礎論	4
	表象文化基礎論特殊研究 I	2
	表象文化基礎論特殊研究 II	2
	表象文化基礎論演習 I	2
	表象文化基礎論演習 II	2
	表象文化構造論	4
	表象文化構造論特殊研究 I	2
	表象文化構造論特殊研究 II	2
	表象文化構造論実験実習	2
	表象文化機能論	4
	表象文化機能論特殊研究 I	2
	表象文化機能論特殊研究 II	2
	表象文化機能論実験実習	2
	表象文化作業論	4
	表象文化作業論特殊研究 I	2
	表象文化作業論特殊研究 II	2
	表象文化作業論実験実習	2
	表象文化史	4
	表象文化史特殊研究 I	2
	表象文化史特殊研究 II	2
	表象文化史演習 I	2
	表象文化史演習 II	2
	表象文化相関論	4
	表象文化相関論特殊研究 I	2
	表象文化相関論特殊研究 II	2
	表象文化相関論演習 I	2
	表象文化相関論演習 II	2
地域文化研究		
	ヨーロッパ地域文化相関論 I	4
	ヨーロッパ地域文化相関論特殊研究 I	4
	現代ヨーロッパ論 I	4
	ヨーロッパ地域文化相関論演習 I	4
	ヨーロッパ地域文化構造論 I	4
	ヨーロッパ地域文化構造論特殊研究 I	4
	ヨーロッパの言語・文化 I	4
	ヨーロッパ地域文化構造論演習 I	4
	ヨーロッパ地域文化相関論 II	4
	ヨーロッパ地域文化相関論特殊研究 II	4
	現代ヨーロッパ論 II	4
	ヨーロッパ地域文化相関論演習 II	4
	ヨーロッパ地域文化構造論 II	4
	ヨーロッパ地域文化構造論特殊研究 II	4
	ヨーロッパの言語・文化 II	4
	ヨーロッパ地域文化構造論演習 II	4
	ヨーロッパ地域文化相関論 III	4
	ヨーロッパ地域文化相関論特殊研究 III	4
	現代ヨーロッパ論 III	4
	ヨーロッパ地域文化相関論演習 III	4
	ヨーロッパ地域文化構造論 III	4
	ヨーロッパ地域文化構造論特殊研究 III	4
	ヨーロッパの言語・文化 III	4
	ヨーロッパ地域文化構造論演習 III	4
	アメリカ地域文化構造論 I	4
	アメリカ地域文化変遷論	4
	アメリカの言語・文化	4
	アメリカの地域文化構造論演習 I	4
	アメリカ地域文化相関論	4
	アメリカ地域文化相関論特殊研究	4
	現代アメリカ論 I	4
	アメリカ地域文化相関論演習	4
	アメリカ地域文化構造論 II	4
	アメリカ地域文化構造論特殊研究	4
	現代アメリカ論 II	4
	アメリカ地域文化構造論演習 II	4
	アジア地域文化構造論 I	4
	アジア地域文化構造論特殊研究 I	4
	現代アジア論	4
	アジア地域文化構造論演習 I	4
	アジア地域文化構造論 II	4
	アジア地域文化構造論特殊研究 II	4
	現代イスラム論	4
	アジア地域文化構造論演習 II	4
	アジア地域文化相関論	4
	アジア地域文化相関論特殊研究	4
	アジアの思想・宗教	4
	アジア地域文化相関論演習	4
国際関係論		
	国際関係史	4
	国際関係史特殊研究	4
	アジア地域国際関係史	4
	国際関係史演習	4
	国際政治関係論	4
	国際政治関係論特殊研究	4
	国際政治行動論	4
	国際政治関係論演習	4
	国際組織論	4
	国際機構論	4
	国際経営論	4
	国際組織論演習	4
	国際体系論	4

	国際体系論特殊研究	4
	世界モデル論	4
	国際体系論演習	4
	国際経済関係論	4
	国際経済関係論特殊研究	4
	国際経済関係論演習	4
	国際文化論	4
	国際社会思想	4
	文化交流論	4
	国際文化論演習	4
	社会主義圏政治論	4
	社会主義圏政治論特殊研究	4
	社会主義圏国際関係論	4
	社会主義圏政治論演習	4
相関社会科学		
	社会科学方法論	4
	社会科学方法論特殊研究	4
	数量社会分析	4
	社会科学方法論演習	4
	社会工学	4
	環境社会科学	4
	情報社会科学	4
	社会工学演習	4
	社会意識構造論	4
	相関社会意識論	4
	社会哲学	4
	社会意識構造論演習	4
	比較組織論	4
	集合行動論	4
	比較組織論演習	4
	社会体制論	4
	社会体制論特殊研究	4
	政治体制論	4
	社会体制論演習	4
	体制変動論	4
	体制変動論特殊研究	4
	現代社会研究	4
	体制変動論演習	4
	社会秩序研究	4
	政策論	4
	政策決定論	4
	社会構成研究	4
	政策論演習	4
	政策決定論演習	4
文化人類学		
	文化理論 I	4
	文化理論II	4
	文化理論演習 I	4
	文化理論演習II	4
	文化過程論 I	4
	文化過程論II	4
	文化過程論演習 I	4
	文化過程論演習II	4
	社会構造論 I	4
	社会構造論II	4
	民族誌 I	4
	民族誌II	4
	民族誌III	4
	民族誌IV	4
	文化人類学特殊研究 I	4
	文化人類学特殊研究II	4
	文化人類学特殊研究III	4
	文化人類学特殊研究IV	4
	文化人類学演習 I	4
	文化人類学演習II	4
	社会人類学 I	4
	社会人類学II	4
	社会人類学特殊研究 I	4
	社会人類学特殊研究II	4
	社会人類学特殊研究III	4
	社会人類学特殊研究IV	4
	文化人類学実験及び実習	4
広域科学		
	システム数理特論 I	2
	システム数理特論II	2
	システム数理特論III	2
	システム数理特論IV	2
	システム数理特別演習及び実習 I	2
	基礎数理学特殊研究	4
	情報科学特論 I	2
	情報科学特論II	2
	情報科学特論III	2
	情報科学特論IV	2
	基礎情報学特別演習及び実習 I	2
	基礎情報学特殊研究	4
	システム理論特論 I	2
	システム理論特論II	2
	システム理論特論III	2
	システム理論特論IV	2
	基礎システム学特別演習及び実験 I	2
	基礎システム学特殊研究	4
	生命系システム特論 I	2
	生命系システム特論II	2
	生体適応システム論 I	2
	生体適応システム論II	2
	生命系システム学特別実験 I	2
	生命系システム学特殊研究	4
	宇宙システム物理学特論 I	2
	宇宙システム物理学特論II	2
	非線形散逸系システム論 I	2
	非線形散逸系システム論II	2
	宇宙システム物理学特別演習及び実習 I	2
	宇宙システム物理学特殊研究	4
	物質循環論	2
	環境計画論	2
	物質系計画学特論 I	2
	物質系計画学特論II	2
	物質系計画学特別実験 I	2
	物質系計画学特殊研究	4
	エネルギー循環論	2
	エネルギー計画論	2
	エネルギー系計画学特論 I	2
	エネルギー系計画学特論II	2
	エネルギー系計画学特別実験 I	2
	エネルギー系計画学特殊研究	4
	生物行動・社会学特論 I	2
	生物行動・社会学特論II	2
	システム生態学特論 I	2
	システム生態学特論II	2
	生態系計画学特別実験 I	2
	生態系計画学特殊研究	4
	地球変遷論 I	2
	地球変遷論II	2
	資源計画論 I	2
	資源計画論II	2
	地球系計画学特別実験 I	2

地球系計画学特殊研究	4
科学技術計画学特論 I	2
科学技術計画学特論II	2
科学技術倫理特論 I	2
科学技術倫理特論II	2
科学技術倫理特別演習及び実習	2
科学技術倫理特殊研究	4
広域科学特殊講義 I	2
広域科学特殊講義II	2
広域科学特殊講義III	2
広域科学特殊講義IV	2
広域科学特殊輪講 I	2
広域科学特殊輪講II	2
広域科学特殊輪講III	2
広域科学特殊輪講IV	2

第1種博士課程科目表

専攻	授業科目	単位
比較文学比較文化		
	比較文学比較文化特別研究	12
	比較文学比較文化特別演習	12
地域文化研究		
	地域文化研究特別研究	24
	地域文化研究特別演習	24
国際関係論		
	国際関係論特別研究	12
	国際関係論特別演習	16
相関社会科学		
	相関社会科学特別研究	14
	相関社会科学特別演習	14
文化人類学		
	文化人類学特別研究	12
	文化人類学特別演習	12
広域科学		
	広域科学特別研究	12
	広域科学特別演習及び実験	6

3　進学情報センター

進学情報センターは個々の学生が各自に適切な進路を選択して進学するように、教官と学生とのコミュニケーションの活性化をはかることを目的として、進学関連の各種情報の収集と公開、進路選択のための講演会、見学会の開催、面接による個人指導などを行なっている。

I　活動の概況

1）資料の収集

平成2年4月、1号館2階正面の160号室に開設された進学情報センターの資料室には 、各学部の便覧、各学科の講義内容をはじめ、学科の紹介のパンフレット等進路選択に役立つ資料が集められている。学生は資料室でこれらの資料を自由に閲覧することができる。平成3年度は各学科の資料の充実をはかるとともに、最近の大学院進学希望者の増加に対応するため、大学院ならびに関連する研究所の資料の収集にも努めた。

2）進学情報検索システムの開発

学生がコンピュータを操作して進学情報を検索できるように、資料室にはオフィスプロセッサおよび端末として利用する8台のパーソナルコンピュータが設置されている。現在利用できる検索システムは次の2種である。

①進学情報検索システム

これは各学部の進学条件、最近5年間の進学者の最低点等の学部情報や大学院各研究科の学生定数や進学経路、教官の所属などの大学院情報、各学科の研究分野に関する分野別情報の検索ができる。平成3年度には新たに文科系諸学部の分野別ならびに大学院情報を入力し、全学の情報検索ができるようになった。

②研究情報検索システム

このシステムは各学科の教官の研究状況の他、学問分野をキーワードとして入力することにより、その研究がどの学科で行なわれているかを知ることができる等、色々な面から研究情報を検索することができるものである。平成2年度は理、工、農、薬、医、教養の各学部に所属する教授、助教授、講師に対して実施したアンケートの結果に基づく情報を提供した。進学振り分けの際には、非常に役立つ情報が得られるために、このシステムは学生に大いに利用された。平成3年度は、文科系の学生ならびに大学院進学希望者の学生からの強い要望もあって法、経、文、教育学部および大学院を担当する研究所所属の教官に対して同様のアンケート調査を実施した。進学振り分けにおいては、文科系の学生もこれらの情報を利用することができた。

3）進学指導のための講演会の開催

進路選択のためのガイダンスとして、「コンピュータサイエンス－情報処理とその周辺」および「物質科学へのアプローチ」の講演会を5月13、14両日に開催した。それぞれ9 学部、5学部を代表する講師が講演した。各学部の研究対象や方法などを様々な観点から比較検討することができ、参加した多くの

学生の進路選択に大変役立ったと思う。また、初めての文科系学生のための講演会、「学際研究とは何か－人文社会科学の場合」をパネルディスカッションの形式で6月10日に開催した。5学部が参加しての討論の過程で、教養学科と他の学部との視点の相違が明らかになり、非常に興味深い会であった。

4) 見学会

駒場農学部碑

進学情報センターが全学的に知られるようになり、進学関係の窓口として進学情報センターを積極的に利用するようになってきたことは特筆すべきことである。昨年度までは、こちらから一方的に資料の提供を依頼してきたが、今年度になってから、いくつかの学科の主任または進学担当教官が来訪し、それぞれの最新の情報を提供するようになってきた。また、緊密な連絡のもとに協同で見学会や資料配布などの計画を立てた結果、以下のように例年に比べ多くの学生が見学会に参加した。

農学部　農業生物学科(2回)　11名
　　農芸化学科　(4回)　38名
　　林学科(演習林見学会)　17名
工学部　化学・生命系(2回)　13名

その他少人数での見学会斡旋
理学部(化学科、動物学科、植物学科)
薬学部

各学部を実地に見学することは学生にとって重要なことであり、今後とも各学科との連絡を密にして、見学の機会を増やして行きたい。

5) 進学相談

個人的な相談に訪れる学生の数は年々増加しており、今年度は500名を越えると予想される。以前は成績不振の学生の相談が大部分であったと聞くが、現在は成績のよい学生が相談に訪れるケースも多い。4月末から9月にかけての進学振り分けの期間には自分の成績で希望する学科に進学できるかどうか相談に訪れる学生が多くなる。この時期には学生の不安は非常に高まっていて、中にはノイローゼに近い状態になっている者も見受けられる。また、学年末には成績不振のために内定した学科に進学できるかどうかを相談する学生が急増する。しかし、進学情報センターとしては成績の問題に関与することはできないので、救済等の立ち入った指導は一切行なわないことにしている。

II　利用状況

進学情報センターが提供する情報が役立つものとして学生に評価され、進路の選定にあたって、まず進学情報センターの情報を調べることが学生の間で定着したように思う。資料室を利用する学生の数はますます増加している。特に進学振り分けの時期には、資料室は連日満員で、コンピュータの順を待つ程の盛況である。

また資料室は場所的条件にも恵まれているため、授業の合間に気軽に立ち寄って調べて行く学生も多くなり、年間を通じてよく利用されている。

以上述べてきたように、学生は進路を選定するにあたり、多くの情報を求めている。進学情報センターでは最新の情報をより多く学生に提供できるように今後とも努める所存である。

4　留学生相談所と外国人留学生の現状

教養学部は東京大学の中で工学部に次いで2番目に多くの外国人留学生を擁している。平成3年11月現在で学部前期課程に20名、学部研究生14名が在籍し、大学院総合文化研究科にはここ5年間で急速に倍増して177名が在籍し、その内訳は修士課程40名、博士課程61名、研究生76名である。出身国・地域は25を数え、その中で特に多いのは中国と韓国で、留学生全体の約60％を占めている。

こうした現状に対応するために、教養学部では昭和62年7月に留学生相談所を開設し、留学生担当講師1名をもって種々の問題の解決にあたることになった。

現在学部1、2年生のちょうど半数は国費留学生で、東京外国語大学付属日本語学校で一年間日本語や基礎科目の予備教育を受けた後、文部省の推薦を経て本学で選考され入学したものである。私費留学生は留学生統一の日本語能力試験と学力試験の成績を参考に、本学の留学生特別選考試験を経て入学を許可されている。総合文化研究科では4月と10月に書類選考による研究生の受け入れを行ない、その中の多くが大学院の正規課程への進学を希望している。学部、大学院ともに留学生は定員外の扱いで受け入れられているが、入学後の教務上の扱いは日本人と全く同じである。

学部留学生は入学後2年間、大学院研究生は1年間チューターによる学習指導を受けることができ、総合文化研究科ではその国際的なオリエンテーションもありチューターをひきうけた学生が熱心に指導にあたっている例が多い。また、特に学部の理科系の学生には理数科の補習が留学生担当教師により行なわれており、着実な効果をあげている。日本語・日本文化についてのセミナーや論文の指導は大学院生を中心に今年度から新しく就任した二人の留学生担当講師があたっている。

相談室は月曜から金曜までの午前10時から午後3時まで、いつでも自由に相談に応じることができ、それ以外は予約によっている。入学時期の4月と10月は新しい学生の種々の手続きや適応上の相談が多く、学期中は進学や修学の相談、12月から、3、4月にかけては在留関係や奨学金の相談が多い。

外国人留学生が安心して学業、研究に励むために、奨学金、宿舎の問題は深刻である。国費奨学金も民間奨学金も35才の年令制限を設けているものが多く、平均年令32.3才の本研究科では奨学金がもらいにくい。安価で学内にあって便利なため、駒場寮に多い時は20名の留学生が住んでいたが、駒場インターナショナルロッジの建設により単身の学生にはかなり楽になった。しかし夫婦、家族の民間アパートの条件は悪く、家族寮の建設が望まれる。

駒場の留学生の精神的な不安は、学部1、2年生には学業成績と進学の問題がある。最初の学期は特に日本語での授業と大学生活に適応するためのかなりのストレスがあり、それを乗り越えることが大きな試練になっている。学部、大学院の研究生にあっては大学院の正規課程に入学するための試験の準備があり、日本語や英語の学習についての深刻なあせりがある。後期課程の学生の中には、論文作成に伴う指導教官との意思の疏通の悩みを持つ者がある。特に不安が大きい場合には、保健センターの協力を仰ぐこともあった。

留学生の指導や厚生については本学部国際交流委員会の諮問を受け、さらに留学生問題懇談会で種々の連絡・調整が行なわれている。

5 学生相談所の活動

教養学部学生相談所は、1953年に開設され今日に至っている。現在も、ささやかではあるが、学生の個人的問題、学業や適性、対人関係の悩みや日常生活の困難、さらに精神衛生的な問題などについて、相談・懇談に応じている。

学生の個人的な問題・悩みには実に様々なものがある。他人にはささいな事に見えても、本人にとっては重大に思えよう。その重大さは、その学生のそれまでの人生やその時点における生活の現実に裏づけられている。学園生活の中で、友人同士話し合うことで解決ないし軽減することも多いであろうし、またそれが望ましいであろう。しかし、友人と話し合ってもなかなかわかってもらえないとか、そもそも話をする友人がいないので困るということも少なくない。

そのような場合、学生相談所の相談員が、一定の期間を学生の話し相手となって、問題解決や人間関係の改善に役立とうとする。相談員は、来談学生のその時点における日常生活や人間関係、精神生活などについて話を聞いたり、また時には大学入学以前のことや現在および過去における家族との話し合い方について聞くこともある。相談がどのような形で進むかは、学生の個性や問題の性質によって決まっていく。いずれにせよ、相談員は学生の主体性を尊重する。自分の問題に気づき、それを確かに相談してみようという判断自体が問題解決の一歩であることが多いのは、いうまでもない。

いわゆる悩みだけでなく、学業や適性にかかわる知的な興味・関心ということも、学生相談の対象となる。大学キャンパスは、青年期の自己実現の場であり、学生が現在の生活を振り返り、それを変えていきたいと思う時、自身の知的関心について考えなおしてみることは大きな意義がある。学生相談は、このような問題に関して一種の産婆術のような役割を果たそうとする。最近では、なかなか難しいことであるが。

精神衛生の問題は、保健センターの精神神経科が専門であろうが、学生相談所にも無縁なことではない。青年期においては、いわゆる悩みと精神衛生の問題は特に複雑にからまり合っており、両機関がその守備範囲を適度に一部重なり合わせておくのが、望ましいであろう。現に、両方を同時に利用している学生も多い。現在、センターの精神神経科と学生相談所は良い協力関係を維持しているといえよう。前者が医療の立場から学生の問題に援助しているとすれば、後者は教育の立場から、また学生の人格の成長を促進して問題の解決に資するという心理学の立場から援助しようとしている。

学生相談所は、また進学情報センターとは、進路・適性の相談などで近い関係にある。留学生相談室にも問い合わせをする必要が出てくる。学生課および教務課との連携の重要さは言うまでもない。さらに相談員としては、来談学生にクラス担任や各教科の教官との対話を勧めてみることも多い。駒場キャンパスにたくさんの貴重な人的資源があることを、学生ひとりひとりに確かめさせたいところである。

相談概況は、年間の来談件数(来談者実数)で150人以上、相談回数(電話相談を含む延人数)で1、500人以上というのが、ここ4〜5年の傾向である。これは、専任相談員一名の現状から考えるとかなり大きな数であるが、この大きなキャンパスから見ると、それ程でもあるまい。なお、他大学の多くの学生相談所では、紀要ないし報告書のようなものを発行している。駒場学生相談所もようやく、関係諸機関の協力を得て、『学生相談報告』の第一号を発行する運びとなった(1992年3月)。これを機会に、各方面からの御意見を頂きたいと考えている。

6　保健センター(駒場支所)

東京大学保健センターは、1966年文部省大学学術局より出された「保健センター設置の法制化」に伴い、東京大学、京都大学、長崎大学、島根大学の四大学が学生保健管理のモデル大学として指定され、翌年(1967年)に東京大学保健センターとして発足し今日に至っている。文部省の保健センター設立の意図は、国立大学における学生の厚生補導のための施設と考え、学生の保健管理に関わる業務を専門的に扱い学生の心身に対する健康保持と増進をはかることにあった。しかし、東京大学においては保健センター規則を独自に定め、当該業務を単に学生の厚生補導面に留まらずに教官・職員を含めて本学に学び働く者すべてをこれらの対象とし、健康保持・増進を一歩進めた診療等の業務にわたって明記してあるのが特徴的である。東京大学では、保健センター制が敷かれる以前に既に本郷キャンパスには学生部所属の学生保健診療所が存在し、また当駒場キャンパスには旧制第一高等学校摂生室を経て東京大学教養学部所属の学生保健診療所があり、医師ならびに医療関係技術者がこれらの任にあたっていた。このように本郷・駒場地区の学生保健診療所で各々独立した形で行なわれていた保健管理サービスをこの機会に両者を一元化し、保健センター所長の下に本郷支所ならびに駒場支所と改めて今日の東京大学保健センターが確立された。

保健センターは教育・研究等のための全学共同利用施設とはやや異なるが、健康に関するサービス業務を提供する学部・研究所から独立した組織である。その主なるものは、各種の健康診断、健康相談、危険を伴う業務への安全サービス、臨床もしくは診療サービス、救急業務、救護サービス、他医療との連絡、各種文書の発行・交付等である。この他に学生ならびに教職員の定期健康診断や、東京大学入試健康診断等に携わっている。

総長を委員長として各学部の長ならびに研究所長、事務局長、部長を含めて保健委員会を構成し、保健に関する重要項目を審議する。この委員会の下部機構に保健センター運営委員会があり、保健センター所長がこれを総括する。また、実際の業務に関する事項等については、保健センター内の従事者を以って適宜会議が持たれる。

保健センター駒場支所においては、現在内科(昭和42年開設)、精神神経科(昭和42年開設)、整形外科(昭和58年開設)、歯科口腔外科(昭和60年開設)がある。他に、健康管理部門(昭和42年開設)では健康管理の外に健康相談にも応じている。付置設備としては、放射線室、薬剤室、臨床検査室がある。

保健センターは教育・研究の施設ではないが健康管理の必要上、研究もしくは調査活動も活発になされている。東京大学の学生ならびに教職員は非常に精度の高い健康管理を受けている集団でもあり、特殊な疾病の疫学的研究等の良い調査対象となっている。これらの成果は全国大学保健管理研究集に幾度か発表を重ねている。

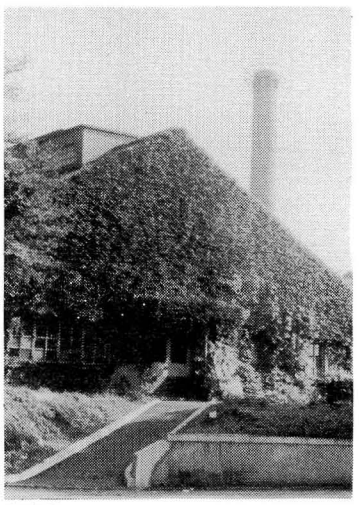
保健センターは、本郷・駒場支所の職員は教授1、助教授2、講師7、助手8、事務官5、技官16名である。

このうちセンター固有の定員は僅かに4名である。定員の中では現在の業務を遂行するのは不可能なため、他部局併任や非常勤等に依存しているのが現状である。平成5年度には、保健センター駒場支所の改築予算が計上され、旧制第一高等学校摂生室、駒場学生保健診療所と歴史を刻んだ当保健センター駒場支所も装いを新たに一層の拡充・発展が望まれている。

7　学寮、学生会館、課外活動施設

【駒場寮】

駒場寮は、昭和9年～昭和12年に旧制第一高等学校の全寮制の学寮として建設され、現在まで理念的には、一高の伝統を継承している。設置場所は、教養学部の構内の一角に位置し、建物は鉄筋3階建てで中寮、北寮、明寮の3棟からなっている。定員は750名であり現時点では入寮率は5割程度と低くなっているが、使用不能部屋、共用室（寮委員会室、会議室、娯楽室etc.）として使用している等の関係で約414名が実質定員となっている 。各部屋には机、本棚、ベッドと生活に必要な最低限のものは一応整備されている。また、共用施設として食堂（生協営業）、共同風呂、簡易自炊設備も設置されている。


寮食堂

【三鷹寮】

三鷹寮は駒場から西へ30km程離れた三鷹市と調布市の境の閑静な住宅地にある。豊富な緑に囲まれた約9,000坪の広大な敷地に昭和39年に建設された4階建ての施設で、南 寮、北寮の他に木造1階建ての事務棟（昭和25年建設）食堂（昭和25年建設）共同風呂（昭和25年建設）等からなっている。南寮、北寮とも各部屋は、自習室・談話室・寝室からなり、寝室には木造の二段式ベッドが設置されている他、机、本棚と生活に必要な最低限のものが整備されている。定員は192名（1室8名×24室）となっている。現員は93名で入寮率は駒場と同様に低くなっているが、1部屋（8人部屋）を5～6名で使用していることもあって、約144名が実質定員となっている。上記の駒場寮・三鷹寮とも耐用年数からみても年々老朽化がはげしく、現状のまま学寮として機能させることには種々問題があり、教養学部では新しい学寮像を求めて「三鷹国際学生宿舎」の建設をめざして、大学が一丸となった努力を傾注中である。

【学生会館】

学生会館は昭和38年に建設され、構造は、地上3階地下1階、面積4,505㎡となっている。用途としては、学生食堂、サークル団体、学生自治団体の活動場所として共用させている他、会議室は、サークル団体の打ち合わせや音楽系サークルの練習場として使用されている。

【課外活動施設】

課外活動施設は、昭和48年に建設され、構造は地上2階、面積611㎡となっている。施設内容は音楽練習室、和室、集会室、会議室、シャワー室などとなっており、もっぱら文化系課外活動の練習場所として使用されている。

付属資料2

前期課程から後期課程、そして大学院にいたるまでの「駒場」の学生の就学状況をめぐって、その集団としての一般的傾向や個人としての内面的な特殊性を資料として提示することは決して容易ではない。また、学生集団のイメージを安易な一般化や特殊化から導き出すことはむしろ避けるべきだとさえ思われる。よって、ここでは、「駒場」で勉学にあたる彼らの姿勢を一般化したり特殊化したりすることなく、もっぱら「III」で触れられた教養学部と総合文化研究科のカリキュラム編成上の特質と組織にかかわる客観的な数字のみを提示するにとどめる。

入学状況、学生定員、クラス編成、開講数、外国人研究生などの数字は、この書物の他の部分の記述や数字とつけ合わせることで多くの具体的な事実を明らかにするはずである。

なお、ここに数字として示されたカリキュラム編成と組織とがいささかも固定化されたものではなく、現在大がかりな改革の途上にあり、その一部はすでに平成4年度から実行に移されることになっている事実は、「I-2沿革と現状ならびに将来計画」および「III-2カリキュラム」の項目で述べられた通りである。

平成3年度　志願、合格、入学状況

教養学部前期課程

	試験日程	志願者	受験者	合格者	入学者	定員外		入学者総数
						特選第1種	国費	
文科一類	前期	2,089	1,933	647(5)	647			720
	後期	2,048	331	74	73			
二類	前期	1,214	1,131	377(5)	377	2	2	421
	後期	860	176	40	40			
三類	前期	1,429	1,284	432(3)	430		1	486
	後期	1,837	247	57	55			
理科一類	前期	2,773	2,735	1,189(6)	1,182	1	3	1,320
	後期	1,940	584	139	134			
二類	前期	1,615	1,557	496(1)	488			543
	後期	378	246	61	55			
三類	前期	389	316	80	80			90
	後期	146	45	10	10			
計	前期	9,509	8,956	3,221(20)	3,204(20)	3	6	3,580
	後期	7,209	1,629	381	367			

合格者、入学者には特別選考第2種を含む[(　)内の数]

教養学部後期課程

	平成3年進学者	学士入学者	3年次生
教養学科第一	29	2	31
第二	45	2	47
第三	35		35
基礎科学科第一	51		51
第二	14		14
計	174	4	178

大学院総合文化研究科

	修士課程			博士課程		
	志願者	合格者	入学者	志願者	合格者	入学者
比較文学	20	10	10	7	7	7
表象文化	24	7	7			
地域文化	60	19	18	14	12	12
国際関係	46	12	12	10	8	8
相関社会	33	9	9	10	9	9
文化人類	20	5	5	8	7	7
広域科学	19	13	13	5	4	4
計	222	75	74	54	47	47

表象文化論専攻の博士課程は平成4年度開講予定

定員の推移

(昭和63年度～平成4年度、前期課程入学者定員、後期課程定員、大学院総合文化研究科定員)

		昭和63年 1988年		平成元年 1989年		平成2年 1990		平成3年 1991年		平成4年 1992年	
前期課程	文科一類	670		670		670		710		710	
	文科二類	410		410		410		410		430	
	文科三類	450		450		470		480		500	
	理科一類		1,250		1,250		1,250		1,305		1,315
	理科二類		526		526		526		541		541
	理科三類		90		90		90		90		90
	計	1,530	1,866	1,530	1,866	1,550	1,866	1,600	1,936	1,640	1,946
		3,396		3,396		3,416		3,536		3,586	
後期課程	教養学科第一	30		30		30		30		30	
	教養学科第二	35		35		35		35		45	
	教養学科第三	10		10		10		10		10	
	基礎科学科第一		50		50		50		60		60
	基礎科学科第二		15		15		15		15		15
	計	75	65	75	65	75	65	75	75	85	75
		140		140		140		150		160	

		修士	博士	修士	博士	修士	博士	修士	博士	修士	博士
大学院総合文化研究科	比較文学	6	3	6	3	3	3	3	3	3	3
	表象文化					6		6		6	3
	地域文化	12	6	12	6	12	6	12	6	12	6
	国際関係	7	4	7	4	7	4	7	4	7	4
	相関社会	7	3	7	3	7	3	7	3	7	3
	文化人類	6	4	6	4	6	4	6	4	6	4
	広域科学	9	5	11	6	11	6	11	6	11	5
	計	47	25	49	26	52	26	52	26	52	28
		72		75		78		78		80	

平成3年度クラス編成表(1年)

(平成3年12月1日現在)

	文科一類		文科二類		計
	入学	留年	入学	留年	
1A	2		1	1	4
1C	5		3		8
2E	20		17	2	39
3E	19	1	16		36
4E	19		15		34
5F	32	2	23		57
6G	24		17	1	42
7G	22		16		38
8B	39		21		60
9B	37		21		58
10B	37		21		58
11B	36		22		58
12B	36	1	22		59
13B	36	1	22		59
14B	74		41	1	116
15B	36		22		58
16D	33		14		47
17D	31		16	1	48
18D	31		16		47
19D	31	2	15		48
20D	30	1	15	1	47
21D	30	1	15	1	47
22D	30		15		45
23D	30		15		45

(合計1158)

	文科三類		計
	入学	留年	
1A	3	1	4
1C	8		8
2E	25	1	26
3E	24		24
4F	36	2	38
5G	43		43
6B	52	2	54
7B	50		50
8B	51	1	52
9D	49	2	51
10D	49	3	52
11D	48	4	52
12D	48	1	49

(合計503)

A:ドイツ語既修クラス
B:ドイツ語未修クラス
C:フランス語既修クラス
D:フランス語未修クラス
E:中国語未修クラス
F:ロシア語未修クラス
G:スペイン語未修クラス

	理科一類		計
	入学	留年	
1A	1	2	3
1C	4	1	5
2E	35		35
3F	40	10	50
4G	41		41
5B	59	9	68
6B	59	7	66
7B	61	5	66
8B	61		61
9B	58	3	61
10B	57	9	66
11B	59	4	63
12B	59	8	67
13B	59	5	64
14B	59	7	66
15B	58	4	62
16B	58	6	64
17B	58	9	67
18B	58	4	62
19B	50	10	60
20B	50	5	55
21D	19	5	24
22D	42	6	48
23D	43	7	50
24D	42	8	50
25D	42	11	53
26D	44	5	49
27D	43	6	49

(合計1475)

	理科二類		理科三類		計
	入学	留年	入学	留年	
1A	3	1	1		5
1C		1	1		2
2E	24				24
3F	18	3			21
4G	18				18
5B	51	6	9		66
6B	51	10	9	1	71
7B	31	3	9		43
8B	32	10	9		51
9B	49	13	9	1	72
10B	49	6	10		65
11B	51	12	10		73
12B	51	7	10		68
13D	45	7	4		56
14D	44	15	4		63
15D	25	17	5		47

(合計745)

総計 3,882名

平成3年度クラス編成表(2年)

(平成3年12月1日現在)

	文科一類		文科二類		計
	進級	留年	進級	留年	
1A					
1C	7	1	3		11
2E	24		16		40
3E	23	1	17	3	44
4E	24	4	19	3	50
5E	34		18	3	55
6F	31		17	1	49
7G	31	2	19	2	54
8G	36	1	19		56
9B	36	2	19	2	59
10B	36	2	19	2	59
11B	35	2	19		56
12B	35	4	20		59
13B	34		20	1	55
14B	36	6	21	2	65
15B	31		21	1	53
16D	31	1	21		53
17D	31		20	1	52
18D	31	2	21	2	56
19D	31	1	21	1	54
20D	31	1	22	1	55
21D	30	2	21	1	54
22D	30	3	23	2	58

(合計1147)

	文科三類		計
	進級	留年	
1A	1		1
1C	6	1	7
2E	29	4	33
3E	30	4	34
4F	30	4	34
5G	38	2	40
6B	51	7	58
7B	51	8	59
8B	50	2	52
9D	43	4	47
10D	45	6	51
11D	41	6	47
12D	47	1	48

(合計511)

A:ドイツ語既修クラス
B:ドイツ語未修クラス
C:フランス語既修クラス
D:フランス語未修クラス
E:中国語未修クラス
F:ロシア語未修クラス
G:スペイン語未修クラス

	理科一類		計
	進級	留年	
1A	7		7
1C	4		4
2D	43	6	49
3D	43	9	52
4D	43	10	53
5D	39	6	45
6D	40	6	46
7D	43	10	53
8D	46	12	58
9B	55	9	64
10B	53	10	63
11B	51	9	60
12B	51	8	59
13B	53	4	57
14B	55	9	64
15B	54	4	58
16B	52	2	54
17B	50	10	60
18B	54	3	57
19B	48	9	57
20B	54	5	59
21B	51	5	56
22B	53	6	59
23B	54	7	61
24F	61	11	72

(合計1327)

	理科二類		理科三類		計
	進級	留年	進級	留年	
1A		1	1		2
1C			3		3
2D	43	11	5	1	60
3D	39	12	5	1	57
4D	34	5	6		45
5B	42	5	8		55
6B	40	8	8		56
7B	45	8	9		62
8B	41	3	9	2	55
9B	34	13	9		56
10B	41	5	9	1	56
11B	37	16	9	2	64
12B	41	11	9	1	62
13F	18	6			24

(合計657)

総計 3,642名

平成3年度開講数一覧

第1・3学期開講数(体育実技および実験実習は除く)

	午前								午後											
	9:00 ——— 10:30				10:40 ——— 12:10				1:00 ——— 2:30				2:40 ——— 4:10				4:20 ——— 5:50			
	講義	専門	演習	ゼミ	講義	専門	演習	ゼミ	講義	専門	演習	ゼミ	講義	専門	演習	ゼミ	講義	専門	演習	ゼミ
月	14	4			61				69				42	2	2	10	6	3		13
火	39				56				51				44	2	8	7	6	10	2	10
水	39				39				57				53		6	10	8		2	22
木	25				61				68				58		8	14	2	1		14
金	28	3			53				60				37	1	6	12	7	1	2	29
土	1				1			2												

(講義985/専門講義27/演習36/ゼミ143/合計1,191)ゼミは全学一般ゼミナール

第2・4学期開講数(体育実技および実験実習を除く)

	午前								午後											
	9:00 ——— 10:30				10:40 ——— 12:10				1:00 ——— 2:30				2:40 ——— 4:10				4:20 ——— 5:50			
	講義	専門	演習	ゼミ	講義	専門	演習	ゼミ	講義	専門	演習	ゼミ	講義	専門	演習	ゼミ	講義	専門	演習	ゼミ
月	24	17			42	17			59	2			24	28	2	7	6	26	2	21
火	31	16			50	25			55				36	22	8	5	5	21	2	16
水	34	19			50				67				44	23	5	6	9	26		22
木	19	6			79	4			78				43	21	9	9	2	18		15
金	26	18			37	7			66				23	26	6	9	7	17	2	20
土	1						2				5									

(講義917/専門講義359/演習36/ゼミ137/合計1,449)

第1・3学期体育実技受講者数(第2・4学期もほぼ同数)

	午前				午後				
	9:00 ——— 10:30		10:40 ——— 12:10		1:00 ——— 2:30		2:40 ——— 4:10		計
月			(482)		(594)		(480)		1,556
火			(424)		(624)		(441)		1,489
水			(491)		(476)		(394)		1,361
木			(588)		(518)		(448)		1,554
金			(494)		(576)		(511)		1,581
計			2,479		2,788		2,274		7,541

第1学期生物学実習(理II、III必修)、地学実習(理I選択)受講者数

	午前				午後					
	9:00	10:30	10:40	12:10	1:00	2:30	2:40	4:10	4:20	5:50
月							◀——地学実習(31)——			▶
					◀——生物学実験(147)——			▶		
火							◀——地学実習(41)——			▶
					◀——生物学実習(120)——			▶		
水							◀——地学実習(18)——			▶
					◀——生物学実習(147)——			▶		
木							◀——地学実習(11)——			▶
					◀——生物学実習(97)——			▶		
金							◀——地学実習(15)——			▶
					◀——生物学実習(122)——			▶		

第2学期物理学実験(理I、II、III必修)、化学実験(理I、II、III必修)受講者数

	午前				午後			
	9:00	10:30	10:40	12:10	1:00	2:30	2:40	4:10
月					◀——物理学実験(187)——			▶
					◀——化学実験(199)——			▶
火					◀——物理学実験(221)——			▶
					◀——化学実験(220)——			▶
水					◀——物理学実験(216)——			▶
					◀——化学実験(171)——			▶
木					◀——物理学実験(151)——			▶
					◀——化学実験(150)——			▶
金					◀——物理学実験(218)——			▶
					◀——化学実験(219)——			▶

第3学期物理学実験(理I、II、III必修)、化学実験(理I、II、III必修)、情報図学(理I選択)受講者数

	午前				午後			
	9:00	10:30	10:40	12:10	1:00	2:30	2:40	4:10
月					◀——物理学実験(161)——			▶
					◀——化学実験(148)——			▶
					◀——情報図学(220)——			▶
火					◀——物理学実験(232)——			▶
					◀——化学実験(224)——			▶
					◀——情報図学(287)——			▶
水					◀——物理学実験(169)——			▶
					◀——化学実験(148)——			▶
					◀——情報図学(273)——			▶
木					◀——物理学実験(205)——			▶
					◀——化学実験(184)——			▶
					◀——情報図学(241)——			▶
金					◀——物理学実験(217)——			▶
					◀——化学実験(206)——			▶
					◀——情報図学(203)——			▶

外国人研究生

総合文化研究科大学院研究生、外国人研究生数

（平成3年度5月1日現在）

専攻	大学院研究生	外国人研究生	計
比較文学	1	23	24
表象文化		3	3
地域文化		14	14
国際関係	1	16	17
相関社会		10	10
文化人類		3	3
広域科学	1	6	7
計	3	75	78

教養学部学部研究生数

（平成3年5月1日現在）

後期課程	32	（このうち外国人16）

前期課程には、学部研究生制度がない。
研究生の出願資格は、4年制大学卒業又は同程度の学力をもつ者。

《書誌》

東京大学教養学部に関する公式の書物、出版物、印刷物の中で『駒場1991』に引用されたり、執筆にあたって参照されたものの中から主要なものを選び、主題別に配列したものである。定期的に刊行されているものについては、平成四年度の募集要項を除いて、いずれも平成三年度のものが最終版で、断り書きがない限り発行は年一回である。定期的な刊行物についてはおよその刊行時期を、不定期な刊行物についてはその刊行時期を括弧内に記してある。

『東京大学百年史』全十巻(昭和59年1月－昭和62年3月)
『教養学部の三十年(1949-1979)』(昭和54年7月7日)
『教養学部の四十年(1949-1989)』(平成元年7月7日)

『東京大学教養学部概要』(4月)
College of Arts and Sciences University of Tokyo(4月)

The University of Tokyo(Catalogue for 1989-90)

『東京大学の概要』(4月)
The University of Tokyo(4月)

『東京大学規則集』(昭和39年12月 最終追録加除 平成3年12月20日)
『教養学部規則集』(平成2年1月)
『東京大学学部通則』(制定 昭和33年12月17日 最終改定 平成3年12月17日)
『東京大学大学院学則』(制定 昭和28年3月17日 最終改定 平成3年9月17日)

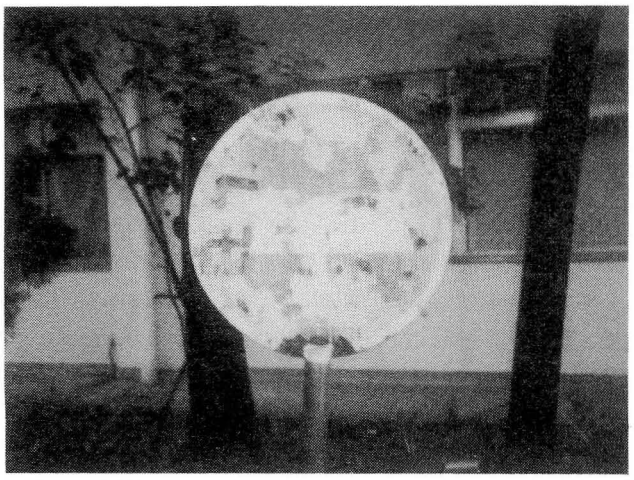
『東京大学教養学部 職員の手引き』

『東京大学入学者募集要項』(11月)
『東京大学外国学校卒業学生募集要項』(11月)
『東京大学教養学部教養三学科学士入学試験要項』(12月)
『東京大学大学院総合文化研究科修士課程学生募集要項』(7月)
『東京大学大学院総合文化研究科第1種博士課程学生選考要項』

『東京大学教養学部研究生出願要項』
『東京大学大学院総合文化研究科大学院研究生出願要項』
『東京大学大学院総合文化研究科「外国人研究生」の出願について』

『東京大学 教養学部便覧 I(前期課程)』(4月)
『東京大学 教養学部便覧 II(後期課程)』(4月)
『東京大学 大学院便覧』(4月)

『教養学部 履修の手引(一般教育科目等の)』(4月)
『全学一般教育ゼミナール紹介 教養学部科目紹介』(年二回 4月、10月)
『進学のためのガイダンス』(4月)
『授業内容 教養学科第一、教養学科第二、教養学科第三』(4月)
『授業内容 基礎科学科第二』(4月)
(基礎科学科第一の授業内容は『教養学部便覧II』に記されている)
『授業内容の概略 総合文化研究科』(4月)



解読不明の標識

［駒場］1991
平成4年3月31日発行

発行：東京大学教養学部　学部長　原田義也
〒153　東京都目黒区駒場3-8-1
TEL 03-3467-1171代表
編集：東京大学「年報」編集委員会
委員長　蓮實重彦
委　員　川口昭彦
川原　貴
支倉崇晴
林　利彦
三谷　博
渡邊守章
製作：メディアフロント
〒151　東京都渋谷区代々木4-19-14-402
TEL 03-3373-6521
デザイン：福沢郁文

COLLEGE OF ARTS AND SCIENCES THE UNIVERSITY OF TOKYO